佐賀県文化財調査報告書第187集
西九州自動車建設に係る文化財調査報告書（9）
中原遺跡 V
二〇一一年三月 佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第 187 集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（9）

中　原　遺　跡　V

11 区～ 13 区の弥生時代・古墳時代墳墓の調査

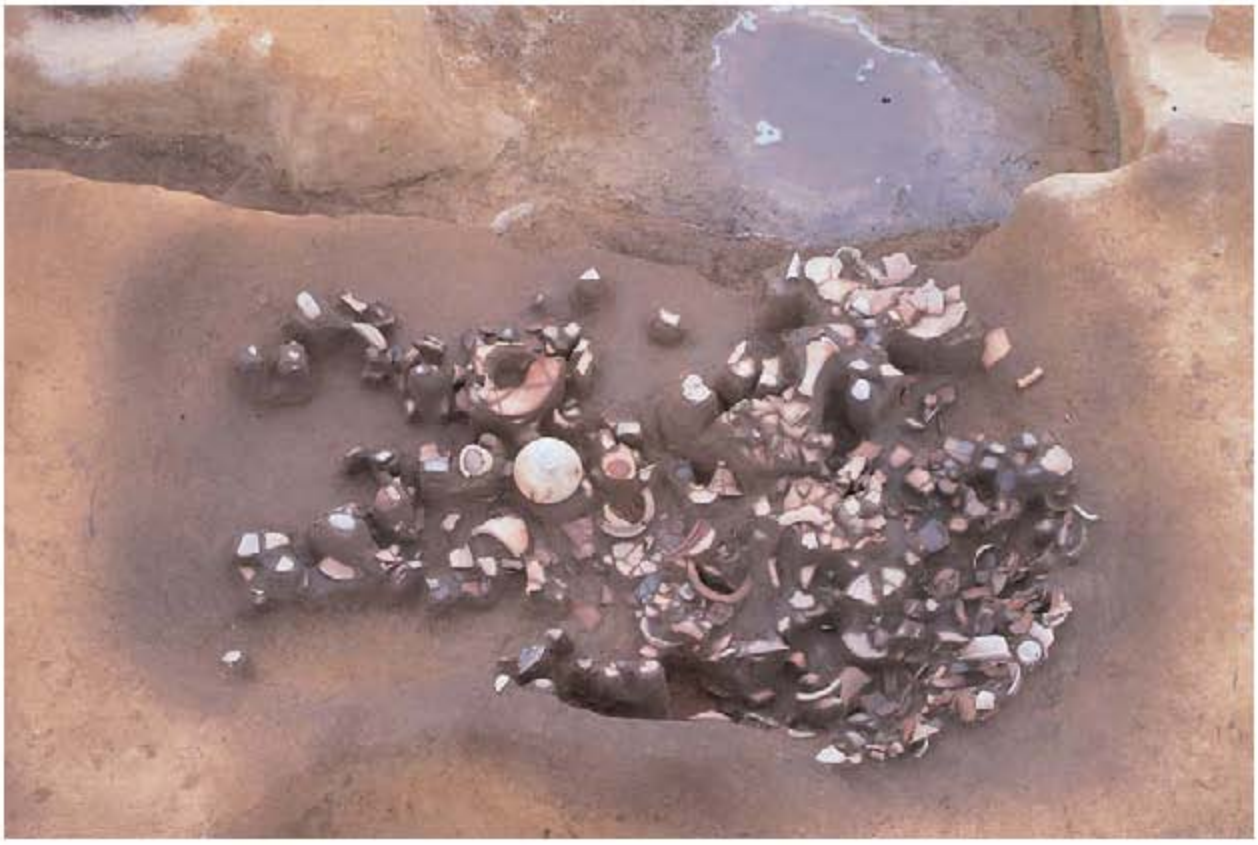
２０１１年3月
佐賀県教育委員会

松浦川と鏡山南麓平野

調査区全景（南西上空から）

調査区全景（南東上空から）

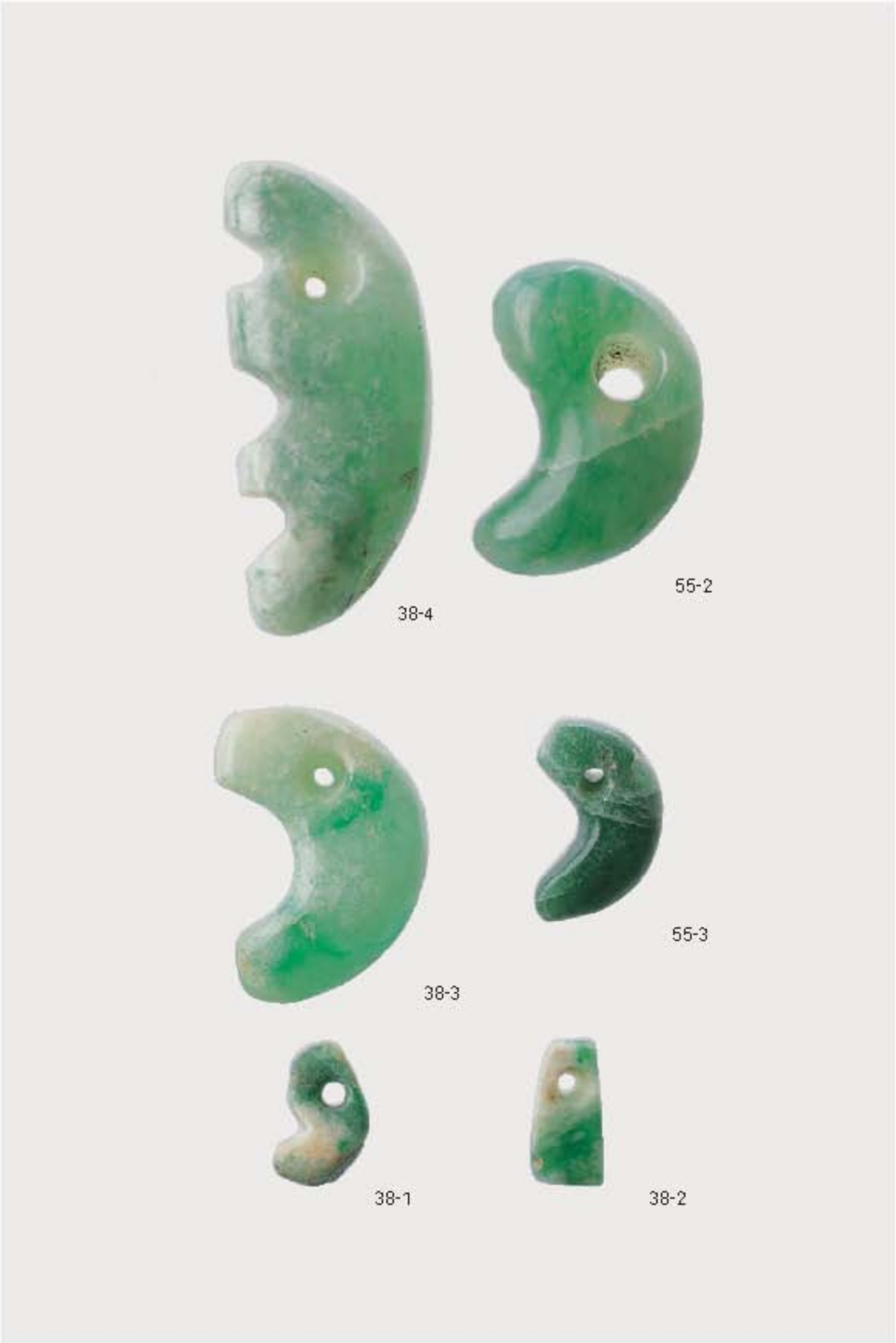
SK11292・13042・13043 土坑（西から）



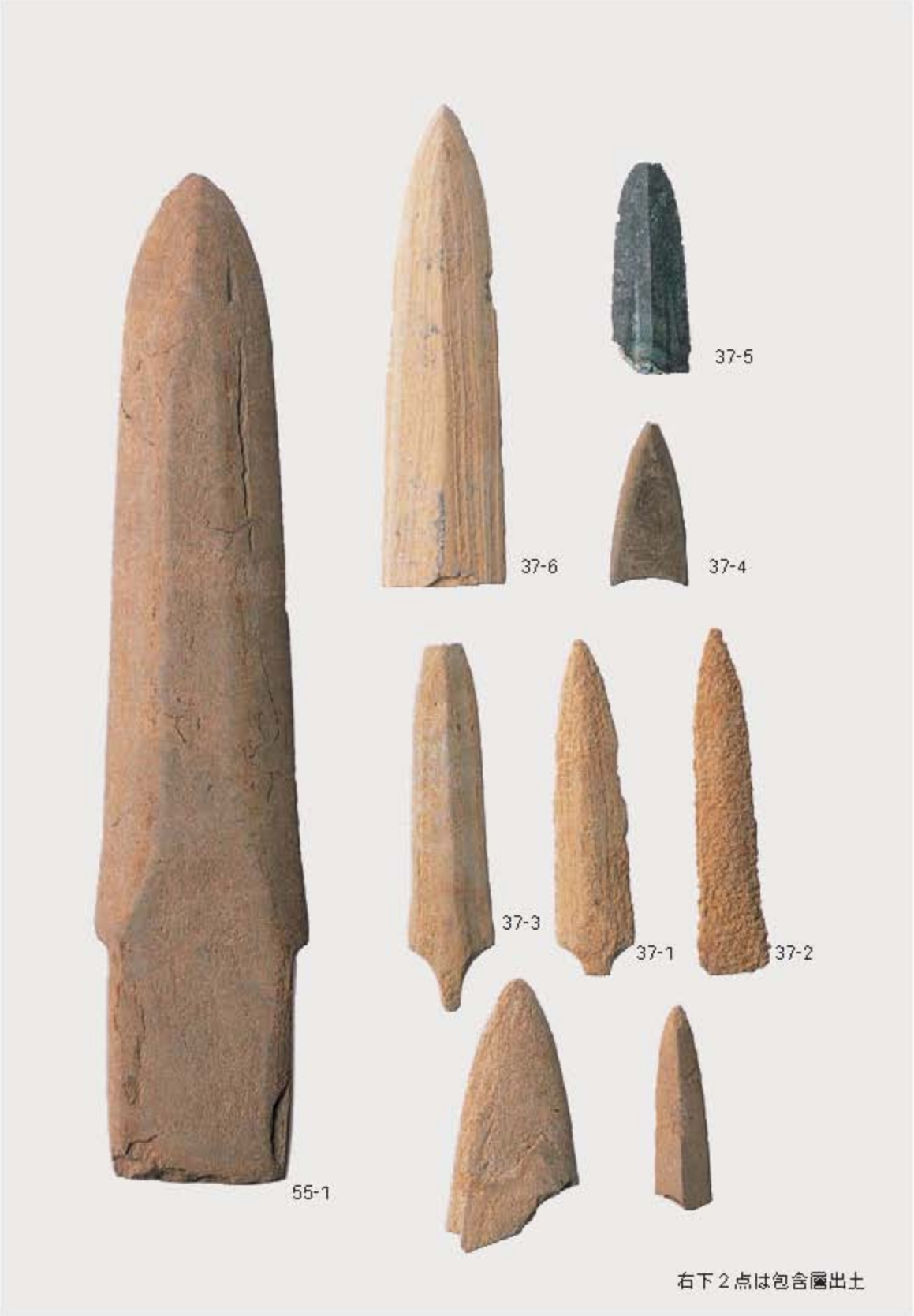
SK11292 土坑（真上から）

ST11141・11002・11067 古墳遠景（南上空から）

ST11158 古墳（西上空から）

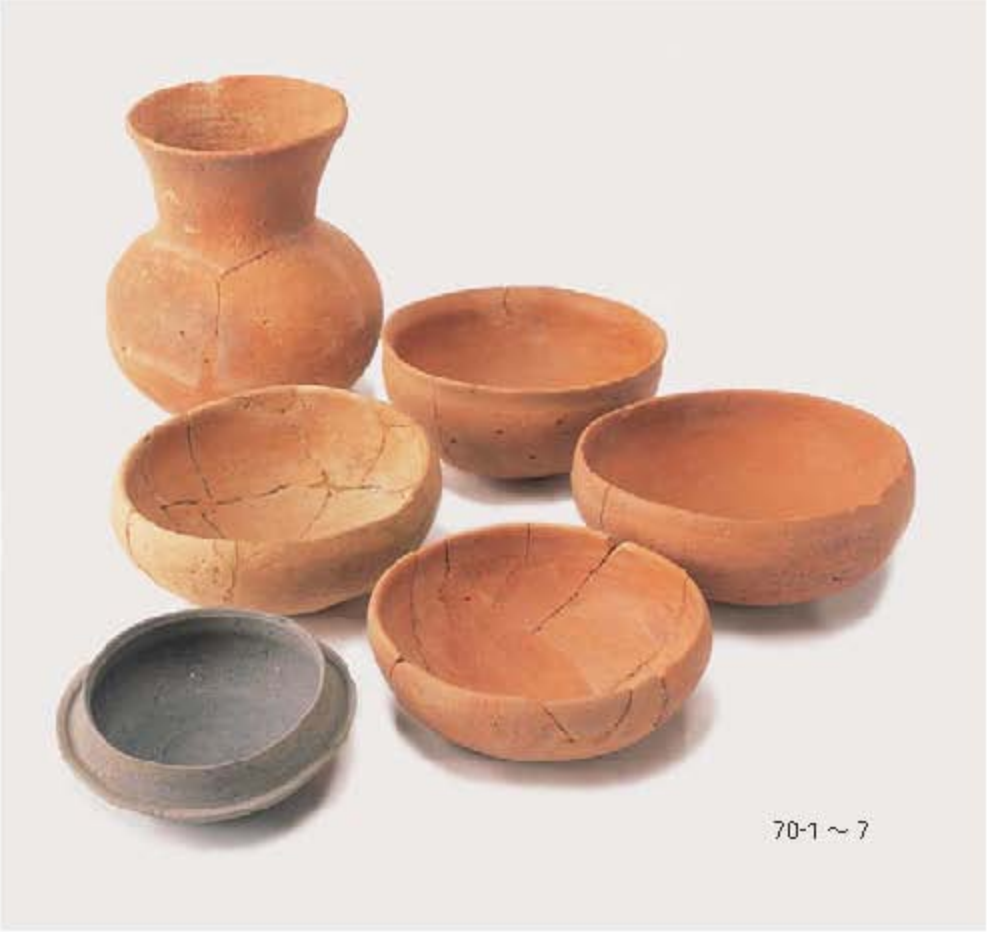


硬玉製勾玉・垂飾



磨製石剣・石戈・石鏃・青銅製切先

広口壺集合



ST11067 古墳出土土器

ST11067 古墳出土土製人形・水晶

87-1

89

76-3

ST11067・11141 古墳出土鬱

陶質土器集合

佐賀県文化財調査報告書第 187 集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（9）

中　原　遺　跡　V

11 区～ 13 区の弥生時代・古墳時代墳墓の調査

２０１１年3月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は佐賀県教育委員会が国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の委託をえて唐津市教育委員会の協力のもと平成13～17年度に実施した西九州自動車道唐津道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告です。中原遺跡の5冊目で、西九州自動車道建設に係る文化財発掘調査報告書では『仁田古墳群Ⅰ』につづく9冊目にあたります。

中原遺跡は弥生～平安時代前期までの複合遺跡で、各時代において重要な遺構・遺物が発見されました。弥生・古墳時代では甕棺墓群、墳丘墓、古墳、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出され、青銅鏡をはじめ青銅製品や鉄製品、石製品、木製品などの多くの貴重な遺物が出土いたしました。

今回の報告は中原遺跡の11区～13区で調査した弥生～古墳時代の墳墓群と出土品です。弥生時代の土壙墓、木棺墓には翡翠製の勾玉、碧玉製管玉などが副葬されていました。また、古墳からは初期馬具や人形土製品などが出土し、貴重な資料になりました。

本書が今後の学術・文化向上に少しでも役立てば幸いに存じます。発刊にあたり多難な調査作業に従事していただいた地元の皆様、整理作業に従事していただいた調査事務所の方々並びに埋蔵文化財の保護に御理解いただきました佐賀国道事務所に対し、心より厚くお礼申しあげます。

平成23年3月25日

佐賀県教育委員会
教育長　　川　崎　俊　広

例　言

1，本書は西九州自動車道唐津ー浜玉道路建設に伴い平成 13 ～ 17 年度に実施した唐津市原所在の中原遺跡の発掘調査報告書であり、西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書の第 9 冊である。

2，発掘調査は国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の委託を受け、佐賀県教育委員会が主体となり唐津市教育委員会の協力を得て実施した。

3，本書の執筆分担は目次に記す。Ⅰ章、Ⅱ章、Ⅲ章は『中原遺跡Ⅲ』の同章をもとに加筆訂正した。

4，報告書作成にあたっての整理作業の遺物復元、遺物実測、製図、遺物写真撮影、編集などは主に唐津中原事務所で行い、一部文化財資料室で行った。　また、写真現像焼付は唐津中原事務所で行った。主な作業分担は次のとおりである。

遺物復元整理……浦田照千代・坂本直久・桑代ゆかり・徳田まり子・松本いつ子・三浦美智子・脇山邦子・渡辺直美

遺物実測・製図……大薗聖子・川原里美・菊池孝子・中島美佳・馬場薫・美浦あずさ

遺物写真撮影……小松譲

写真現像焼付……市丸宮子・古藤真理子

写真整理・事務……池内理恵・辻美紀子・樋口令子・松本綾子

5，遺構実測は一部作業員の補助のもとに調査員が行い、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。空中写真は㈲空中写真企画に委託した。遺構のデジタルトレースは㈲とっぺんに委託し、市川浩文が編集した。遺物実測の一部を㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6，発掘調査、遺物整理に際して下記の方々から指導・助言を得た。
武末純一・桃崎裕輔・斉藤大輔（福岡大学）、定森秀夫（滋賀県立大学）、大賀克彦　（順不同・敬称略）

7，本書の編集は市川浩文・吉野進一・伊達惇一朗の協力のもと小松譲が行った。

凡　例

1，遺跡の略号は下記のとおりである。
中原遺跡（ＮＡＫ）

2，遺構種別記号は次のとおりである。
ＳＫ：土壙墓・土坑、ＳＴ：古墳

3，各遺構番号は（遺構種別記号ー番号）で連番とした。本書では発掘調査時の遺構番号を原則的にそのまま用いた。遺構番号の下 4 桁、5 桁は調査区を示す。

4，本書に掲載した遺物番号は挿図ごとに連番として本文中では挿図番号ー遺物番号で表記した。写真図版遺物も同じである。

5，本書に用いた方位はすべて国土座標第Ⅱ系の座標北である。

6，遺物および実測図の検索・照合のため、実測遺物全てに登録番号を付け表に付記した。

7，遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図は佐賀県文化財調査研究資料室に保管する。

目　次

Ⅰ、調査の経過 …… 1
1，調査に至る経過 …… 1
2，調査組織 …… 3
3，調査の方法と経過 …… 9
(1)　調査の方法 …… 9
(2)　調査の経過 …… 10

Ⅱ、遺跡の位置と環境 …… 15
1，地理的環境 …… 15
2，歴史的環境 …… 18

Ⅲ、調査の概要 …… 26
1，中原遺跡の調査歴（小松） …… 26
2，遺跡の概要 …… 26

Ⅳ、弥生時代の遺構と遺物（吉野、伊達） …… 47
1，概要 …… 47
2，遺構 …… 47
(1)　土壙墓 …… 47
(2)　土坑 …… 51
3，遺物 …… 77
(1)　土壙墓 …… 77
①土器 …… 77
②石器、青銅器 …… 77
③石製玉類 …… 77
(2)　土坑 …… 81
①土器 …… 81
②石器 …… 90
③石製玉類 …… 90

Ⅴ、古墳時代の遺構と遺物（小松） …… 118
1，概要 …… 118
2，遺構 …… 118
(1)　ST11002 古墳 …… 118
(2)　ST11067 古墳 …… 126
(3)　ST11141 古墳（唐津市教委５号墳） …… 129
(4)　ST11158 古墳 …… 130
(5)　ST12002 古墳 …… 134

3，遺物（小松）……139
(1) ST11002 古墳出土遺物……139
①土器 ……139
②鉄製品 ……139
③玉類 ……139
(2) ST11067 古墳出土遺物……146
①土器 ……146
②人形土製品……146
③水晶原石 ……147
④馬具 ……147
(3) ST11141 古墳（唐津市教委５号墳）出土遺物 ……156
①土器 ……156
②埴輪 ……157
③鉄製品・馬具・鉄鏃 ……157
④玉類 ……157
(4) ST11158 古墳出土遺物……169
①土器 ……169
(5) ST12002 古墳出土遺物……180
①土器 ……180
②鉄製品 ……180
4，古墳群の形成過程について（小松）……180
(1) 各古墳の時期決定 ……180
(2) 古墳群の形成過程 ……182

Ⅵ．総括 ……205
1，弥生時代土壙墓・土坑の形成過程（小松、吉野） ……205
(1) はじめに ……205
(2) 壺Ｄ（広口壺）の型式分類 ……205
(3) 土壙墓の分布と時期 ……208
(4) 土坑の分布と時期 ……212
(5) 土器の器種構成 ……212
(6) まとめ ……213
2，弥生時代土壙墓・土坑・甕棺墓出土の鉄製品（補遺）（小松）……215

挿図目次

図－1　路線図（1/50000）…… 2
図－2　遺跡位置図 …… 15
図－3　旧海岸線・砂丘列地形分類図（1/100000）…… 16
図－4　周辺遺跡分布図（1/70000）…… 19
図－5　唐津平野弥生時代青銅器出土遺跡分布図（1/50000） …… 22
図－6　調査区位置図（1/6000） …… 27
図－7　中原遺跡全調査区遺構配置図（1/2000） ……29・30
図－8　11, 12, 13 区遺構配置図(1/600)　31・32
図－9　中原遺跡全景 …… 33
図－10　遺跡概略（1/6000） …… 34
図－11　11 区・13 区弥生時代墳墓・土坑配置図 1（1/500） ……35・36
図－12　11 区・13 区弥生時代墳墓・土坑配置図 2（1/250） ……37・38
図－13　弥生時代墳墓・土坑出土状況 1（1/100） ……39・40
図－14　弥生時代墳墓・土坑出土状況 2（1/100） ……41・42
図－15　弥生時代墳墓・土坑出土状況 3（1/100） ……43・44
図－16　弥生時代墳墓・土坑出土状況 4（1/100） ……45・46
図－17　SK13155・13170 土壙墓（1/30）… 57
図－18　SK13285・13307 土壙墓（1/30）… 58
図－19　SK13328・13359 土壙墓（1/30）… 59
図－20　SK13339・13346・13385 土壙墓（1/30） …… 60
図－21　SK13353・13360・13362 土壙墓（1/30） …… 61
図－22　SK13363・13371・13372 土壙墓（1/30） …… 62
図－23　SK11292 土坑（1/30）……63・64
図－24　SK11232・13042・13063 土坑（1/30）…… 65
図－25　SK13043 土坑（1/30） …… 66
図－26　SK13045・13076・13100 土坑（1/30） …… 67
図－27　SK13189・13237・13331 土坑（1/30） …… 68
図－28　SK13203・13378・13387 土坑（1/30） …… 69
図－29　SK13191・13194・13308 土坑（1/30） …… 70
図－30　SK13197・13244 土坑（1/30）…… 71
図－31　SK13318・13358 土坑（1/30）…… 72
図－32　SK13322・13351 土坑（1/30）…… 73
図－33　SK13314 土坑（1/30） …… 74
図－34　SK13326・SK13327 土坑（1/30）… 75
図－35　SK13245・13399 土坑（1/30）…… 76
図－36　土壙墓出土土器（1/4） …… 78
図－37　土壙墓出土石器・青銅器（1/2）…… 79
図－38　土壙墓出土玉類（1/1） …… 80
図－39　SK11292 土坑出土土器 1（1/4）…… 91
図－40　SK11292 土坑出土土器 2（1/4）…… 92
図－41　SK11292 土坑出土土器 3（1/4）…… 93
図－42　SK11292 土坑出土土器 4（1/4）…… 94
図－43　SK11292 土坑出土土器 5（1/4、1/6、1/3） …… 95
図－44　SK11292 土坑出土土器 6（1/4）…… 96
図－45　SK11292 土坑出土土器 7（1/4）…… 97
図－46　SK11292 土坑出土土器 8（1/4）…… 98
図－47　土坑出土土器 1（1/4） …… 99
図－48　土坑出土土器 2（1/4） …… 100
図－49　土坑出土土器 3（1/4） …… 101
図－50　土坑出土土器 4（1/4） …… 102
図－51　土坑出土土器 5（1/4） …… 103
図－52　土坑出土土器 6（1/4） …… 104
図－53　土坑出土土器 7（1/4） …… 105
図－54　土坑出土土器 8（1/4） …… 106
図－55　土坑出土石器・勾玉（1/2・1/1）…… 107
図－56　ST11002・11067・11141

古墳（1/200）……121・122
図－57　ST11002 古墳墳丘（1/150）……123・124
図－58　ST11002・11067・11158・12002
土層断面図（1/20,1/40,1/80）……125
図－59　ST11067 古墳墳丘（1/100）…127・128
図－60　ST11141 古墳墳丘（1/100）…131・132
図－61　ST11141 古墳内部主体（1/40）……133
図－62　ST11158 古墳墳丘（1/150）……135・136
図－63　ST12002 古墳墳丘（1/100）……137・138
図－64　ST11002 古墳出土土器 1（1/3）……140
図－65　ST11002 古墳出土土器 2（1/3）……141
図－66　ST11002 古墳出土土器 3（1/3）……142
図－67　ST11002 古墳出土土器 4（1/3、1/4）
鉄製品（2/3）・玉類（1/1）……143
図－68　ST11002 古墳出土土器 5（1/3）……144
図－69　ST11002 古墳出土土器 6（1/3）……145
図－70　ST11067 古墳出土土器 1（1/3）……148
図－71　ST11067 古墳出土土器 2（1/3）……149
図－72　ST11067 古墳出土土器 3（1/3）……150
図－73　ST11067 古墳出土土器 4（1/3）……151
図－74　ST11067 出土土製人形（2/3）……152
図－75　ST11067 出土水晶原石（1/1）……153
図－76　ST11067 古墳出土轡（1/2）・模式図…154
図－77　ST11067 古墳出土轡X線写真……155
図－78　ST11141 古墳（5 号墳）
出土遺物 1（1/4）……158
図－79　ST11141 古墳（5 号墳）出土遺物 2
（1/2，1/3）……159
図－80　ST11141 古墳出土土器 1（1/3）……160
図－81　ST11141 古墳出土土器 2（1/3）……161
図－82　ST11141 古墳出土土器 3（1/3）……162
図－83　ST11141 古墳出土土器 4（1/3）……163
図－84　ST11141 古墳出土土器 5（1/3）……164
図－85　ST11141 古墳出土土器 6（1/3）……165
図－86　ST11141 古墳出土埴輪（1/2）……166
図－87　ST11141 古墳出土鉄製品（1/2）……167
図－88　ST11141 古墳出土轡X線写真……167
図－89　ST11141 古墳出土轡（1/2）・模式図…168
図－90　ST11141 古墳出土玉類（1/1）……169
図－91　ST11158 古墳出土 1 土器（1/3）……170
図－92　ST11158 古墳出土 2 土器（1/3）……171
図－93　ST11158 古墳出土 3 土器（1/3）……172
図－94　ST11158 古墳出土 4 土器（1/3）……174
図－95　ST11158 古墳出土 5 土器（1/3）……175
図－96　ST11158 古墳出土 6 土器（1/3）……176
図－97　ST11158 古墳出土陶質土器（1/2）…177
図－98　ST12002 古墳出土土器 1（1/3）……178
図－99　ST12002 古墳出土土器 2（1/3）……179
図－100　ST12002・11158 古墳出土鉄製品・
玉類（1/2、1/1）……179
図－101　古墳時期決定土器群 1（1/4）……183
図－102　古墳時期決定土器群 2（1/4）……184
図－103　壺 D 型式分類 1（1/12）……206
図－104　壺 D 型式分類 2（1/12）……207
図－105　弥生時代墳墓・
土坑配置図（1/200）……209・210
図－106　SK11292 出土土器比率……214
図－107　SK11292 以外出土土器比率……214
図－108　土壙墓、土坑、甕棺墓
出土鉄製品（1/2）……216

表 目 次

表－1　調査経過表……8
表－2　調査担当者一覧表……9
表－3　中原遺跡各調査区調査期間・
担当者一覧……9
表－4　唐津平野弥生時代青銅器・
鋳型出土遺跡一覧表……21
表－5　土壙墓、土坑一覧表……48
表－6　土壙墓、土坑出土土器一覧表（1）…108
表－7　土壙墓、土坑出土土器一覧表（2）…109
表－8　土壙墓、土坑出土土器一覧表（3）…110
表－9　土壙墓、土坑出土土器一覧表（4）…111
表－10　土壙墓、土坑出土土器一覧表（5）…112

表－11　土壙墓、土坑出土土器一覧表（6）… 113
表－12　土壙墓、土坑出土土器一覧表（7）… 114
表－13　土壙墓、土坑出土土器一覧表（8）… 115
表－14　土壙墓、土坑出土石器・青銅器
　　一覧表 …… 116
表－15　土壙墓、土坑出土玉類一覧表 …… 116
表－16　土壙墓、土坑出土管玉一覧表 …… 117
表－17　古墳一覧表 …… 119
表－18　古墳出土土器一覧表（1）…… 185
表－19　古墳出土土器一覧表（2）…… 186
表－20　古墳出土土器一覧表（3）…… 187
表－21　古墳出土土器一覧表（4）…… 188
表－22　古墳出土土器一覧表（5）…… 189
表－23　古墳出土土器一覧表（6）…… 190
表－24　古墳出土土器一覧表（7）…… 191
表－25　古墳出土土器一覧表（8）…… 192
表－26　古墳出土土器一覧表（9）…… 193
表－27　古墳出土土器一覧表（10）…… 194
表－28　古墳出土土器一覧表（11）…… 195
表－29　古墳出土土器一覧表（12）…… 196
表－30　古墳出土土器一覧表（13）…… 197
表－31　古墳出土土器一覧表（14）…… 198
表－32　古墳出土土器一覧表（15）…… 199
表－33　古墳出土土器一覧表（16）…… 200
表－34　古墳出土土器一覧表（17）…… 201
表－35　古墳出土土器一覧表（18）…… 202
表－36　水晶原石一覧表 …… 203
表－37　古墳出土鉄製品一覧表 …… 203
表－38　古墳出土埴輪一覧表 …… 203
表－39　古墳出土玉類一覧表 …… 204
表－40　古墳出土土製人形一覧表…… 204
表－41　壺D型式分類表 …… 205
表－42　土壙墓、土坑時期出土遺物一覧表 … 211
表－43　弥生時代土壙墓、土坑出土鉄製品
　　一覧表 …… 215

巻頭図版目次

1，松浦川と鏡山南麓平野
2，調査区全景（南西上空から）
　調査区全景（南東上空から）
3，SK11292・13042・13043
　土坑（西から）
　SK11292 土坑（真上から）
4，ST11141・11002・11067 古墳遠景
　（南上空から）
　ST11158 古墳（西上空から）
5，硬玉製勾玉・垂飾
6，磨製石剣・石戈・石鏃・青銅製切先
7，広口壺集合
8，ST11067 古墳出土土器
　ST11067 古墳出土土製人形・水晶
9，ST11067・11141 古墳出土轡
10，陶質土器集合

図版目次

PL.1　1.調査区全景（南東上空から）…… 217
　　2.11 区・12 区全景（真上から）…… 217
PL.2　1.調査区全景（南西上空から）…… 218
　　2.調査区全景（北東上空から）…… 218
PL.3　1.SK13155 広口壺出土状況（東から）… 219
　　2.SK13285（西から）…… 219
　　3.SK13285 土層断面（西南から）…… 219
　　4.SK13285（南から）…… 219
PL.4　1.SK13307（西から）…… 220
　　2.SK13307 土層断面（北から）…… 220
　　3.SK13307（南から）…… 220
PL.5　1.SK13328 完掘（北から）…… 221
　　2.SK13328 壺出土状況（南から）…… 221
　　3.SK13328 甕片出土状況（南東から）… 221

4.SK13328 土層断面（東から） …… 221
5.SK13328 土層断面（西から） …… 221
6.SK13339（西から）…… 221
7.SK13339 完掘状況（西から） …… 221
PL.6 1.SK13346 完掘（西から）…… 222
2.SK13353 ヒスイ製玉出土状況
（西から）…… 222
3.SK13353 管玉 No.2 出土状況
（北から）…… 222
4.SK13362（北から）…… 222
5.SK13362 磨製石鏃
出土状況（北から）…… 222
6.SK13363（北から） …… 222
PL.7 1.SK13371（手前）・SK13372（奥）
（南から）…… 223
2.SK13371（右）・SK13372（左）
（西から）…… 223
3.SK13371（西から）…… 223
4.SK13372（西から）…… 223
5.SK13385（北から）…… 223
6.SK13385 石剣・切先（東から） …… 223
PL.8 弥生土坑
（SK11292・SK13042・SK13043）…… 224
PL.9 1.SK11232（東から）…… 225
2.SK11292（南から）…… 225
3.SK11292（南西から）…… 225
PL.10 1.SK13042（東南から）…… 226
2.SK13063（南から）…… 226
3.SK13076（北東から）…… 226
PL.11 1.SK13100（東から）…… 227
2.SK13191（南から）…… 227
3.SK13191（東から）…… 227
4.SK13194（南から）…… 227
PL.12 1.SK13197（南から）…… 228
2.SK13189・SK13203（北から） …… 228
3.SK13189・SK13203 北壁土層断面
（西から）…… 228
4. SK13189・SK13203 北壁土層断面
（北から）…… 228
5. SK13189・SK13203 北壁土層断面 228
（東から）…… 228
6.SK13244（南から） …… 228
PL.13 1.SK13308（南東から）…… 229
2.SK13314（南から）…… 229
3.SK13314 勾玉出土状況 …… 229
4.SK13314 完掘状況（北から） …… 229
PL.14 1.SK13318（南から）…… 230
2.SK13318 完掘状況（北から）…… 230
3.SK13318 石戈出土状況（西から）…… 230
4.SK13322（西から）…… 230
5.SK13326（東から）…… 230
6.SK13326 鉄鏃 No.1 出土状況
（北から）…… 230
7.SK13326 鉄鏃出土状況（北から） … 230
8.SK13326 鉄製鏃 No.3 出土状況
（南東から）…… 230
PL.15 1.SK13327 管玉 No.1 出土状況
（東から）…… 231
2.SK13327 管玉 No.2 出土状況 …… 231
3.SK13331（南から）…… 231
4.SK13351（北西から）…… 231
5.SK13351 周辺の完掘状況（東から）… 231
6.SK13358（南から）…… 231
PL.16 1.SK13378（北から）…… 232
2.SK13378 管玉 No.1・2・3 出土状況
（北から）…… 232
3.SK13378 管玉 No.4 出土状況
（北から）…… 232
4.SK13399（東から）…… 232
PL.17 1.ST11141・11002・11067 古墳遠景
（南上空から）…… 233
2.ST11002 古墳 1（西上空から）…… 233
3.ST11002 古墳 2（西上空から）…… 233
PL.18 1.ST11002 古墳土層（東から）…… 234
2.ST11067 古墳と ST11002 古墳周溝… 234
3.ST11067 古墳（北から） …… 234
PL.19 1.ST11067 古墳（北西上空から）…… 235
2.ST11067 古墳土層 1 …… 235

3.ST11067 古墳土層 2 …… 235
PL.20 1.ST11067 古墳出土土師器 …… 236
2.ST11067 古墳出土須恵器 …… 236
3.ST11067 古墳出土土製人形 1 …… 236
4.ST11067 古墳出土土製人形 2 …… 236
5.ST11067 古墳出土土製人形 3 …… 236
6.ST11067 古墳出土土製人形 4 …… 236
PL.21 1.ST11141 古墳 1（真上から）…… 237
2.ST11141 古墳 2（南西から）…… 237
3.ST11141 古墳 3（真上から）…… 237
PL.22 1.ST11141 古墳 4（西上空から）…… 238
2.ST11141 古墳石室 1（西から）…… 238
3.ST11141 古墳石室 2（北から）…… 238
PL.23 1.ST11141 古墳石室 3（西から）…… 239
2.ST11141 古墳石室 4（西から）…… 239
3.ST11141 古墳土層 …… 239
PL.24 1.ST11141 古墳出土須恵器 …… 240
2.ST11141 古墳出土馬具 …… 240
3.ST11141 古墳出土馬具、鉄鏃 …… 240
4.ST11141 古墳出土鉄鏃 …… 240
PL.25 1.ST11158 古墳 1（西上空から）…… 241
2.ST11158 古墳 2（西上空から）…… 241
PL.26 1.ST11158 古墳 3（真上から）…… 242
2.ST11158 古墳 4（西から）…… 242
3.ST11158 古墳葺石（西から） …… 242
PL.27 1.ST12002 古墳と周溝墓群（北から）… 243
2.ST12002 古墳（南西から）…… 243
3.ST12002 古墳周溝出土土器 …… 243
PL.28 SK13328・13339 土壙墓・
SK11292 土坑出土土器 …… 244
PL.29 SK11292・13042 土坑出土土器 …… 245
PL.30 SK13042・13043・13063・13076・
13100・13189 土坑出土土器 …… 246
PL.31 SK13189・13191・13194・13197・
13203 土坑出土土器 …… 247
PL.32 SK13237・13314・13318・13358
土坑出土土器 …… 248
PL.33 ST11002・11067 古墳出土土器 …… 249
PL.34 ST11067・11141 古墳出土土器 …… 250
PL.35 ST11141 古墳出土土器 …… 251
PL.36 1.ST11158 古墳出土須恵器 1 …… 252
2.ST11158 古墳出土須恵器 2 …… 252
PL.37 1.ST11158 古墳出土須恵器 3 …… 253
2.ST11158 古墳出土須恵器 4 …… 253
PL.38 1.ST11158 古墳出土須恵器 5 …… 254
2.ST11158 古墳出土須恵器 6 …… 254
PL.39 1.ST11158 古墳出土須恵器 7 …… 255
2.ST11158 古墳出土須恵器 8 …… 255
PL.40 ST11158 古墳出土土器 …… 256
PL.41 ST11158・ST12002 古墳出土土器 …… 257
PL.42 ST11067 古墳出土土製人形 …… 258
PL.43 古墳出土水晶原石・埴輪・鉄製品 …… 259
PL.44 1.ST11141 古墳出土轡 1 …… 260
2.ST11141 古墳出土轡 2 …… 260
PL.45 1.ST11067 古墳出土轡 …… 261
2.ST12002 古墳出土U字形鍬鋤先 …… 261
PL.46 古墳出土玉類 …… 262

唐津中原文化財事務所

唐津中原文化財事務所復元棟

Ⅰ．調査の経過

1，調査に至る経過

西九州自動車道は福岡県福岡市から前原市、佐賀県唐津市、伊万里市、長崎県松浦市、佐世保市を経由して佐賀県武雄市に至り九州横断自動車長崎大分線と合流する総延長約 150km の路線であり、国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の事業である。本埋蔵文化財発掘調査事業はこのうちの唐津道路・唐津伊万里道路・伊万里道路・伊万里松浦道路区間の約 45.2km（佐賀県分）を対象としている。

佐賀県教育委員会文化課（平成 21 年度から社会教育・文化財課）は佐賀国道事務所から道路建設事業の照会を受け、平成 6 年度から路線予定地の踏査および確認調査を実施した。文化財調査体制は開発事業が広域かつ大規模であることから調査主体は佐賀県教育委員会文化課とし、調査対象地の当該教育委員会からの職員派遣をうけた。これまでの本調査は唐津市堂の前遺跡・井ゲタ遺跡・末広遺跡・梅白遺跡・中原遺跡、唐津市浜玉町赤野遺跡・岩根遺跡・袈裟丸城跡・目貫古墳群・大江前遺跡・仁田古墳群・矢作遺跡・下新田古墳群・大坂古墳群・唐津市汐井川古墳群・古園遺跡・寺ノ元遺跡・千々賀遺跡・千田島Ⅱ遺跡がある。

このうち、刊行した発掘調査報告書は 2000 年 3 月に『堂の前遺跡・井ゲタ遺跡』、2003 年 3 月に『梅白遺跡』、2006 年 3 月に唐津市浜玉町『大江前遺跡・目貫古墳群・赤野遺跡・袈裟丸城跡・岩根遺跡』2007 年 3 月に『中原遺跡Ⅰ』、2008 年 3 月に『中原遺跡Ⅱ』、2009 年 3 月に『中原遺跡Ⅲ』、2010 年 3 月に『中原遺跡Ⅳ』『仁田古墳群Ⅰ』などがある。

中原遺跡の調査は本調査事業以前に 2 回の発掘調査が実施されている。この 2 回の発掘調査地点は本事業調査区 11 区～１３区で確認できた。第一次調査は 1965 年 11 月 11 日～ 11 月 21 日の第一次日仏合同調査として行われた。弥生前期～中期後半の甕棺墓 6 基を調査した。また、このとき検出した石組遺構は本事業で確認した ST11158 前方後円墳の葺石であることが判った。

第二次調査は 1986 年 4 月～ 7 月にかけて分譲住宅地造成に伴い唐津市教育委員会が実施した。調査の結果、弥生時代中期の甕棺墓 3 基と古墳時代初頭の周溝墓 4 基と古墳時代中期の古墳周溝を確認した。本事業発掘調査は中原遺跡としては第 3 次調査になるが本事業の調査区の中に第一次、第二次調査の調査区が含まれる。

本調査に至る確認調査は平成 9 年 1 月～ 3 月にかけて実施した。確認調査担当は佐賀県文化課立石泰久（企画調整主査）・家田淳一（主査）・中尾賢治（調査補助員）である。確認調査対象地は路線内の宇木川以西から県道浜玉・相知線付近までである。佐賀国道事務所路線測点番号では NO.480 ～ NO.540 までである。3 m × 40 mを基本とする試掘坑を 57 本設定し重機による掘削を行った。この確認調査により梅白遺跡および中原遺跡の広がりを確認した。特に 36 トレンチから弥生時代終末の土器群が多量に出土したがこれは 2 区の SX246 にあたる。前述の第一次・第二次調査により中原遺跡は埋蔵文化財包蔵地として周知化されていたが、中原遺跡周辺は路線のインターチェンジ部分に相当しその開発面積も 80000㎡を超える広大なものであった。平成 9 年度の確認調査により中原遺跡の範囲が拡大することが判り、小字原、西丸田も含めて遺跡の範囲を拡大した。但し、第一次・第二次調査地点は住宅地であり住宅移転も進んでおらず確認調査をすることはできなかったが遺跡があることは判っていたので調査対象地とした。また、この段階では古代の遺構・遺物が出土することはほとんど想定していなかった。このような経過を得て中原遺跡の調査対象面積を約 90000㎡とし平成 11 年から本調査に着手した。

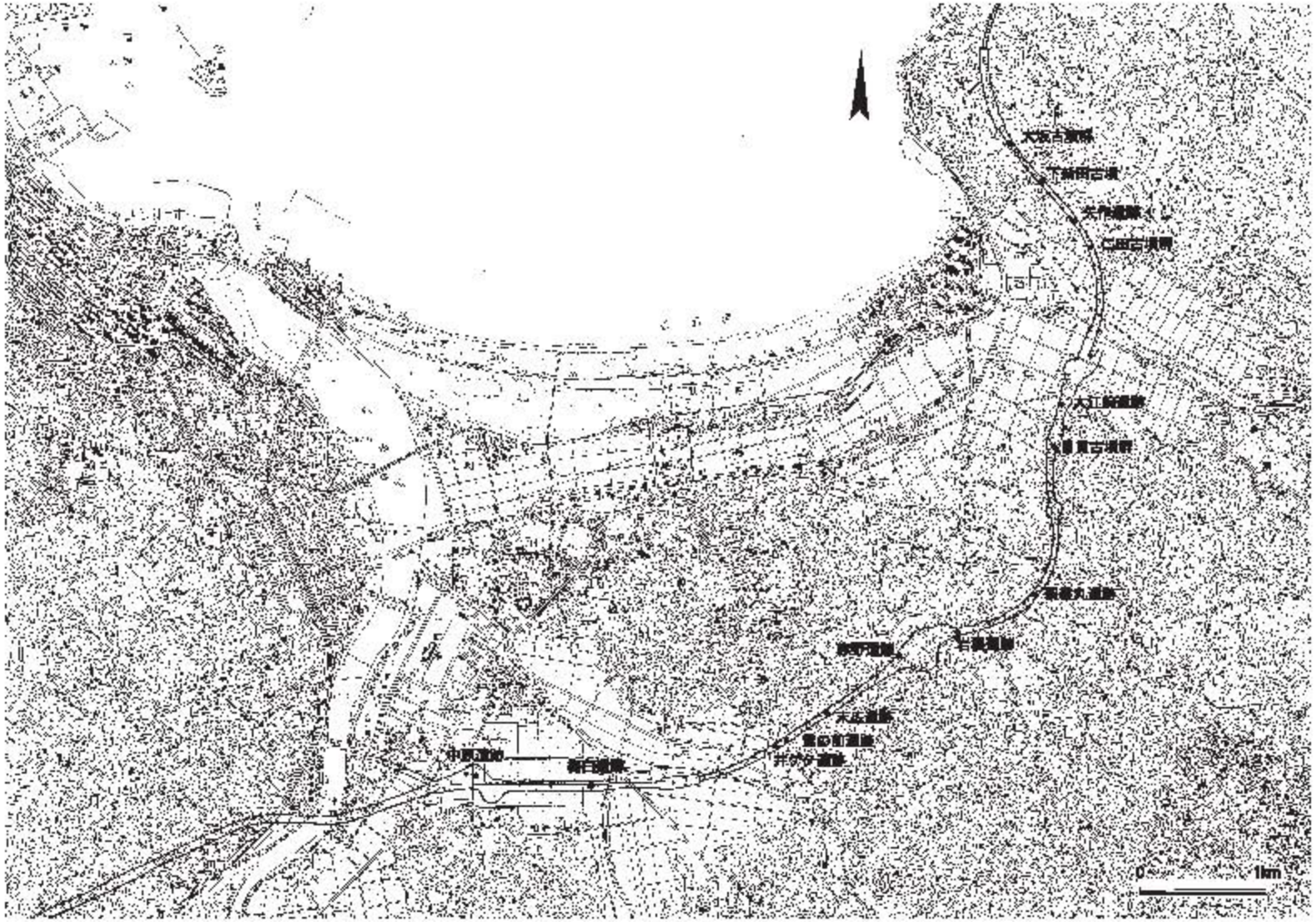


図1　路線図（1/50000）

2，調査組織

調査主体　佐賀県教育委員会
調査協力　唐津市教育委員会

発掘調査（平成 13 年 4 月～ 18 年 3 月）

平成 13 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	松尾　正廣
	佐賀県教育委員会	文化課長	佛坂　勝男
	佐賀県教育委員会	文化課参事	堤　博文
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	天本　洋一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	山口　康郎
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課企画調整主査	立石　泰久
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松　譲
	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	井上　倫生
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	辻村美代子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	松浦　智
	唐津市教育委員会	文化課職員	内田　孔明
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課専門員	天本　茂春
	佐賀県教育委員会	文化課主査	相川ミエ子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	島田　一幸
	佐賀県教育委員会	文化課主事	陶山　優

平成 14 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	松尾　正廣
	佐賀県教育委員会	文化課長	佛坂　勝男
	佐賀県教育委員会	文化課参事	中園　一次
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	天本　洋一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	山口　康郎
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課企画調整主査	立石　泰久
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松　譲
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	松浦　智
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	松瀬　京子
	唐津市教育委員会	文化課職員	内田　孔明
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課専門員	天本　茂春
	佐賀県教育委員会	文化課主査	野口佐智子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	島田　一幸
	佐賀県教育委員会	文化課主事	陶山　優

平成 15 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	松尾　正廣
	佐賀県教育委員会	文化課長	香月　博子
	佐賀県教育委員会	文化課参事	中園　一次
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	天本　洋一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	川久保弘二郎
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課企画調整主査	立石　泰久
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松　　譲
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	松瀬　京子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	谷　洋一郎
	唐津市教育委員会	文化課職員	内田　孔明
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課専門員	天本　茂春
	佐賀県教育委員会	文化課主査	野口佐智子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	島田　一幸
	佐賀県教育委員会	文化課主事	坂口　豪史

平成 16 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野　健二
	佐賀県教育委員会	文化課長	初村　健二
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	天本　洋一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	福山　正廣
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課係長	立石　泰久
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松　　譲
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	谷　洋一郎
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	大島　健司
	唐津市教育委員会	文化課職員	内田　孔明
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課係長	中原　吉朗
	佐賀県教育委員会	文化課主査	野口佐智子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	島田　一幸
	佐賀県教育委員会	文化課主事	坂口　豪史

平成 17 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野　健二
	佐賀県教育委員会	文化課長	初村　健二
	佐賀県教育委員会	文化課参事	東中川忠美
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	松本　誠一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	中村　　信

調査総括	佐賀県教育委員会	文化課主幹	西田　和己
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松　　譲
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	谷　洋一郎
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	大島　健司
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	田中健一郎
	唐津市教育委員会	文化課職員	美浦　雄二
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課係長	中原　吉朗
	佐賀県教育委員会	文化課主査	平尾　和子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	黒木　文好
	佐賀県教育委員会	文化課主事	山口　徹也

発掘作業員　平成 13 年度～平成 17 年度

〔H 13 年度〕

青木淳一、阿賀野千鶴、安藤剛、磯口裕子、市丸和子、市丸クミエ、伊藤末司、伊藤正子、井上義秋、岩田桂子、岩田泰浩、岩村正、内山智子、浦津正美、大木壽明、緒方義春、小栗三行、小副川初美、小野尾千代香、片峰秋子、片峰節子、加茂春江、小石加奈子、古賀和江、佐伯明、佐伯ヨシ子、坂本ユキヨ、坂本直久、重カズヨ、田中フサ子、谷口やす子、堤怜子、手島茂一、戸野川一二、長嶋サツエ、中島康子、中村静江、鍋島フミ子、野口洋一、野崎徳蔵、長谷川三男、馬場重治、藤瀬哲代、古川善彦、増井博、松下一枝、豆田紀久子、三塩タチ子、森智恵子、吉岡俊雄、吉村百合子、米倉幸一郎、脇山忠義、脇山ツタ子、脇山典子、脇山春雄、脇山マスエ、脇山美佐子、渡辺フサエ

〔H 14 年度〕

阿賀野千鶴、安藤剛、市丸和子、市丸クミエ、伊藤末司、伊藤正子、井上義秋、岩田桂子、岩村正、浦津正美、緒方義春、小栗三行、小副川初美、小野尾千代香、片峰秋子、小石加奈子、古賀和江、佐伯明、佐伯ヨシ子、坂本ユキヨ、坂本直久、重カズヨ、田中フサ子、谷口やす子、堤怜子、手島茂一、戸野川一二、中村静江、鍋島フミ子、野口洋一、野崎徳蔵、長谷川三男、馬場重治、藤瀬哲代、古川善彦、増井博、松下一枝、豆田紀久子、三塩タチ子、森智恵子、吉岡俊雄、吉村百合子、米倉幸一郎、脇山忠義、脇山ツタ子、脇山典子、脇山春雄、脇山マスエ、脇山美佐子

〔H 15 年度〕

阿賀野千鶴、安藤剛、市丸和子、市丸クミエ、伊藤末司、伊藤正子、井上義秋、岩田桂子、内山清信、浦津正美、緒方義春、小副川初美、片峰秋子、小石加奈子、古賀和江、佐伯明、佐伯ヨシ子、坂本ユキヨ、坂本直久、重カズヨ、田中フサ子、谷口やす子、手島茂一、戸野川一二、中村静江、鍋島フミ子、野口洋一、野崎徳蔵、馬場重治、原直嗣、藤瀬哲代、古川善彦、増井博、松下一枝、豆田紀久子、三塩タチ子、森智恵子、吉岡俊雄、吉村百合子、米倉幸一郎、脇山忠義、脇山ツタ子、脇山典子、脇山春雄、脇山マスエ

〔H 16 年度〕

阿賀野千鶴、市丸和子、市丸クミエ、伊藤末司、伊藤正子、井上義秋、岩田桂子、内山清信、浦津正美、緒方義春、小副川初美、片峰秋子、小石加奈子、佐伯明、佐伯ヨシ子、坂本ユキヨ、坂本直久、重カズヨ、谷口やす子、手島茂一、戸野川一二、中村静江、鍋島フミ子、野口洋一、野崎徳蔵、馬場重治、藤瀬哲

代、古川善彦、増井博、松下一枝、豆田紀久子、三塩タチ子、森智恵子、吉岡俊雄、吉村百合子、米倉幸一郎、脇山忠義、脇山ツタ子、脇山典子、脇山春雄、脇山マスエ

〔H 17 年度〕

阿賀野千鶴、石本雅生、市丸クミエ、伊藤末司、伊藤正子、岩田桂子、上野政喜、浦津正美、大谷節子、緒方義春、小副川初美、片峰秋子、川崎はつえ、川崎美登香、小石加奈子、佐伯明、坂本直久、重カズヨ、進藤英司、谷口やす子、中山博司、野口洋一、野崎徳蔵、橋本静夫、馬場重治、藤瀬哲代、増井博、松下一枝、豆田紀久子、三塩タチ子、森智恵子、吉岡俊雄、吉村百合子、米倉幸一郎、脇山忠義、脇山典子

室内整理作業　平成 13 年度～平成 21 年度

報告書作成　平成 22 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	川崎　俊広
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課長	江島　秋人
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課参事	七田　忠昭
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課副課長	森田　孝志
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課副課長	古川　英生
調査総括	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課係長	小松　　譲
調査員	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	井上　倫生
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	市川　浩文
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課嘱託	吉野　進一
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課嘱託	伊達　惇一朗
	唐津市教育委員会	文化課職員	美浦　雄二
庶務会計	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主事（吉野ヶ里遺跡担当）	黒田　康裕
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査（地域・家庭教育担当）	宮本　宏之
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査（文化財指導・世界遺産推進担当）	井手　弘幸

調査補助員・整理作業員　平成 13 年度～平成 22 年度

〔H 13 年度〕

唐津中原事務所

調査補助員：美浦あずさ

整理作業員：池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、辻美紀子、馬場薫、松本いつ子、三浦美智子、渡部直美

佐賀県文化財調査研究資料室

整理作業員：奥知恵子、村里育子

〔H 14 年度〕

唐津中原事務所

整理作業員：青木淳一、池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、辻美紀子、徳田まり子、中島美佳、馬場薫、松本いつ子、美浦あずさ、三浦美智子、脇山邦子、渡部直美

佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：奥知恵子、村里育子
〔H 15 年度〕
唐津中原事務所
整理作業員：池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、辻美紀子、徳田まり子
中島美佳、馬場薫、松本いつ子、美浦あずさ、脇山邦子、渡部直美
佐賀県文化財調査研究資料室
調査補助員：百崎正子
整理作業員：奥知恵子、村里育子
〔H 16 年度〕
唐津中原事務所
整理作業員：池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、辻美紀子、徳田まり子
中島美佳、松本いつ子、美浦あずさ、脇山邦子、渡部直美
佐賀県文化財調査研究資料室
調査補助員：百崎正子
整理作業員：江副明子、奥知恵子、村里育子
〔H 17 年度〕
唐津中原事務所
整理作業員：池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久、辻美紀子
徳田まり子、中島美佳、松本いつ子、美浦あずさ、脇山邦子、渡部直美
佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：江副明子、奥知恵子、村里育子
〔H 18 年度〕
唐津中原事務所
整理作業員：池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久、徳田まり子
中島美佳、松本いつ子、美浦あずさ、脇山邦子、渡部直美
佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：江副明子、奥知恵子、村里育子
〔H 19 年度〕
唐津中原事務所
調査補助員：美浦あずさ
整理作業員：市丸宮子、浦田照千代、大薗聖子、川原里美、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久
徳田まり子、中島美佳、松本いつ子、脇山邦子、渡部直美
佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：江島美恵子、桑原廣子、上瀧光子、山口美佐子
〔H 20 年度〕
唐津中原事務所
調査補助員：美浦あずさ
整理作業員：市丸宮子、大薗聖子、川原里美、菊池孝子、桑代ゆかり、古藤真理子、徳田まり子、松本

綾子、松本いつ子、脇山邦子
佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：一番ヶ瀬富士子、江島美恵子、桑原廣子、山口美佐子
〔H 21 年度〕
唐津中原事務所
調査補助員：美浦あずさ
整理作業員：大薗聖子、菊池孝子、桑代ゆかり、古藤真理子、徳田まり子、松本綾子、松本いつ子、脇山邦子
佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：一番ヶ瀬富士子、江島美恵子、桑原廣子
〔H 22 年度〕
唐津中原事務所
調査補助員：美浦あずさ
整理作業員：大薗聖子、菊池孝子、桑代ゆかり、古藤真理子、徳田まり子、松本いつ子、脇山邦子
佐賀県文化財調査研究資料室
整理作業員：江島美恵子、桑原廣子（五十音順）

表1　調査経過表

年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
A班	井上・松浦	小松・松瀬	内田・松瀬	内田・大嶋	川副・田中
B班	内田・松瀬	川副・松浦	川副・谷	川副・谷	谷

表2　調査担当者一覧表

年度		佐賀県(職員)	(嘱託)	唐津市職員	調査補助員	資料室(嘱託)
平成13	2001	立石・小松・井上	辻村・松浦	内田	松瀬	吉田
平成14	2002	立石・小松・川副	松浦・松瀬	内田		百崎
平成15	2003	立石・小松・川副	松瀬・谷	内田		大嶋
平成16	2004	立石・小松・川副	大嶋・谷	内田		松瀬
平成17	2005	西田・小松・川副	大嶋・谷・田中(9月まで)	美浦（10月から）		児玉
平成18	2006	西田・小松・川副	丹羽・児玉	美浦		小森
平成19	2007	西田・小松・川副	戸塚・藤原・田中(10月から)	美浦	美浦ぁ	小森
平成20	2008	小松・梶山・井上・市川	戸塚・田中・藤原	美浦	美浦ぁ	小森
平成21	2009	小松・梶山・井上・市川	戸塚・藤原・土屋	美浦（9月まで）	美浦ぁ	―
平成22	2010	小松・井上・市川	吉野・伊達	美浦（12月まで）	美浦ぁ	―

表3　中原遺跡各調査区調査期間・担当者一覧

調査区	調　査　期　間	主　な　担　当　者
9－2区	H14. 4.10～H14.11.27	小松・松瀬
9－3区	H16.12. 7～H17. 3. 2	内田・大嶋
10区	H13. 9.27～H13.12. 7	井上・松浦
11区	H13. 5.28～H15.12.16	内田・井上・松浦. 松瀬・川副・谷
12区	H14.10. 7～H16.10.28	小松・松瀬・内田・大嶋
13区	H14.12.10～H17. 9.27	川副・ 谷 ・小松
14－1区	H14. 3. 8～H15. 3.15	川副・松浦
14－2区	H15.10.20～H16. 3.19	内田・松瀬
14－3区	H17. 4.22～H17. 7. 1	川副・田中

3，調査の方法と経過

(1)　調査の方法

中原遺跡の略号はＮＡＫとし調査区の呼称は算用数字を用い１区であれば「ＮＡＫ－１」とし、図面や写真、遺物の注記など記録類の表示に用いた。調査区内を現道路などの区画により１区から１４区の調査区に分け、さらに調査年度や調査工程上、細分し14-1区、14-2区などのように表示した。11区、12区、13区の現況は水田、畑、宅地であり、それらの区画によりそれぞれの調査区を設定した。

調査区画は国土座標にあわせＸ＝46260、Ｙ＝－92700の交点を原点とする10ｍ×10ｍの方眼区画を設定した。南北方向をアルファベットとし北から南にＡ～Ｇ、東西方向を算用数字にし東から西に１～59とし、グリッド（区画）名をアルファベット－算用数字で表記した。各グリッドの北東杭をグリッド杭とし、杭にグリッド名を表示した。

遺構番号は３桁の一連の番号とし、４桁、５桁目は調査区を示すことにした。この遺構番号の頭に遺構の種別を示すアルファベット２文字の分類記号を付けて表示した。柱穴は調査区ごとの４桁の一連番号とし４桁目は調査区を示すことにした。

遺構の写真は白黒、カラーリバーサルとも４×５、ブローニー、35mmを使用し、カラーネガは35mmのみに使用した。また、必要に応じ気球や高所作業車(ハイライダー)による写真撮影を実施した。

調査にあたっては基本土層を設定し、表土は重機により掘削し、包含層は人力掘削を原則とした。ただし、出土遺物が少ない包含層は重機掘削を行った。

(2) 調査の経過

中原遺跡の調査は平成11年7月5日の1区の重機による表土掘削から始まった。終了は平成17年9月であり、調査期間は約6年間である。平成11年度～平成12年度はおもに1区から7区の古代の遺構と遺物の調査であり、『中原遺跡Ⅰ』、『中原遺跡Ⅱ』、『中原遺跡Ⅲ』で報告した。

本報告書に掲載する調査区は11区、12区、13区であり、その調査期間は平成13年5月から平成17年9月である。調査は主に2班体制で行い、この調査期間中に9区、10区、14区の調査も併行したために9区～14区の調査経過を記す。

11区の調査は平成13年5月末から始めた。調査区内の除草作業のち人力によるトレンチ掘り下げを開始した。主担当はB班であり、7月はA・B班合同で11区の調査を行った。本調査区はこれまでの唐津市教育委員会や日仏合同調査結果などでも遺構密度が高いことが予想されたが、現況が宅地であり、用地買収などの関係で充分な予備調査ができなかったため、当初は慎重に調査を計画し、トレンチを設定し人力掘削をおこない、表土や包含層の厚さなどを調べた。

7月上旬、11区の重機による表土掘削に着手した。7月下旬、ST11002古墳の葺石を検出し、唐津市教育委員会の調査区も確認できた。9月、竪穴住居などの遺構を検出し掘り下げに入った。

9月27日、10区の重機による表土掘削を開始し、10月上旬からA班は10区の人力による遺構検出に着手した。10区は10-1区、10-2区、10-3区に分かれるが、12月上旬には調査を終了した。その後、A班は11区の調査に合流した。

10月、11区の直線溝であるSD11065の掘り下げ、11月から12月にかけてST11002古墳やST11067古墳、ST11141古墳の周溝掘り下げに入った。

12月上旬、ST11141古墳の主体部を確認した。

平成14年1月、竪穴住居や土坑など集落域の調査が本格化してきた。2月、テレビ局の番組のロケ撮影に協力した。調査員、作業員もエキストラとして出演した。11区の東側から中央部にかけて甕棺墓は希薄であったが、2月頃から甕棺墓の調査にも入った。

3月8日、14-1区の重機による表土掘削を開始し4月から人力掘削を始めた。14-1区はさらに3つの調査区に分かれるが、北側2つの調査区の包含層掘り下げを実施した。A班が11区と14-1区の調査を併行して行った。

4月上旬、9-2区の重機による表土掘削を開始し、引き続き人力掘削による遺構の掘り下げ作業に入った。9-2区はA班が担当した。9-2区からはSD11065の延長の溝であるSD901や掘立柱建物群を検出した。11区はB班が担当し4月以降、竪穴住居や甕棺の掘り下げ作業を行った。また、B班は14-1区の包含層掘り下げも併行した。

5月、9-2区から方格規矩鏡片が出土した。

6月、9-2区の調査区北側の低地部から木組遺構を検出した。

8月、9-2区の調査区東側の重機による表土掘削を再開した。その結果、掘立柱建物群を検出した。高島忠平先生から調査指導を受けた。

8月下旬、14-1区から鋳型が出土した。9月から10月にかけて9-2区の調査区北側の低地部からは木組遺構のほか、柱材やねずみ返しなどの建築部材が出土した。

10月上旬、12区の重機による表土掘削を開始した。表土は薄く、重機で掘削した遺構検出面から石製把頭飾が出土した。10月23日、福富中学校1年生の発掘体験学習を11区で行った。

11月下旬、9-2区の調査が終了した。A班は12区の調査に入った。

12月中旬、13区南東部の重機による表土掘削をおこなった。その結果、11区～13区にまたがるST11158前方後円墳を検出した。また、日仏合同調査のトレンチを確認した。日仏合同調査に確認されていた石列はST11158前方後円墳の葺石であることも判明した。

平成15年1月、ST11158前方後円墳の後円部墳丘部下検出の甕棺群から硬玉製や碧玉製の玉類などが出土した。

2月、12区でST12032を検出した。また、14区から鋳型片が出土した。小田富士雄先生から調査指導を受けた。

3月、11区の甕棺墓から銅矛や鉄斧や鉄製鉋などが出土し、厚葬墓群が明確になってきた。

平成15年4月、嘱託職員の谷が着任した。松浦の後任である。A班は内田、松瀬、B班は川副、谷の体制で、A班は12区を、B班は13区と11区の残務を担当した。

4月下旬、鏡ケーブルTVの取材があった。12区はST12032古墳の周溝掘り下げ、13区はST11158古墳の周溝掘り下げを4月から5月にかけて行った。

5月中旬、九州大学岩永先生から銅矛、鋳型についての調査指導を受けた。

5月下旬、高所作業車によるST12032古墳とST11158古墳の全景写真撮影を実施した。

6月、13区の近・現代墓の掘り下げを実施、ほぼ終了した。

6月5日、銅矛、鋳型の記者発表を行った。

6月7日、現地説明会を実施、見学者は約150名であった。

7月、12区は弥生時代後期の竪穴住居他の調査を実施、13区は前方後円墳の後円部墳丘上の厚葬甕棺墓周囲の祭祀土坑の調査を行った。

7月下旬、13区甕棺墓より鉄矛出土。12区の竪穴住居から鏡の紐片や碧玉原石片なども出土した。

9月、14-2区の調査に入るため、プレハブを移動し重機による盛土、表土掘削を開始した。

9月上旬、甕棺墓より円環型銅釧3が出土した。下旬には福富中学校の発掘体験学習を行った。12区は周溝墓群の掘り下げを行った。ST12002古墳の周溝掘り下げを開始した。

10月下旬、14-2区の人力掘削に着手した。担当はA班である。12区と14-2区の調査を併行した。

11月中旬、13区の甕棺墓から碧玉製管玉108点や円環型銅釧12が出土、円環型銅釧や石製玉類など装身具の副葬が際だってきた。また、13区の南側を重機により表土掘削して拡張した。

12月、12区ST12032古墳の周溝内埋葬施設を検出、12月12日、福岡大学武末先生から中原遺跡出土陶質土器についての調査指導を受けた。

平成16年1月15日、宮崎大学柳沢先生から中原遺跡検出の古墳について調査指導をうけた。

2月22日、鏡地区の「まつらの姫達の宴ウォーキング」で中原遺跡見学に協力した。

2月26日、東京大学後藤先生から青銅器ほかの調査指導をうけた。

3月3日、愛媛大学村上先生から鉄器の調査指導をうけた。その結果、遺跡内で弥生時代後期～終末期に鍛冶が行われていたことが確実になった。

2月から3月にかけて、12区は周溝墓群の調査、13区は甕棺墓の掘り下げを継続した。また、3月末で14-2区の調査が終了した。

平成16年、4月から松瀬にかわって大嶋が着任した。A班内田、大嶋、B班川副、谷の体制で12区、13区を引き続いて担当した。

5月、唐津市北波多上平野遺跡の調査にはいった。

5月末、鏡山小学校6年生の遺跡見学があった。また、13区南側の包含層掘り下げを実施した。こ

の谷状の落ち込みから多量の農具や工具などの木製品や土器片が出土した。

7月上旬、久里小学校6年生の遺跡見学があった。また、SP13231から鏡片が出土した。さらに、円環型銅釧の公表を行った。

8月上旬、13区南側の落ち込みから鋳型片出土。14区出土の鋳型と接合した。また、木組遺構や杭列なども検出し、木組遺構埋土から多量の堅果が出土した。

9月上旬、13区の空中写真撮影を実施した。

10月、13区南側の落ち込みの木組遺構の調査が終了した。落ち込み内を横断する数条からなる杭列とそれに直交する木樋を検出した。11月にかけて調査を継続し、鋳型片なども出土した。

11月中旬、熊本大学甲元先生から調査指導をうけた。

11月末で13区南側落ち込みの調査が終了した。調査終了後、工事用の仮設道路施工のため埋め戻された。また、12区西側のSC12092から鉄剣、刀などが出土した。

12月上旬、9-3区の重機による表土掘削を開始した。調査はA班が担当した。

平成17年1月、13区で墳丘墓を検出した。周溝埋土からは人頭大の葺石が出土した。またST13414の主体部から内行花文鏡片が出土した。9-3区では11区から延長して伸びる古代の直線溝を検出した。

2月、墳丘墓間に位置する土壙墓群から小形倣製鏡、素環頭刀子、ガラス小玉などが出土した。また、ST13415の主体部の調査に着手した。

2月下旬、熊本大学木下先生に石製玉類の調査指導をうけた。

3月、ST13415から内行花文鏡片や方格規矩鏡片が出土した。3月には駒沢大酒井先生や別府大下村先生の調査指導を受けた。3月末で9-3区の調査が終了した。

平成17年4月、田中が着任した。14-3区の重機による表土掘削後人力掘削を開始した。5月、6月と包含層の掘り下げを継続し、三叉鍬やリース状木製品などが出土した。6月末で調査を終了した。

8月中旬、青銅鏡を公表した。

8月下旬、13区の市道部の調査に着手した。重機掘削のち、人力掘削を継続した。道路中央部に水道管が埋設されており大半が攪乱されていた。墳丘墓の周溝は確認できなかった。9月末で13区市道部の調査が終了した。これにより、中原遺跡の全ての調査が終了した。

調査日誌

平成13年（2001年）

5月28日　11区トレンチ掘り下げ開始
6月6日　甲元眞之先生来訪、土壌水洗機搬入
7月17日　ST11002の葺石を検出
8月3日　唐津市教育委員会調査区を確認
8月22日　A班、5区の調査に移動
9月10日　石野博信先生来訪
9月27日　10区重機掘削開始
12月7日　ST11141の主体部確認

平成14年（2002年）

1月25日　ST11141周溝から馬具出土
1月30日　蒲原宏行氏調査指導
2月6日　11区空中写真撮影
2月12日　北波多地区確認調査開始
3月8日　14-1区重機掘削開始
4月10日　9-2区重機掘削開始
4月17日　9-2区人力掘削開始
4月22日　14区人力掘削開始
5月23日　9-2区より方格規矩鏡片出土
5月28日　9-2区、11区、ハイライダーによる写真撮影
7月24日　田辺昭三先生来訪
8月2日　9-2区、11区、ハイライダーによる写真撮影
8月6日　高島忠平先生調査指導
8月7日　田中正日子先生来訪
8月28日　14区から鋳型出土
10月7日　12区重機による表土掘削開始
10月23日　福富中学校生徒発掘体験
10月24日　甲元眞之先生来訪
11月13日　9-2区空中写真撮影
12月2日　ST11158古墳は前方後円墳と確認
12月5日　14区、ハイライダーによる写真撮影

平成15年（2003年）

2月19日　小田富士雄先生調査指導
2月21日　11区空中写真撮影
2月24日　11区、ハイライダーによる写真撮影
3月10日　佐田先生調査指導
5月13日　岩永先生調査指導
5月28日　ST11158古墳ハイライダーによる写真撮影
6月5日　銅矛、鋳型記者発表
6月7日　現地説明会
7月2日　唐木田先生、藤瀬氏来訪
7月24日　鉄矛出土、村上先生来訪
9月3日　ハイライダーによる写真撮影
9月4日　SJ13112から円形銅釧出土
9月17日　福富中学校生徒発掘体験
11月7日　村上先生来訪
11月18日　SJ13134から円環型銅釧出土
12月12日　武末純一先生調査指導

平成16年（2004年）

1月15日　柳沢先生調査指導
12区ST12032全景写真撮影
2月26日　後藤直先生調査指導
3月3日　村上先生調査指導
3月11日　気球写真撮影
3月12日　ハイライダーによる写真撮影
3月15日　柳田康雄氏来訪
4月28日　北波多村上平野遺跡重機掘削開始
5月27日　鏡山小学校児童遺跡見学
7月1日　久里小学校児童遺跡見学
7月2日　SP13231より鏡片出土
7月7日　円環型銅釧公表
7月9日　中山清隆氏、韓国（財）東北支石墓研究所来訪
7月13日　田尻氏来訪
9月3日　13区空中写真撮影
9月6日　大阪府藤田氏、関西外語大佐古先

生来訪
10月13日　13区落ち込み、材出土状況ハイライダーによる撮影
10月29日　高島忠平先生来訪
11月9日　柳田康雄氏来訪
11月10日　福岡市教委吉留氏来訪
11月19日　甲元眞之先生調査指導
12月16日　佐世保文化財事務所より調査員来訪

平成17年（2005年）
1月12日　ST13414より鏡片出土
1月25日　坪井清足先生来訪
2月8日　佐賀女子短期大学学生来訪
2月15日　高島忠平先生、藤田等先生来訪
2月22日　木下尚子先生調査指導、安藤広道先生来訪
2月28日　佐世保教育事務所、文化財担当者来訪
3月2日　空中写真撮影
3月3日　酒井清治先生調査指導
3月17日　下村智先生調査指導
4月17日　筑紫古代研究会来訪
7月1日　藤丸詔八郎氏来訪
8月17日　青銅鏡出土公表
9月7日　柳田康雄氏来訪
9月22日　空中写真撮影
9月30日　13区調査終了

Ⅱ．遺跡の位置と環境

1，地理的環境

中原遺跡は佐賀県唐津市大字原字西丸田、西ノ畑、溜ノ内、笹原、大字中原字中原に所在する。本書に掲載する11区・13区は大字原字溜ノ内、西ノ畑にあたる。

図２　遺跡位置図

唐津市は九州の北端で佐賀県の北西部、現在の市役所で北緯33度27分、東経129度58分である。平成17年1月に唐津市、浜玉町、厳木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町が合併し、さらには平成18年1月に七山村も合併した。平成20年10月の統計によれば、面積487.47㎡で人口128,551人、世帯数は44,455世帯である。唐津市は今回の合併により東は福岡県二丈町、南は佐賀市と多久市、西は伊万里市と玄海町に接する。北は唐津湾および玄界灘に面し、朝鮮半島へと連なる。呼子町から壱岐島まで約30kmであり、鏡山山頂からも壱岐島影を望むことができる。このように半島に最も近いという地理的環境のため古代より我が国のなかでもいち早く半島や大陸の文化を受容した地域である。

唐津市およびその周辺の地形は①東松浦溶岩台地域②松浦杵島丘陵地域③脊振山地西部域④低地部（広義の唐津平野）⑤島嶼域の五つに区分できる。①東松浦溶岩台地は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤のうえに第三紀末期～第四紀初頭にかけて噴出した松浦玄武岩が覆う溶岩台地である。通称“上場台地”と呼ばれ、標高150～200ｍである。②松浦杵島丘陵地は南北に流下する佐志川およびその延長線を境に東側の丘陵性山地であり、松浦川左岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり、標高約200ｍ内外である。③脊振山地西部域は松浦川および唐津平野の東南部にあたり脊振山系の西部地域にあたる。地質は風化の進んだ花崗岩類からなる。唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類であり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部（唐津平野）は東松浦溶岩台地や松浦杵島丘陵地や脊振山地に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する低地を総称している。松浦川とその支流、玉島川、佐志川流域にあたる。五つの地形区分のうち①東松浦溶岩台地では主に旧石器～縄文時代の遺跡が、④低地部では主に弥生時代以降の遺跡が、⑤島嶼域ではおもに弥生～古墳時代の遺跡が立地する。また②の地域は急峻な地形を利用し中世には山城が築かれ、近代以降石炭の採掘が盛んに行なわれるようになる。

唐津平野を形成した河川には、最大規模の松浦川やその支流の徳須恵川、半田川、宇木川がある。松浦川とその支流は、脊振山系と松浦杵島丘陵地の間を縫うように流れる。玉島川は唐津平野の東端を流れる松浦川に次ぐ規模の河川である。脊振山系に水源をもち唐津湾に注ぐ。この他、唐津市街地を流れる町田川や唐津平野の北西端を流れる佐志川がある。これらの大河川や中小河川流域により、唐津平野内の遺跡立地はさらに地域区分ができる。

唐津平野の地形発達は海岸線の変化と密接に関わり、井関氏(1982)や下山氏(1994)の先行研究がある。井関氏の研究は唐津平野の地形発達史の嚆矢である。縄文海進の海域の拡大による奥唐津湾の範囲を想定し、唐津平野の地形発達史の原型を示した。下山氏は海成層に含まれる海棲生物化石のうち貝

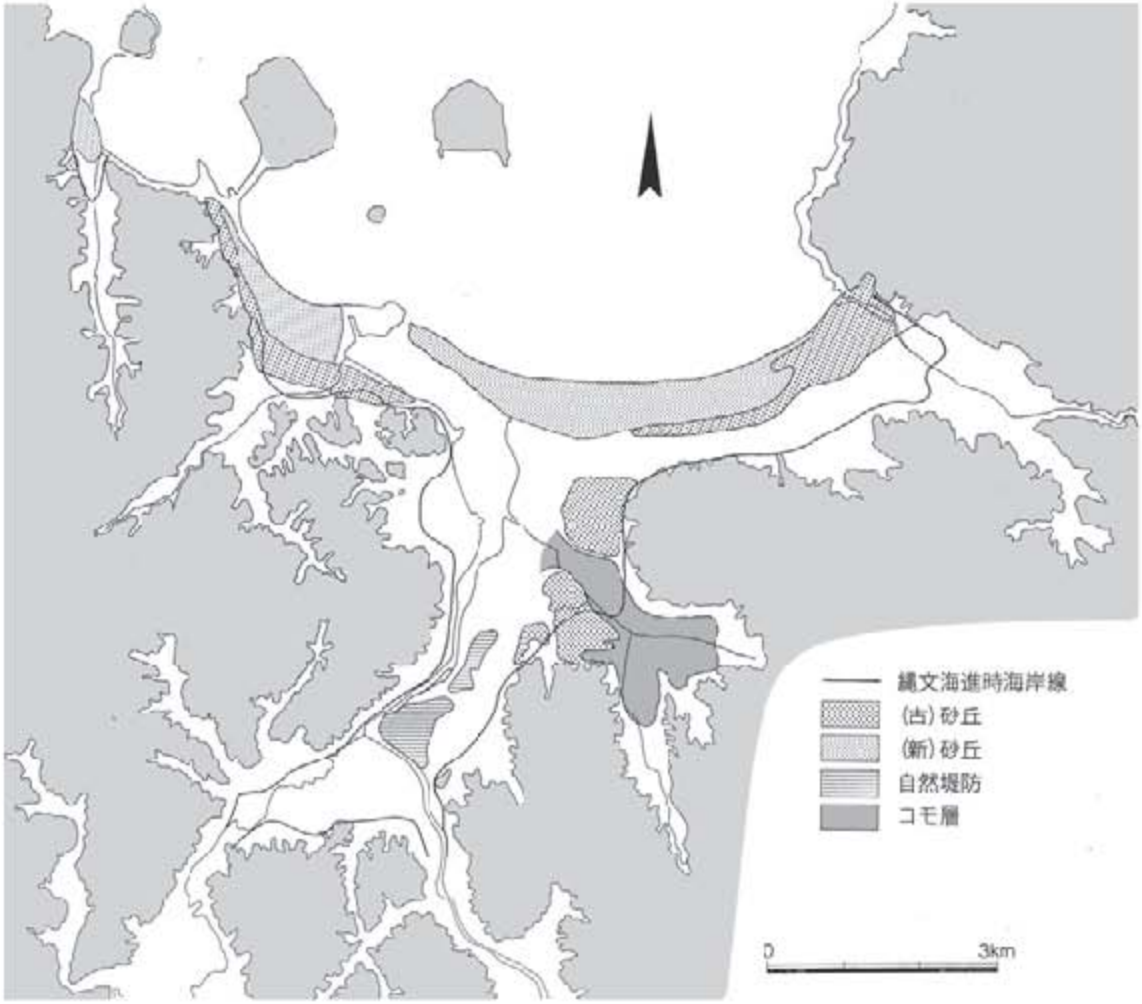


図3　旧海岸線・砂丘列地形分類図（1/100000）

殻に注目し、ボーリング資料により北部九州の海岸線を復元した。考古学的な検討は、コモ層の分布域を明らかにした木下氏 (1981,1993) に始まる。近年、田崎氏 (2007) が唐津平野をモデルに、発掘調査データを用いて沖積低地の環境変遷を追っている。また小松・美浦 (2008) は自然科学的な分析に加え、発掘調査成果を盛り込んで、現在までの唐津平野の地形発達と遺跡立地の関係についてまとめを行なっている。図3の縄文海進時海岸線は、これまでの研究をもとにしたものである。

縄文海進期の海面上昇の終焉後、幾度か訪れた海退現象により河川の堆積（沖積上部砂層）が拡大し、奥唐津湾は埋め立てられ現在の平野の概形が形成された。また同時に松浦川東岸地域と唐津市街地南部地域に砂丘列（古砂丘列）も形成され、初期稲作に適した後背湿地を生み出した。松浦川東岸の砂丘列は鏡山西麓の鏡集落から原集落、中原集落、徳武集落まで連続している。中原遺跡や後述する梅白遺跡は砂丘微高地上に立地するが、この砂丘の砂は極めて細く礫などを含まない風成砂である。井関氏は原集落と中原集落を古砂丘列としたが、西九州自動車道に係る文化財確認調査により梅白遺跡から中原遺跡間も砂丘があることが判り、夕日山北麓に広い砂丘が形成されていることが判明した。この古砂丘列の形成は発掘調査成果により縄文中期の前半代には始まっていることが分かった。

鏡山南麓の宇木川・半田川流域は砂丘列によって後背湿地になるが、この低地部に植物遺体層・通称コモ層が広く堆積する。木下氏（1981）は、昭和40年代末～50年代にかけての農業基盤整備事業に

係る文化財確認調査により、コモ層の分布範囲を明らかにした。宇木汲田貝塚遺跡や柏崎貝塚遺跡は、縄文時代晩期～弥生時代前期の貝塚であり、後背湿地に面する丘陵裾部に立地する。発見された貝殻にヤマトシジミが多く見られた。そのため当該期、後背湿地は汽水性の潟であるとの考え方が支配的となり、コモ層の分布がその潟の範囲を示すものと考えられてきた。ところが、平成９年から始まった梅白遺跡の調査によって、コモ層の下から古墳時代の水田と、さらにその下層から縄文時代晩期～弥生時代中期の水田関連遺構が発見され、後背湿地の低地部においてもすでに水田開発が行われていたことが判ってきた。また、井関氏が想定した中原集落の砂丘はさらに夕日山北麓まで広がることも確認できた。

松浦川西岸の砂丘列は唐津市街地の南部地域に広がる砂丘であり、その背後に流れる町田川流域が後背湿地になる。菜畑遺跡の水田はこの後背湿地に、桜馬場遺跡は砂丘上に立地する。前述したコモ層は町田川流域にも広がっている。菜畑内田遺跡ではコモ層直下から梅白遺跡と同時期の古墳時代の水田が見つかっていることから、コモ層の堆積時期が宇木・半田川流域と同じであることが分かった。現在町田川の流路は砂丘列を横断し唐津城下が河口域になっているが、これは近世の河川改修の結果であり、それ以前の流路がどこを流れていたのかが問題である。小松・美浦 (2008) では、和多田方面に東流し松浦川に注いでいたと想定している。

これに対し松浦川本流域ではコモ層は見つかるものの、その堆積時期は中原遺跡の調査成果により弥生後期中頃～後半と分かり、上述の流域とは違いがあることが分かった。堆積時期の違いは今後の検討課題である。

佐志川流域ではコモ層が発達しないことが発掘調査により確かめられている。河口部には砂丘列が形成されるものの規模が小さく、河口部を閉塞するまでには至らなかったためであろうか。中流域の汐入遺跡では縄文海進時の貝層が見つかっており、海岸線の推定ができるようになった。

唐津平野の旧地形のうち注目されるものの一つに玉島川の流路がある。現在の玉島川は北流して唐津湾に注ぐが、これは近世の河川改修によるものであり、旧玉島川は虹の松原砂丘と鏡山の間を西流していたと考えられる。新砂丘列は弥生～古墳時代に形成されたと考えられ、虹の松原砂丘の発達は玉島川河口を天然の良港に仕上げたと思われる。近世の河川改修は松浦川、町田川においても実施されており旧流路、旧地形の復元は遺跡の理解に不可欠である。このように小地域毎の地形発達の違いは、遺跡の形成時期や規模、性格が異なる要因となっている。

参考文献

木下巧 1981『古代末盧文化資料集成』肥前文化史研究会

井関弘太郎 1982「末盧の地形と地質」『末盧国』 六興出版

下山正一　1994「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四紀研究』33-5

田崎博之　2007「発掘調査データからみた砂堆と沖積低地の形成過程」『砂丘形成と寒冷化現象』科研費補助研究報告書

小松譲　2008 『中原遺跡Ⅱ』佐賀県教育委員会

小松譲・美浦雄二　2008「弥生成立期の地理的景観―佐賀県唐津市唐津平野にみる初期農耕集落の出現と拡大」藤尾慎一郎『弥生時代の考古学第２巻　弥生文化誕生』 同成社

2，歴史的環境

唐津地方は前項で記したとおりの地理的条件のため原始・古代から半島・大陸文化受容の地であった。東松浦溶岩台地・通称上場台地や低地部（唐津平野）さらに東松浦半島海岸に浮かぶ島嶼などにそれぞれ特徴的な遺跡が立地することも記した。以下、松浦川東岸を中心に概観する。

[旧石器時代]

最も遺跡数が多いのは上場台地上である。台地上には比較的幅の広い谷がヤツデ状に発達しており、遺跡は谷部の湧水点近くに立地する。旧石器時代の著名な遺跡としてナイフ形石器文化の唐津市肥前町磯道遺跡[1]や生石遺跡[2]、細石器文化の唐津市原遺跡[3]などがある。東松浦半島周辺の海岸部や島嶼でも旧石器時代から人類の活動の痕跡が認められる。馬渡島、加唐島、小川島、神集島からはナイフ形石器などが採集されている。最終氷期の最盛期の海面は現在より約130m低位にあったと考えられており、現在の島という地形ではないことも考慮しなければならない。松浦川東岸では、堂の前遺跡[4]を代表に丘陵裾部の遺跡から極少量の遺物が見つかっているだけで、遺跡数が非常に少なく、詳しい状況は分かっていない。

[縄文時代]

上場台地上では押型文土器・石鏃が出土した牟田辻遺跡や住居跡、組織痕文土器を出土した女山遺跡[5]、晩期の貯蔵穴状土坑を検出した唐の川高峰遺跡[6]や梨川内村前遺跡[7]があり、早期と晩期前半に上場台地では遺跡数が増大することが指摘されている。低地部では、西唐津海底遺跡[8]では前期の土器が出土しており、菜畑遺跡[9]では前期～後期の遺構と遺物が、徳蔵谷遺跡[10]では中～後期の遺構と大量の遺物が確認されている。近年の調査で玉島川流域の五反田松本遺跡[11]から、縄文中期後半代～後期にかけての大量の遺物が流路状の落込みから見つかり、注目すべき成果が挙がっている。松浦川東岸では丘陵裾部や砂丘微高地上に遺跡が点在しているが、規模が小さく遺構は見つかっていない。辻裏遺跡[12]、井ゲタ遺跡[13]、梅白遺跡[14]がこれにあたる。

[弥生時代]

東松浦半島海岸部や島々には弥生時代の遺跡もみられる。これらは漁撈を生業とした海人集団の活動の痕跡であろう。とくに拠点的な地域として加部島、呼子周辺と神集島、湊、相賀周辺がある。唐津市呼子町大友遺跡[15]では、弥生時代前期～後期前半の約150基の墳墓が確認されている。甕棺墓、配石墓、土壙墓、箱式石棺墓、石囲墓、敷石墓、支石墓など埋葬施設の種類が多く、埋葬方法なども五島列島など西北九州の埋葬との共通性がみられる。また、南海産の貝輪を副葬していることも特筆され、海人の共同墓地と考えられる。呼子港の対岸に浮かぶ加部島には古墳時代後期の瓢塚前方後円墳が所在する。さらに加部島には式内社である田島神社が鎮座しており、古墳時代～古代において海上交通の要所であったことが窺える。呼子町から約5km南東に位置する唐津市湊周辺にも弥生～古墳時代の遺跡がみられる。湊中野遺跡[16]では弥生中期～後期の焼土坑が確認されている。唐津平野や糸島半島が望める眺望のいい立地であり、焼土坑は「のろし」的性格が考えられている。雲透遺跡[17]では弥生時代中期の貝塚が調査され、鹿角製のヤスや釣針のほか貝輪などが出土した。これらの大友遺跡、湊中野遺跡、雲透遺跡では糸島・福岡平野系の土器が出土していることも特筆される。湊の対岸に浮かぶ神集島には短甲や鉄刀を出土した学校東古墳群や鬼塚古墳群がある。また相賀には陶質土器を出土した相賀古墳もあり、湊・神集島周辺も海上交通の要所であった。

縄文時代晩期後半になると、低地部に形成された砂丘列背後の低湿地が初期稲作の適地となり、町田川流域では菜畑遺跡が、宇木川流域では宇木汲田遺跡[18]が出現する。菜畑遺跡では我が国最古の水田跡が確認された。晩期以降、唐津平野において多くの著名な遺跡が出現するが、それは河川流域毎に遺跡の

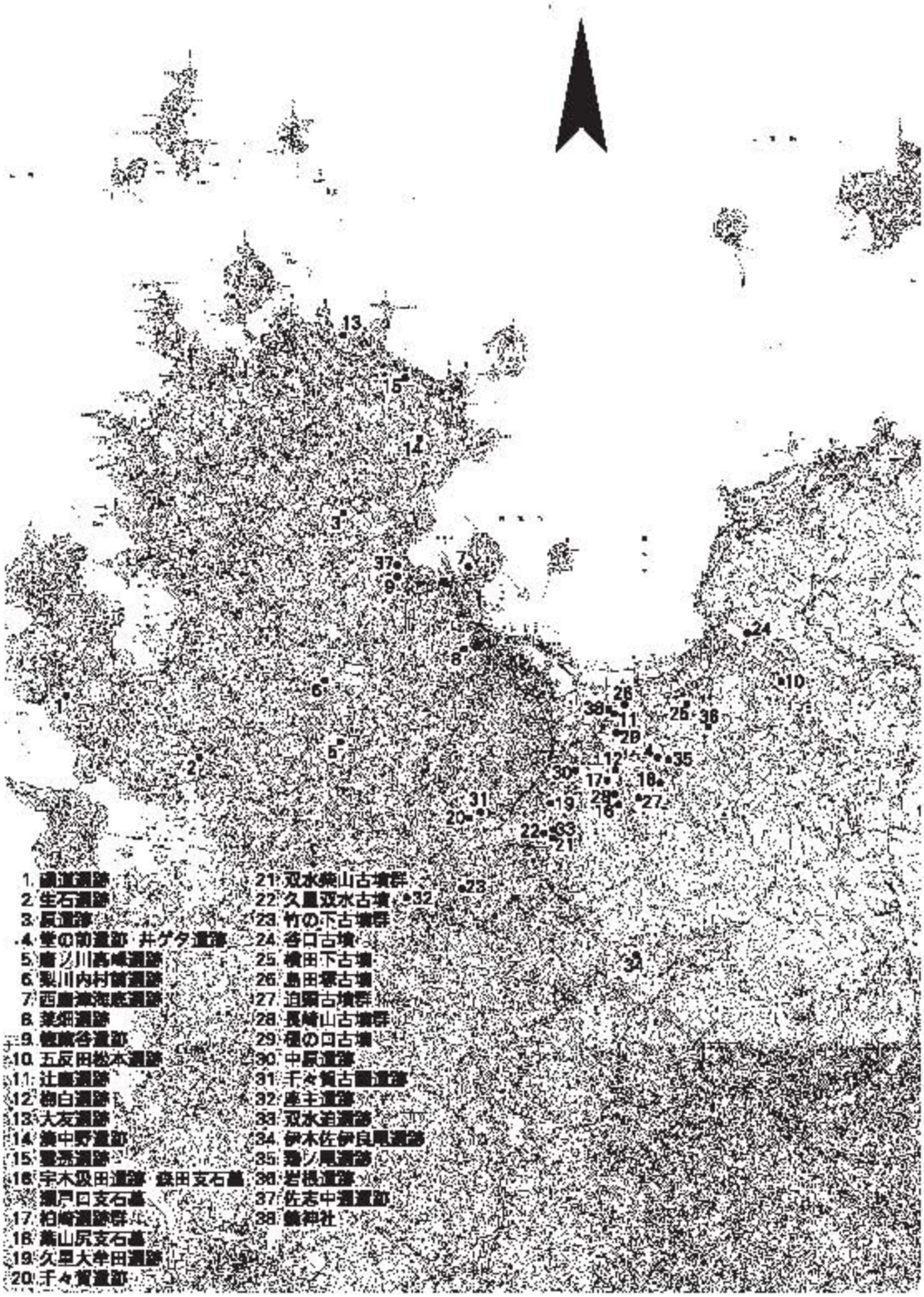


図４　周辺遺跡分布図（1/70000）

まとまりを形成する。

唐津平野の中で調査事例も多く、研究史的にも重要な遺跡が多いのは松浦川東岸の宇木川・半田川流域である。宇木汲田貝塚遺跡では、1965 年の日仏合同調査により、縄文時代晩期の夜臼式期の土器底部に炭化米や籾圧痕が発見され、稲作の存在を提示した。貝塚から 200 ～ 300m 南方の宇木汲田遺跡では、昭和初期に銅剣、銅矛が発見されており、1957 年の東亜考古学会、1965、1966 年の日仏合同調査で、甕棺墓群から多鈕細文鏡、細形銅剣、銅矛、銅戈、銅釧、玉類など多数の副葬品が出土した。柏崎貝塚は昭和初期の耕地整理によって発見されその後、数回の学術調査が実施され弥生前期後半の短期間に形成されたものであることが判った。柏崎遺跡[18]では明治末に触角式銅剣、銅矛が発見され、柏崎田島遺跡の甕棺墓群では異体字銘帯鏡が柏崎大深田遺跡からは広形銅矛の鋳型が出土している。

また、唐津平野には西北九州に特徴的に分布する支石墓がみられる。葉山尻支石墓[19]では 1952、1953 年の調査で支石墓と甕棺墓を検出しており、この他瀬戸口支石墓、森田支石墓などが調査された。梅白遺跡は本事業により 1997 年～ 1999 年に調査が実施され、弥生、古墳時代の集落と水田を確認した。このように、鏡山南麓の宇木川・半田川流域は、砂丘形成による後背湿地の出現という初期稲作に適した地理的条件をもとに、農耕集落が出現、発展する。その発展の様子は、墳墓出土の鏡や青銅器、玉類、銅釧などの副葬品からも伺える。

本報告の中原遺跡は松浦川右岸で後背湿地を形成した砂丘微高地上に立地する。弥生時代中期の甕棺墓や終末期～古墳時代初頭の墳墓から青銅鏡、鉄剣、玉類が出土している。また、中期の鋳型片 4 点も出土しており、宇木汲田遺跡と並び弥生時代中期の拠点集落である。発見された鋳型のうち銅剣の鋳型は戸塚氏（2008）[20]の研究により、直線距離で約 1.5 ｋｍ南西の久里大牟田遺跡出土の銅剣の鋳型であることが考えられ、製品の生産地と消費地が分かる非常に貴重な例になりそうである。今後注目が集まる資料である。

弥生時代中期後半以降、松浦川本流域の遺跡群が発展していく。久里大牟田遺跡[20]では鉛製の矛や銅矛、銅戈などが甕棺、土壙墓から出土している。松浦川の左岸に注ぐ徳須恵川の下流に立地する千々賀遺跡群は中期から後期にかけて発展していく。千々賀庚申山遺跡からは細形双耳銅矛や銅戈が、千々賀遺跡からはイモ貝縦切銅釧が、千々賀遺跡[21]からは赤色漆で同心円文や鋸歯文を描いた容器蓋 3 点とともに、中期から後期の多量の土器や建築部材が出土している。

菜畑遺跡や桜馬場遺跡は町田川流域にあたる。菜畑遺跡では、初期に水田が開かれた後も継続的に水田が営まれており、流域の拠点的な遺跡である。桜馬場遺跡では、後期の甕棺墓から方格規矩鏡、有鈎銅釧、巴形銅器が見つかっており、このほか広形矛先や内行花文鏡片も採集されている。近年調査が行なわれ、不時の発見であった甕棺や副葬品が再確認され、大きな話題となった。

このように唐津地域では多くの厚葬墓が発見されており、稲作が開始されて首長層が出現、展開していく過程を看取することができる。東松浦半島や島々にも弥生時代の遺跡は分布するが青銅器を副葬するような首長墓は松浦川流域やその支流である宇木川・半田川流域や町田川流域に限られる。表 4 は唐津平野出土の青銅器・鋳型の一覧表であり、図 5 はその遺跡分布図である。

宇木汲田遺跡では多くの青銅製武器が出土しているが、複数の青銅製武器や青銅製品を副葬した墳墓は少なく、その分布からみても有力集団墓であることは明瞭である。また、宇木川・半田川流域の厚葬墓の分布をみると鏡山山麓部には厚葬墓がないことが判る。同時期の墳墓群は立地するにも関わらず、厚葬墓がないことは同流域において集団格差が生じていることを物語る。

また、中原遺跡は宇木汲田遺跡や柏崎遺跡群と至近距離であるが生産基盤となる水田などの立地が両

表4 唐津平野弥生時代青銅器・鋳型出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	青銅器・鋳型
1	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺	細形銅剣1、細形銅矛1
2	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	木棺墓？	細形銅剣1、細形銅矛1
3	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・6号	細形銅剣1
4	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・11号	細形銅剣1
5	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・12号	細形銅剣1・多紐細文鏡1
6	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・17号	細形銅戈1
7	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・18号	細形銅剣1
8	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・32号	細形銅剣先片1
9	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・37号	細形銅矛1
10	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・38号	円環型銅釧5
11	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・41号	細形銅矛1
12	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・58号	細形銅戈1
13	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・61号	細形銅剣1
14	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・64号	円環型銅釧18
15	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・112号付近	細形銅矛1・円環型銅釧17
16	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	甕棺・129号	細形銅剣
17	宇木汲田遺跡	唐津市大字宇木字汲田	包含層	銅鐸の舌
18	柏崎石蔵遺跡	唐津市大字柏崎字石蔵	甕棺(箱式石棺？)	有柄触角式細形銅剣1、中細形銅矛2
19	田島遺跡	唐津市大字柏崎字田島	甕棺6号	前漢鏡（日光鏡）1
20	鶴崎遺跡	唐津市大字宇木字鶴崎	甕棺	有柄銅剣1
21	鶴崎遺跡	唐津市大字宇木字鶴崎	甕棺	中細銅戈1
22	柏崎大深田遺跡	唐津市大字柏崎字大深田	包含層	広形矛鋳型片1
23	中原遺跡	唐津市大字原字中原	甕棺・SJ11247	細形銅矛1
24	中原遺跡	唐津市大字原字中原	甕棺・SJ13134	円環型銅釧12
25	中原遺跡	唐津市大字原字中原	甕棺・SJ13112	円環型銅釧3
26	中原遺跡	唐津市大字原字中原	包含層	鋳型片4
27	桜馬場遺跡	唐津市桜馬場	甕棺1号	後漢鏡2・有鈎銅釧26・巴形銅器5
28	桜馬場遺跡	唐津市桜馬場	包含層	後漢鏡片（内行花文鏡）1
29	桜馬場遺跡	唐津市桜馬場	包含層	広形銅矛先
30	平野町(伝)	唐津市平野町	甕棺	「狭鋒」矛
31	千々賀(庚申山)遺跡	唐津市大字千々賀	甕棺	中細形双耳付矛1・中細形銅戈1
32	千々賀遺跡	唐津市大字千々賀	甕棺傍らの小壺	銅釧8以上
33	久里大牟田遺跡	唐津市大字久里字大牟田	甕棺	銅剣先1
34	久里大牟田遺跡	唐津市大字久里字大牟田	甕棺2号	中細形銅矛1・中細形銅戈1
35	久里大牟田遺跡	唐津市大字久里字大牟田	甕棺(土壙墓？)	細形銅矛1
36	石ヶ崎遺跡	唐津市大字久里	甕棺	細形銅剣1
37	中尾遺跡	唐津市大字山本字中尾	甕棺	細形銅剣1
38	徳須恵支石墓	唐津市北波多大字徳須恵	甕棺	細形銅矛1
39	手樋ノ元遺跡	唐津市相知町大字大野字手樋ノ元	甕棺	銅戈1
40	浜玉町・谷口付近	唐津市浜玉町大字谷口	不明	中細形銅戈

遺跡とは異なることは集団系譜を考える上で重要であろう。唐津平野での特定個人墓の出現は後期前半の桜馬場遺跡である。ただし、その周辺には伝平野町出土の銅矛以外青銅器の出土はみられず、市街地化が進み周辺の遺跡の分布状況が判らないため、遺跡の形成過程が追えない。しかし、唐津平野では青銅製品を副葬する厚葬墓は有力集団墓から特定個人墓へと展開し、その遺跡立地が変遷することが判る。

［古墳時代］

古墳時代前期の首長墓には松浦川流域の双水柴山2号墳[22]、中原遺跡ST12032、久里双水前方後円墳[23]がある。古墳時代初頭の双水柴山2号墳は全長34.7mで丘陵の尾根上に造られる。主体部は木棺である。久里双水前方後円墳は全長108.5mで、竪穴式石室から盤龍鏡、碧玉製管玉、棺外から刀子が出土した。

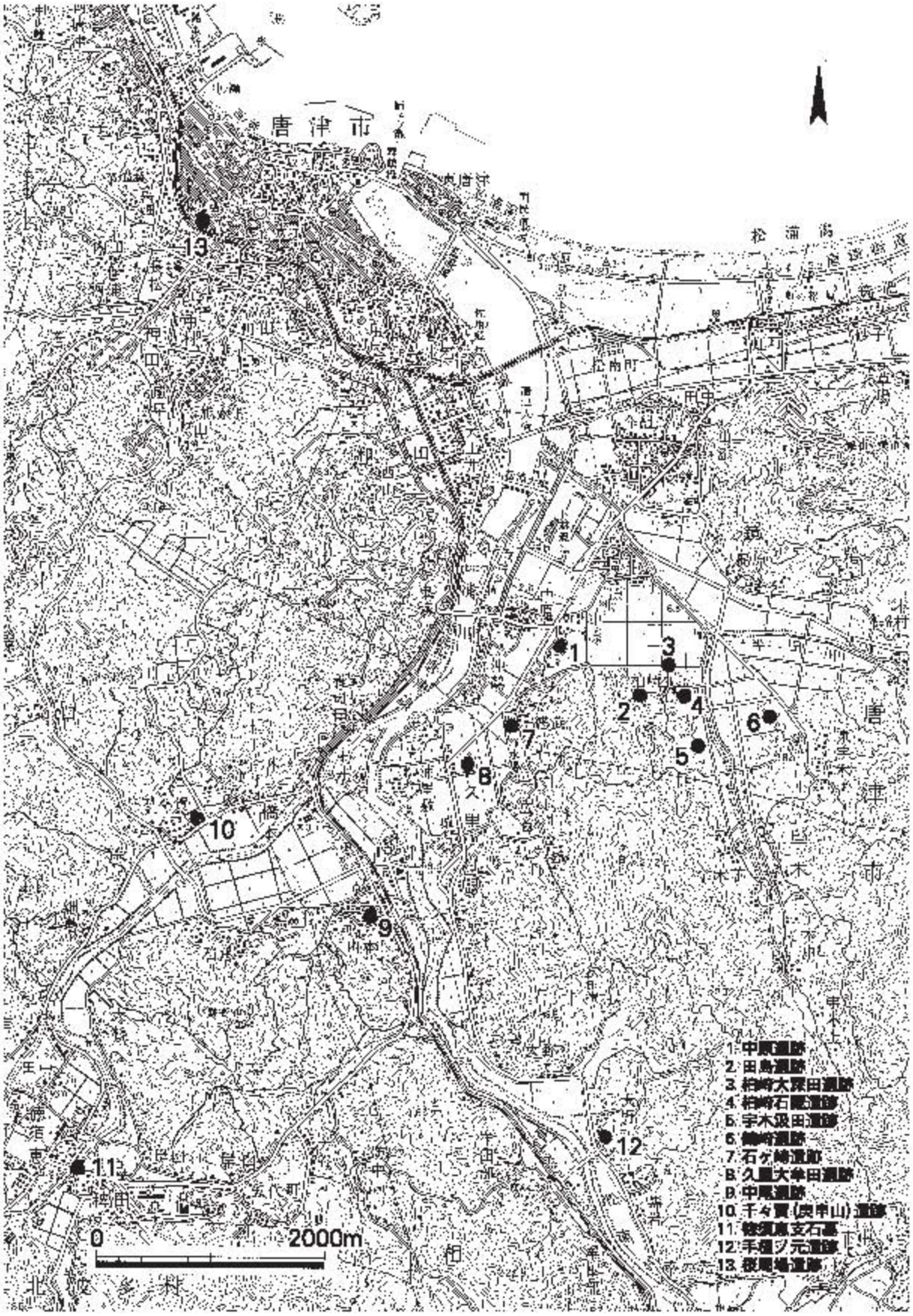


図5　唐津平野弥生時代青銅器出土遺跡分布図（1/50000）

近年、徳須恵川流域の唐津市北波多の竹の下古墳群[24]で、前期に属すると思われる全長 32 mと 52 mの 2 基の前方後円墳がみつかり首長墓系譜に加えられることになった。前期後半から中期、後期にかけて首長墓は玉島川流域に移る。谷口古墳[25]は組合わせ式の長持形石棺を主体部にもち、仿製三角縁神獣鏡、碧玉製石釧など畿内的要素をもつ。その後、初期横穴式石室をもつ横田下古墳[26]や、金銅製冠や銅椀などの渡来系文物を副葬した島田塚前方後円墳[27]が造られる。

中小古墳では宇木川・半田川流域に垂飾付耳飾り、三累環頭を出土した半田宮の上古墳[28]や竪穴系横口式石室のほか土壙墓、箱式石棺などが確認された迫頭古墳群[28]、同じく竪穴系横口式石室をもつ長崎山古墳群[29]、石障系石室をもつ樋の口古墳[30]などがある。中原遺跡[31]では複数の陶質土器や鉄鐸、初期の馬具、梅白遺跡の古墳水田流路中から軟質土器など渡来系文物の出土が目立つのも特筆される。他の地域では同事業で浜玉町渕上の仁田古墳群から遺存状態の良い埴輪窯が確認され、埴輪資料の少ない佐賀県で貴重な発見となった。

後期は他地域では群集墳が発達する時期であるが、唐津地域では数基単位の古墳群が形成されるに留まる。しかし加部島には多数の古墳が築かれていたと伝えられており、地域内では特異な存在である。半島への航路上重要な位置を占めていたことが要因であろう。

[奈良・平安時代]

古代の唐津地域は肥前国松浦郡にあたる。松浦郡は現唐津市、西松浦郡、長崎県平戸や五島列島、佐世保市などを範囲とする極めて広い面積をもつ。松浦郡の古代行政組織は肥前国風土記によれば郷 11 所、里 26 所、駅 5 所、烽 8 所である。この中の具体的な地名や駅名は肥前国風土記、延喜式、和名抄などの史料によってわかる。郷名は肥前国風土記に値嘉郷、和名抄に庇羅、大沼、値嘉、生佐、久利の郷名が記される。里名は肥前国風土記に賀周里がみえるだけである。駅名は肥前国風土記に逢鹿駅、登望駅、延喜式に磐氷、大村、賀周、逢鹿、登望の 5 駅名が記されている。烽は肥前国風土記に褶振烽、値嘉郷 3 所となっている。その他の地名の由来で鏡渡や大家島がみえる。

唐津地域の古代の主要な遺跡ではまず千々賀古園遺跡[32]が挙げられる。松浦川の支流である徳須恵川下流の西岸に位置する。唐津市教育委員会の 2 回の調査により掘立柱建物 8 棟を検出した。そのうちの 3 棟は大規模で L 字形の配置をもつ。特筆される出土遺物に銅製の天秤受け皿や蛇紋岩製の権（分銅）や平瓦片がある。平瓦には特徴的な幅広のカキ目が巡らされており、壱岐嶋分寺や法隆寺等で類例が見られる。また、墨書土器が 95 点出土している。墨書土器には「嶋守」「川上」「田造」等があり、最も多いのが「六」である。また「川部」は中原遺跡出土 1 号木簡にもみられる人名である。8 世紀前～中頃を盛期とし後半までの遺物がみられ、官衙的配置をした大型建物の存在などから松浦郡衙とも推定されてきた。

座主遺跡[33]は徳須恵川中流域の左岸に立地する。谷状低湿地の遺物包含層から石帯・巡方や墨書土器 15 点が出土した。墨書土器には「坂本」「廣」「大」「六」などがある。8 世紀代を中心とし、盆地状の地形であることなどからも里あるいは郷のひとつとも考えられよう。双水迫遺跡[34]は松浦川右岸の久里に所在する。古代においても「久利郷」に含まれていたと思われる。詳細不明ながら 8 世紀代の集落が確認されている。伊岐佐伊良尾遺跡[35]は「生佐郷」内に所在する。掘立柱建物や鍛冶炉など 8 世紀代の集落が確認されている。鶏ノ尾遺跡[36]は鏡山南麓に立地する。平安時代の鍛冶炉と奈良～平安時代の炭窯等の遺構の他、谷部の整地層から大量の土師器供膳具と共に緑釉陶器、越州窯系青磁、播磨系須恵器が出土している。岩根遺跡[37]は鏡山南東麓の丘陵上に立地する。9 世紀代の製鉄関連遺構を確認した。製錬炉本体は確認できなかったが、遺物の検討から箱形炉であることが判った。製鉄を主体とし精錬鍛冶か

ら鍛錬鍛冶までの作業が行われていた。

延喜式に記載された大村駅は唐津市浜玉町東北部にある大村神社周辺が比定地である。大村神社の境内から布目瓦が出土し、社殿背後に基壇状の盛り土もみられ、奈良時代の寺院跡と考えられる。三代格や東大寺要録にみられる弥勒知識寺と推定されている。中世以降も交通の要所であったと思われ、草野氏が山城や居館を築いている。

肥前国風土記にみえる賀周里や賀周駅は地名などからも唐津市見借がその推定地と考えられてきた。見借は佐志川の上流にあたるが、その河口に立地するのが佐志中通遺跡や徳蔵谷遺跡である。両遺跡からは遺構こそ確認されていないが8世紀代の土器が出土している。佐志中通遺跡からは腰帯金具も出土している。賀周里や賀周駅を比定する上で参考になる遺跡であろう。

この他、逢鹿駅や登望駅に比定できる遺跡や調査事例はみあたらないが、地名や弥生、古墳時代以降の遺跡群の分布などを考えても、逢鹿駅は唐津市相賀周辺に登望駅は唐津市呼子周辺に比定できるであろう。

[中世以降]

古代後半以降近世に至るまで中原遺跡では遺構や遺物が激減する。これと入れ替わるように遺構や遺物の確認が急増するのが、現鏡集落が所在する鏡山西麓の砂丘である。11世紀には鏡神社が建造物として成立していると考えられ、それ以降の時期の遺跡が砂丘のほぼ全体に広がっている。近世になり松浦川本流域の本格的な開発が行なわれる。それまでは谷部の扇状地を利用した谷水田であったものが、積極的な新田開発により平野のほぼ全域が水田域となっている。

遺跡文献

1，堀川義英 1981『田尾遺跡群磯道遺跡』肥前町教育委員会
2，堀川義英 1978『生石・森の下遺跡』佐賀県教育委員会
3，松岡史・富樹憲次 1960『佐賀県東松浦郡鎮西町字原出土の細石器』九州考古学 10
　杉原荘介・戸沢充則 1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」考古学集刊 4-4
4，小松譲 2000『堂の前・井ゲタ遺跡』佐賀県教育委員会
5，日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会編 1960「島原半島（原山、山ノ寺、礫石原）および唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10
6，田島龍太 1996『唐ノ川高峰遺跡』（3）唐津市教育委員会
7，内田孔明 1996『梨川内村前遺跡』（2）唐津市教育委員会
8，1982「西唐津海底遺跡」『末盧國』六興出版
9，中島直幸・田島龍太 1982『菜畑遺跡』唐津市教育委員会
10，田島龍太 1995『徳蔵谷遺跡』（2）唐津市教育委員会
　田島龍太 1996『徳蔵谷遺跡』（3）唐津市教育委員会
11，田島龍太 2008『五反田松本遺跡』唐津市教育委員会
12，田島龍太 1989『唐津市内遺跡確認調査（4）』唐津市教育委員会
13，小松譲 2003『梅白遺跡』佐賀県教育委員会
14，東中川忠美 1981『大友遺跡』呼子町教育委員会
15，中島直幸 1985『湊中野遺跡』唐津市教育委員会
16，仁田坂聡 1998『雲透遺跡Ⅱ』唐津市教育委員会

17, 岡崎敬ほか 1982「宇木汲田遺跡」『末盧國』六興出版
18, 堀川義英 1980『柏崎遺跡群』佐賀県教育委員会
中島直幸 1980『柏崎松本遺跡』唐津市教育委員会
中島直幸 1982「柏崎遺跡群」『末盧國』六興出版
19, 渡辺正気 1982「葉山尻支石墓」『末盧國』六興出版
20, 中島直幸 1980『久里大牟田遺跡』唐津市教育委員会
21, 仁田坂聡 2001『千々賀遺跡』唐津市文化財調査報告書第 102 集
22, 中島直幸 1987『双水柴山遺跡』唐津市教育委員会
23, 1992『久里双水古墳確認調査概要報告』唐津市教育委員会
1993『久里双水古墳確認調査概要報告（2）』唐津市教育委員会
1994『久里双水古墳確認調査概要報告（3）』唐津市教育委員会
24, 陣内康光 2008『竹の下古墳群』唐津市教育委員会
25, 1982「谷口古墳」『末盧國』六興出版
26, 1982「横田下古墳」『末盧國』六興出版
27, 1982「島田塚古墳」『末盧國』六興出版
28, 松岡史 1962「第二編　古代」『唐津市史』唐津市
29, 中島直幸『長崎山古墳群』唐津市教育委員会
30, 1982「樋の口古墳」『末盧國』六興出版
31, 田島龍太 1987『中原遺跡』唐津市教育委員会
小松譲 2002『中原遺跡』佐賀県教育委員会
32, 伴耕一朗 1991『千々賀古園遺跡』唐津市教育委員会
仁田坂聡 1997『千々賀古園遺跡』（2）唐津市教育委員会
33, 森田孝志 1981「座主遺跡」『押川遺跡』佐賀県教育委員会
34, 田島龍太 1982「双水迫遺跡」『末盧國』六興出版
35, 蒲原宏行 1986「伊岐佐遺跡群」相知町教育委員会
36, 草場誠司 2003『鶏ノ尾遺跡』（2）唐津市文化財調査報告書第 109 集
37, 小松譲 2006「岩根遺跡」『大江前遺跡』佐賀県教育委員会
38, 岩尾峯希 2002『佐志中通遺跡』（2）唐津市教育委員会
39, 中島直幸 1986『鏡神社経塚』唐津市教育委員会
唐津市教育委員会 1986『鏡神社』鏡神社一の宮建設委員会

註

戸塚洋輔　2008「唐津平野における弥生時代の青銅器生産－中原遺跡出土鋳型の検討－」
『アジア鋳造技術史学会　研究発表概要集 2 号』

柳田康雄氏は筑前町東小田峯遺跡出土土製鋳型で鋳造された銅矛は、久里大牟田遺跡出土銅矛の法量が最近似値を示すとした。（柳田康雄 2009「弥生時代青銅器土製鋳型研究序論」『国学院雑誌』10 巻 20 号）

Ⅲ．調査の概要

1，中原遺跡の調査歴

中原遺跡は本事業による発掘調査以前に過去２回の発掘調査が実施されており、また、本発掘調査期間中に同遺跡内を唐津市教育委員会が発掘調査を行っており、現在までに４回の発掘調査が実施された。以下が中原遺跡の調査歴である。

	期　　間	調査主体	文　　献
1	1965年11月11日～11月21日	日仏合同調査団	『末盧国』六興出版1982年
2	1986年4月9日～7月17日	唐津市教育委員会	唐津市教育委員会1987『中原遺跡』唐津市報18集
3	1999年7月5日～2005年7月1日	佐賀県教育委員会（本事業）	『中原遺跡Ⅰ』『中原遺跡Ⅱ』『中原遺跡Ⅲ』『中原遺跡Ⅳ』以下刊行中
4	2005年10月5日～2006年3月31日	唐津市教育委員会	唐津市教育委員会2006『中原遺跡(2)』唐津市報129集

このうち、1965 年の日仏合同調査と 1986 年の唐津市教育委員会の発掘調査区は本事業の 11 ～ 13 区の中に含まれる。

日仏合同調査は第１トレンチと砂丘形成状況確認のための第２トレンチが設定された。第１トレンチでは５基の甕棺と古墳時代後期の石組遺構を検出しているが、石組遺構は本事業で検出した ST11158 前方後円墳の葺石であることが判った。5 基の甕棺墓は中期に属し、5 号甕棺から硬玉製勾玉 1、碧玉製管玉 7 が、7 号甕棺の棺内から鉄戈が、棺外から鉄矛が出土している。この他、包含層から鋳造鉄斧側片が出土している。

1986 年の唐津市教育委員会による調査は宅地造成に伴うもので、本事業の 11 区、12 区、13 区にまたがる。検出した主な遺構は弥生時代中期の甕棺墓３基と古墳時代前期の周溝墓４基、中期の円墳の周溝と近世の井戸跡１基である。周溝墓のうち、１号、３号、４号周溝墓は本調査でも確認できたが、２号周溝墓は確認できなかった。１号周溝墓の埋葬主体部は２基からなり土壙墓（木棺墓？）であった。

円墳の周溝は本事業で検出した ST11141 古墳の周溝である。周溝内から須恵器有蓋高杯、壺、ﾊｿｳが、鉄製品には鉄鐸６のほか鉄鎌、摘鎌、刀子、ﾔﾘｶﾞﾝｶが、玉類として滑石製有孔円盤、滑石製臼玉、ガラス小玉、琥珀小玉、管玉、土製勾玉などがある。

2005 年の唐津市教育委員会による調査は道路新設に伴うもので、本事業調査区の西方に位置する。調査対象地は低湿地帯にあたり、包含層から弥生時代後期、古墳時代前期、中期の土師器のほか木製品などが出土している。特筆される遺物として朝鮮半島系の軟質土器である棒状の把手付き甑の破片が出土している。

2，遺跡の概要

中原遺跡は弥生・古墳時代の集落と墳墓および古代の官衙的な遺跡である。主に調査区の南半部に弥生・古墳時代の集落と墳墓が北半部で古代の官衙的的遺構や遺物が出土した。

遺跡の立地は第Ⅱ章で述べたとおり標高約４ｍの砂丘微高地上に立地する。調査面積は約 90,000㎡。遺跡の現況はやや起伏がみられ、水田と宅地、畑地、墓地であった。現況の宅地は 1980 年代に開発さ

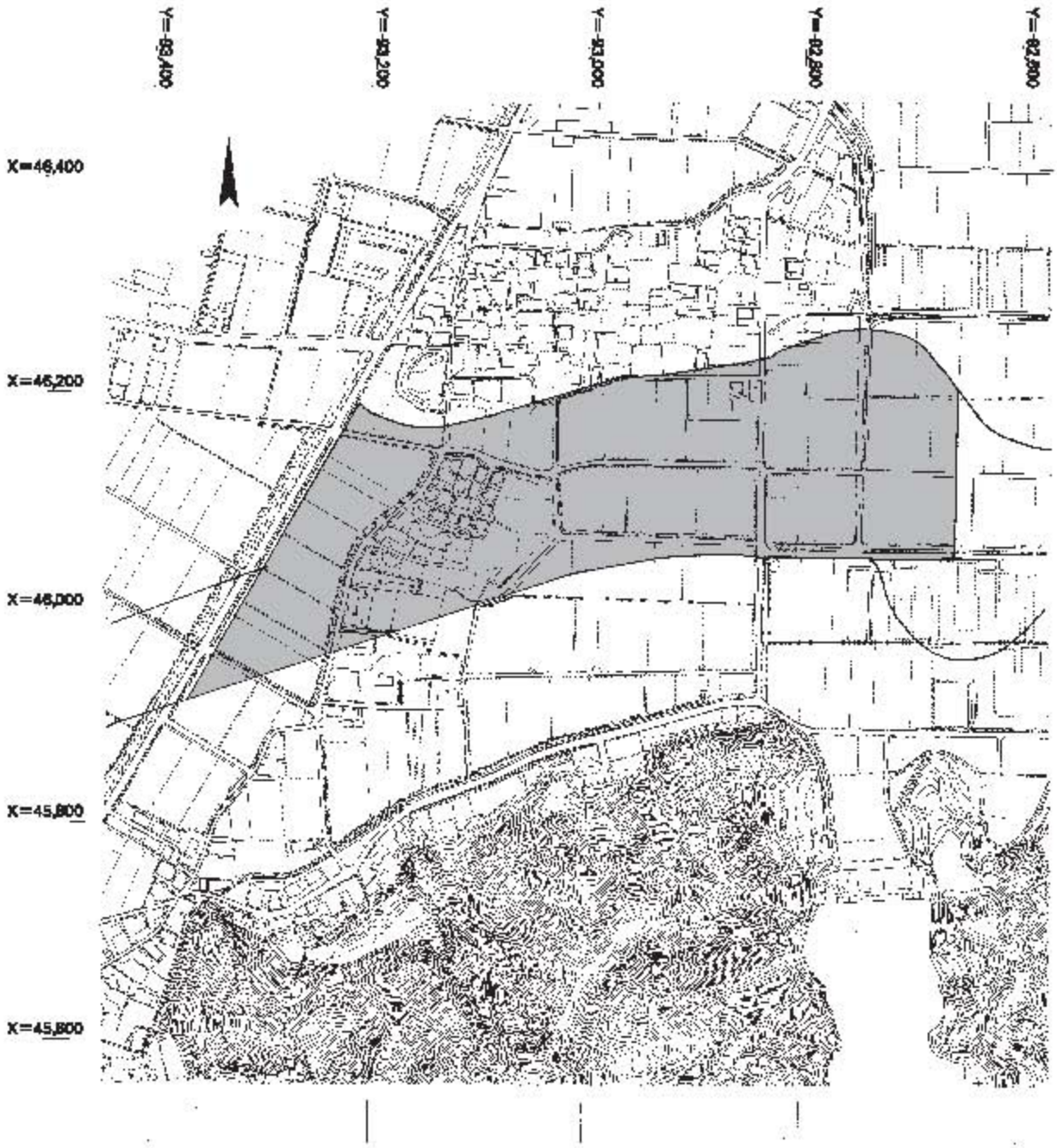


図6　調査区位置図（1/6000）　0　2000m

れた。聞き取りによるとそれ以前は古墳の墳丘らしき盛土があったと言う。

図6に調査区位置図を掲載する。遺跡の南方は標高272 mの夕日山からのびる丘陵の裾部にあたる。この裾部から砂丘微高地が北方にのびる。夕日山の北麓裾部にある池ノ浦溜池は深い谷地形を利用している。旧地形は夕日山に源をもつ流路がこの谷地形を経由して旧松浦川に注いでいたと思われる。本調査区の南端に幅20～30 mの落ち部がみられるが、夕日山から注ぎ出た自然流路であったかもしれない。このように概ね南北に形成された砂丘微高地は所々東西方向に走る谷状の地形によって分断される。本調査区内においても13区南端と2区、5区、7区にわたる谷地形がみられる。この谷地形は弥生時代には存在し、古墳、奈良・平安時代にかけて序々に埋没していく。本遺跡の評価をする上で以上のよう

な旧地形の復元は欠かせない。

図７は本遺跡全調査区の遺構配置図である。図９は調査区毎に撮影した空中写真を合成したものである。図９の空中写真では黄褐色と黒褐色の部分が見て取れる。黄褐色の部分が砂丘微高地であり、黒褐色部分が低地部になる。砂丘微高地は 11 ～ 13 区にかけて広がる。砂丘微高地の南北両側は幅約 20 ～ 30 mの谷状地形になり、東側は緩やかに、西側はやや急に傾斜して低地部になる。従って、本調査区は独立した砂丘微高地をほぼ全掘したことになる。この砂丘微高地上に分布するのが弥生・古墳時代の集落と墳墓である。弥生時代の墳墓は甕棺墓 281 基、土壙墓 14 基、終末期の墳丘墓３基を検出した。甕棺、土壙墓は前期後半に出現し、中期前半から中期中頃にかけてピークをむかえ、中期後半から後期前半にかけて衰退していく。副葬品を所有する墓群が数群みられ特定有力集団墓を形成する。甕棺埋葬法や副葬品種別において唐津地域の弥生墳墓の地域性がみられる。甕棺埋葬法では埋置角度が他地域に比べて急傾斜であり、直立棺や倒置棺も多く見られる。口縁部の打ち欠きも多く、さらには打ち欠いた口縁部を墓壙に埋置するものもある。副葬品では円環型銅釧 15 点、硬玉製勾玉 22 点、碧玉製管玉約 700 点等装身具の卓越があげられる。

調査区南側の谷状地形から南西部の低地部にかけて非常に多くの土器（コンテナ 1,000 箱以上）が出土した。土器群の時期は中期中頃～後半を主体とし後期前半までである。これらの土器群に混じって青銅器の鋳型が４点出土した。４点とも両面鋳型であり、このうち２点が接合した。石材は石英―長石斑岩で中細形銅矛・銅剣の鋳型と思われる。鋳型片４点は調査区南西隅の比較的狭い範囲から多量の土器と共に出土している。調査区南側の谷状地形を挟んだ南側は調査区外になり、夕日山北麓裾部から北方にのびる砂丘微高地になる。ここに青銅器生産を行なった弥生集落中心部があると推定される。

また、上記の調査区南側の幅約 20 ～ 30 mの谷状地形は多量の杭を打ち込み、自然木を芯材として置いた堤防状の施設が造られる。堤防状の遺構には芯を中空に刳りぬいた木製の水管や、長さ約４m の木樋が埋置される。その周辺には木組遺構もあることから、堤防状施設は灌漑用か木の実などの水さらしの水量調節のための機能が考えられる。さらに、砂丘微高地西側縁辺の低地部からは、多量のヤスや石錘などの漁撈具が出土しており、中原遺跡は旧松浦川岸に立地していたことを窺わせる。

弥生時代終末期には特定個人墓である墳丘墓３基が出現する。平面形態は方形と長方形であり、いずれも西側に陸橋部をもち周溝が巡る。主体部は刳り貫き式の木棺で、棺内から硬玉製異形勾玉や碧玉製管玉、棺外から破砕された内行花文鏡や鉄剣が出土している。さらに周溝内埋葬施設もあり棺外から破砕された方格規矩鏡や鉄鏃、鉄剣が出土した。また、土壙墓・木棺墓群が４群あり破砕された獣帯鏡や折れ曲がった鉄剣、硬玉製勾玉、碧玉製管玉などが出土した。

古墳時代初頭には墳長約 25 mの前方後円墳が造られる。主体部は削平されていたが、周溝内から石棺を確認した。さらに周溝を共有して周溝墓４基と平面方形、円形の周溝墓４基も造られる。

古墳時代中期の帆立貝式前方後円墳１基、円墳３基と後期の前方後円墳１基も確認した。後期の前方後円墳は墳長 33.0 mで内部主体は削平されていた。時期は６世紀後半である。

砂丘微高地は調査区の北側にも見られる。２区、３区、５区、７区の調査区北半部にみられ、この砂丘微高地上から古代の掘立柱建物群や井戸跡などを検出した。この砂丘微高地と前述した弥生・古墳時代の墳墓と集落が立地する砂丘微高地の間は谷状の地形になり、その中に流路が東西方向に横切る。検出した流路の総延長は約 360 mであり、流路からは木簡、墨書土器、緑釉陶器、奈良三彩の他、曲物、挽物皿等の木製品が多量に出土した。古代の官衙的遺構や遺物は全調査区の北半部の谷状地形にある流路や溝跡さらに砂丘微高地上にて検出した。

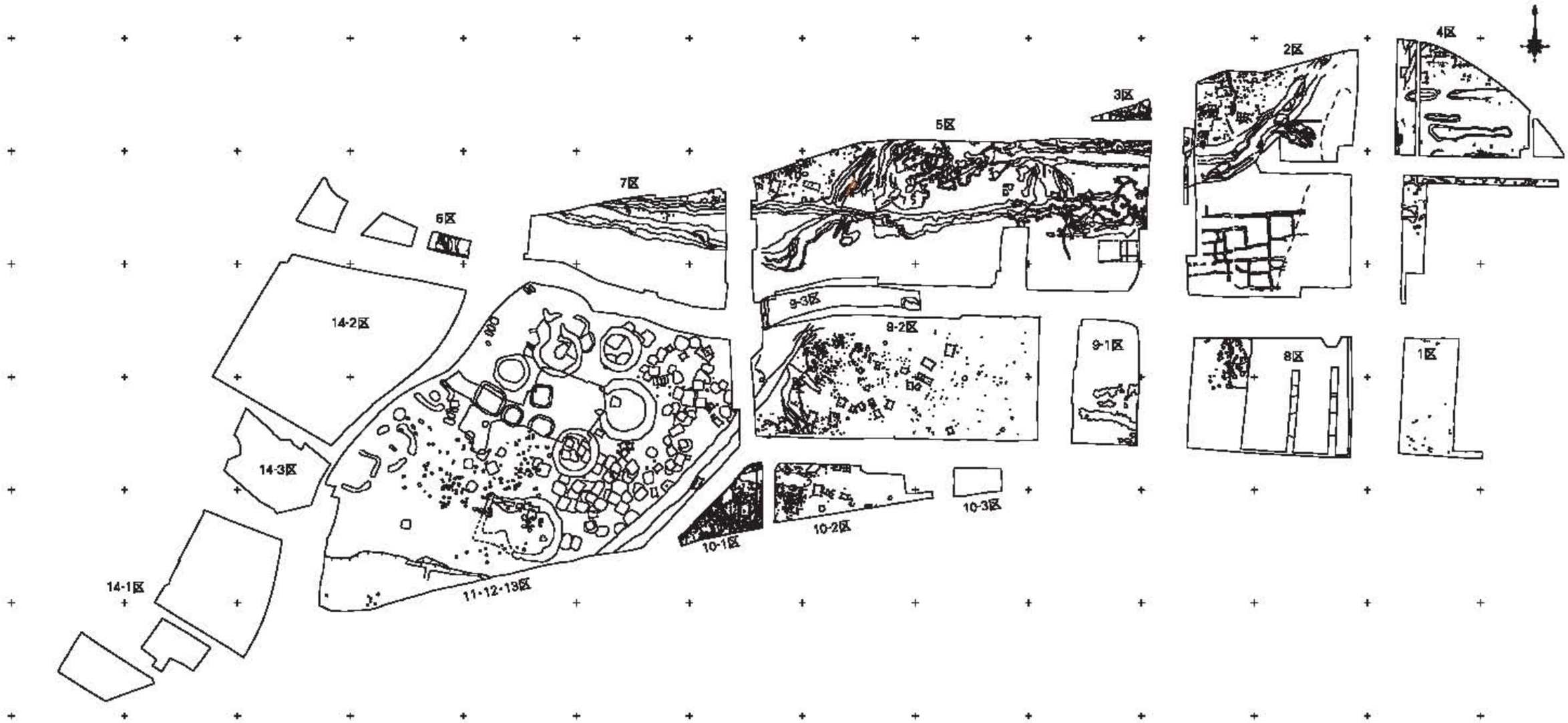


図7　中原遺跡全調査区遺構配置図（1/2000）

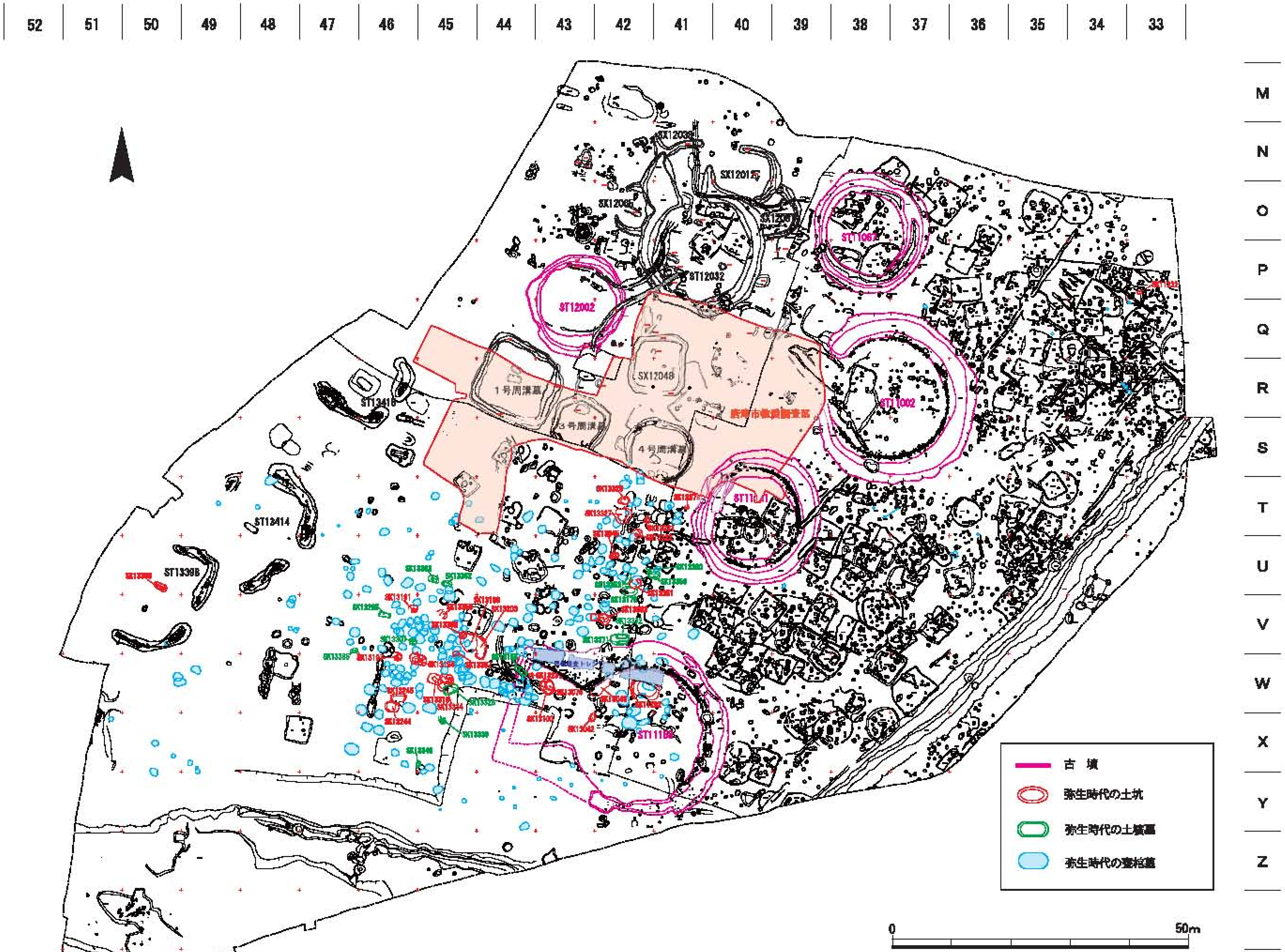


図８　11，12，13区遺構配置図（1/600）

図8　中原遺跡全景

図 10 は本調査区の全遺構配置図を地形測量図に組み込み、遺跡の概略を示したものである。アミ部分は低地になる。11 ～ 13 区の砂丘微高地に弥生・古墳時代の墳墓と集落が立地し、南側の谷状地形をはさんで未調査ではあるものの、弥生時代の集落の中心部があることが予測される。古代の官衙関連施設や集落は弥生・古墳時代の遺跡が立地する砂丘のさらに北側の砂丘微高地に立地する。この砂丘微高地の東西幅は不明であるが、おおよそ 370 m、南北は約 150 mである。この範囲に古代の官衙関連施設や集落が立地すると予想される。

本報告書は南側の砂丘微高地上に立地する弥生時代の土壙墓、土坑と古墳時代中、後期の古墳群の報告である。

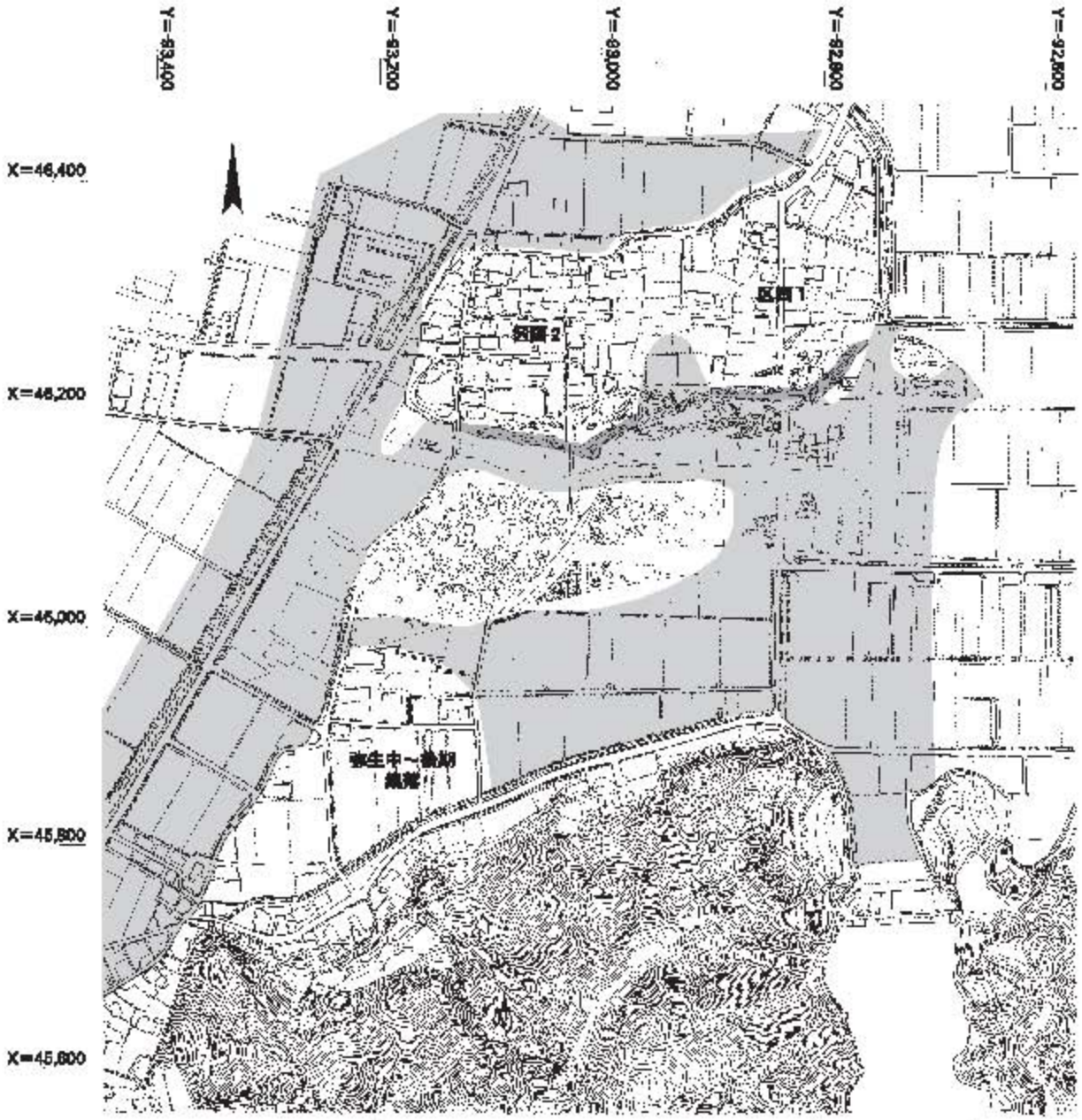


図 10　遺跡概略（1/6000）　0　200m

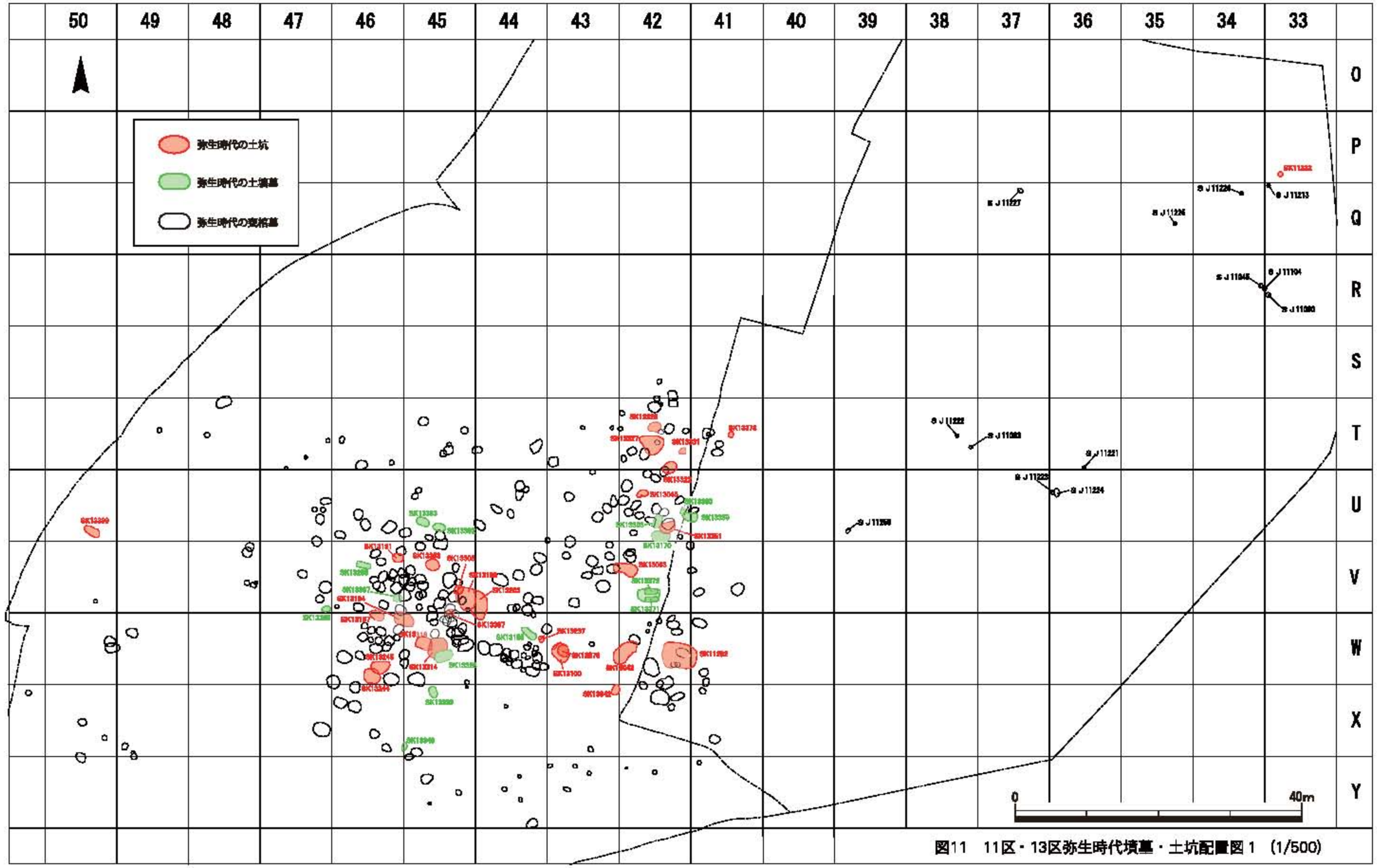


図11　11区・13区弥生時代墳墓・土坑配置図１（1/500）

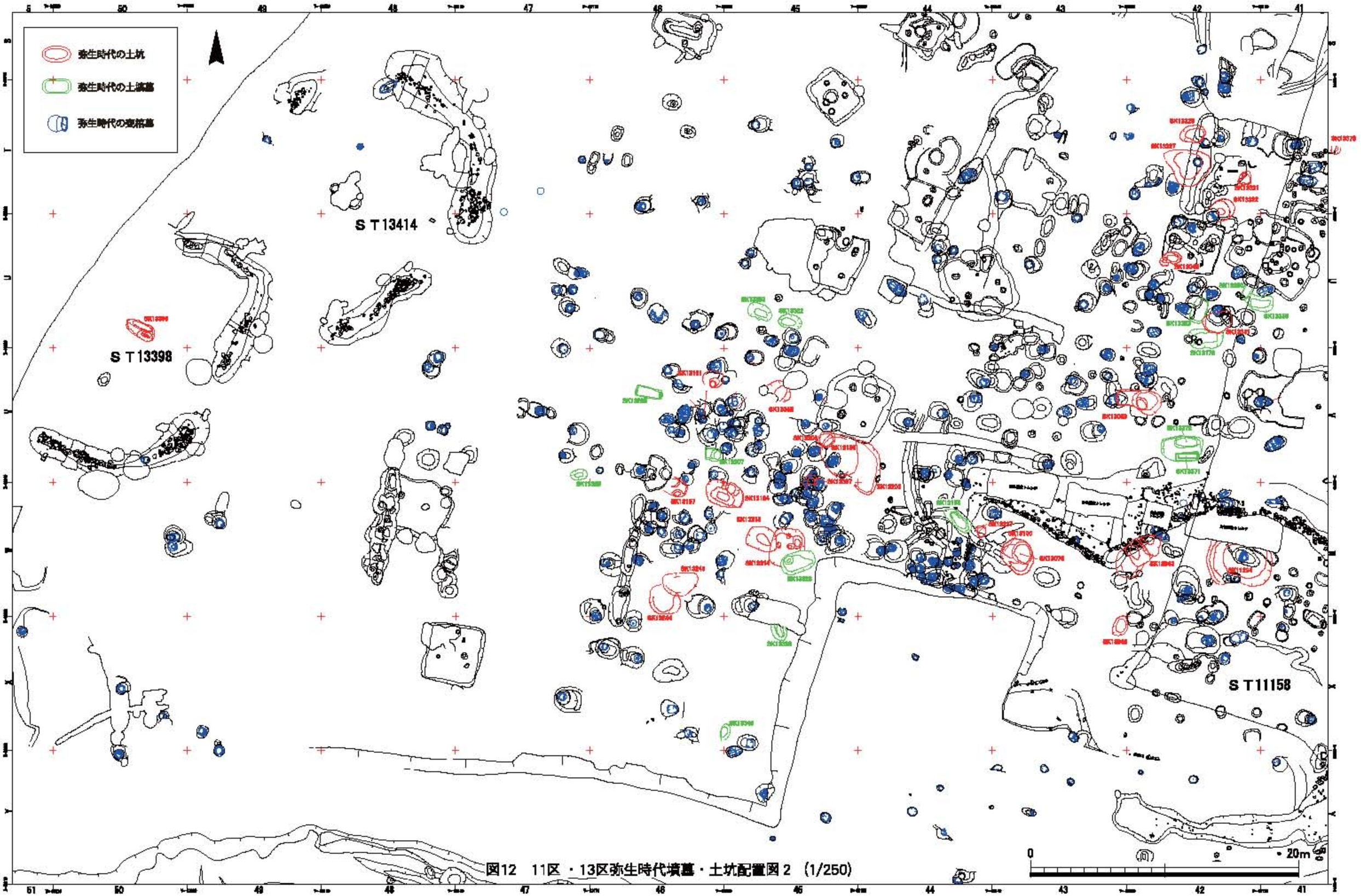


図12　11区・13区弥生時代墳墓・土坑配置図２（1/250）

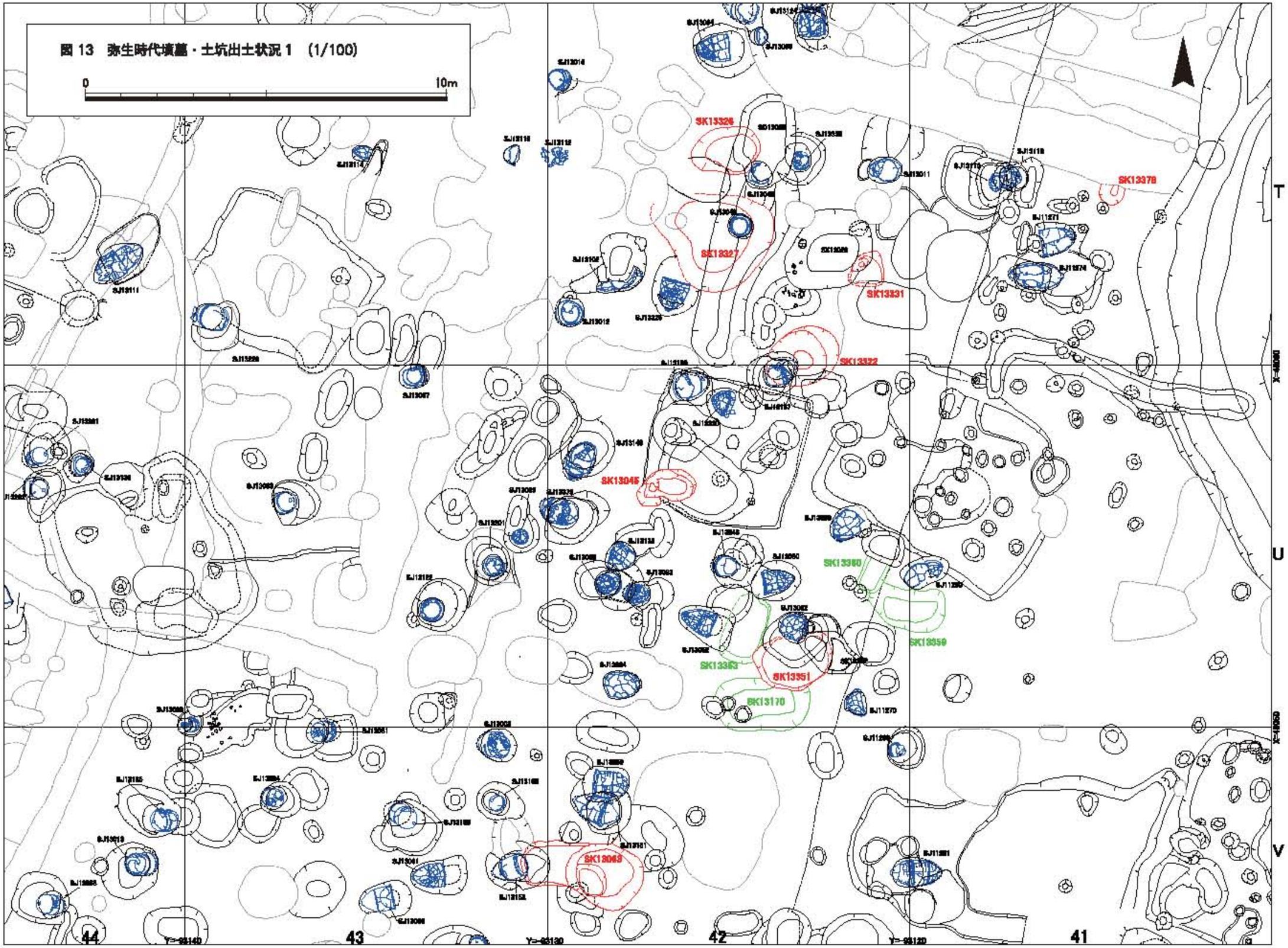


図 13　弥生時代墳墓・土坑出土状況 1　(1/100)

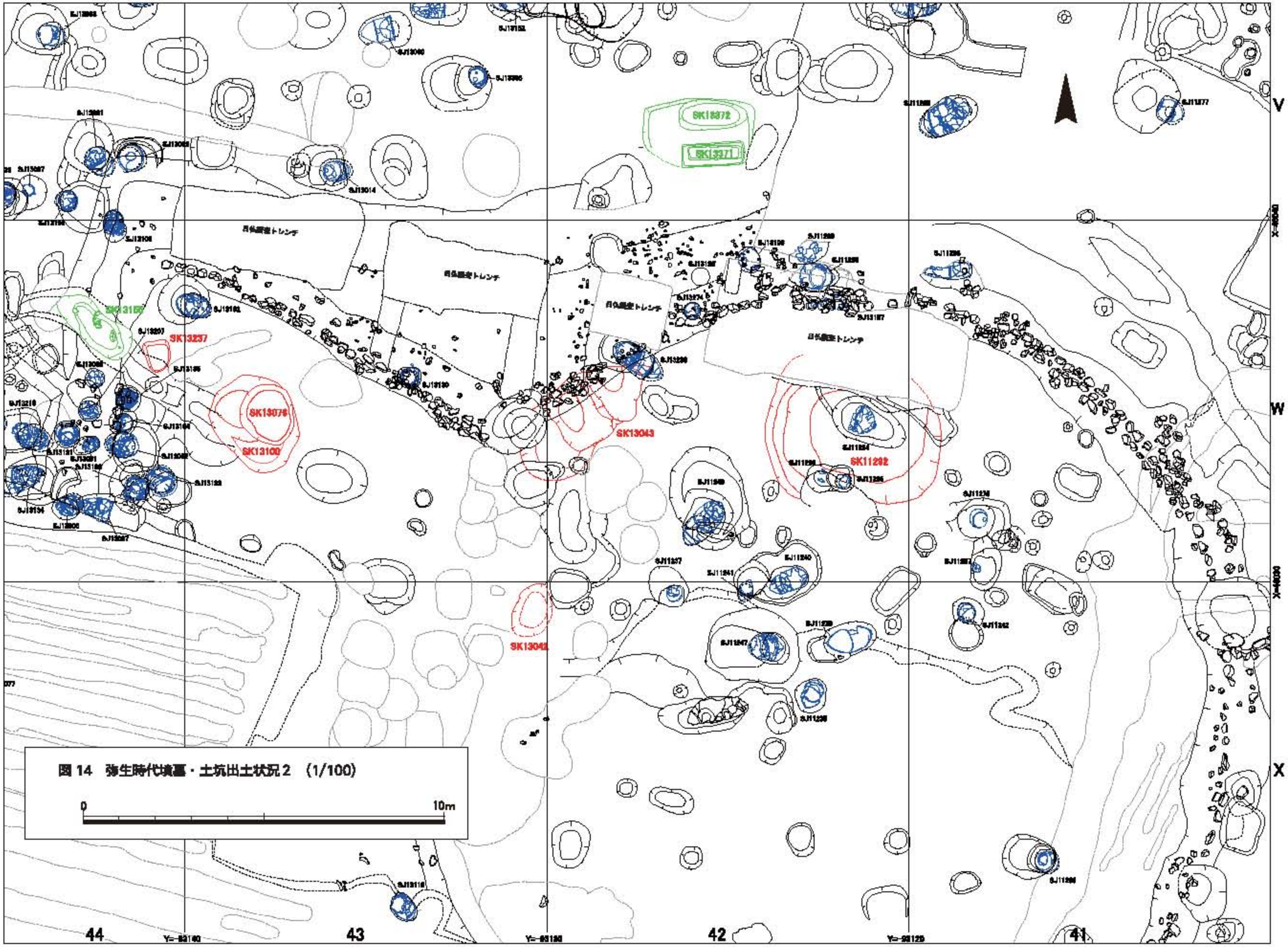


図 14　弥生時代墳墓・土坑出土状況 2　(1/100)

0　10m

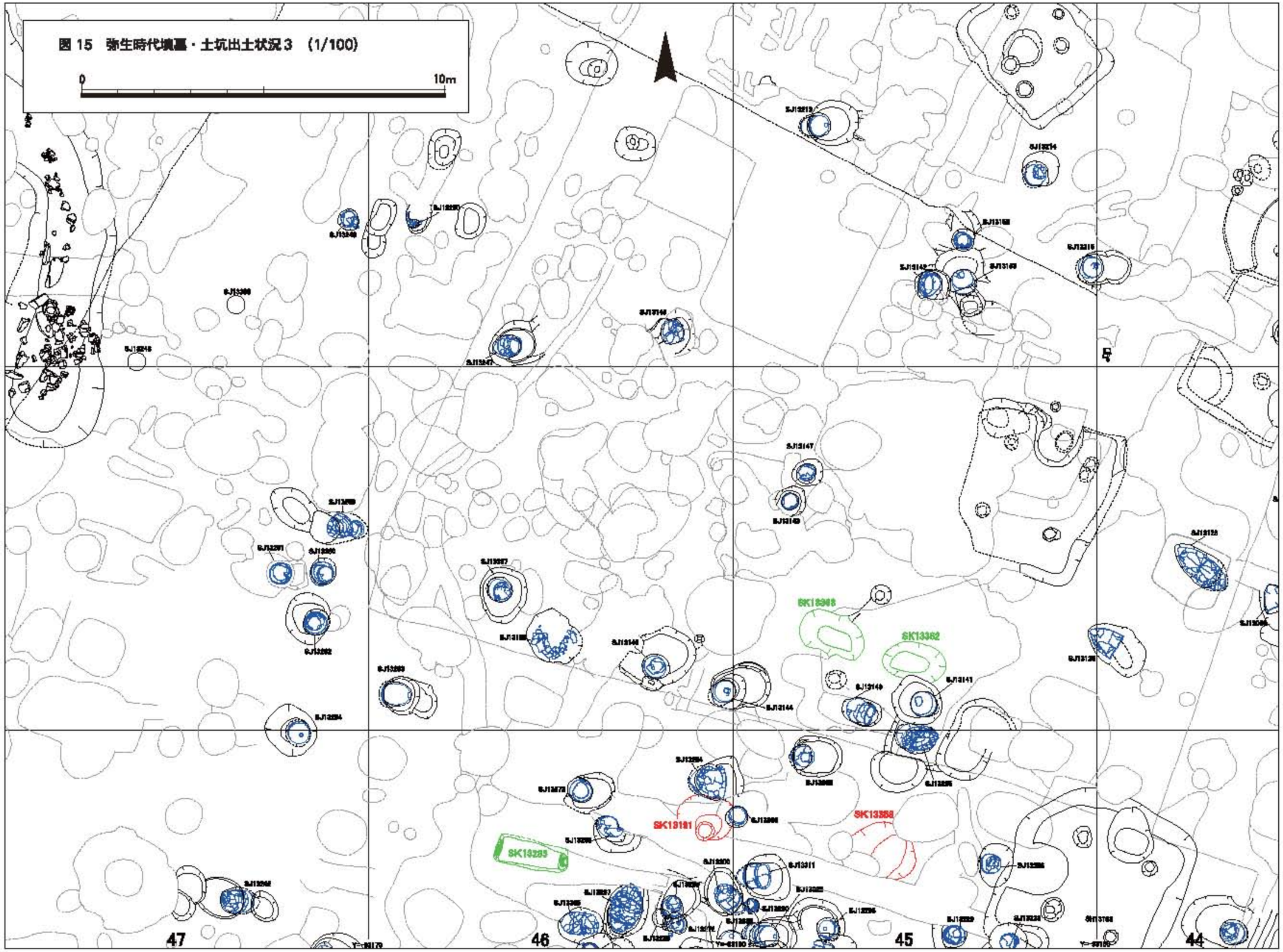


図 15　弥生時代墳墓・土坑出土状況３　(1/100)

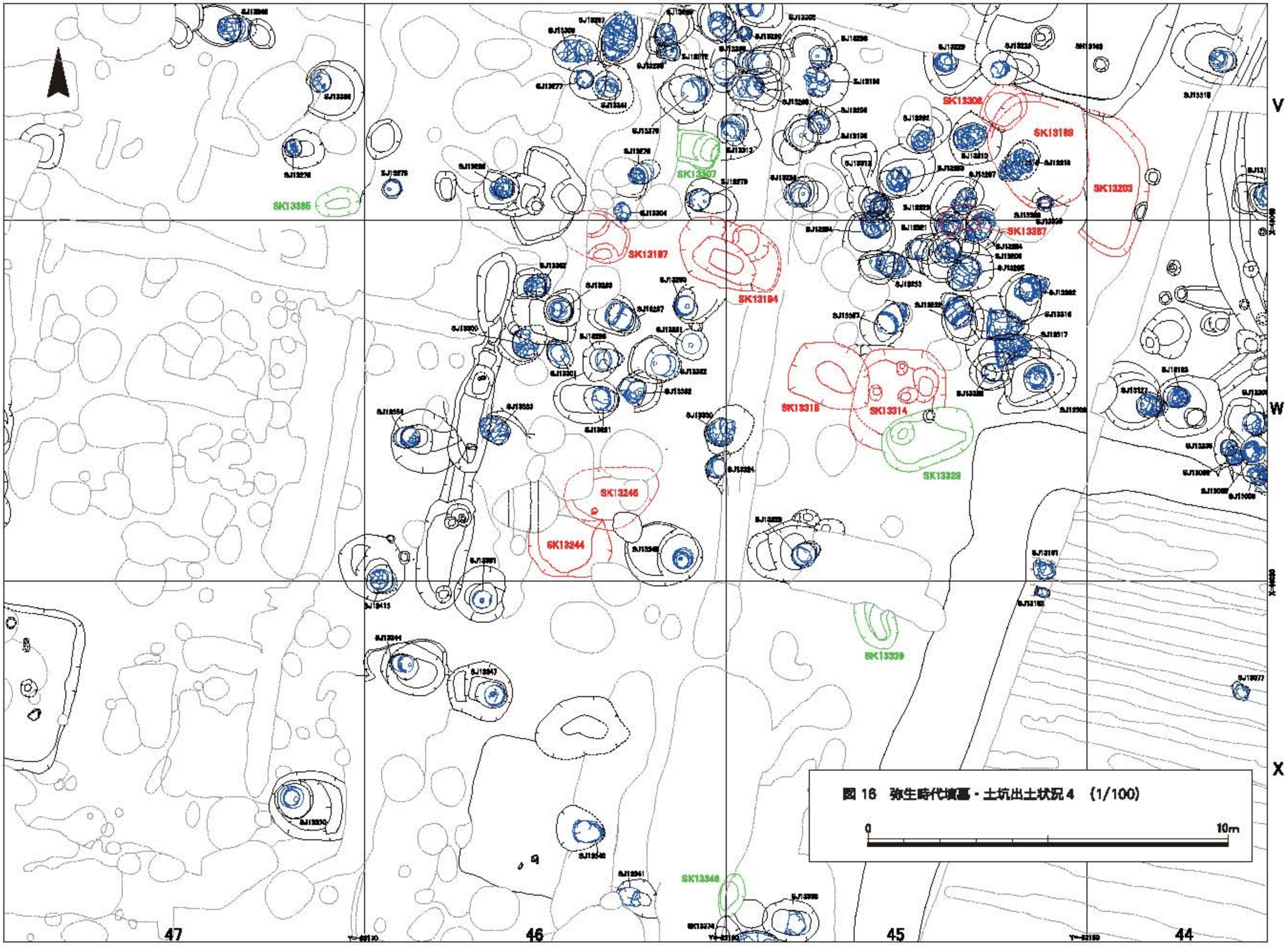


図 16　弥生時代墳墓・土坑出土状況 4　(1/100)

0　10m

Ⅳ．　弥生時代の遺構と遺物

1，概要

既刊の「中原遺跡Ⅳ」では 11 区・13 区の弥生時代甕棺墓の調査を報告した。砂丘微高地の東側半分の 11 区は、竪穴住居群と古墳が立地しており、甕棺墓が極めて希薄になっている。砂丘微高地の西側縁辺部にあたる 13 区西側も甕棺墓群が単独か数基と希薄であるが、南西部にあたる 13 区は、甕棺墓群が密集しており、竪穴住居群は希薄になっている。

本章は、11 区と 13 区における土壙墓、土坑の報告であり、掲載遺構数は土壙墓 14 基、土坑 28 基である。土坑は、甕棺墓群の中に立地することや、多くの副葬品を出土した甕棺墓群である A 群、B 群、C 群を囲むように位置すること、さらに土坑出土土器の多くは赤色顔料塗彩の広口壺であることなどから祭祀土坑と考えられる。

本書掲載の遺構から出土した遺物には弥生土器や石器、玉類がある。出土土器の時期はいわゆる須玖式である。

土壙墓については SK13155、SK13328、SK13339 の 3 基から土器が出土している。鋤先口縁広口壺の口縁部のみ 3 点と素口縁広口壺の完形 2 点が出土している。それぞれ土器の特徴から、Ⅱ -2 期からⅡ -4 期に位置づけられる。

土坑出土の土器は、確認した 28 基の遺構の内、18 基から出土している。特に SK11292 から甕や壺が大量に出土した。土坑の東側から廃棄された状況が窺える。出土土器の時期は須玖Ⅰ式古段階から須玖Ⅱ式新段階である。その他の 17 基の土坑からも甕や壺が出土しており、Ⅱ -1 期からⅡ -5 期に位置づけられる。

石器・青銅器は SK13362 土壙墓から有茎磨製石鏃 2 点と無茎磨製石鏃 1 点、SK13363 土壙墓から無茎磨製石鏃 1 点、SK13385 土壙墓から磨製石剣切先 1 点、青銅製切先 1 点が出土した。この他に SK13318 土坑から完形の磨製石戈が 1 点出土した。

玉類は SK13346 土壙墓から極小形の勾玉 1 点、SK13353 土壙墓から硬玉製垂飾 1 点、SK13371 土壙墓から半玦状勾玉 1 点、櫛形勾玉 1 点出土、SK11232 土坑から小形勾玉 1 点、SK13314 土坑から極小形の勾玉が 1 点出土した。これらはすべて硬玉製である。

管玉は SK13346 土壙墓から 30 点出土しており、今回出土管玉の半数以上となっている。SK13322 土坑からはグリーンタフ製の管玉が出土、それ以外の材質は全て碧玉製となっている。また、今回管玉は一覧表でのみの提示とする。法量の計測値は金属ノギスで 0.02㎜まで計測した。

2，遺構

(1) 土壙墓

ＳＫ１３１５５

W-44 区画に位置する。規模は長軸が 2.25 m、短軸が 0.84 m、深さが 0.54 mで、平面形態としては、東西に伸びる歪な不整楕円形、断面形態は逆台形をした土壙墓である。

本遺構周辺では、前方後円墳の前方部分と重なっていて、古墳よりさらに深くから出土していることから、より古いことがわかり、さらに西側において 2 つの撹乱と少し切りあっている。また、本遺構東側に SK13237 土坑が類似した土器と共に出土している。遺物出土状況としては、本遺構中心付近に土器片が出土している。

表5　土壙墓、土坑一覧表

（　）＝撹乱など推定　〔　〕＝遺構平面図の高低差から

遺構番号	種別	Gr	規模（m）			平面形態	出土遺物	備　　考
			長軸	短軸	深さ			
SK13155	土壙墓	W-44	2.25	0.80	0.54	不整楕円形	土器片	
SK13170	土壙墓	U-42	2.60	1.44	0.57	隅丸長方形		
SK13285	土壙墓	V-46	2.03	0.76	0.66	隅丸長方形		石材あり
SK13307	土壙墓	V-46	(1.14)	(1.02)	0.58	隅丸方形		石材あり
SK13328	土壙墓	W-45	2.78	1.50	0.95	隅丸長方形	壺、甕破片	
SK13339	土壙墓	X-45	(1.33)	1.06	0.46	楕円形	壺、土器片	
SK13346	土壙墓	X-45,46	(1.19)	0.72	0.36	楕円形	硬玉製勾玉1 碧玉製管玉30	
SK13353	土壙墓	U-42	(1.88)	(1.02)	0.27	隅丸長方形	硬玉製垂飾1 碧玉製管玉1	
SK13359	土壙墓	U-41,42	(2.07)	0.77	0.41	隅丸長方形	鉄刀1	
SK13362	土壙墓	U-45	(1.73)	(0.93)	0.53	楕円形	磨製石鏃3	
SK13363	土壙墓	U-45	1.84	1.09	0.60	隅丸楕円形	磨製石鏃1	
SK13371	土壙墓	V-42	1.74	0.62	0.26	長方形	硬玉製勾玉2	SK13372遺構内
SK13372	土壙墓	V-42	3.06	1.90	0.39	隅丸長方形	碧玉製管玉2	
SK13385	土壙墓	V-47	1.23	0.78	0.51	楕円形	石剣切先1 青銅製切先1	
SK11232	土坑	P-33	0.72	0.68	〔0.26〕	円形	硬玉製勾玉1	
SK11292	土坑	W-42	4.91	2.35	0.71	不整楕円形	土器片（大量）1	
SK13042	土坑	X-42,43	1.55	1.02	〔0.82〕	不整楕円形	土器片	
SK13043	土坑	W-42,43	(4.08)	1.96	0.65	不整楕円形	完形壺、土器片	
SK13045	土坑	U-42	1.65	0.80	〔0.43〕	不整楕円形	土器片	
SK13063	土坑	V-42	3.39	1.84	0.69	不整楕円形	完形壺1、土器片	
SK13076	土坑	W-43	1.63	1.51	0.31	円形	完形壺1、土器片	
SK13100	土坑	W-43	2.61	2.31	0.75	不整円形	完形壺2	
SK13189	土坑	V-45	(3.16)	3.09	0.92	不整円形	完形壺2、土器片	
SK13191	土坑	V-45,46	1.54	1.23	0.54	不整隅丸正方形	土器片	
SK13194	土坑	W-45,46	2.70	1.90	0.93	不整楕円形	完形壺1、土器片	
SK13197	土坑	W-46	1.43	(1.20)	0.49	不整隅丸長方形	完形壺2	
SK13203	土坑	V-44,45	3.65	(1.78)	0.56	不整隅丸正方形	土器片	他遺構により大部分不明
SK13237	土坑	W-44	1.86	0.75	0.16	不整方形	土器片	
SK13244	土坑	W-46	2.28	(1.67)	0.43	不整方形	土器片	
SK13245	土坑	W-46	(2.61)	(1.74)	-	不整楕円形	土器片	
SK13308	土坑	V-45	1.31	1.25	0.36	不整円形	土器片	
SK13314	土坑	W-45	(2.93)	(2.03)	0.72	不整隅丸正方形	完形壺2、土器片 硬玉製勾玉1 碧玉製管玉4	
SK13318	土坑	W-45	2.39	1.78	1.17	不整長方形	完形壺2、石戈	
SK13322	土坑	T-42	1.64	1.52	0.57	楕円形	GT製管玉3	
SK13326	土坑	T-42	1.91	1.34	0.57	不整楕円形	鉄鏃1、鉄鏃1、 鉄製鉾1	
SK13327	土坑	T-42	(3.40)	2.90	0.56	不整円形	碧玉製管玉3	
SK13331	土坑	T-42	1.15	0.97	0.56	不整三角形		
SK13351	土坑	U-42	(2.17)	(1.50)	0.58	不整楕円形	碧玉製管玉1、 鉄製鉾1	
SK13358	土坑	V-45	(1.75)	1.52	0.43	不整円形	土器片	
SK13378	土坑	T-41	0.67	0.56	-	不整楕円形	碧玉製管玉1	
SK13387	土坑	V-45	1.08	(0.50)	0.64	不整円形	碧玉製管玉4	
SK13399	土坑	U-50	(2.25)	(0.95)	-	不整楕円形	碧玉製管玉1	遺構にかかる撹乱の線は推定

長軸方位は北から西に 43°ふれている。B群に接して北側に位置することや土坑の形状から祭祀土坑の可能性もある。

ＳＫ１３１７０

U-42 区画に位置する。規模は長軸が 2.60 m、短軸が 1.44 m、深さが 0.57 mで、平面形態は、東西に伸びる隅丸長方形の土壙墓になっている。断面形態として東西断面は皿形をしている。

本遺構周辺では、西側を小穴に切られ、北側を SK13351 土坑によって切られ、さらに本遺構付近に SK13353 土壙墓、SK13359 土坑が密集して出土している。

長軸方位は南から東に 84°ふれている。A群から北に伸びる墓道上に位置している。

ＳＫ１３２８５

V-46 区画に位置する。規模は長軸が 2.03 m、短軸が 0.76 m、深さが 0.66 mで、平面形態は東西に伸びる比較的長方形に近い隅丸長方形をなし、断面形態は、東壁と西壁の北側は直角に近いが、南側はゆるい角度で掘られている逆台形の土壙墓である。

周辺状況としては同じ区画内の南東から同じく板石をもった SK13307 土壙墓が出土している。東側と西側のそれぞれの端に、底部から更に西側が 0.24m、東側が 0.29m の穴を掘り、東西の小口に立てるようにして埋まっている板石が見つかっている。東側が少し撹乱によって切られ、北側は崩落の影響で推定となっている。

長軸方位は北から西に 78°ふれている。類例には福岡市吉武遺跡群 1 次調査 4 区 SK03 土壙墓がある。（福岡市教育委員会 1998『吉武遺跡群Ⅹ』）

ＳＫ１３３０７

V-46 区画に位置する。規模は長軸が 1.14 m、短軸が 1.20 m、深さが 0.58 mで、平面形態としては、そのほとんどを円形の撹乱によって削られているが隅丸方形をしており、SJ13313 甕棺墓と接している。断面形態として南北断面は逆台形、東西断面は箱形になっている土壙墓である。東側に平たい板石を、立てるようにして埋めている。底部はその石材のある東側が約 0.05m 西端よりも低くなっている。

周辺状況として同じ区画内の北西に位置する SK13285 土壙墓からも同じく、板石が出土している。

長軸方位は北から西に 81°ふれている。

ＳＫ１３３２８

W-45 区画に位置する。規模は長軸が 2.78 m、短軸が 1.50 m、深さが 0.95 mで、平面形態は東西に伸びる隅丸長方形をした土壙墓である。断面形態は南北断面が逆台形、東西断面は船底形になっている。

本遺構と周辺については出土状況として、北西部に SK13314 土坑と北西側から小穴をもうけ、その中に口縁部を北に向けた完形の壺、西側に甕破片、中央から土器片が出土している。また、本遺構北側に列のように、SK13339 土壙墓と SK13346 土壙墓が存在している。

長軸方位は南から西に 72°ふれている。C群の北側に位置している。

ＳＫ１３３３９

X-45 区画に位置する。規模は長軸が 1.56 m、短軸が 1.05 m、深さが 0.46 mで、南北に伸びた楕円形をした土壙墓である。断面形態としては、逆台形になっている。

本遺構と周辺については、北側から半分近くを撹乱によって削られている為、はっきりとした遺構の広がりは分からない。本遺構の北と南に SK13328 土壙墓と SK13346 土壙墓が存在する。出土状況については、遺構のほぼ中央に、口縁を西に向けて横になっているほぼ完形壺と、壺付近に集中して石材

と土器片が出土している。

長軸方位は北から東に 16° ふれている。

ＳＫ１３３４６

X-45、46 区画に位置する。規模は長軸が 1.19 m、短軸が 0.72 m、深さが 0.36 mで、平面形態は南北に伸びる楕円形をした土壙墓である。断面形態は船底形になっている。

本遺構と周辺については、本遺構は大きな撹乱と存在している。そして、他の遺構とかたまって出土していて、そのうち SK13374 に切られており、さらに本遺構東側を撹乱が切っている。本遺構の遺物出土状況を確認してみると、硬玉製勾玉 1 点と碧玉製管玉が 30 点と管玉が大量に出土している。

長軸方位は北から東に 12° ふれている。

ＳＫ１３３５３

U-42 区画に位置する。規模は長軸が 1.88 m、短軸が 1.02 m、深さが 0.27 mで、平面形態は南北に伸びる隅丸長方形をした土壙墓となっており、断面形態は皿形になっている。

本遺構と周辺については、西側から北側にかけて SJ13052、SK13350、SJ13050 に切られ、南東側において SK13351 と SJ13082 に切られており、一番深いところに存在していることから、最も古い時期の遺構と思われる。また、周辺については南側に SK13170 土壙墓が存在する。出土状況からは、遺物が硬玉製垂飾 1 点と碧玉製管玉 1 点が出土している。

長軸方位は北から東へ 32° ふれている。A群から北に伸びる墓道に存在している。

ＳＫ１３３５９

U-41、42 区画に位置する。規模は長軸が 2.07 m、短軸が 0.77 m、深さが 0.41 mで、平面形態は、東西に伸びる隅丸長方形をした土壙墓である。断面形態は皿形になっており、遺構底部が東から西へ約 0.1m 落ち込んでいる。

本遺構と周辺については、南西の角と北西の角を SK13360 と、別の遺構の 2 つによって切られており、さらに周辺に遺構がかたまって出土し、南西側に SK13353 土壙墓と SK13170 土壙墓が存在している。

長軸方位は北から西に 83° ふれている。A群から北に伸びる墓道に存在している。

ＳＫ１３３６２

U-45 区画に位置する。規模は長軸が 1.73 m、短軸が 0.93 m、深さが 0.53 mで、平面形態は、東西に伸びる楕円形をした土壙墓ある。断面形態は、船底形になっている。

本遺構の状況と周辺は、撹乱より下に本遺構が存在するため、本遺構の規模は推定になっている。また、南側を SJ13141 遺構に少し切られている。周辺については、本遺構のすぐ西側に存在する SK13363 土壙墓と類似した遺構の特徴や主軸を持ち、本遺構と並ぶように出土している。出土状況は、遺物として磨製の有茎石鏃が 2 点、無茎の石鏃が 1 点、遺構中央から東よりに集中して出土している。

長軸方位は北から西へ 78° ふれている。

ＳＫ１３３６３

U-45 区画に位置する。規模は長軸が 1.84 m、短軸が 1.09 m、深さが 0.60 mで、平面形態は東西に伸びる隅丸楕円形をした土壙墓である。断面形態は船底形になっている。本遺構を南北に横切る大きな撹乱と重なっているためその大きさのほとんどが推定になる。

本遺構の状況と周辺について、東端から南へ約 0.60m 削られ、0.31m 落ち込んでいる。東側にある SK13362 土壙墓と似た特徴を持ち、並ぶように出土している。本遺構の遺物出土状況は東側底部付近に、磨製の無茎石鏃が 1 点出土している。

長軸方位は北から西に 70°ふれている。

ＳＫ１３３７１

V-42 区画に位置する。規模は長軸が 1.74 m、短軸が 0.62 m、深さが 0.26 mで、平面形態は東西に伸びる長方形をしており、断面形態は、三段掘りになっている。

本遺構と周辺の状況としては、本遺構の南側に前方後円墳があり、北側には小穴や遺構がいくつかある。また、本遺構は SK13372 土壙墓の大きな遺構に内包され、遺構南側に SK13372 土壙墓と並ぶようにして存在している。本遺構の出土遺物としては、硬玉製の半玦状勾玉と櫛形勾玉の 2 点が出土している。本遺構の平面形態、形状などから、本遺構が木棺墓であった可能性も考えられる。

長軸方位は南から西に 87°ふれている。

ＳＫ１３３７２

V-42 区画に位置する。規模は長軸が 3.06 m、短軸が 1.90 m、深さが 0.39 mで、平面形態は東側を少し削られているが、東西に伸びる隅丸長方形をした土壙墓で、断面形態は歪な皿形をしている。本遺構内南側に、SK13371 土壙墓を内包して本遺構と並ぶようにして存在している。

本遺構周辺状況としては北側にいくつかの小穴と遺構が存在しており、南側に前方後円墳がある。本遺構の出土遺物は、碧玉製管玉が 2 点出土している。

長軸方位は 90°になっている。SK13371 土壙墓と同じくＡ群の北側に存在している。

ＳＫ１３３８５

V-47 区画に位置する。規模は長軸が 1.23 m、短軸が 0.78 m、深さが 0.51 mで、平面形態は東西に伸びる楕円形をした土壙墓である。断面形態は逆台形になっている。本遺構の約 2/3 を V、W 区画にまたがった大きな撹乱によって削られている。

本遺構の遺物出土状況と周辺状況については、遺物が遺構中央から西よりに石剣切先 1 点と青銅器製切先 1 点が地面に刺さるように出土している。本遺構は掲載土壙墓の中でも最も西に位置している。

長軸方位は南から西に 79°ふれている。

(2) 土坑

ＳＫ１１２３２

11 ～ 13 区の北東の P-33 区画に位置する。規模は長軸 0.72 m、短軸 0.68 m、深さは 0.26 mになる円形の土坑である。本遺構は、11 区の東側にある住居区に作られており、本遺構も SH11234 の北東側に内包される形で見つかっている。本遺構に隣接する他の土壙としては北側に SK11072、北西に SK11233、東に SK11073 が見つかっている。遺物に硬玉製勾玉が一点出土しているが、土器などは見つかっておらず、年代は不明。

ＳＫ１１２９２

11 ～ 13 区の南の W-42 区画に位置する。規模は長軸 4.91 m、短軸 2.35 m、深さ 0.71 mになる東西に長い不整楕円形の土坑である。前方後円墳の後円部分に作られており、本遺構は、土器が大量に出土しており、祭祀土坑と考えられる。本遺構の南側に中原遺跡の有力者を埋葬したと思われる甕棺墓群Ａ群が見つかっている。出土土器は、須玖Ⅰ式から須玖Ⅱ式段階の幅を持っているが、本遺構の真ん中よりやや北側にⅡ -6 期（須玖Ⅱ式新段階）に当たると考えられる SJ11294 が作られていることから、利用期間はⅡ -2 期（須玖Ⅰ式古段階）からⅡ -5 期（須玖Ⅱ式古段階）までの間になると思われる。出土遺物の割合は甕の土器、及び土器片が多く出土し、壺がそれに続き、他に蓋・高杯・器台などが僅か

に出土している。土器の分布状況としては、東側が西側より多く出土しているように見受けられる。断面は、逆台形の形をしており、掘り方は、西側は緩やかに、東側は急に作られている。坑底は多少波打っているが、比較的平坦にされている。

ＳＫ１３０４２

11～13区の南のX-42、43区画に位置する。南側を撹乱によって大きく切られているが、規模は推定長軸1.55 m、短軸1.02 m、深さ0.82 mになる、南北に長軸を持つと思われる不整楕円形の土坑である。前方後円墳のくびれ部分に作られており、北側は遺構上から土坑が掘られ、北東側にはSK13041が隣接している。本遺構の東側に甕棺墓群のＡ群があり、遺物はほぼ完形の鋤先口縁の甕が2点、甕の底部が1点、口縁部を欠いた壺が1点出土している。

ＳＫ１３０４３

11～13区の南のW-42、43区画の間に位置する。規模は長軸4.08 m、短軸1.96 m、深さ0.65 mになる東西に長い不整楕円形の土坑である。遺物は年代幅を持ち、大量に出土しているが、完形の形で出土しているものはなく、土器片の状態で出土している。出土位置も、大半が坑底よりもレベルの高い位置にあり、また坑底も何度か使用されたように波打っており、何度か掘り返えしながら使用され、土器もその際に掘り返され、再度廃棄されたと思われる。本遺構は、前方後円墳のくびれ部分に位置し、その為北東側の一部を古墳の周溝に切られており、また、北西側及び南西側それぞれに小穴の撹乱によって一部が切られている。

ＳＫ１３０４５

11～13区のほぼ中央付近のU-42区画に位置する。規模は長軸1.65 m、短軸0.80 m、深さ0.43 mになる、東西に長い不整楕円形をしている土坑である。本遺構の周辺は、全方位から甕棺墓が見つかっているが、これより東側は住居区になっており、甕棺墓は少なく、西側から甕棺墓が多数見つかっている。西側に不整円形の小穴があるが、遺構の状態から後世に掘られたものと思われる。遺物は甕と思われる底部が3点と紡錘車が1点出土している。

ＳＫ１３０６３

11～13区やや南西のV-42、43区画の間に位置する。規模は長軸3.39 m、短軸1.84 m、深さ0.69 mになる東西に長い不整楕円形をした土坑であるが、西側は0.10 mと非常に浅い為後世の別遺構と思われる。しかし、実際の形は径1.85 mの円形に近い土坑と思われる。南西にはSK13168があり、これを切っている。また、東から北にかけても撹乱がみつかっているが、いずれも切っている。本遺構の周辺は、大規模な甕棺墓群はなく北東から南西にかけて、甕棺墓が点在しながら広がっている。遺物はほぼ完形の鋤先口縁壺と、壺と甕の土器片が複数出土している。遺構を断面で見てみると、西側は壺がほぼ完形の状態で残って出土した部分と、土器片のみが出土している部分の二箇所に分けられ、坑底が2箇所認められ、ほぼ完形の壺が出土した場所のほうが0.1 mほど段差を持ったように深くなっていることから、複数回使用されたものと思われる。

ＳＫ１３０７６

11～13区の南西のW-43区画に位置する。規模は長軸1.73 m、短軸1.45 m、深さ0.31 mになる円形の土坑である。この遺構は、前方後円墳の前方部分に作られていた。また、SK13100上の北東に作られており、ほぼ全域がSK13100に収まっている。本遺構の周辺は東に甕棺墓群のＡ群が、西にも甕棺墓群のＢ群が存在している。遺物は、南側に甕の土器片が集中して出土しており、その中の甕には底部に穿孔がされていた。遺構断面は、逆台形の形をしており、坑底は南東側がもっとも低くなってお

り、中央付近から北西側になるにつれ徐々に坑底が上り坂になる。また、南東側は急に、北西側はなだらかに掘られている。

ＳＫ１３１００

11～13区の南西のW-43区画に位置する。規模は長軸2.61 m、短軸2.31 m、深さ0.75 mになる不整円形の土坑である。この遺構は、前方後円墳の前方部分に作られていた。遺構内の北東部分にSK13076がほぼ全域本遺構の上に作られていた。

本遺構の周辺は東に甕棺墓群のＡ群が、西にも甕棺墓群のＢ群が存在している。出土遺物はほぼ完形の素口縁、鋤先口縁壺がそれぞれ1点ずつ、計2点南側に、土器片が北側から出土している。そのうち素口縁広口壺は丹塗りが施されている。北側半分は段差を持つように0.20 m近く深くなっており、複数回使用されていたと思われる。

ＳＫ１３１８９

11～13区の南西のV-45区画に位置する。規模は長軸3.16 m、短軸3.06 m、深さ0.92 mになる不整円形の土坑である。遺構の北西側にSK13308、東側にSJ13310の遺構により切られ、また本遺構の真ん中やや南西側上にSJ13319が存在しそれ以前に使われていたと思われ、北側は住居跡に切られ、東側に接しているSK13203を切っている。周辺の遺構による切り合いによって、正確な平面プランは不確定である。また、本遺構の南側には、甕棺墓群のＣ群が存在している。遺物はほぼ完形の壺が南東側に、甕が東側に出ており、また土器片も北西側を中心に複数出土している。断面は逆台形の形をしており、坑底はほぼ平坦になっている。

ＳＫ１３１９１

11～13区の南西のV-45、46区画の間に位置する。規模は長軸1.54 m、短軸1.23 m、深さ0.54 mになる東西に長い不整隅丸正方形と思われる土坑である。遺構の南側は撹乱によって切られており、北側はSJ13284を、東側はSJ13286を切っている。また遺構南側に円形の小穴が確認される。本遺構の周辺は、南側にＣ群の西にある甕棺墓群が存在している。遺物は土器片が15点出土している。そのうちひとつは遺構の外から出土しているが、その他の土器片は比較的かたまって北側を中心にして出土している。断面は、御椀状の形をして掘られている。

ＳＫ１３１９４

11～13区の南西のW-45、46区画の間に位置する。規模は長軸2.70 m、短軸1.90 m、深さ0.93 mになる東西に長い不整楕円形の土坑である。遺構の東側は撹乱によって東側の壁が切られていたが、坑底までは届いていなかった。土坑は坑底がいくつか見られることから何度か使用されていたと見られる。掘り方は、南部が北側に0.20 m進む間に1.00 m掘るのに対して、北側は南側に0.50 m進む間で1.00 mと緩やかに掘ってある。断面は逆台形に掘ってあり、西側からは坑底にいたるまで一直線に、東からは1つ段を作ってから坑底に向かって掘り進んである。本遺構の周辺は、北東に甕棺墓群のＣ群が、北西側と南西側にも甕棺墓群が見つかっており、本遺構はその3点の中間に存在する。

ＳＫ１３１９７

11～13区の南西のV-46区画とW-46区画の間に位置する。規模は長軸1.47 m、短軸1.20 m、深さ0.49 mになる、東西に長い不整隅丸長方形の土坑である。遺構は東側が撹乱によって大半が切られている。そのため本来長径は東西になると思われるが、確認できる遺構では南北のほうが0.20 mほど長くなっている。本遺構の周辺は、北と南の両方にまとまった甕棺墓群があり、その甕棺墓群の真ん中ほどに本遺構がある。遺構は北側と南側に段差が見られ、0.10 mほど低くなっており、複数回使用さ

れた時にできた段差と思われ、そのうち南側からは遺物は出土していないが、北側からは坑底からだいぶ浮いた状態で土器片が出土しており、ほぼ完形の鋤先口縁と素口縁の壺が一点ずつ出土している。

ＳＫ１３２０３

11～13区の南西のV-44、45区画の間に位置する。規模は長軸3.65 m、短軸1.78 m、深さ0.56 mになる不整隅丸正方形と見られる土坑である。東側がSK13189に大きく切られており、正確な形は掴めない。遺構東側に0.20 mほど掘られた不整円形と不整楕円形の小穴が二つ存在する。本遺構の周辺は、北に竪穴式住居があり、また、南には甕棺墓群のＣ群が見つかっている。出土遺物は、土器は南から西に向かって逆コを描くように６点、北東側に１点坑底から浮いた状態で出土している。断面はレンズ状になっているが、土器が出土している中央付近になると思われる場所が0.1 mほど高くなっている。

ＳＫ１３２３７

11～13区の南西のW-44区画に位置する。規模は長軸1.86 m、短軸0.75 m、深さ0.16 mになる、南北に長い不整方形の土坑である。本遺構の周辺は、南側の下には溝があったが、本遺構の坑底のほうが0.80 mほど高かった。また、すぐ南には甕棺墓群のＢ群が、東には前方後円墳が見つかっている。遺物は掲載していないが、土器片が出土している。

ＳＫ１３２４４

11～13区の南西のW-44区画に位置する。規模は長軸2.28 m、短軸1.67 m、深さ0.16 mになる不整方形と見られる土坑である。北側の大半がSK13245や撹乱によって切られてしまっている。そのため長径は本来南北になると思われるが、確認できる遺構は東西のほうが長くなっている。また、南東側も撹乱によって一部が切られている。本遺構の周辺は、東にSJ13348が隣接するほか、北から南西にかけて甕棺墓群Ｃ群を含めての甕棺墓群が見つかっている。遺物は土器片が５点出土している。断面はレンズ状の形態をしており西側が東側よりもきつい坂となっている。

ＳＫ１３２４５

11～13区の南西のW-46区画に位置する。規模は長軸2.61 m、短軸1.74 m、深さ0.43 mになる東西に長い不整楕円形の土坑である。西側になるにつれて深くなっており、北側、北西に撹乱があり大きく切られている。また東側も遺構内に撹乱が存在しており切られている。南東側にも撹乱があり一部切られている。南西側ではSK13244と接しており、これを切っている。本遺構の周辺は、南東にSJ13348が隣接するほか、北から南西にかけて甕棺墓群Ｃ群を含めての甕棺墓群が見つかっている。遺物は土器片が南西から１点出土している。

ＳＫ１３３０８

11～13区の南西のV-45区画に位置する。規模は長軸1.31 m、短軸1.25 m、深さ0.36 mになる不整円形の土坑である。東側から南側にかけてSK13189土坑を切っており、南側ではさらにSJ13310を切っている。本遺構の周辺は、北側に竪穴式住居があり、南には甕棺墓群のＣ群が存在する。遺物は土器片10点が南側に集中するような形で出土している。断面は逆台形をしており、南側が北側よりも緩い掘り方となっている。

ＳＫ１３３１４

11～13区のやや南西のW-45区画に位置する。規模は長軸2.93 m、短軸2.03 m、深さ0.72 mになる不整隅丸正方形とみられる土坑である。周辺には、北側に甕棺墓がまとまって出土しているＣ群がある。北西側はSK13318に、南西側は撹乱によって西側の大半が切られている。また南東はSK13328

によって大半が切られている。北東側は撹乱によって一部が切られている。遺構内に不整円形、不正楕円形の小穴とみられるものが６つある（SK13328による推定線付近のも含む）。遺物は、ほぼ完形の壺が２点及び土器片、そして北側から勾玉が１点、その他に碧玉製管玉の合計４点が坑底より浮いた状態で出土している。断面は逆台形をしており、残っている遺構部分を見る分に、西側は東側よりも緩い掘り方となっている。

ＳＫ１３３１８

11～13区のやや南西のW-45区画に位置する。規模は長軸2.39ｍ、短軸1.78ｍ、深さ0.72ｍになる東西に長い不整長方形の土坑である。周辺には、北側に甕棺墓がまとまって出土しているＣ群があり、北側には多くの甕棺墓が存在する。本遺構では、東側に接しているSK13314を切っている。北側と南側に撹乱があり、一部が切られている。遺物には石戈が遺構北側から坑底より浮いた状態で出土している。また、中央の坑底上を中心にほぼ完形の壺を含め土器片が17点出土している。断面は御椀状の形をして掘られている。一部東側が撹乱によって切られている。

ＳＫ１３３２２

11～13区のほぼ中央のT-42とU-42区画にまたがって位置する。規模は長軸1.64m、短軸1.52m、深さ0.57mになる。東西に長軸を持つ楕円形と思われる土坑である。この付近は、墓道があったと思われる付近であり、それに関連する土坑である可能性がある。南東側でSJ13167と切りあっているが、南側ではSK13022を切っている。周辺の状況では、南にSH13086が、南東にもSH11279が存在する。断面は、逆台形の形をしており、西側が東側よりやや緩い掘り方となっている。遺物は土器片が中央付近に２点と、碧玉製管玉が北側から北東側にかけて３点出土している。

ＳＫ１３３２６

11～13区のほぼ中央のT-42区画に位置する。規模は長軸1.91ｍ、短軸1.34ｍ、深さ0.56ｍになる、東西に長い不整楕円形の土坑である。北側はSK13334と接しており、切っている。東側ではSD13085とSJ13048と接しており両方とも切っている。遺物は、東側に比較的土器片が集中しており、合計９点が出土している。西側も３点が集中した形で出土している。またその中間に１点土器片が出ている。断面は逆台形の形をしており坑底はほぼ平坦な状態になっている。

ＳＫ１３３２７

11～13区のほぼ中央のT-42区画に位置する。規模は長軸3.40ｍ、短軸2.90ｍ、深さ0.56ｍになる東西に長い不整円形の土坑である。本遺構の西側は撹乱によって大きく切られているため、遺構の形は分かりにくい。確認できる範囲では、東側の掘り始めの部分を底にしたら、平面プランはフラスコ状の形に見える。本遺構の北東側内部にSJ13049が重なっていたが、坑底までは届いていなかった。また、溝状遺構であるSD13085が本遺構の東側と重なっており、南西側ではSJ13325を切っている。本遺跡の周辺には、北と東に周溝墓が存在する。遺物は坑底の南側に碧玉製管玉が坑底より浮いた状態で３点出土している。断面は、逆台形の形をしており、坑底はほぼ平坦になっている。また、東側が西側よりもやや緩やかに掘られている。

ＳＫ１３３３１

11～13区のほぼ中央のT-42区画に位置する。規模は長軸1.15ｍ、短軸0.97ｍ、深さ0.56ｍになる南北に長い不整三角形の土坑である。北側はSK13032と重なり、西側はSX13029に切られ、南側では撹乱によって正確な掘り始めの高さは確認できなかった。遺構内西側には深さが最大0.56ｍに達する楕円形の小穴が確認された。本遺構の周辺には、北と東に周溝墓があり、西には溝状遺構

SD13085 が存在する。遺物は土器片が坑底から浮いた状態で 23 点、小穴から 2 点出土している。断面は SK13032 と撹乱によって正確にはわからないが、逆台形に近いものと思われる。また、坑底は小穴を除いてほぼ水平にされている。

ＳＫ１３３５１

11 ～ 13 区のほぼ中心の U-42 区画に位置する。規模は長軸 2.17 m、短軸 1.50 m、深さ 0.58 mになる東西に長い不整楕円形の土坑である。本遺構を中心として、いくつかの遺構が団子状に寄り集まっている。そのうち、北側を SJ13082 に、東側を SK13352 によって大きく切られ、南側に接している SK13170 土壙墓と、西側に接している SK13353 土壙墓を切っている。南西側には後に掘られた跡が見られた。遺物は碧玉製管玉が 1 点遺構中央部から出土している。断面は、東側が SK13352 に途中で切られているが、皿型に近い断面と見ることができる。他に、西側は壁に向かってやや坂になっている部分が東側より 0.2 mほど長い。

ＳＫ１３３５８

11 ～ 13 区のやや南西側の V-45 区画に位置する。規模は長軸 1.75 m、短軸 1.52 m、深さ 0.43 m になる東西に長い不整円形とみられる土坑である。周辺は撹乱されている場所が多く、本遺構も撹乱によって南側が大きく切られ、さらに北側も撹乱によって一部が切られているため正確な形は分からない。東側には後に小穴を掘ったと思われる跡が見られた。遺構周辺には南側にはＣ群の甕棺墓群がある。遺物は土器片が 11 点出土しており、そのうち 10 点が坑底の中心部上から出土である。坑底は南北に長い楕円形の形をしている。断面は逆台形だが、西側は東に 1.00 mほどをかけて、なだらかに掘られている。

ＳＫ１３３７８

11 ～ 13 区のほぼ真ん中の T-41 区画に位置する。規模は長軸 0.67 m、短軸 0.56 m、深さ 0.39 m になる不整楕円形の土坑である。墓道と考えられる付近に位置するが、年代については不明である。近くにある遺構は、西側に SJ13110、SJ13118 があり、南には SJ11271、SJ11274 が存在する。東側には古墳時代の古墳が作られている。また北側を撹乱によって大きく切られているため遺構の正確な形は分からない。遺物は碧玉製管玉が 1 点出土している。

ＳＫ１３３８７

11 ～ 13 区の西側の V-45 区画に位置する。規模は長軸 1.08 m、短軸 0.50 m、深さ 0.64 mになる不整円形と思われる土坑である。本遺跡の周辺は甕棺墓が密集している地域であり、Ｃ群の中に存在する。その中で本遺構は、北側に接している SJ13297 を、南に接している SJ13206 切って、東側に接している SJ13204 に切られている。また、SJ13321 の真上に本遺構が作られている。その他に、南側を撹乱によって切られている。遺物は碧玉製管玉が坑底より浮いた状態で 4 点出土している。

ＳＫ１３３９９

11 ～ 13 区西側拡張部の U-50 区画に位置する。規模は長軸 2.25 m、短軸 0.95 m、深さは確認できる範囲で 0.15 m程になる東西に長い不整楕円形の土坑である。方形周溝墓の ST13398 の内部に存在する。周辺は撹乱が多数存在し、本遺構も北側を撹乱によって大きく切られている。そのため遺構の形は推定となる。遺構内の南側に掘り込みがあり、坑底の深さは最大 0.35 mあり、さらに南側に円形の小穴が掘られている。小穴の最大の深さは掘り込みの坑底からさらに 0.09 mほど掘られている。遺物は碧玉製管玉が西側より 1 点出土している。ST13398 の主体部になる可能性が高い。

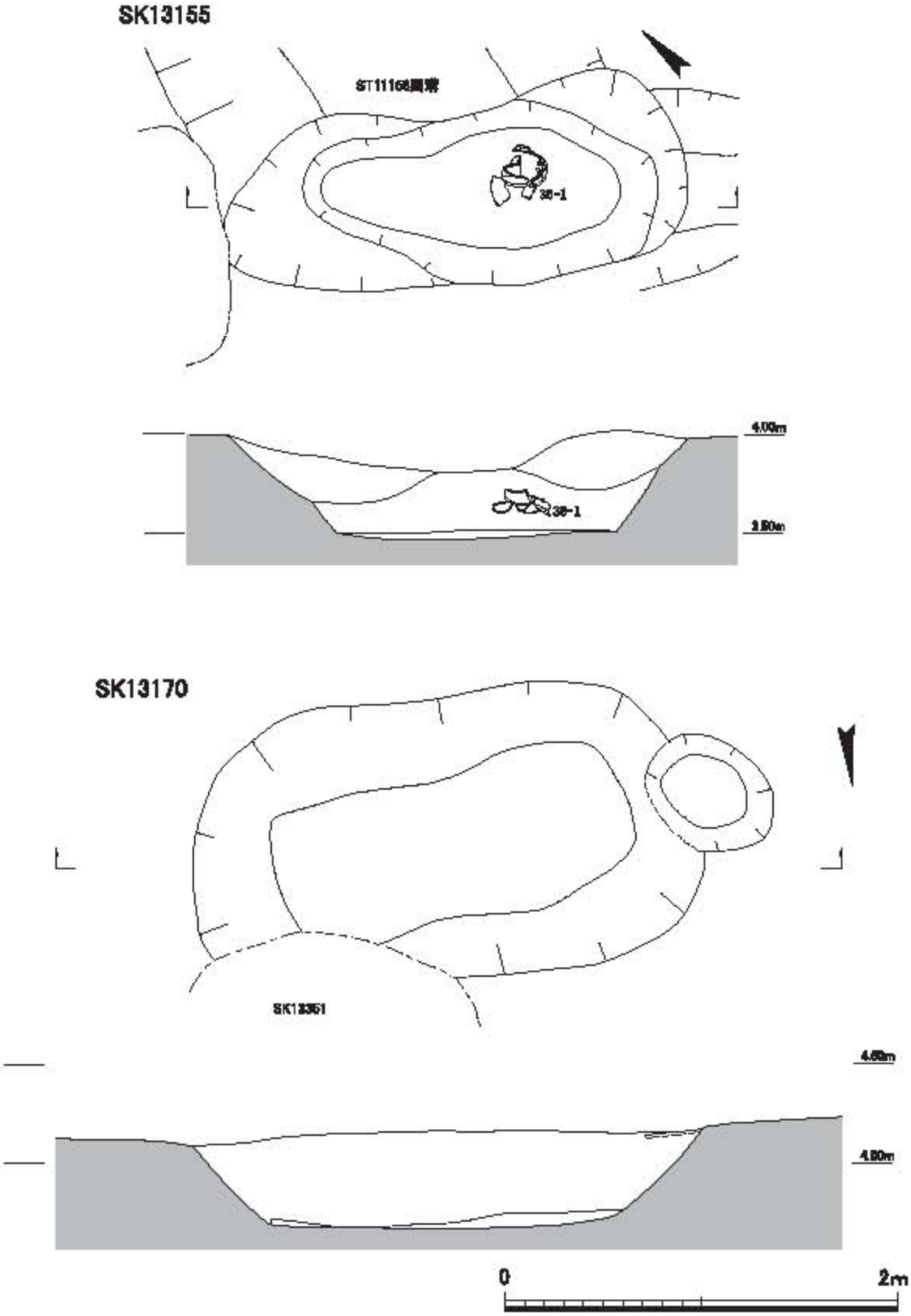


図 17　ＳＫ 13155・13170 土壙墓（1/30）

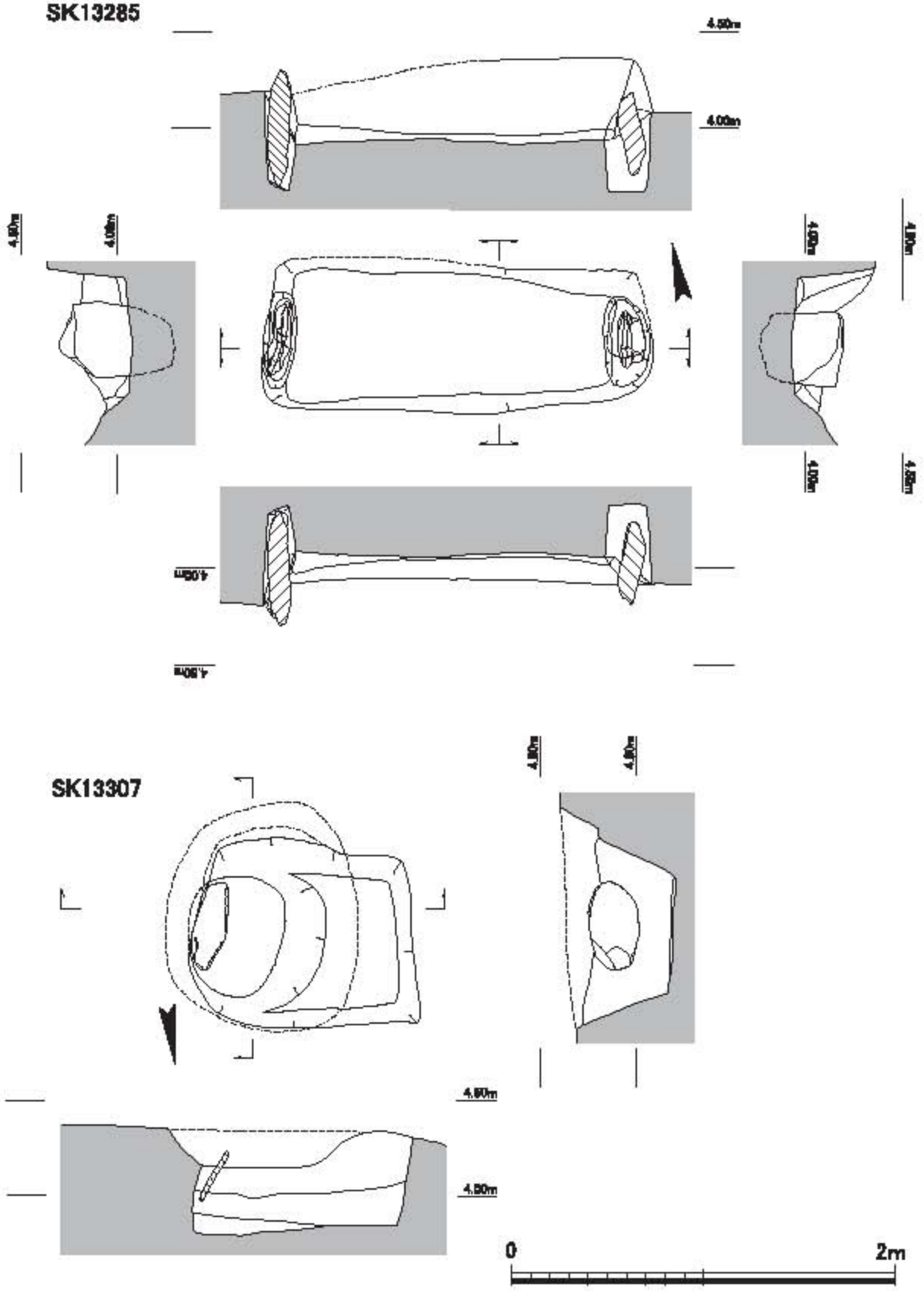


図 16　S K 13285・13307 土壙墓（1/30）

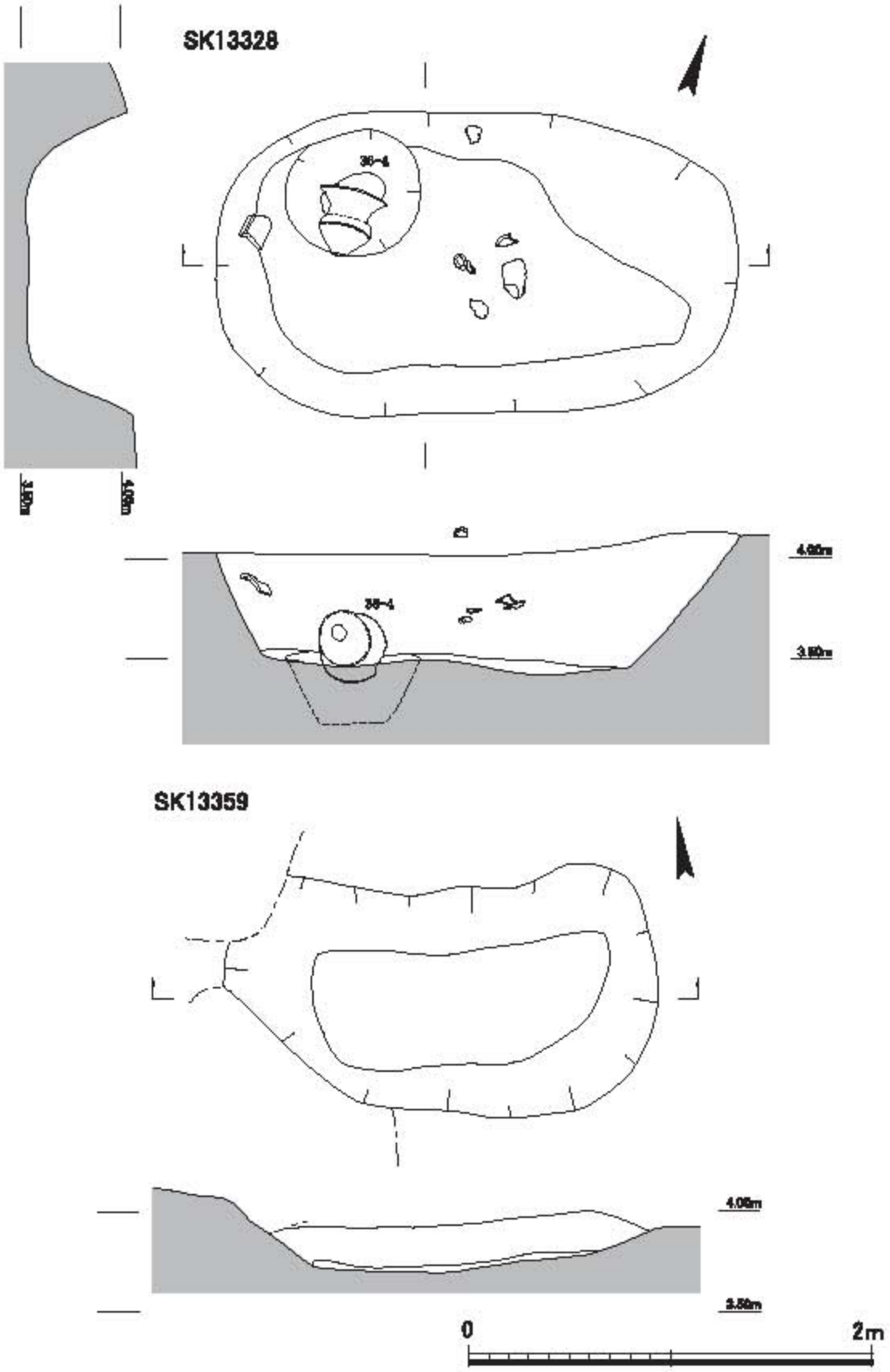


図 19　ＳＫ 13328・13359 土壙墓（1/30）

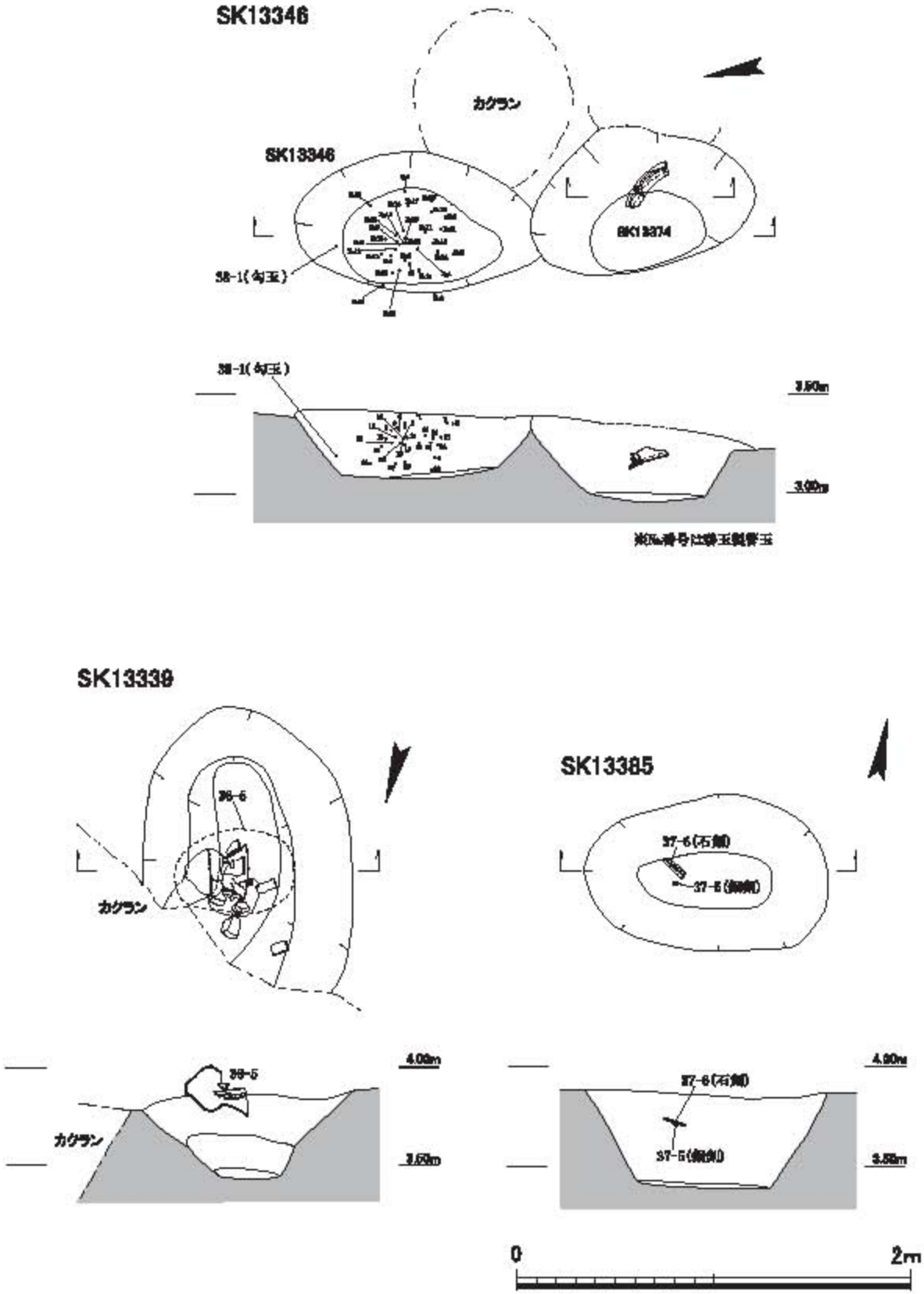


図 20　ＳＫ 13339・13346・13385 土壙墓（1/30）

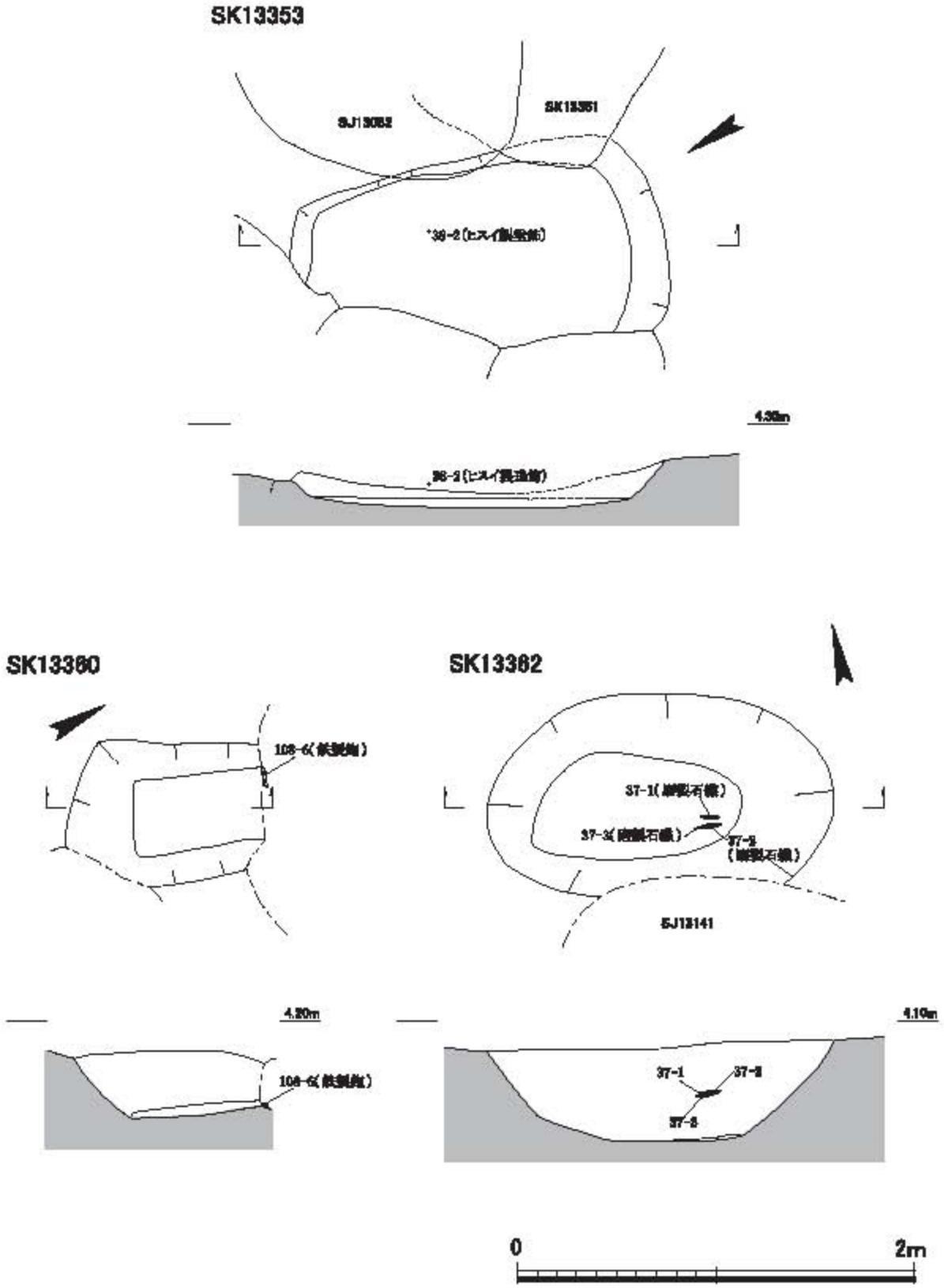


図21　ＳＫ13353・13360・13362土壙墓（1/30）

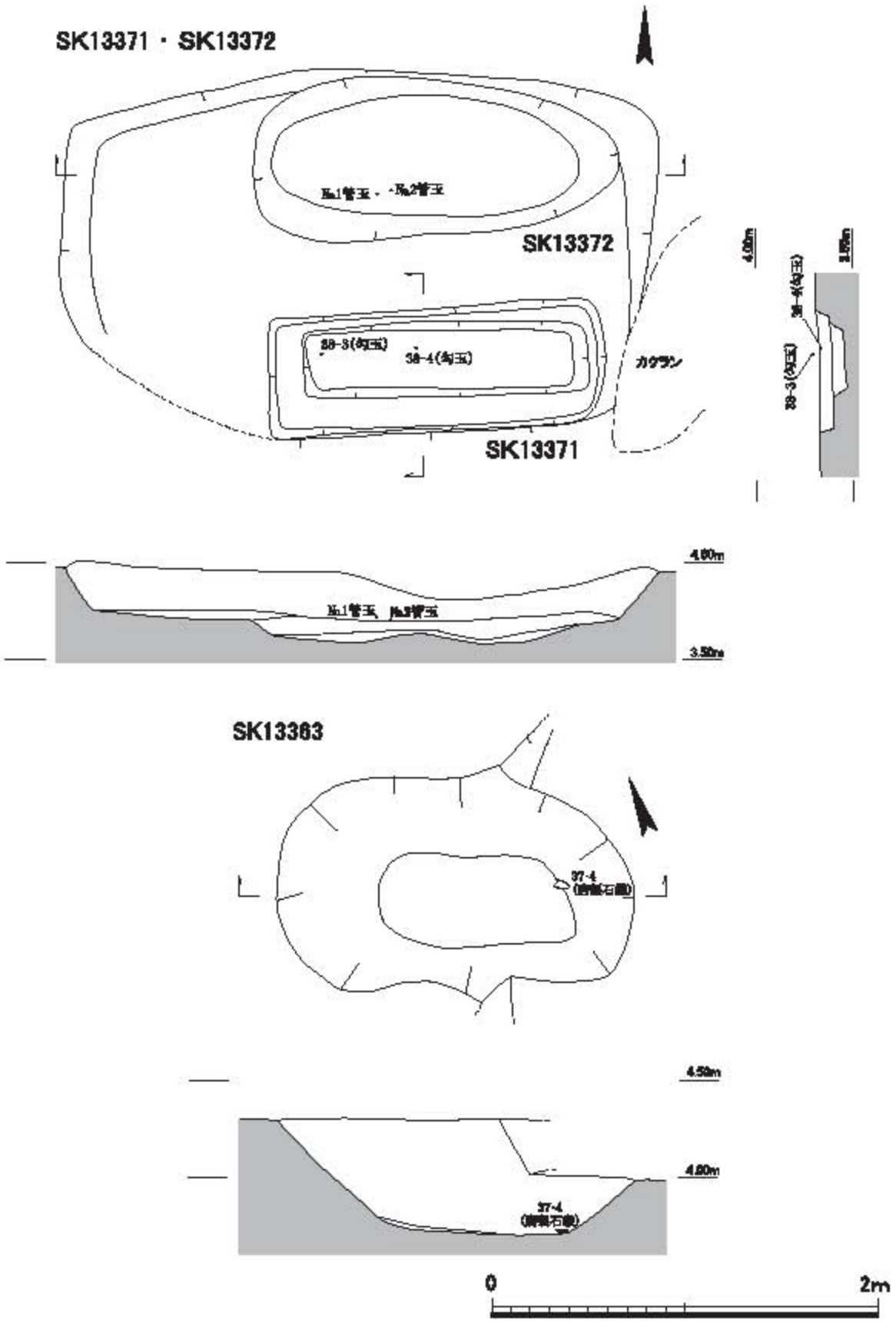


図22　ＳＫ13363・13371・13372土壙墓（1/30）

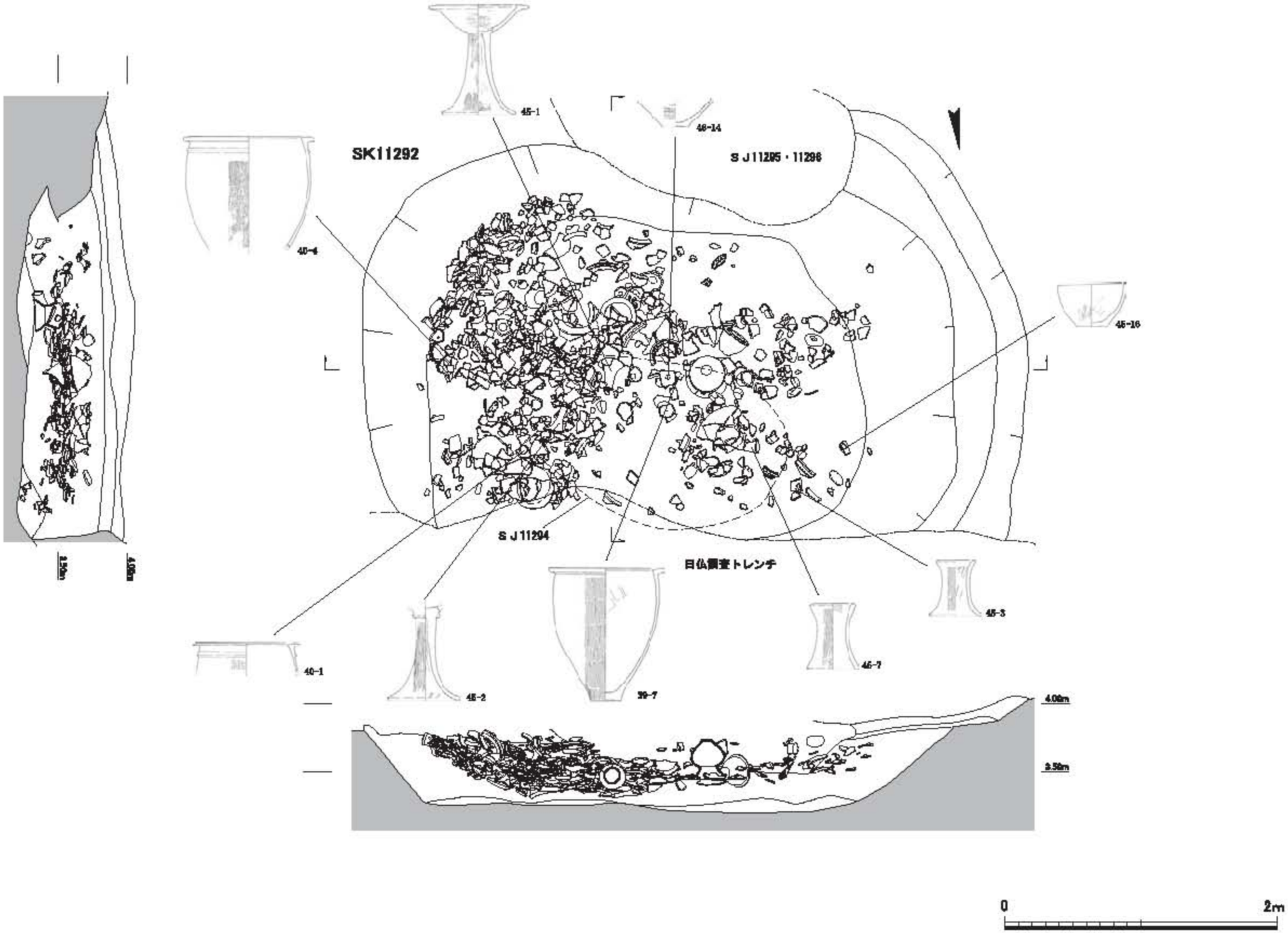


図23　ＳＫ 11292 土坑（1/30）

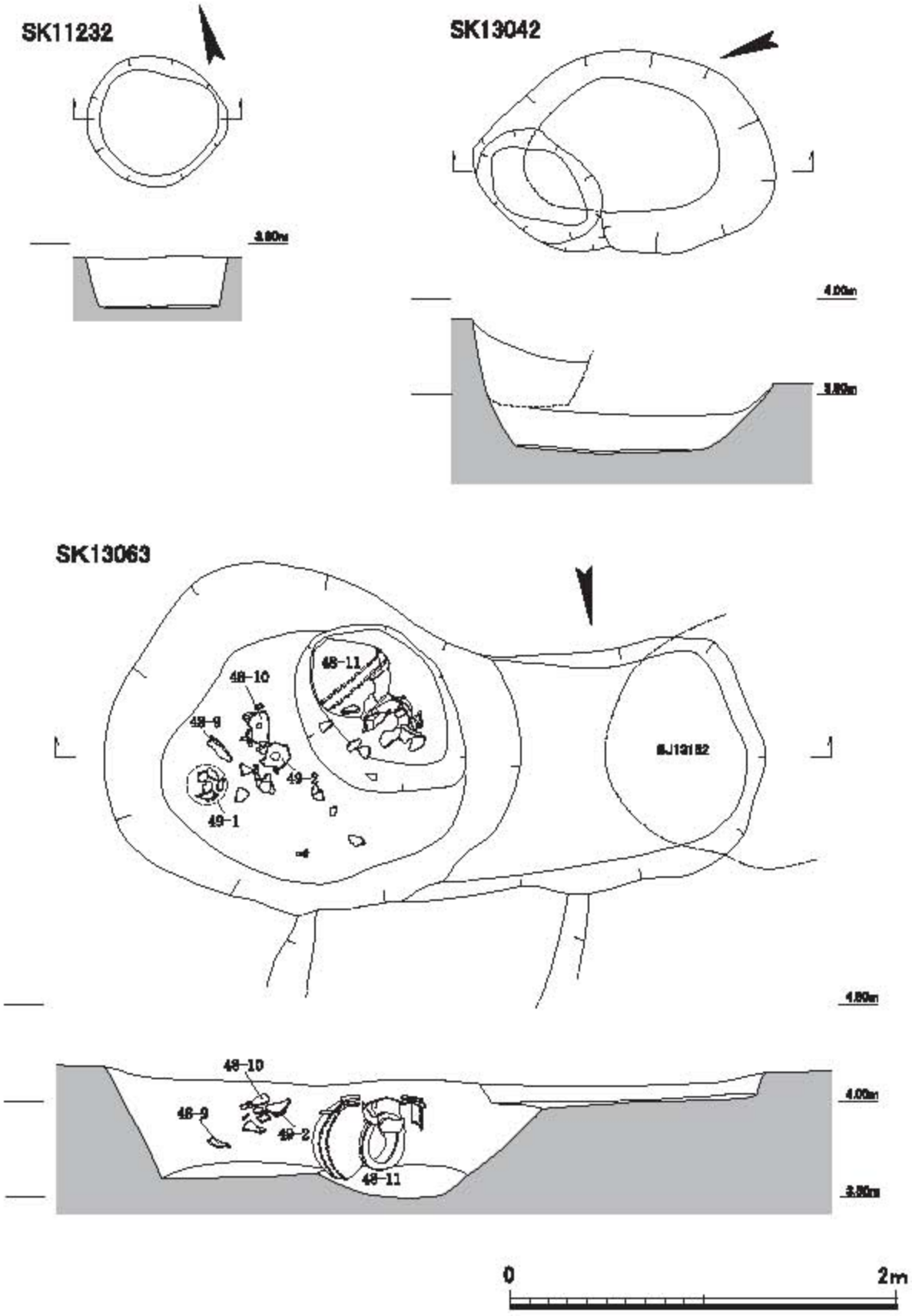


図 24　SK11232・13042・13063 土坑（1/30）

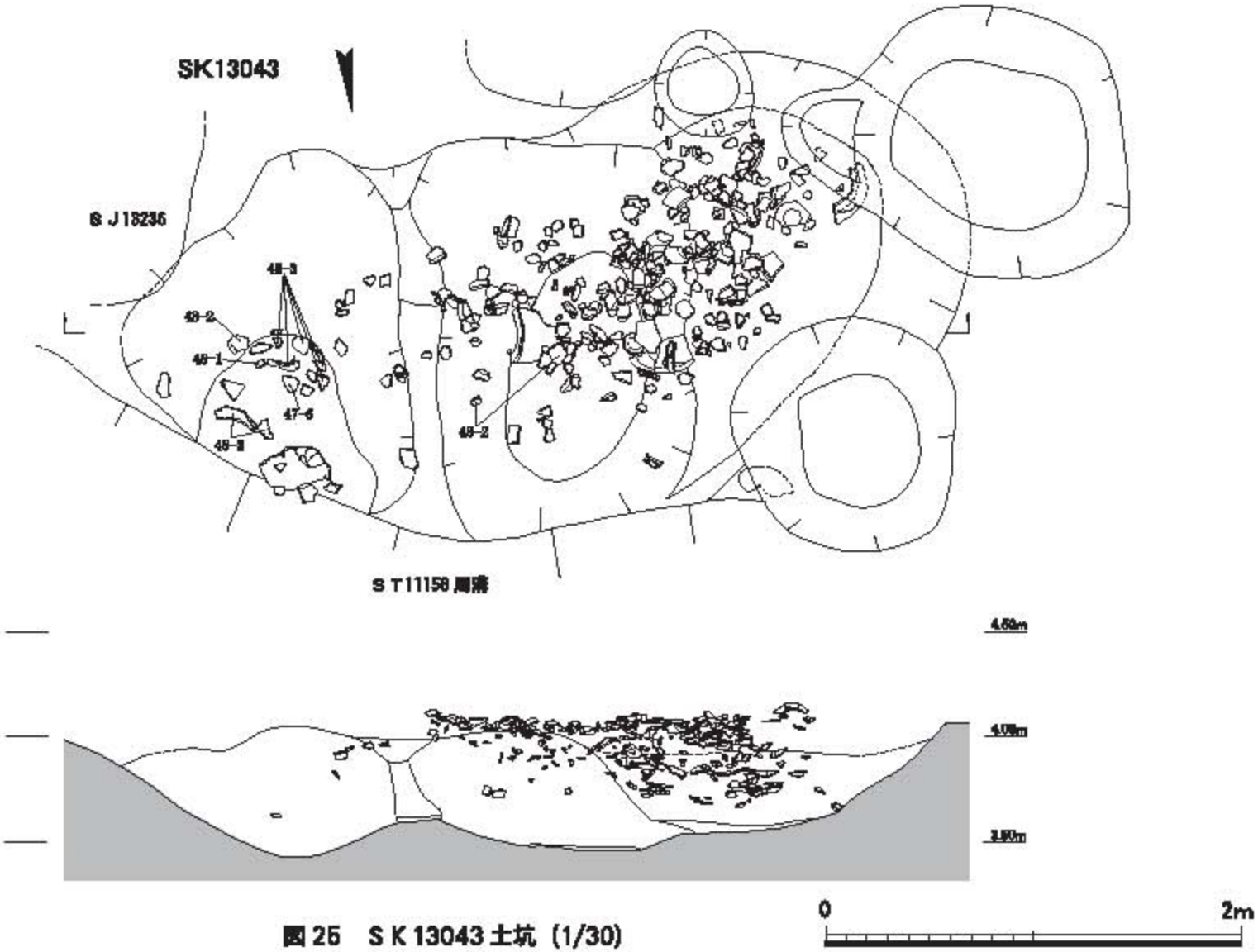


図25　SK13043土坑（1/30）

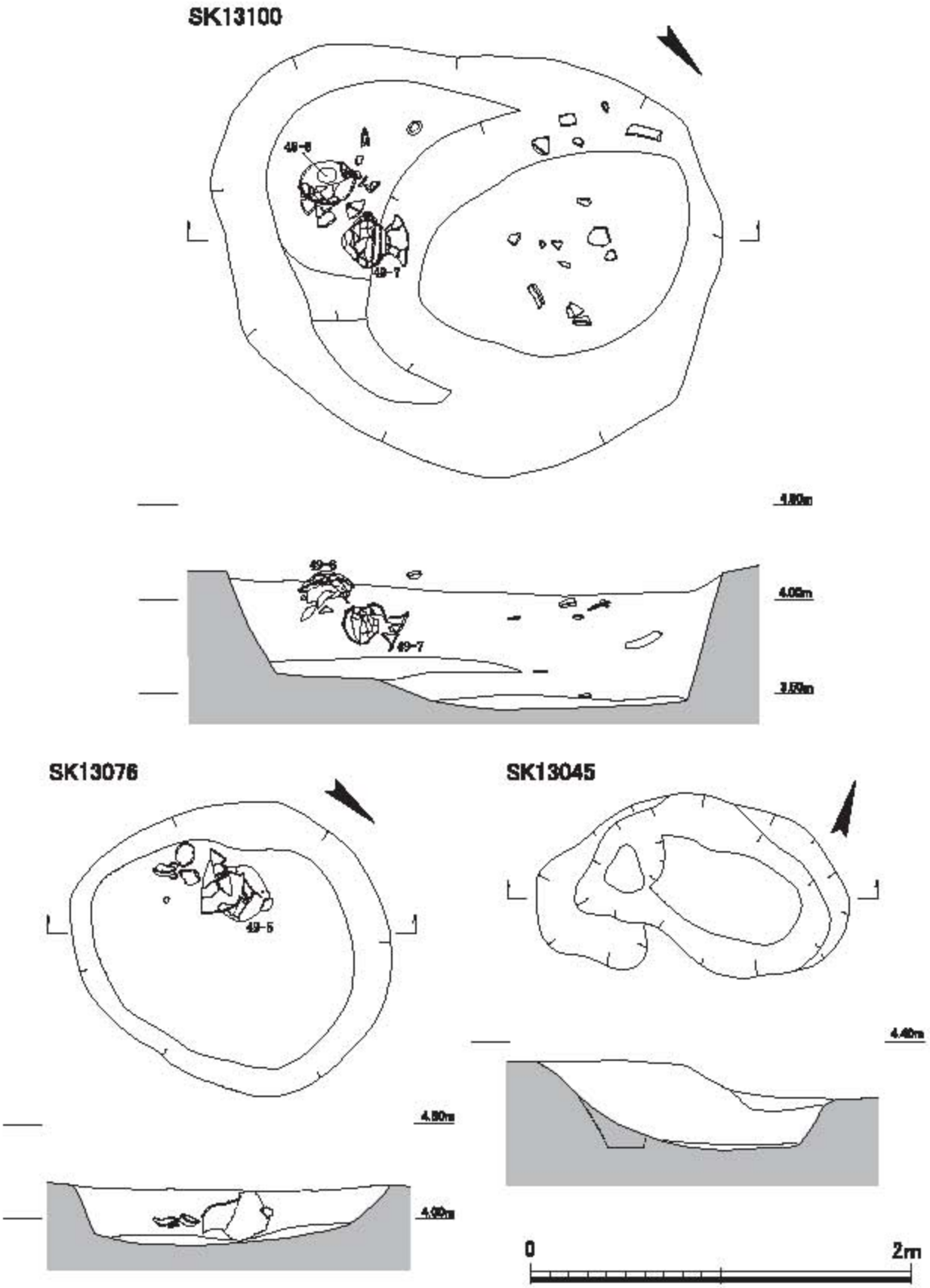


図26　SK13045・13076・13100土坑（1/30）

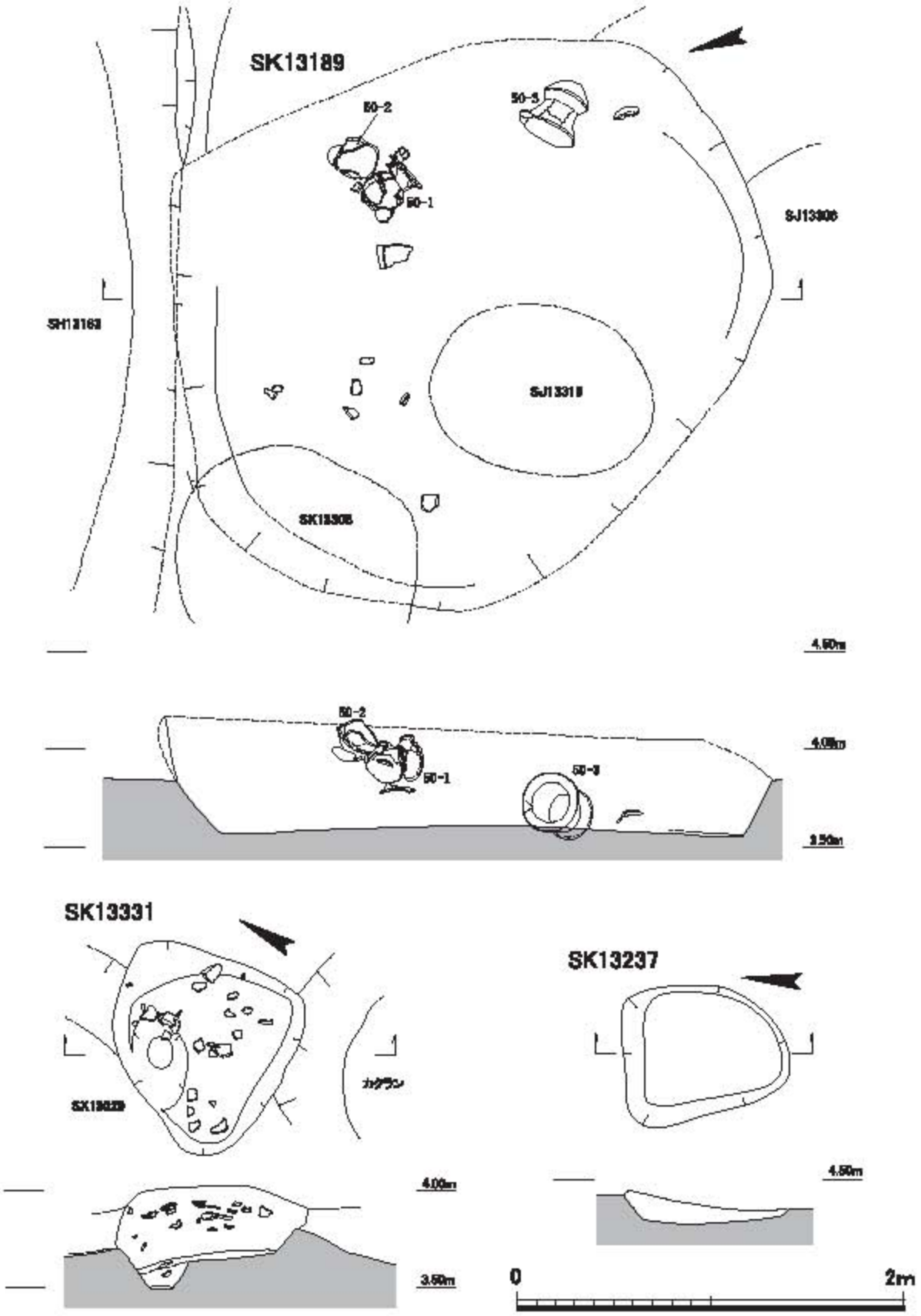


図 27　S K 13189・13237・13331 土坑（1/30）

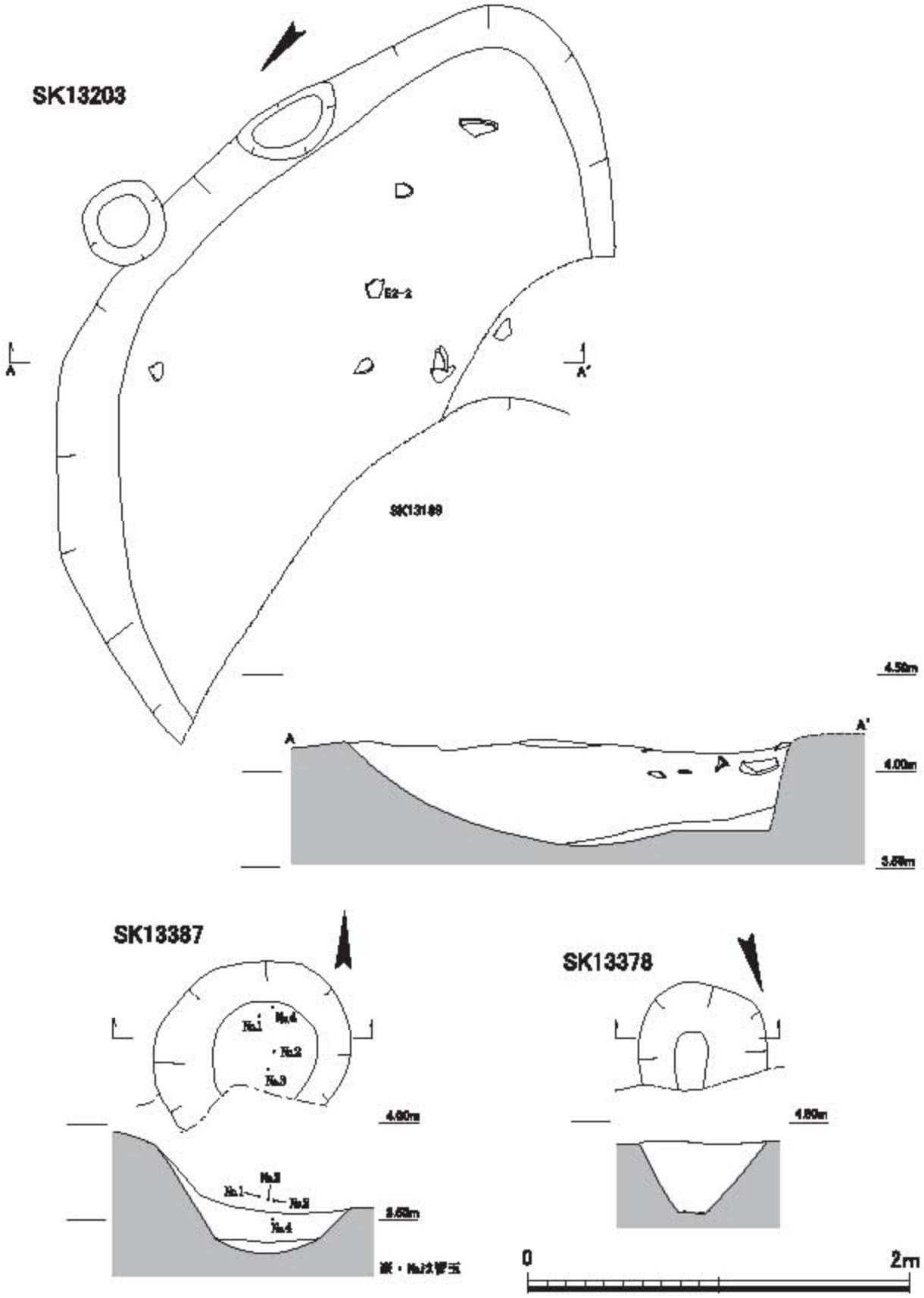


図28　SK13203・13378・13387土坑（1/30）

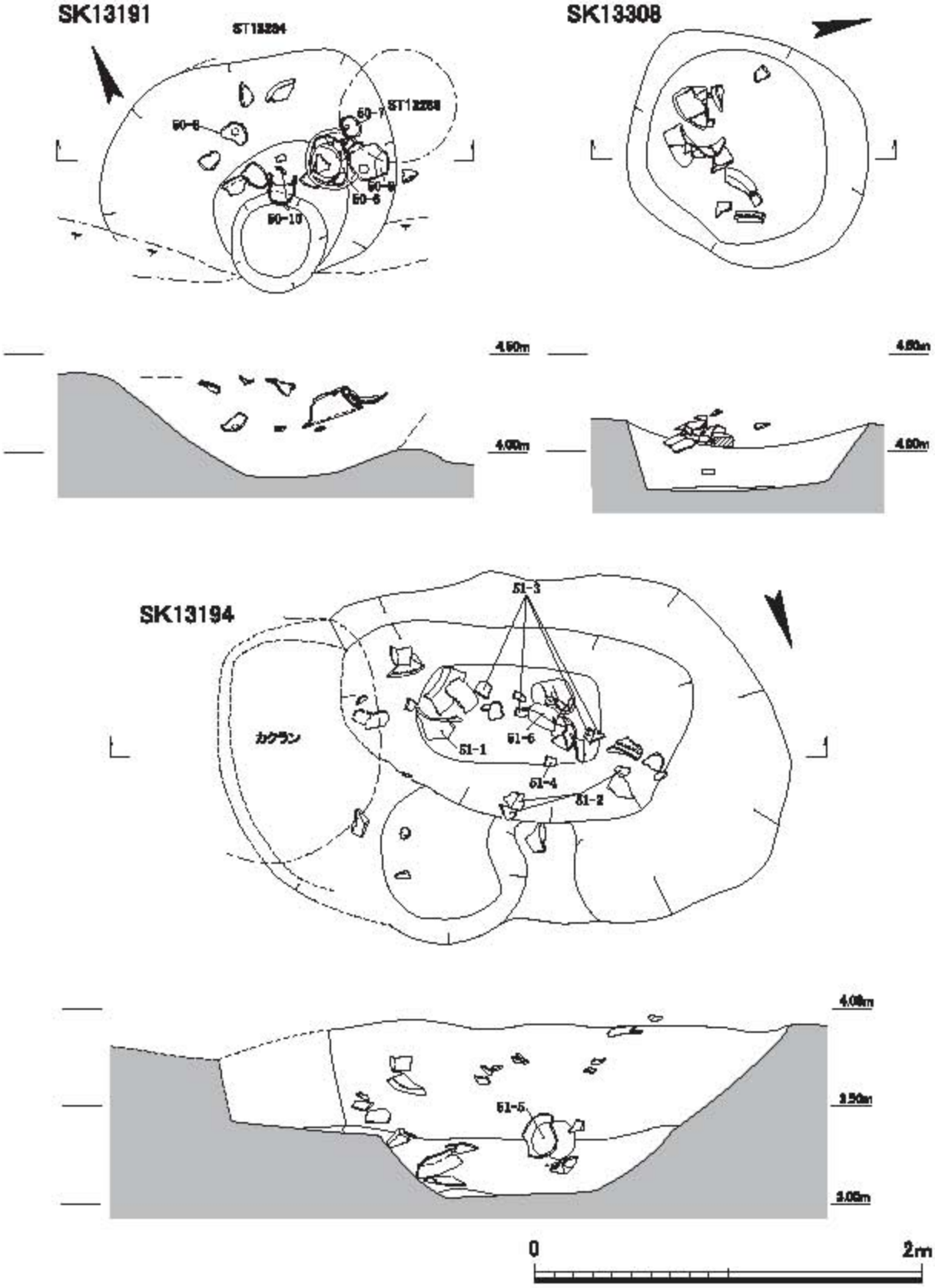


図29　ＳＫ13191・13194・13308土坑（1/30）

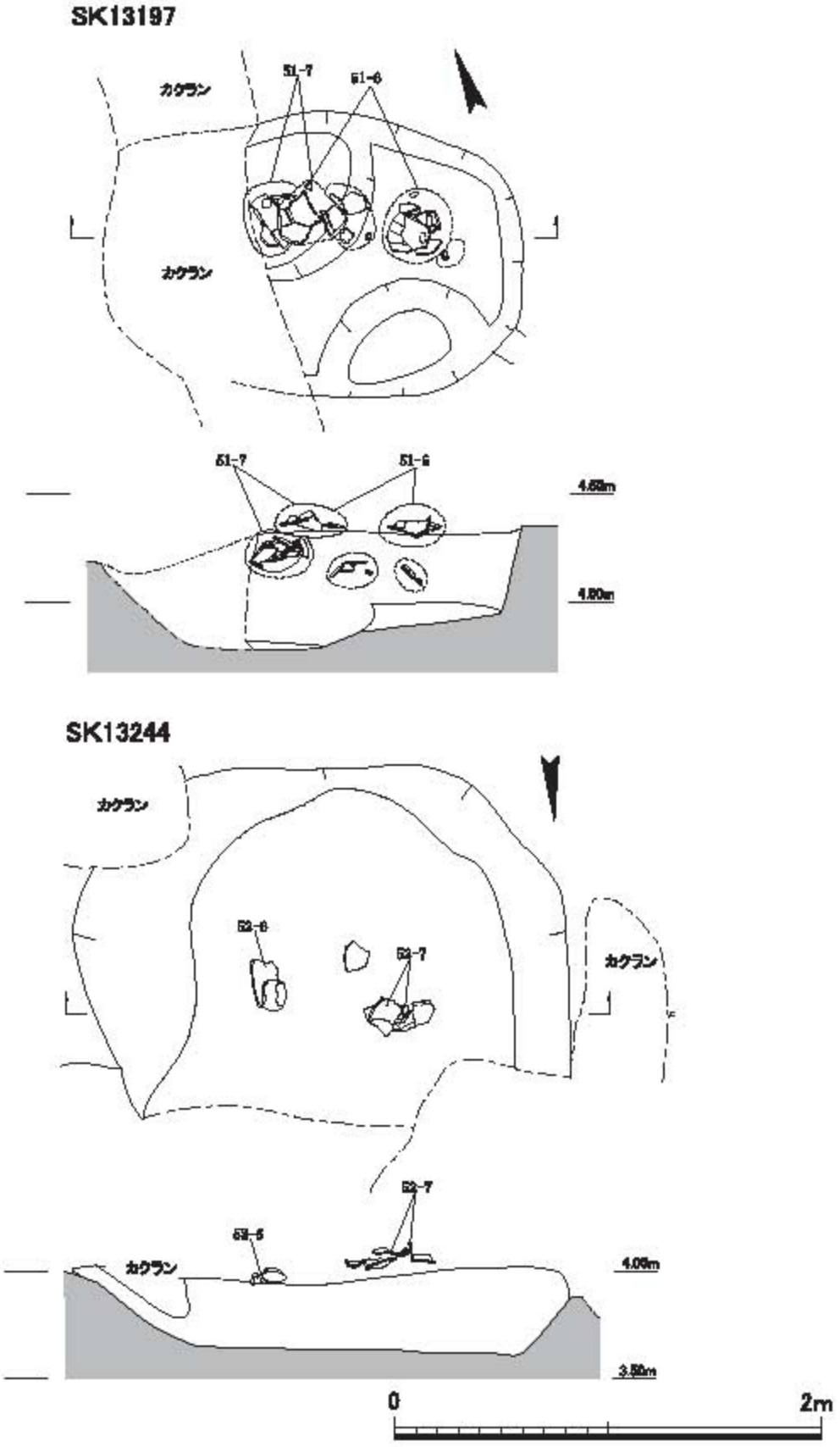


図30　ＳＫ13197・13244土坑（1/30）

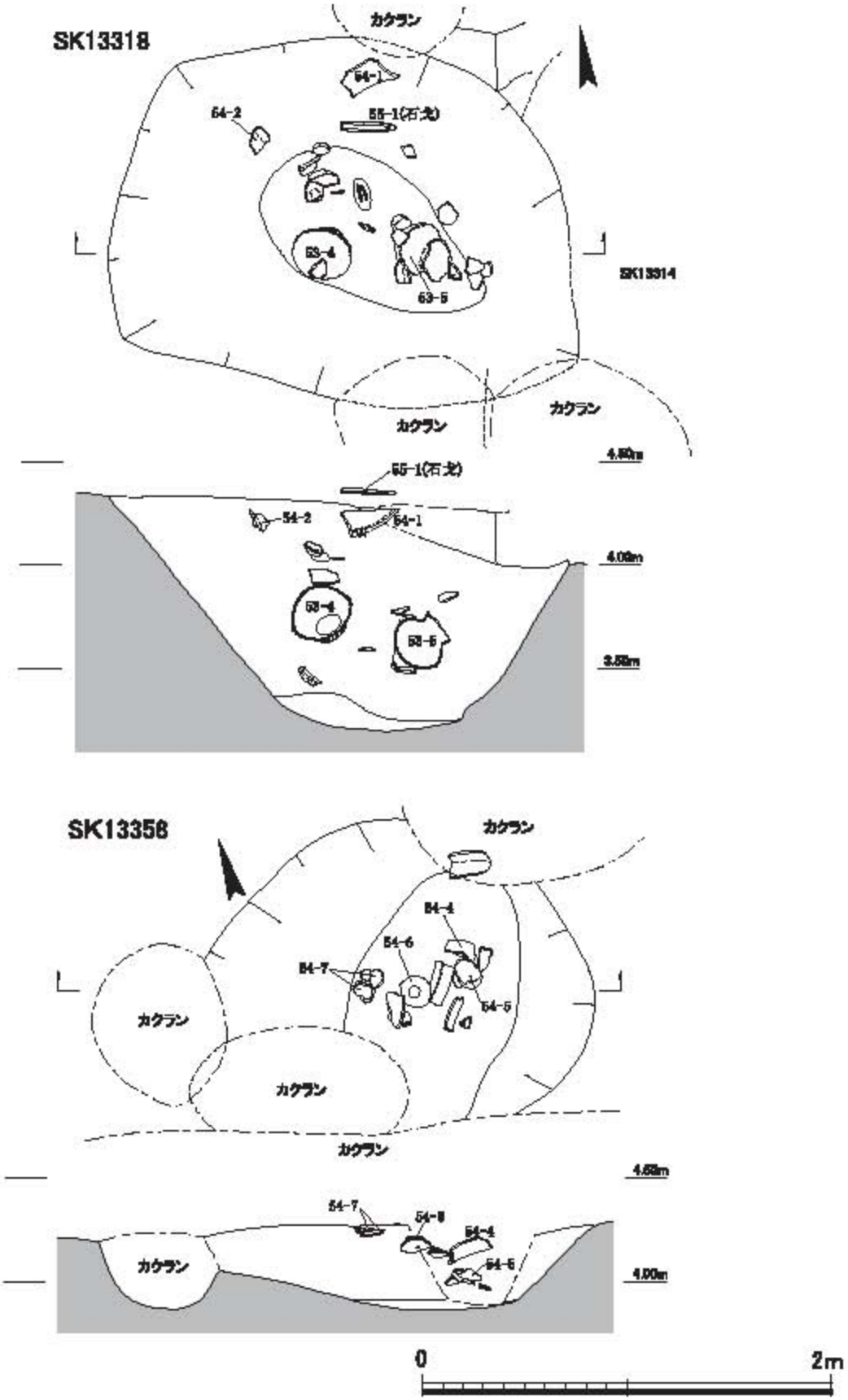


図31　ＳＫ13318・13358土坑（1/30）

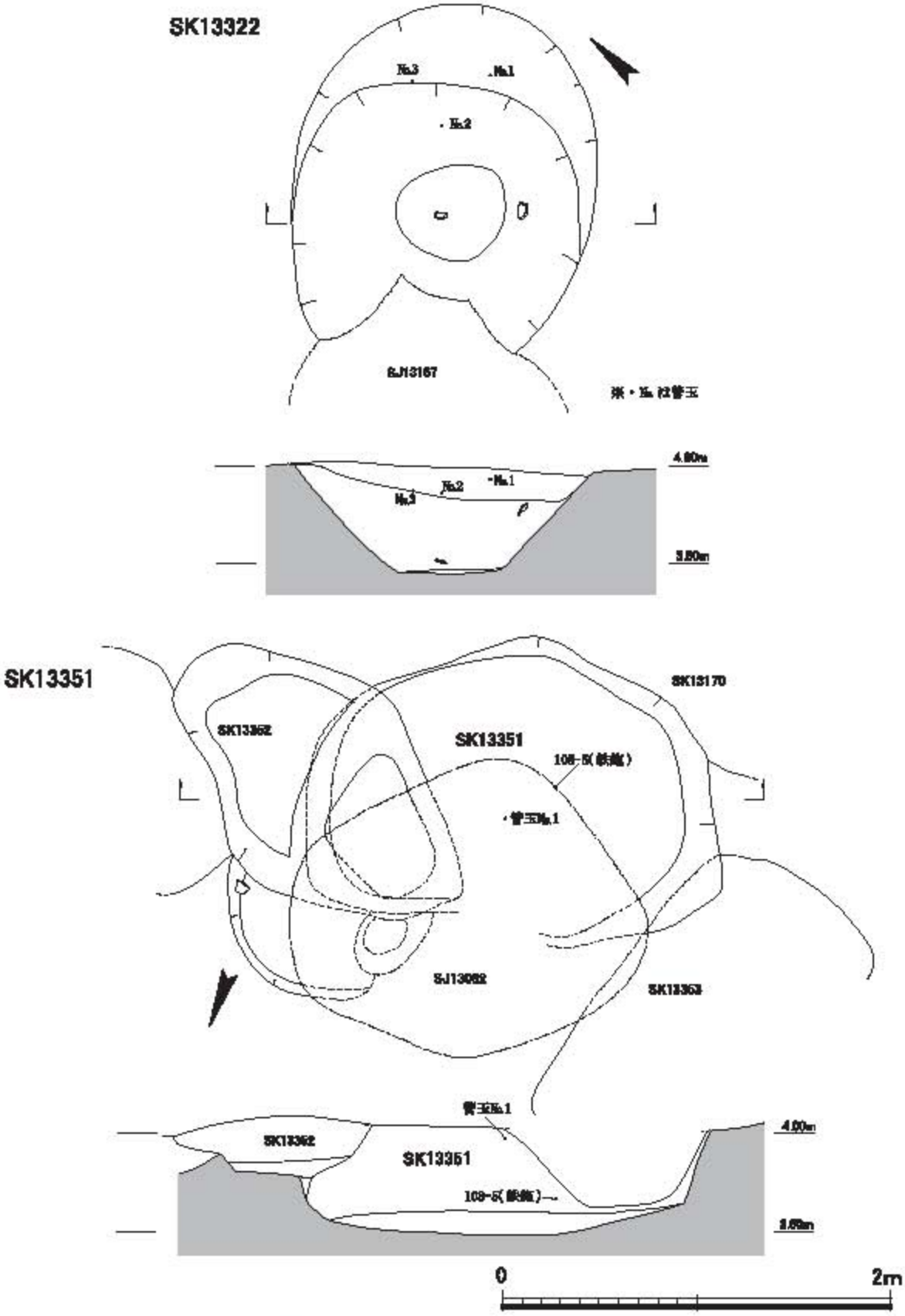


図32　ＳＫ13322・13351土坑（1/30）

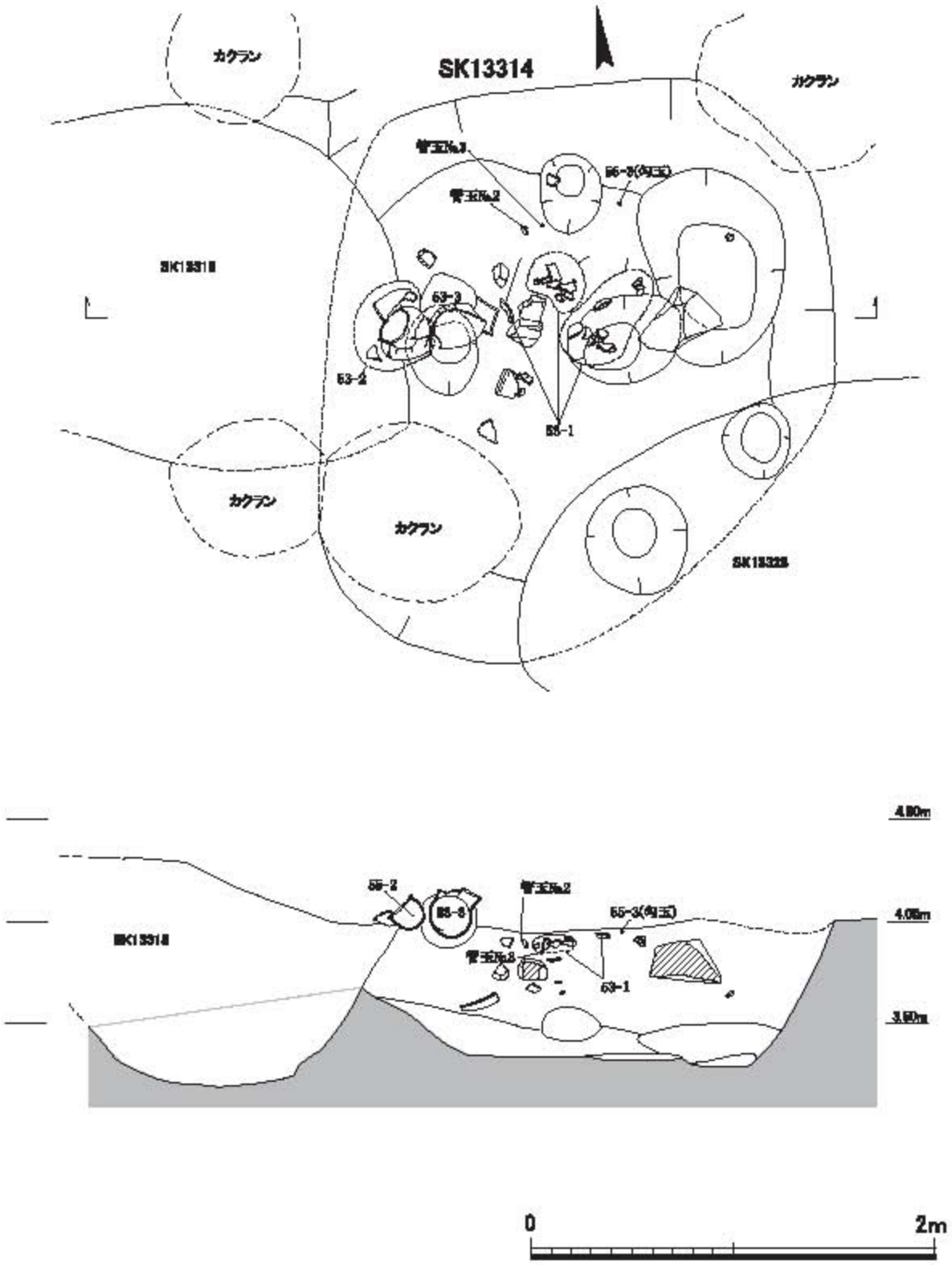


図 33 ＳＫ 13314 土坑（1/30）

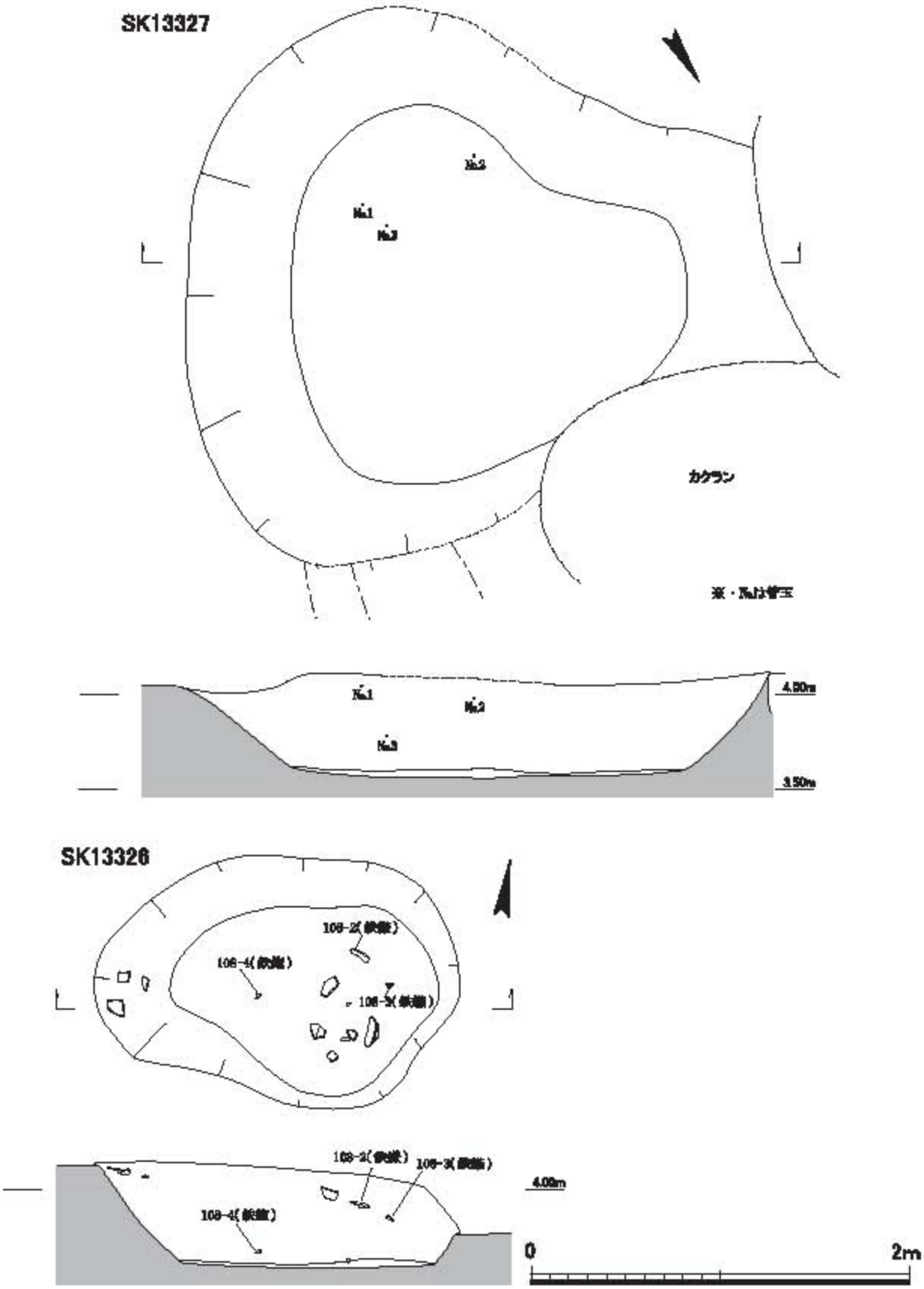


図 34　ＳＫ 13326・13327 土坑（1/30）

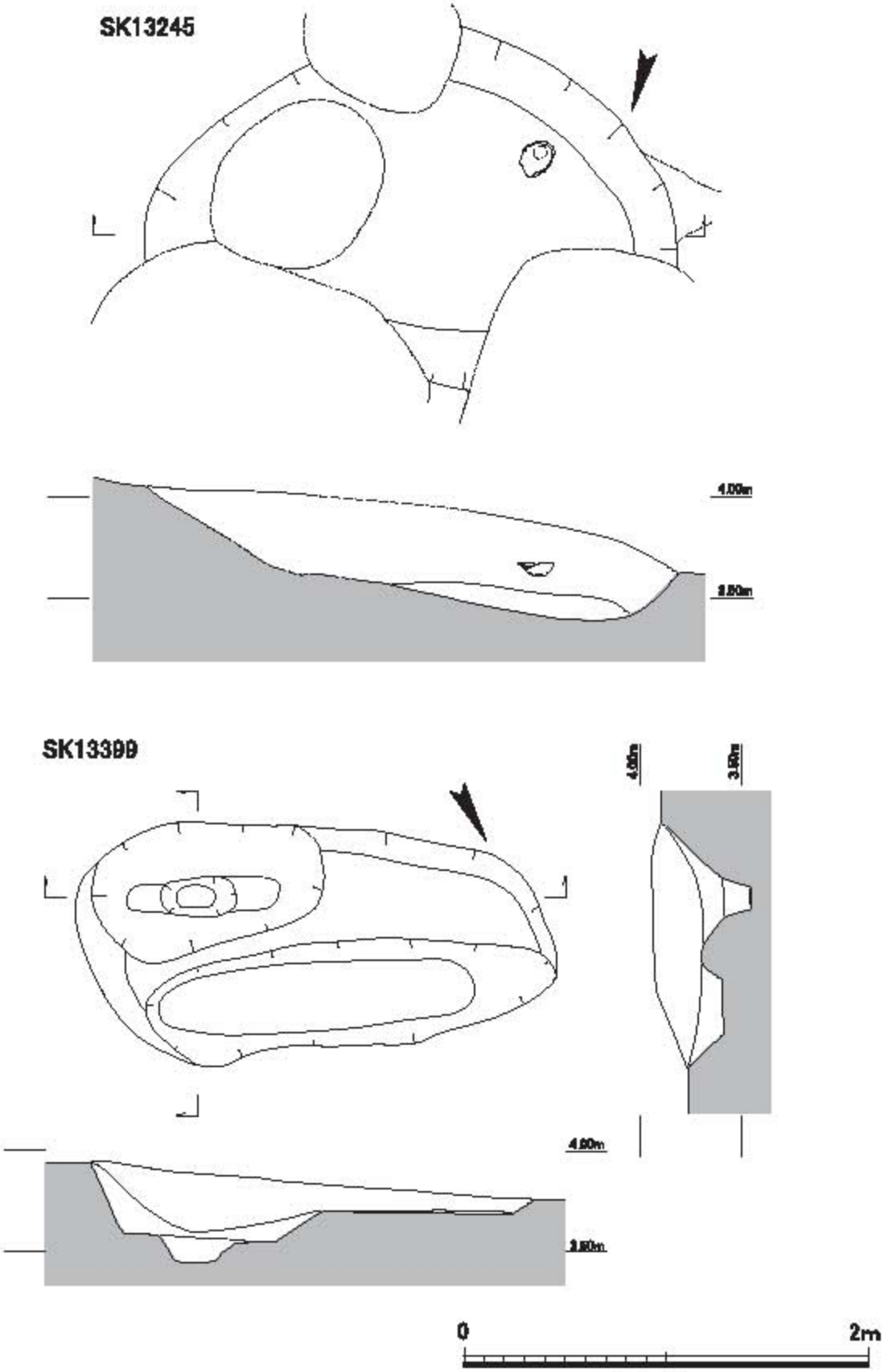


図 35　S K 13245・13399 土坑（1/30）

3，遺物

（1）土壙墓

①土器

ＳＫ１３１５５　（図 36-1 ～ 3）

図 36-1 ～ 3 は鋤先口縁壺である。1 と 2 は口縁部上端を水平に外側へやや伸び、端部をコの字に調整され、内側への突出も少し見られる。さらに 2 は暗文をもっている。1 の色調はやや橙色で 2 は橙色、ともに内側をナデ、外側をヨコナデで調整している。3 は、口縁部のみだが口縁部上端を水平に、端部をコの字に調整、内側に断面三角形の突出をもち色調は橙色で、ほとんどをヨコナデで調整している。焼成は 1 ～ 3 どれも良好である。

ＳＫ１３３２８　（図 36-4）

図 36-4 は素口縁広口壺である。口縁部が頸部つなぎ目から真っ直ぐ立ち上がって伸び大きく開くように外反している。端部をヨコナデによるコの字に調整をしており、胴部最大径にあたる部分には断面 M 字突帯を一条もっている。頸部外側に暗文を施され、胴部外側と内側頸部をミガキ、内側胴部をナデで調整し、外面と内側頸部まで丹塗りされている。底部の厚さは薄く、弥生時代の中でも比較的に新しい壺にあたる。

ＳＫ１３３３９　（図 36-5）

図 36-5 は素口縁広口壺である。口縁部が頸部つなぎ目から外反して大きく開いているが、図 36-4 の壺よりは口縁部の広がりは小さい。端部に丸みを帯びた調整をうけ、胴部には断面三角形の突帯を一条もっている。頸部外側に暗文が施され、胴部内側をナデ調整されている。底部の厚さは比較的厚く上げ底を施されている壺である。

②石器、青銅器

ＳＫ１３３６２　（図 37-1 ～ 3）

図 37-1 ～ 3 は磨製石鏃である。1 と 2 は風化による影響が激しく見られるが、図 37-1 は完形の有茎磨製石鏃で、図 37-2 は無茎磨製石鏃、図 37-3 は風化による影響も少なく、先端が欠損している有茎磨製石鏃である。

図 37-1、3 は吉武高木遺跡 K125 甕棺墓（『吉武遺跡群Ⅷ』1996 福岡市教育委員会）出土例に類似する。同甕棺は甕ＡⅢ 2 であり、中原編年Ⅱ -1（古段階）期にあたる。

ＳＫ１３３６３　（図 37-4）

図 37-4 は磨製の無茎石鏃で、先端が欠損している。黒色の石材を使用している。

ＳＫ１３３８５　（図 37-5、6）

図 37-5 は青銅製切先で、先端の一部が残存している。図 37-6 は磨製の石剣切先で、基部が欠損している。5 と 6 は共に鍔をもっていた。

③石製玉類

ＳＫ１３３４６　（図 38-1）

図 38-1 は硬玉製の極小形勾玉で、体部を歪なくの字に曲げている。硬玉自体は深い緑色をしていて、間に白濁になっている部分がある。穿孔方向は両面からの穿孔になっている。他には碧玉製の管玉が 30 点出土している。

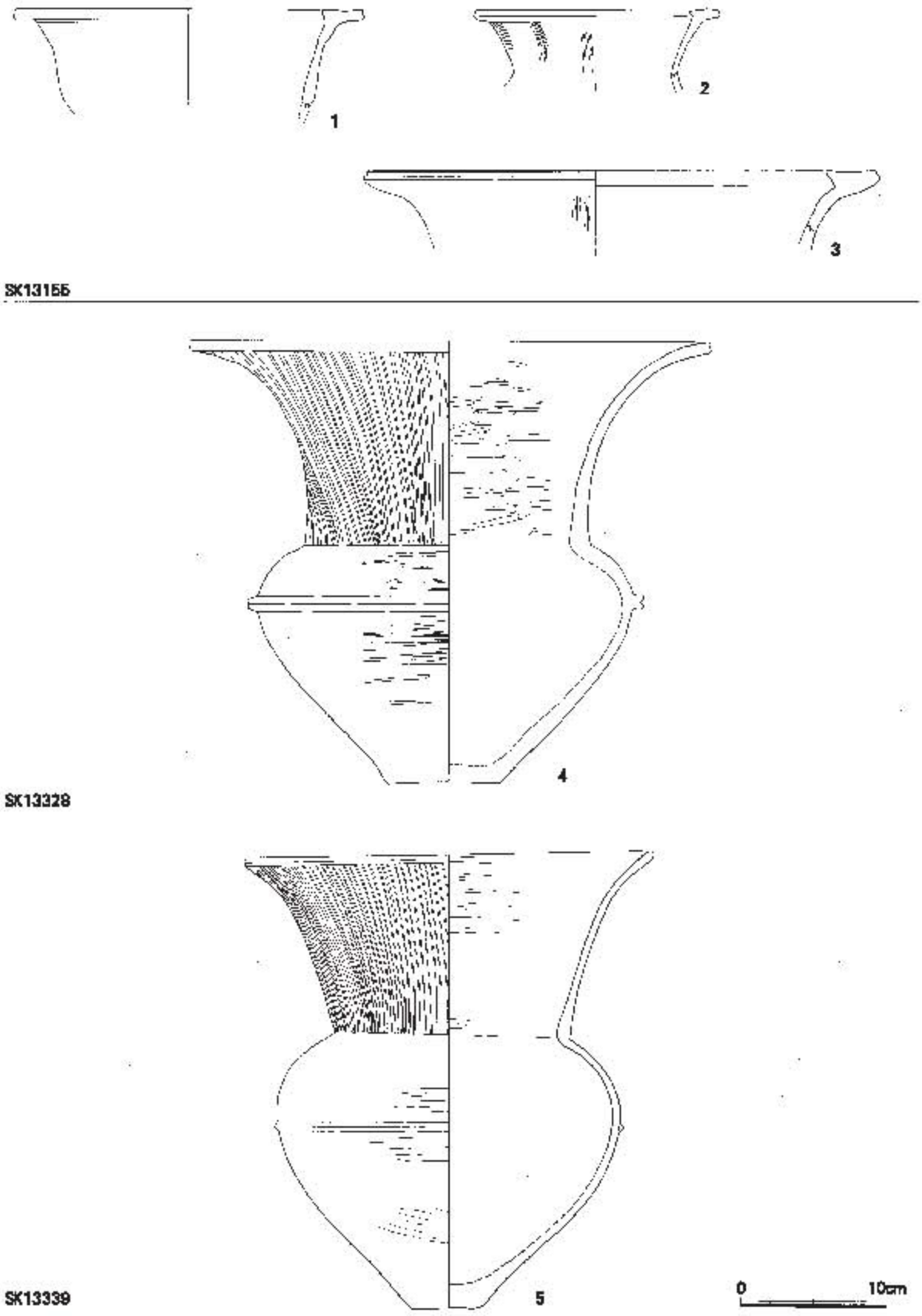


図 36　土壙墓出土土器（1/4）

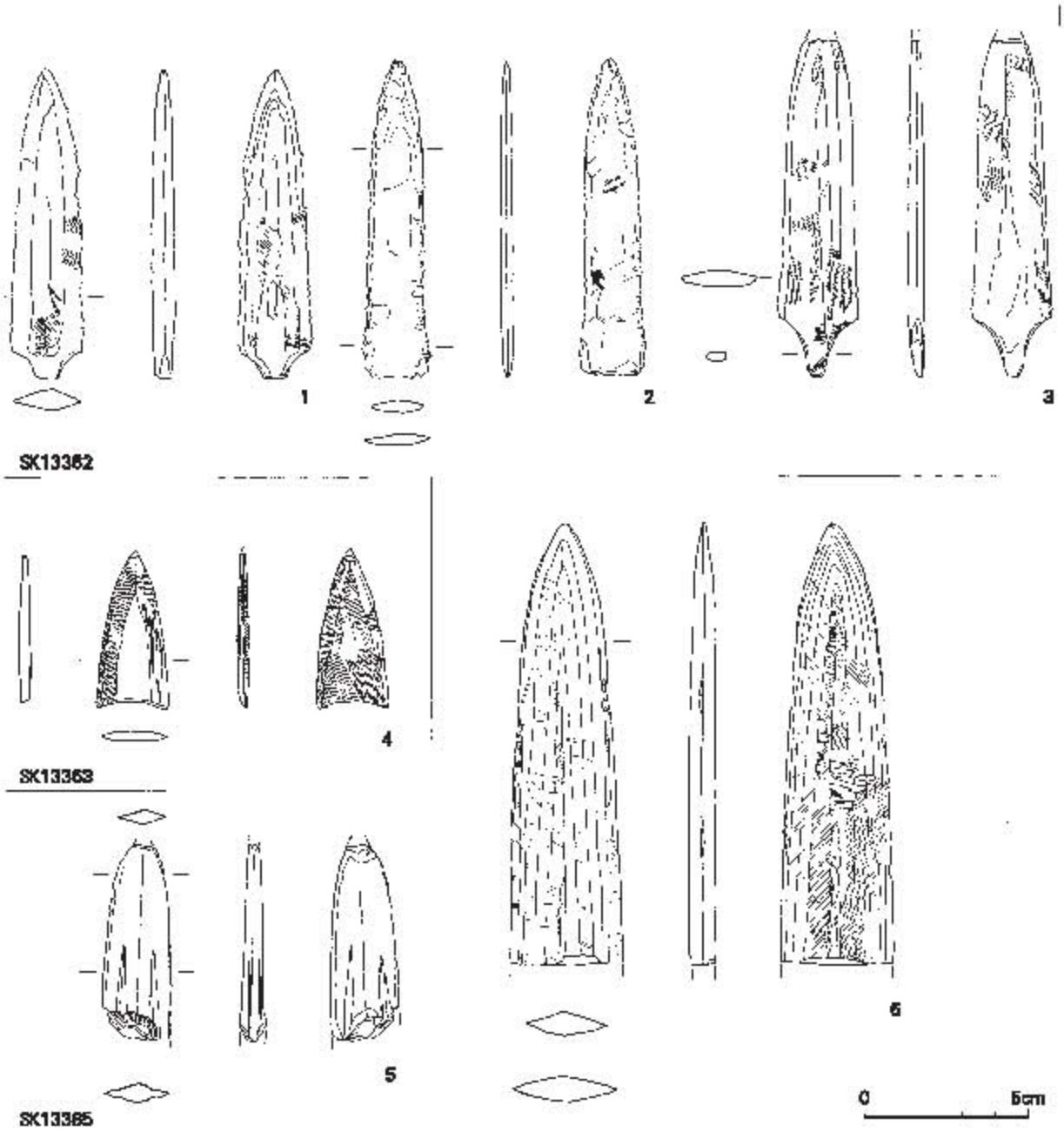


図 37　土壙墓出土石器・青銅器（1/2）

ＳＫ１３３５３　（図38-2）

図38-2は硬玉製の垂飾で、小さな長方形に穿孔がある。色調は深い緑色の中にも透き通った緑色があり、白濁部もある。穿孔方向は片面からの穿孔になっている。他に碧玉製の管玉が１点出土している。

ＳＫ１３３７１　（図38-3、4）

図38-3は硬玉製の半玦状勾玉で、体部をＵ字ないし、くの字に曲げている。穿孔のある頭部を方柱状に、尾部に向かって細くなる調整を施している。色調はそのほとんどを白色と混ざり合ったような淡い緑色になっており、間に透明感のある緑色も見られる。

図38-4は硬玉製の櫛形勾玉で、腹部に３箇所の刻りこみを施す。色調は全体的に白色が混濁し、淡い緑色ないし濁った緑色をしている。

図38-3と４は共に穿孔方向は両面からの穿孔である。

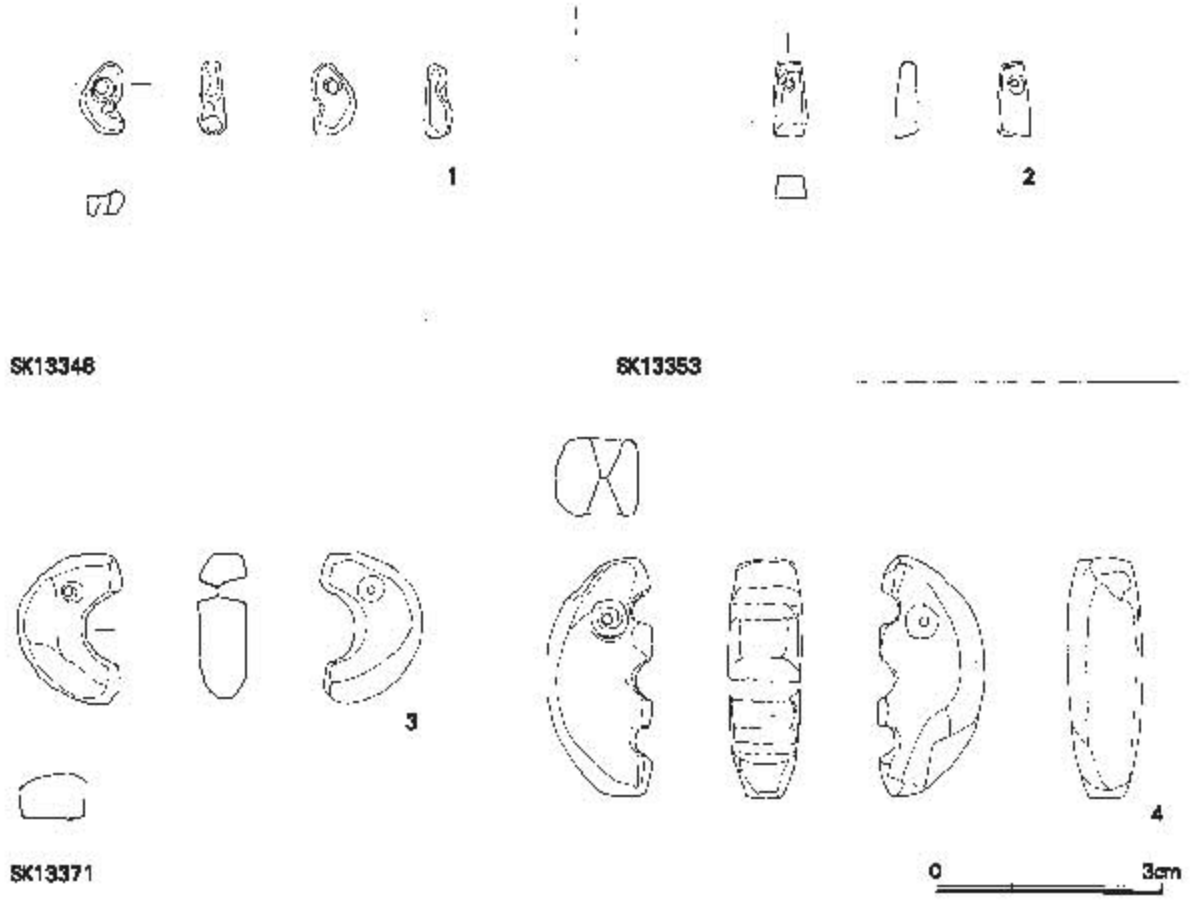


図38　土壙墓出土玉類（1/1）

(2) 土坑

①土器

ＳＫ１１２９２

SK11292 からは出土遺物が多かった為、ある程度分類し、古い順になると思われる順番で載せ、甕棺の土器編年は、『中原遺跡Ⅳ』のⅤ章の編年を参考にした。

図 39-1 ～図 41-4 はいずれも鋤先口縁甕で、図 42-1 ～図 43-3 は甕棺、図 43-4 ～図 44-6 は壺である。

図 39-1 ～ 6 は口縁部のみの残存で、5 には丹塗りが施されている。1 ～ 3 は突帯を持ち、口縁上端が平坦。1 の口縁端部はコの字調整、2、3 は丸みを持ち、内側への突出は段差がなくあまり見られない。口縁部の下には断面三角形の突帯が施されており、3 は突帯に刻み目を持つ。口縁部と突帯の間に稜がわずかに見られ、1 の胴部はあまり膨らまず、2、3 はやや膨らみを持つ。1、3 の調整は口縁部をヨコナデ、外側、内側をナデ、2 の口縁部はヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデ。1 の色調は外側がにぶい橙色、内側が橙色、2 の色調は外側がにぶい橙色、内側が橙色、3 は外側、内側共に橙色で、焼成は良好である。

4 ～ 6 は口縁上端が平坦で、4 と 6 の口縁端部は丸みを持ち、5 はやや三角形に近い形になり、内側への突出は段差がなくあまり見られない。4 ～ 6 の胴部はあまり膨らまないが、4 は肩部を持つようになっている。調整は 4 ～ 6 共に外側をハケメ、内側をナデ。色調は 4 と 6 共に外側、内側が橙色、5 は外側が橙色、内側がにぶい橙色。焼成はいずれも良好である。

図 39-7、8 はほぼ完形で、7 には丹塗りが施されている。7、8 は口縁上端が平坦で、7 はやや内側に傾斜し 8 は端部がやや垂れる。口縁端部は共に丸みを持ち、内側への段差は無く、突出はあまり見られなない。胴部も共にやや膨らみを持つ。7 の調整は、口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側を工具によるナデ、底部はナデで、やや上げ底になっている。8 の調整は口縁部をヨコナデ、外側をナデ後ハケメ、内側、底部をナデで、平底になっている。7 の色調は、外側、内側共に橙色で、8 は外側、内側共に浅黄橙色。焼成は共に良好である。

9 ～ 12 は口縁部のみの残存で、9、11、12 には丹塗りが施されている。口縁上端は平坦かやや内側に傾き、口縁端部はいずれも丸みを持ち、内側への突出は段差が無くあまり見られない。胴部はいずれもやや膨らみを持ち、10 の胴部外側に煤が付着。調整はいずれも口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデ。色調は 9、11 が外側、内側を共に橙色、10 は外側をにぶい橙色、内側がにぶい黄橙色、12 が外側、内側共に明赤褐色。焼成はいずれも良好である。

図 40-1 ～3、5 は口縁部のみ残存で、4 は底部のみ欠いている。そのうち 1、3、4 に丹塗りが施されている。いずれも突帯を持ち、口縁上端は 4 がやや丸く、外側に垂れ、そのほかは平坦になっている。口縁端部は 5 がコの字調整で、他はいずれも丸みを持ち、1、2、4 の内側への突出は段差が無く、3 はごくわずかに段差があり、5 ははっきりと段差がある。いずれもあまり突出せず、口縁部下には断面三角形の突帯を持つ。胴部は膨らみを持つ。色調は 1、2 が外側、内側共に橙色、3 の外側をにぶい褐色、内側がにぶい橙色、4 が外側、内側共ににぶい黄橙色、5 は外側、内側共に橙色、焼成はいずれも良好である。

6 は口縁部のみ残存で、口縁上端は平坦。口縁端部は丸みがあり、内側への突出は段差を持ち、やや伸びる。口縁部下に断面三角形の突帯を 1 条持つ。口縁部と突帯の間に稜が鮮明に見られ、胴部は膨らまず、鉢の可能性も考えられる。調整は口縁部をヨコナデ、外側、内側をナデ。色調は外側をにぶい橙色、内側を橙色。焼成は良好である。

7 は口縁部のみの残存で、丹塗りが施されている。口縁上端は平坦で、口縁端部はやや垂れる。口縁端部は丸みを持ち、口縁部下に断面三角形の突帯を 2 条持つ。2 つの突帯の間に稜がわずかに見られる。

胴部は大きく膨らむ。内側への突出は、段差は無くあまり見られない。調整は、口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデ。色調は外側、内側共ににぶい橙色。焼成は良好である。

8～10は口縁部のみ残存で、9、10には丹塗りが施されている。口縁上端はいずれも平坦で、8、10は口縁端部がやや垂れ、端部はいずれも丸みを持つ。内側への突出は段差を持ち突出する。8の胴部はやや膨らみ、9、10はあまり見られない。調整は、8、10が口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデ、9は口縁部をヨコナデ、外側は不明、内側はナデ。色調は8が外側、内側共ににぶい黄橙色、9、10が外側、内側共に橙色。焼成は良好である。

図41-1は口縁部のみ残存で、口縁上端は平坦、口縁端部は垂れ、端部は丸みを持つ。内側への突出は段差が無く、あまり突出しない。口縁部下に断面三角形の突帯を2条持つ。突帯の間に稜が見られる。胴部は大きく膨らむ。調整は、口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデ。色調は、外側をにぶい橙色、内側を橙色。焼成は良好である。

2は口縁部のみ残存で、口縁上端は平坦で、やや外側に傾く。端部は丸みを持ち、内側への突出は段差を持ち、突出する。胴部はあまり膨らまない。調整は、口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデで、外側には煤が付着している。色調は外側、内側共に橙色で、焼成は良好である。

3、4はほぼ完形で、4には丹塗りが施されている。口縁上端は平坦で、口縁端部は丸みを持ち、内側への突出は段差が無く、3は突出が弱く、4は突出が強い。胴部の膨らみは共にあまり見られない。調整は、共に口縁部をヨコナデ、外側をハケメ、内側をナデ。4は焼成後、底部に内側から穿孔を施される。3には外側、内側に煤が付着し、共に底部の一部に煤が付着。色調は3が外側をにぶい黄橙色、内側をにぶい黄褐色、4が外側、内側共に橙色。焼成は良好である。

5は胴部から底部にかけての残存、胴部はあまり膨らみを持たない。調整は、外側をハケメ、内側と底部をナデ、平底をしており、わずかに胴部内側に煤が付着している。色調は外側、内側共に橙色。焼成は良好である。

図41-6、7は口縁部のみ残存で、胴部と口縁部の付け根がくの字状のようになり、口縁上端は外側に垂れ、内側への突出が無い。口縁端部は丸みを帯びている。胴部の形態は残存が少なく不明。調整は、6、7共に口縁部をヨコナデ、外側を6がハケメ、7はハケ後ナデ、内側を6、7共にナデ。色調は、6がにぶい黄橙色、7は橙色。焼成は共に良好である。

図41-8～11は口縁部のみ残存で、8には丹塗りが施されている。胴部と口縁部の付け根がくの字状になり、口縁上端は外側に立ち上がり、内側への突出が無い。口縁端部は丸みを帯びておる。胴部は8、10、11があまり膨らまず、9がやや膨らむ。調整は、8が全面をナデ、他は口縁部がすべてヨコナデ、9は外側をハケ後ナデ、内側をナデ、10、11は外側をハケメで、内側を10はナデ、11はハケメ。色調は、8が橙色、9はにぶい赤褐色、10は黄灰色、11は黄橙色。9、10は外側、内側共に、煤が付着している。

図42-1は口縁部のみ残存の中型甕棺で、口縁部は逆L字状の鋤先口縁である。口縁上端は平坦で、やや外側に傾く。端部はコの字調整されており、端部は薄くなるよう潰しながら整形したように見え、外側に大きく突出する。内側への突出は段差が無く、あまり見られない。胴部は大きく膨らみ、断面三角形の突帯が1条見られる。これらの特徴から中型甕DかEに分類されると思われる。調整は、口縁部外側をヨコナデ、内側は磨耗の為不明。また、口縁部から外側にかけて黒塗りが施されており、外側には黒班も残る。

図42-2はほぼ完形の中型甕棺で、口縁部は逆L字状の鋤先口縁である。口縁上端は平坦で、やや外側に傾く。口縁端部はコの字調整され、内側への突出は段差を持ち突出する。胴部は大きく膨らみ、胴

部最大径とその上に断面三角形の突帯を２条持つ。これらの特徴から中型甕ＤかＥに分類されると思われる。調整は口縁部をヨコナデ、外側、内側、底部をナデ、また、胴部中腹を赤色顔料、下部を黒塗りで彩色している。焼成は良好である。

図43-1～３は口縁部のみ残存の甕棺で、1、２は大型甕棺、３は中型甕棺で、口縁部は逆Ｌ字状の鋤先口縁になっている。そのうち、1、２は内側への突出のほうが大きく、１と２では２のほうが長くなっている。口縁上端はいずれも外側に傾いており、特に１は大きく傾く。口縁端部はコの字調整をされている。これらのことから、１は大型甕Ｄの汲田式甕棺、２は大型甕Ｅの須玖式甕棺に、３は中型甕Ｅの須玖式甕棺になると思われる。調整は、口縁部をすべてヨコナデで、１の外側をナデ、内側をハケ後ナデ、2、３は外側をヨコナデ、内側をナデ。色調は、１はにぶい赤褐色、2、３は橙色。焼成は良好である。

図43-4～６は口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、5、６には丹塗りが施されている。口縁部から肩部までの残存である。頸部の形は、4、６が上方に向かって開き、５はややそりを持ちながら朝顔状に開き、頸部の長さは比較的短めで、あまり外側への開きは強くない。口縁上端は、いずれも平坦で、外側への突出はそれほど見られない。口縁端部は４が丸みをもち、5、６はコの字調整されている。口縁部の調整はすべてヨコナデで、４の頸部はタテ工具ナデ、内側をナデで、煤が外側の前面に付着している。５は全面をヨコナデ、６は肩部まで残存しており、口縁部を除く全面をナデ。色調は、４は外側がにぶい橙色、内側がにぶい黄橙色、５は外側が浅黄橙色、内側が橙色、６は外側がにぶい橙色、内側が橙色。焼成はいずれも良好である。

図43-7～10は口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺の口縁部から頸部までの残存である。そのうち7、10には丹塗りが施されている。頸部は、7～10は上方に向かって開く。頸部も長くなり、外側への開きが増え、内側の突出も見られる。口縁上端は、7、8、は平坦で、外側への突出は、８はよく伸び、７は８ほどではないが伸びる。9、10の口縁上端は外側に下がり突出は少なめ。口縁端部は、いずれもコの字調整されている。口縁部の調整はすべてヨコナデで、7～10の外側、内側をナデ。色調は、７の内側がにぶい橙色、7、８が外側を橙色、8、９が内側を橙色、9、10が外側をにぶい黄橙色、浅黄橙色。焼成は7、10が良好、8、９はやや不良である。

図43-11、12、図44-1、２は、口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺の口縁部から頸部の残存で、11、12、図44-2は朝顔状に開き、特に２の反りは強い。図44-1は上方に向かって開く。11～２は口縁上端が平坦で、12は外側への突出は少なめで、11、1、２は外側へ長く伸び、いずれも内側の突出が目立つ。調整はいずれも口縁部がヨコナデで、12は外側をハケ後ナデ、内側をナデ、１が外側、内側共にナデ、11、２は全面ヨコナデ。色調は、11、12、１が橙色、２が浅黄橙色。焼成はいずれも良好である。

図44-3～６は口縁部が素口縁広口壺で、いずれも丹塗りが施されている。３～５はほぼ完形、６は胴部の中位より下を欠損している。口縁部はいずれもコの字調整。頸部はいずれも朝顔状に開く。頸部は3、5、６の根元は一端垂直に立ち上がり外反、４は根元から外反する。最大径はいずれも胴部にあり、3、５は肩部に、４は中位よりやや上に、６は胴部の下が不明だが、肩部にくると思われる。３の調整は、口縁部をヨコナデ、外側をミガキ、内側を工具によるナデ、頸部外側をヘラミガキと暗文、頸部内側をナデ、底部はナデで、平底をしており黒班が見られる。4、５は外側をヘラミガキ、内側をナデ、頸部外側を全面暗文、内側をヘラミガキ、底部はやや上げ底で、５は外側から穿孔され、４は外側に黒班が、５は内側に煤が付着、６は外側が磨耗の為不明瞭、内側をナデで、外側を丹塗りしている。色調は、3、４が橙色で、5、６はにぶい黄橙色。焼成は３～５は良好で、６は不良である。

図 45-1、2 は高杯である。2 には丹塗りが施されている。1 はほぼ完形で残存しており、2 は杯の底面から裾部までを残存している。1 は鋤先口縁を持った高杯で、口縁部上端面が平坦で外側へ伸び、下へ少し垂れる。1 は口縁端部にヨコナデによるコの字調整、裾端部は 1 も 2 もヨコナデによるコの字調整がみられる。また、1、2 共に裾部外側はヘラミガキによる調整、2 の杯と裾の結合部に突帯が一条、裾部内側にはシボリ痕がある。それぞれ焼成は良好で、2 の外側の色調が明赤褐色になっている。

図 45-3 ～ 8 は器台である。3、6 ～ 8 は鼓形の器台で、4、5 は裾部分のみの残存となっている。3、6 ～ 8 は受部よりも裾部の方が大きく作られている。4、5 は裾部分のみの残存となっているため不明。3 ～ 6 の受部端や裾部端はヨコナデによるコの字調整で、7、8 はカキメによるコの字調整になっている。また、外側は 3 ～ 8 全てハケメ調整になっている。焼成は全て良好になっていて、色調は、3、5 がにぶい橙色、4 がにぶい橙色とにぶい黄橙色、6 が橙色と明黄褐色、7、8 が橙色になっている。

図 45-9 ～ 12 は支脚である。残存部が底部付近のみのため、全体的なことは分からない。外側の調整は全てナデで、全てに穿孔があり、9 は貫通している。さらに、9、12 は棒による穿孔痕がみられる。

図 45-13 は椀である。口縁端部はヨコナデによるコの字調整が施され、外側と内側の調整はナデによるもので、さらに内側に指頭圧痕がみられる。また、底部には輪積み痕がみられる。焼成は良好で、色調は内外共に浅黄橙色になっている。

図 45-14 ～ 16 は鉢である。14、15 には丹塗りが施されている。14 は鋤先口縁になっている。上端は平坦に外に伸び、内側の突出が目立つ、また、内側には煤が付着している。15 は口縁端部が外側に、ややくの字状に立ち上がり、上端は平坦で上にのび、底部に煤が付着している。16 は素口縁で、底部に煤が付着している。それぞれ口縁端部はヨコナデによる丸みをおびた調整、内側も全てナデ、外側は 14 がナデ、15 がハケメ、16 がヘラミガキによる調整になっている。

図 45-17 ～ 19 は蓋である。19 には丹塗りが施されている。全て摘み部分の真中にくびれがある。18 は端部も残存しヨコナデによるコの字調整を施されている。18 は器高が低く、19 は器高が高い。17 も摘み部のみの残存だが、19 に近い器高と見られる。また 19 には煤が付着している。17、18 の外側はハケメ、19 は摘み部がナデ、あとはハケメの調整、内側の調整は全てナデになっている。

図 46-1 ～ 17 は底部のみ残存で、2、9 ～ 14、16 には丹塗りが施されている。そのうち 1 ～ 11 は甕、12 ～ 17 は壺になると思われる。

1 ～ 11 の甕底部のうち、1 ～ 8、10 の調整は外側をハケメ、内側をナデ、底部をナデ、9 は外側、内側をナデ、11 は外側、内側をミガキ。黒班がついているものは、1 ～ 4、9、11 で、11 以外は底部外側のみ、11 は底部外側と内側両方に黒班が見られる。1、6 ～ 11 は平底、2 は上げ底、3 ～ 6 はやや上げ底、そのうち、4 は焼成後に底部外側から穿孔され、1 には指頭圧痕が内側に見られる。胴部の形は、1 ～ 8 は直線的に立ち上がり、9 ～ 11 は膨らむように立ち上がる。色調は、1、2、4、6、7、9 ～ 11 が外側、内側共に橙色、3 は外側を橙色、内側をにぶい黄褐色、5 は外側が橙色、内側を暗灰黄色、8 は外側、内側をにぶい橙色。焼成は 1、4、6、7 がやや不良、その他は良好である。

12 ～ 17 の甕底部のうち、12 の調整は外側をミガキ、内側、底部をナデ、13 は外側をハケ後ナデ、内側、底部をナデ、14 は外側、底部をヘラミガキ、内側をナデ、15 は外側をヘラミガキ、内側、底部と底部付近をナデ、16 は全面ハケメで、底部と外側の接合部分をハケメ、17 は外側、底部をヘラミガキ、内側をナデ。指頭圧痕は 15、17 に見られ、黒班、煤は 15 以外に見られ、13 は外側に、その他は底部に見られる。12、14、15、17 はやや上げ底で、13、16 は平底。胴部への立ち上がりは、12 は横に膨らみ、14、15 は胴部が直線的に斜め上に膨らみ、16、17 は曲線的に斜め上に膨らみ、13 はあまり

膨らみを持たず立ち上がる。色調は 12、14、15、17 が橙色、13 は明赤褐色、16 は明黄褐色。焼成は、14、15 がやや不良、その他は良好である。

図 46-18 は球胴の土器で、ほぼ完形。口縁部は素口縁で無頸である。口縁端部は丸みを帯びている。調整は、口縁部外側をヨコナデ、口縁部内側をヘラミガキ、外側をヘラミガキ、内側をナデ、底部をナデで、底部は平底。土器の頸部と底部に黒班が見られ、色調はにぶい黄橙色、焼成は良好である。

ＳＫ１３０４２（図 47-1 ～ 4）

１～３は甕で丹塗りが施されている。1、2 は口縁部及び体部が残存している。どちらも口縁部は逆Ｌ字状をする鋤先口縁であり、内側への突出は段差が無いが、内側に大きく張り出し、2 よりも 1 の突出が目立つ鋤先状である。口縁上端は平坦で、外側への張り出しも延びている。口縁端部は双方とも丸みを帯びている。どちらも胴部は膨らまない。調整は双方とも外側をハケメ、口縁部をヨコナデ、内側、底部をナデで調整しているが、1 は口縁部内側の接合部分をハケメで調整しており、底部は平底で、輪積痕が残っている。色調は双方ともにぶい黄橙色で、焼成は良好である。

３は甕の底部のみ残存。調整は、外側をハケメ、内側、底部をナデ、底部は平底で輪積痕が残っている。また、内側には指頭圧痕が残っている。色調は橙色で、焼成は良好である。

４は口縁部を欠いた壺で、頸部の付け根と型部と胴部に断面三角形の突帯を３条持つ。胴部最大径は中位よりやや上にある。胴部の突帯は、胴部の最大径の上下に一つずつ付けられている。調整は、外側、内側、底部ともにナデで、頸部の突帯部分のみヨコナデで付けられている。底部は平底で輪積痕は見られない。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良好である。外側には黒班が見られる。

ＳＫ１３０４３（図 47-5、6　図 48-1 ～ 3）

5、6 は丹塗りを施された甕の口縁部のみの残存である。両方とも口縁部は逆Ｌ字状をしている鋤先口縁広口壺であり、内側への突出は段差が無く、やや内側に張り出し、6 よりも 5 の突出が目立つ。口縁上端は、5 はほぼ水平なのに対して、6 はやや外側に垂れる。口縁端部は両方とも丸みを持っている。残存部分で確認できる範囲では、5 の胴部はあまり膨れず、直線的な体系で、6 は 5 よりも膨れる体形になると思われる。5 の調整は、外側と口縁部をヨコナデ、内側を左斜め上にケズリ、6 の調整は、外側をハケメ、口縁部をヨコナデ、内側をナデとなっている。色調は、双方とも橙色で、焼成は共に良好である。

１～３は丹塗りを施された壺である。そのうち 1、2 は口縁部～頸部のみの残存となっている。1、2 の頸部は上方に向かって開き、口縁部は逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、内側への突出が見られ、2 より 1 の突出が目立つ。口縁上端は、1 は水平で 2 は水平か、やや外に垂れる。口縁端部は共に丸みを持っている。調整は、両方とも頸部外側をヨコナデ後、暗文を施している。口縁部はヨコナデ、頸部内側をナデ、2 は頸部と体部の接合部分をヘラミガキで、体部残存部分の内側はナデに戻っている。色調は、1 は橙色、2 はにぶい橙色で、焼成は共に良好である。3 は、頸部が上方に向かって開く素口縁広口壺で、口縁端部はコの字調整になる。口縁部が胴部の最大径を上回る。頸部外側には暗文を施している。胴部最大径は中位よりやや上に有り、最大径になる部分にＭ字状突帯を 1 条付けられる。調整は磨耗によって不明瞭だが外側はミガキと見られ、内側は、口縁上端から底部にかけてナデによって調整される。底部一帯に黒班が見られ、色調は橙色で、焼成は良好である。

ＳＫ１３０４５（図 48-4 ～ 7）

4 は紡錘車である。三分の一ほど破損しているが、ナデによる調整が確認できる。

５～７は甕の底部のみの残存である。そのうち 7 には丹塗りが施されている。調整はいずれも、外側をハケメ、内側、底部をナデによる。そのうち 5 は平底、6 は上げ底、7 はやや上げ底。色調はいず

れもにぶい黄橙色で、焼成は良好である。

ＳＫ１３０６３（図 48-8 ～ 11、図 49-1、2）

8、9は甕口縁部の残存である。そのうち９には丹塗りが施されている。両方とも口縁部は逆Ｌ字状をする鋤先口縁であり内側への突出が見られ、8よりも９の突出がやや目立つ。口縁上端は、8が水平かやや外側に垂れるが、9は外側に垂れ、また口縁部の付け根の部分が厚くなっている。口縁端部は両方とも丸くなっている。どちらも胴部は膨らまず、調整も外側をハケメ、口縁部をヨコナデ、内側をナデとなっている。また外面には両方とも煤が付着している。色調は両方とも黄橙色で、焼成は良好である。

10は丹塗りが施された甕底部のみの残存である。調整は外側をハケメ、内側、底部をナデ、また底部は平底である。色調はにぶい橙色で、焼成は良好である。

11は丹塗りが施された壺で、頸部が上方に向かって開き、口縁が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺であり、口縁部はやや外側に垂れる。口縁端部はコの字調整をされている。胴部の最大径は中位のやや上にあり、胴部最大径部分とそのやや離れた上位に断面三角形の突帯を２条持つ。調整は、胴部より下が外側内側共に調整不明瞭で、胴部最大径の突帯部分から上がヘラミガキ、口縁部から頸部内側がヨコナデ、体部内側が胴部まで工具によるナデ、底部は平底でナデによる調整がされ、黒班が見られる。

1は壺の口縁部から頸部にかけての残存である。頸部は朝顔状に開き、口縁が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺である。口縁部は外側と、内側への突出が目立つ。口縁上端は平坦で、口縁端部は丸みを持っている。調整は、口縁部、頸部外側、内側共にナデによる。一部残存している体部の角度を見た場合、胴部の最大径の方が大きいか。色調は橙色で、焼成は良好である。

2は丹塗りが施された壺底部の残存である。調整は外側、内側、底部共にナデで、底部付近に黒班が付着している。底部は平底である。色調は橙色で、焼成は良好である。

ＳＫ１３０７６（図 49-3 ～ 5）

3、4は甕の口縁部のみの残存である。両方とも逆Ｌ字状の鋤先口縁をしており、内側への突出が見られる。口縁上端は平坦で、どちらも口縁端部は丸みを持っている。ただ、外側への伸びは３より４のほうが長い。口縁部から体部にかけては、どちらもあまり膨らまないが、4は３に比べ場合やや膨らみを持っている。調整、色調は両方とも同じで、外側をハケメ、口縁部をヨコナデ、内側をナデ、にぶい橙色をしており、焼成は良好である。

5は丹塗りが施された、頸部が朝顔状に開く素口縁広口壺で、口縁端部はコの字調整されている。口縁部が胴部最大径を上回る。頸部外側に暗文を施している。胴部最大径は中位よりやや上にあり、胴部の中位よりやや下に穿孔が一つ外側より作られている。調整は全体的に磨耗によって不明瞭だが、外側と内側をミガキ、底部はナデで、やや上げ底になっている。また、底部に黒班がわずかに見られる。色調は橙色で、焼成は良好である。

ＳＫ１３１００（図 49-6、7）

6、7は丹塗りが施された壺で、6は頸部が上方に向かって開き、口縁部は逆Ｌ字状をしている鋤先口縁広口壺である。端部外側がやや伸び、内側への突出が目立つ。口縁上端は平坦で、口縁端部はコの字調整されているで、頸部は暗文を施されている。最大径が胴部中位にあり、口縁部径を上回っている。また、胴部最大径と頸部の付け根の中間辺りに、M字突帯が２条付けられている。調整は、外側をナデ、突帯部分をヨコナデ、口縁部から頸部内側をヨコナデ、内側をナデ、底部をナデで、やや上げ底になっている。胴部に黒班が付いている。色調は橙色で、焼成は良好である。7は、頸部が朝顔状に開く素口縁広口壺、口縁端部はコの字調整されている。口縁部が胴部最大径を上回っている。頸部には暗文を施

している。胴部最大径は中位よりやや上にあり、最大径になる部分にM字状突帯を一条付けられている。調整は全体が磨耗の為不明瞭だが、確認できる範囲では、胴部外側の肩部をヘラミガキ、内側をナデ、頸部内側をヘラミガキ、底部はナデで、平底になっており、黒班が見られる。そして全体に丹塗りを施している。色調は、外側を黄橙色で、内側を橙色、焼成は良好である。

ＳＫ１３１８９（図50-1～3）

1～3は壺で、そのうち1、3には丹塗りが施され、2は口縁部を欠いている。1は頸部が朝顔状に開き、口縁部が逆Ｌ字状をしている鋤先口縁広口壺で、口縁端部が外側へやや伸び、内側への突出が見られる。口縁上端は外側へ垂れ、口縁端部はコの字調整されている。胴部最大径は中位にあり、口縁部径を上回っている。また胴部最大径とややその上に見かけM字突帯を2条付けている。調整は、外側の下部を工具によるナデ、中位から口縁部、頸部内側までヨコナデ、胴部内側、底部をナデで、平底になっている。頸部の内側に輪積痕が残っている。胴部に黒班が付いている。色調は橙色で、焼成は良好である。

2の胴部最大径は中位よりやや上にあり、胴部最大径とやや上に断面三角形の突帯を2条付けられている。調整は外側下部を工具によるナデ、突帯部分をヨコナデ、外側上部、内側、底部をナデで、平底になっている。胴部に煤が若干付着しており、色調は明黄褐色で、焼成は良好である。

3は外側へ頸部が上方に向かって開く素口縁広口壺で、口縁端部は平たく調整されている。口縁部が胴部最大径を上回っている。頸部には暗文が全体に施されている。胴部最大径は中位よりやや上にあり、M字状突帯を1条付けられている。調整は、外側の下部以外をヘラミガキ、内側をナデ、頸部内側をヘラミガキ、底部と胴部下部をナデで、平底になっている。色調は橙色で、焼成は良好。

ＳＫ１３１９１（図50-4～10）

4～6は丹塗りが施された壺で、口縁部から頸部にかけての残存で、6はわずかに胴部が残る。4、5は口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、頸部が朝顔状に開き、口縁端部が外側へ伸び、内側へ突出する。口縁上端は平坦で、口縁端部はコの字調整されている。調整は、両方とも頸部外側から口縁部にかけてヨコナデ、頸部内側は、4は口縁部下からすぐにナデ、5は頸部中位からナデ。4は頸部外側に煤が付着。色調は両方とも橙色で、焼成は良。6は、頸部が上方に向かって開く鋤先口縁広口壺で、逆Ｌ字状の口縁部を作る際に粘土を重ねている為厚くなっている。外側への突出は弱く、内側への突出が見られ、口縁上端は丸みを持っており、口縁端部はコの字調整されている。調整は、外側がナデ、口縁部がヨコナデ、頸部外側、頸部内側がナデで、頸部の外側は暗文が施されている。色調は外側がにぶい橙色、内側が橙色で、焼成は良好である。

7～9は底部のみの残存で、そのうち7は甕、8、9は壺である。9には丹塗りが施されている。7の調整は外側をヘラミガキ、内側を工具によるナデ、底部をナデで、破損しているが平底と思われる。外側、内側共に煤が付着している。8の調整は不明瞭ながら、外側を荒いハケメ、内側を工具によるナデ、底部をナデで、平底である。9の調整は外側をナデで、底部付近をハケメ、内側をナデ、底部をナデで、平底である。8の焼成は暗灰黄色で、9は橙色、共に焼成は良である。

10は丹塗りが施された無頸壺で、口縁部は逆Ｌ字状をしている鋤先口縁無頸壺で、内側へわずかに突出する。口縁上端は平坦で、口縁端部は平坦に調整されている。調整は、外側下部をヨコミガキ、外側上部をミガキ、口縁部をヨコナデ、内側をナデ、底部は欠損している為不明である。色調は外側が橙色、内側がにぶい黄橙色をしており、焼成は良好である。

ＳＫ１３１９４（図51-1～5）

1～5すべてが壺で、2～4は丹塗りが施されている。1～4は口縁部から胴部にかけての残存で、

5はほぼ完形の残存である。1は口縁部から肩部までの残存となっている。頸部は朝顔状に開き、口縁上端は平坦で、外側への突出は弱く、内側に突出する。口縁端部はコの字調整となっている。調整は、外側がナデ、口縁部がヨコナデ、内側が指頭圧痕、頸部外側をヘラミガキ、頸部内側をナデ。頸部と胴部の繋ぎ目に断面三角形の突帯が付けられ、その周辺はヨコナデで調整されている。色調は橙色で、焼成は良好である。

2は口縁部から頸部の残存で、口縁部は逆L字状の鋤先口縁広口壺である。頸部は朝顔状に開く、口縁上端は丸みを持ち外側へ伸び、内側へ突出する。口縁端部はコの字に調整され、刻目を施されている。調整は、口縁部から頸部外側をナデ、頸部内側は口縁部のすぐ下を横に1条のハケメで調整し、その下からナデで調整している。色調は橙色で、焼成は良好である。

3は頸部が上方へ向かって開く素口縁広口壺で、口縁端部はコの字調整されている。調整は口縁部をヨコナデ、頸部外側、内側をナデで、頸部外側に暗文を施している。色調は外側をにぶい橙色、内側を橙色で、焼成は良好である。

4は頸部と肩部のみの残存で、頸部と肩部の接続部分に断面三角形の突帯を1条持つ。調整は、外側内側ともにナデ。色調は外側が橙色、内側がにぶい橙色で、焼成は良好である。

5は頸部が上方に向かって開く素口縁広口壺で、口縁端部は剥落が激しく不明瞭。胴部の最大径は中位のやや上にあり、口縁部を上回る。調整は磨耗の為ほぼ不明瞭で、頸部外側のヘラミガキと胴部内側、底部のナデのみ確認。また、底部は平底で、黒班が見られる。色調は橙色で、焼成は良好である。

ＳＫ１３１９７（図51-6、7）

6、7はほぼ完形の丹塗りを施された壺で、6は口縁が逆L字状の鋤先口縁広口壺である。頸部が上方に向かって開き、口縁上端は平坦で外側へ大きく突出し、内側への突出も見られる。口縁上端は平坦で、口縁端部は丸みを持っている。胴部最大径は中位のやや上にあり、口縁部を上回る。胴部最大径とやや上に断面台形の突帯を2条持つ。調整は磨耗の為不明瞭が多いが、突帯部分はヨコナデ、口縁部はヨコナデ、頸部内側、底部はナデで、平底になっている。また、胴部に黒班が広く見られる。色調は橙色で、焼成は良好である。7は素口縁広口壺で、頸部が朝顔状に開く。口縁端部は丸みを持っている。胴部最大径は、中位よりやや上にあり。口縁部を上回る。調整は外側をミガキ、内側をナデ、頸部外側をヨコナデ、頸部内側上位をヨコナデ、下位をナデ、底部をナデで、上げ底になっている。また、底部付近に黒班が見られる。

ＳＫ１３２０３（図52-1、2）

1、2共に壺の口縁部から頸部にかけての残存で、2は丹塗りが施され、肩部が一部残存する。1の頸部は上方に向かって開く鋤先口縁広口壺で、口縁上端は平坦に調整し、内側へ突出が見られ、口縁端部は刻目が施されている。調整は、頸部外側、内側をナデ、口縁部をヨコナデ。色調は淡黄。2の頸部は朝顔状に開く素口縁広口壺で、口縁端部はコの字調整されている。肩部には、M字状突帯が1条付けられている。調整は、頸部外側をミガキ後全面に暗文、頸部内側、肩部をミガキ。色調は明赤褐で、焼成はいずれも良好である。

ＳＫ１３２３７（図52-3、4）

3、4共に壺の口縁部から頸部にかけての残存で、4は丹塗りが施されている。3、4共に逆L字状の鋤先口縁広口壺で、頸部は上方に向かって開き、内側への突出が見られるが、3はごく僅かな突出である。口縁端部は両方ともコの字調整されている。3の調整は口縁部をヨコナデ、頸部外側、内側共にナデ、4は口縁部をヨコナデ、胴部外側、内側、頸部外側、内側共にナデで、頸部外側に煤が付着。色調

は、3は黄橙色、4は橙色、焼成は両方とも良好である。

ＳＫ１３２４４（図52-5～8）

5、6共に壺で5は口縁部、6は口縁部から頸部にかけての残存である。6は頸部が上方に向かって開き、口縁部は両方とも逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、両方とも内側への突出は見られるが、6はそれほど外側には突出していない。口縁上端は5が外側に傾くのに対して、6は水平で、口縁端部は両方共コの字調整だが、5は刻目を施される。調整は両方とも口縁部、頸部外側、内側をナデ。色調は5が橙色で、6がにぶい橙色、焼成は両方とも良好である。

7は丹塗りが施された高杯で、脚部だけの残存である。脚部が残っている。中空で坏部と接合する部分に粘土を脚の方から棒のようなもので押し込んで蓋のようになっている。調整は、外側が磨耗の為不鮮明で、内側は裾部がハケメ、脚部内側がナデ。色調は明赤褐色で、焼成は良好である。

8は甕で、甕棺になると思われる。口縁部のみ残存である。口縁部は逆Ｌ字状で、外側への大きく伸び、内側への突出も見られる。口縁上端は平坦で、口縁端部はコの字調整されている。調整は、口縁部をヨコナデ、内側をナデ。色調は橙色で焼成は良好。

ＳＫ１３２４５（図52-9～11）

9、10は壺で、9は口縁部から頸部、10は頸部と肩部にかけて残存。9は口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、頸部が朝顔状に広がり、口縁部は内側に突出が見られる。口縁上端は外側にやや傾き、口縁端部はコの字に調整され、刻目を施されている。調整は、口縁部をヨコナデ、頸部外側を全面に暗文、頸部内側をヘラミガキ。口縁部内側の突出の調整は甘く、粘土の隙間が見られる。色調は外側がにぶい黄橙色、内側が橙色。焼成は良好。10は、頸部が途中までしか残っていないが、頸部は上方に開くと思う。頸部と胴部の内側接合に稜は見られない。調整は、外側をヘラミガキ、内側をナデ、頸部外側をヘラ状工具によるナデ、内側をナデ、頸部と胴部接合部分をヘラミガキ。色調はにぶい橙色。焼成は良好。

11は丹塗りが施された底部のみの残存で、甕か壺のものと見られる。調整は外側、底部が磨耗の為不明瞭、内側をナデ。底部は平底で、輪積痕が見られない。内側底部に煤が見られる。色調はにぶい橙色。焼成は良好。

ＳＫ１３３１４（図53-1～3）

1～3共にほぼ完形の壺で、1のみ底部が欠損し、2、3には丹塗りが施されている。頸部はいずれも朝顔状に広がり、1は口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺であり、口縁上端は平坦で、外側へ口縁が伸び、内側への突出が見られる鋤先口縁である。3は素口縁広口壺で、頸部は朝顔状に開く。口縁端部は1と3がコの字調整、2は丸みを持っている。いずれも頸部に暗文が施されており、1のみ全面に施される。1、2は胴部最大径が口縁部を上回り、1は胴部中位よりやや上に、2は肩部ほどにある。また、1は胴部最大径の上下に断面三角形の突帯を2条持つ。3は胴部最大径が肩部付近にあり、口縁部が胴部最大径を上回る。調整は、1が口縁部をナデ、外側をミガキ、内側をナデ、頸部外側を暗文、頸部内側をヘラミガキ、また外側に煤が付着している。2は、外側をヘラミガキ、内側をナデ、頸部外側をハケメ、暗文、頸部内側をヘラミガキ、突帯付近はヨコナデ、底部をナデで、やや上げ底で、底部に黒班が付いている。3は、いずれもナデで、頸部に暗文。底部は上げ底。色調は、1の外側が灰黄褐色、内側がにぶい黄褐色、2は明赤褐色、3は橙色で、焼成はいずれも良好。

ＳＫ１３３１８（図53-4、5　図54-1、2）

4、5共にほぼ完形の丹塗りを施された壺である。4は底部が一部欠損している。口縁部は逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、頸部は上方に向かってやや開く。口縁上端はやや膨らみを持ち、外側へ平坦でや

や外側に傾く。口縁端部は丸みを帯びており垂れ、内側への突出が見られる鋤先口縁である。最大径は胴部中位よりやや上にあり、胴部最大径の上下に断面三角形の突帯を２条持つ。調整は口縁部から頸部外側、内側ともにヨコナデ、外側をハケメ後ナデ、内側をナデ、底部をナデで、上げ底。色調はにぶい橙色で、焼成は良好。５は頸部が朝顔状に広がる素口縁広口壺で、口縁部はコの字調整。最大径は胴部の肩部辺りにあり、最大径に断面三角形の突帯を１条持つ。調整は、口縁部をヨコナデ、外側、頸部外側がミガキ、頸部内側をヨコナデ、内側をナデ、底部はナデで、上げ底。また、頸部に暗文が全面に施され、底部に黒班が見られる。色調は橙色で、焼成は良好。

１、２は口縁部から頸部にかけての残存である。１は口縁部が逆Ｌ字状の鋤先口縁広口壺で、頸部は朝顔状に開き、頸部の根元には断面三角形の突帯を持つ。口縁上端は平坦で、口縁端部はコの字調整されており、また指で口縁端部をナデによる調整をしている。調整は、頸部外側、内側をナデ、口縁部をヨコナデ、色調は 橙色で、焼成は良好である。２は口縁部に粘土を貼り付け、口縁上端を平坦に整形し、口縁端部は丸くなっている甕で、胴部はあまり膨らみを持たない。調整は、外側は磨耗の為不明瞭で、口縁部、内側はナデ。色調は明黄褐色で、焼成は良好である。

ＳＫ１３３５８（図 54-3 ～ 7）

３、４は甕の口縁部から頸部にかけての残存である。３、４共に口縁部は素口縁に粘土を重ねて厚くして、口縁端部に刻目を施している。３、４共に頸部を持ち、３より４の反りが大きい。口縁上端は３がやや丸くなっており、内側への突出が見られる。４は外側が厚くなり、上端は平坦になっている。内側への突出は見られない。３の調整は口縁部をヨコナデ、頸部外側をナデ、頸部内側をナデ、４の調整は、全体が磨耗の為不明瞭。色調は共に橙色で、焼成はやや不良。

５は丹塗りが施された短頸素口縁壺で、胴部中位から口縁部にかけての残存である。頸部は朝顔状に広がる。調整は、外側、内側をヘラミガキ、頸部外側内側をナデ。また、内側全面に煤が付着。色調は、橙色で、焼成は良好。

６は底部のみの残存で壺と思われる。調整は外側をハケメ、内側をナデ、底部をナデで、上げ底になっており輪積痕が見られる。また、底部には黒班が見られる。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良好である。７は底部のみの残存で甕と思われる。調整は外側、底部をナデ、内側は不明瞭、底部は平底である。色調は橙色で、焼成は良好である。

②石器

ＳＫ１３３１８（図 55-1）

図 55-1 は磨製の石戈で、つなぎ目となる部分が欠損している。また、鎬と思われる線が見られる。

③石製玉類

ＳＫ１１２３２（図 55-2）

図 55-2 は硬玉製の小形勾玉で、体部をくの字に曲げ、頭部に２条の刻みが施してある。色調は全体的に淡い緑色で、間に白色の節理が入り込む。穿孔方向は両面からの穿孔になっている。

ＳＫ１３３１４（図 55-3）

図 55-3 は硬玉製の極小形勾玉で、体部をくの字に曲げ、頭部端と尾部端に丸みのある調整を施し、尾部に向かって細くなる。穿孔方向は両面からの穿孔になっている。

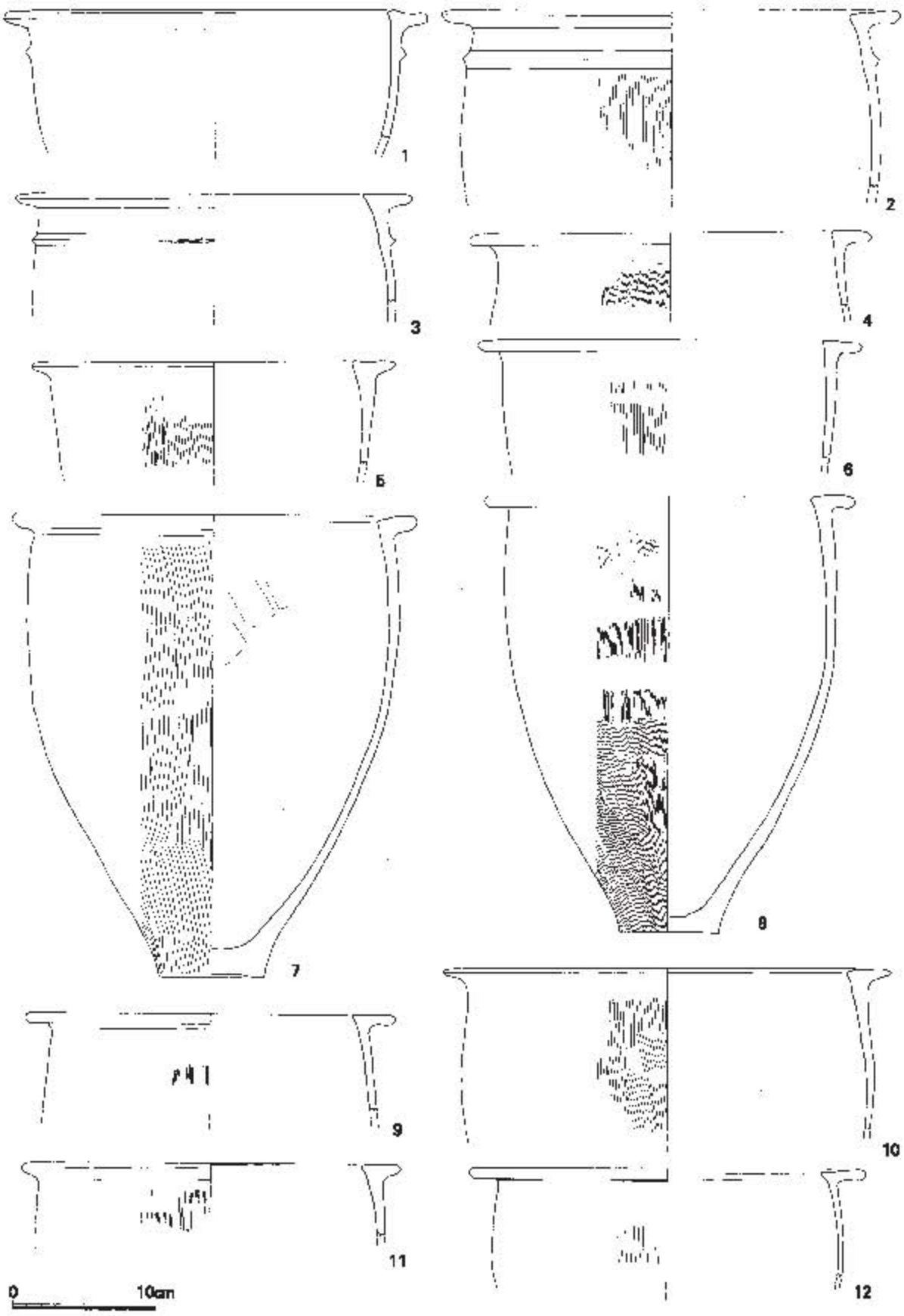


図 39　SK11292 土坑出土土器 1（1/4）

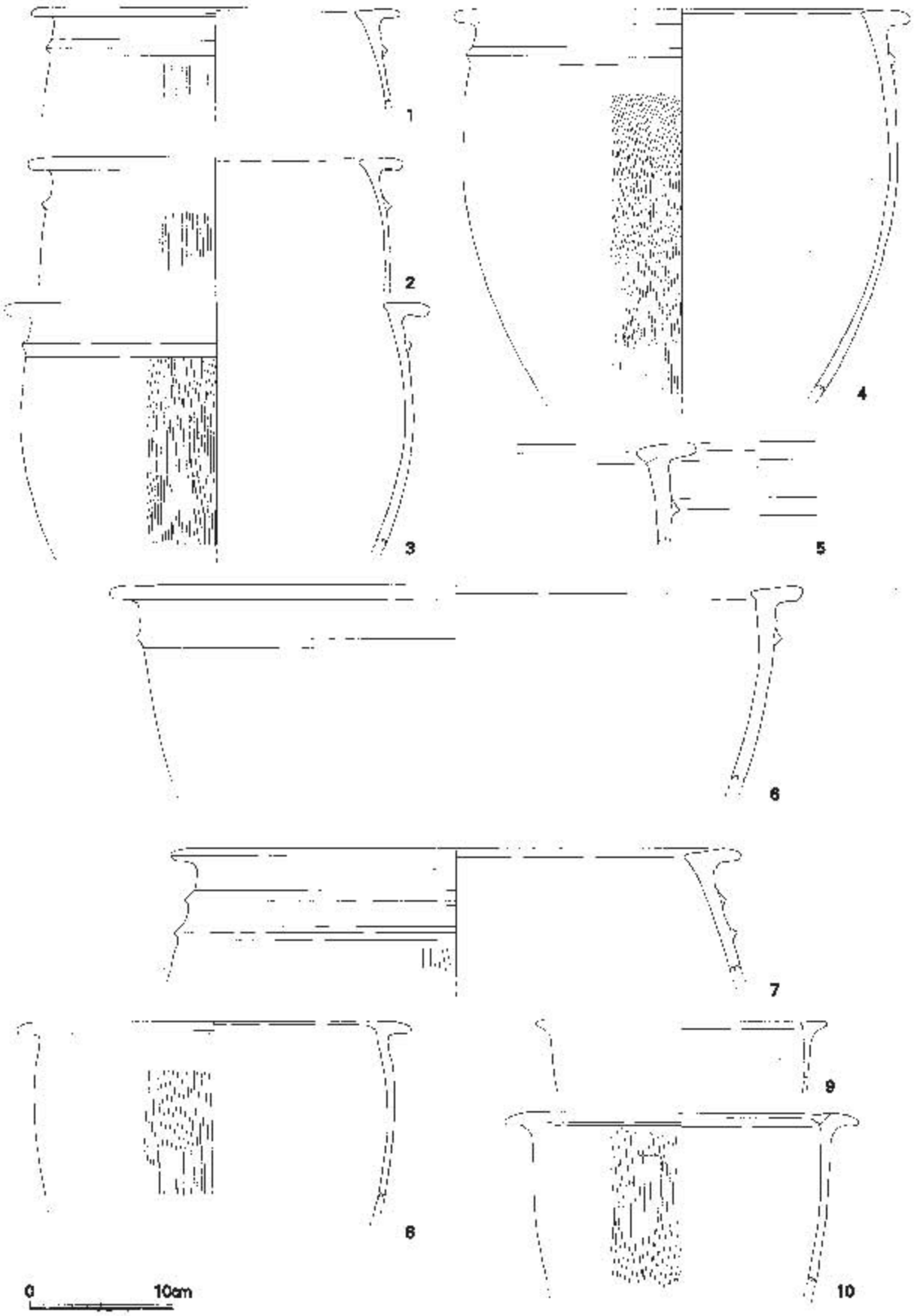


図 40　SK11292 土坑出土土器 2（1/4）

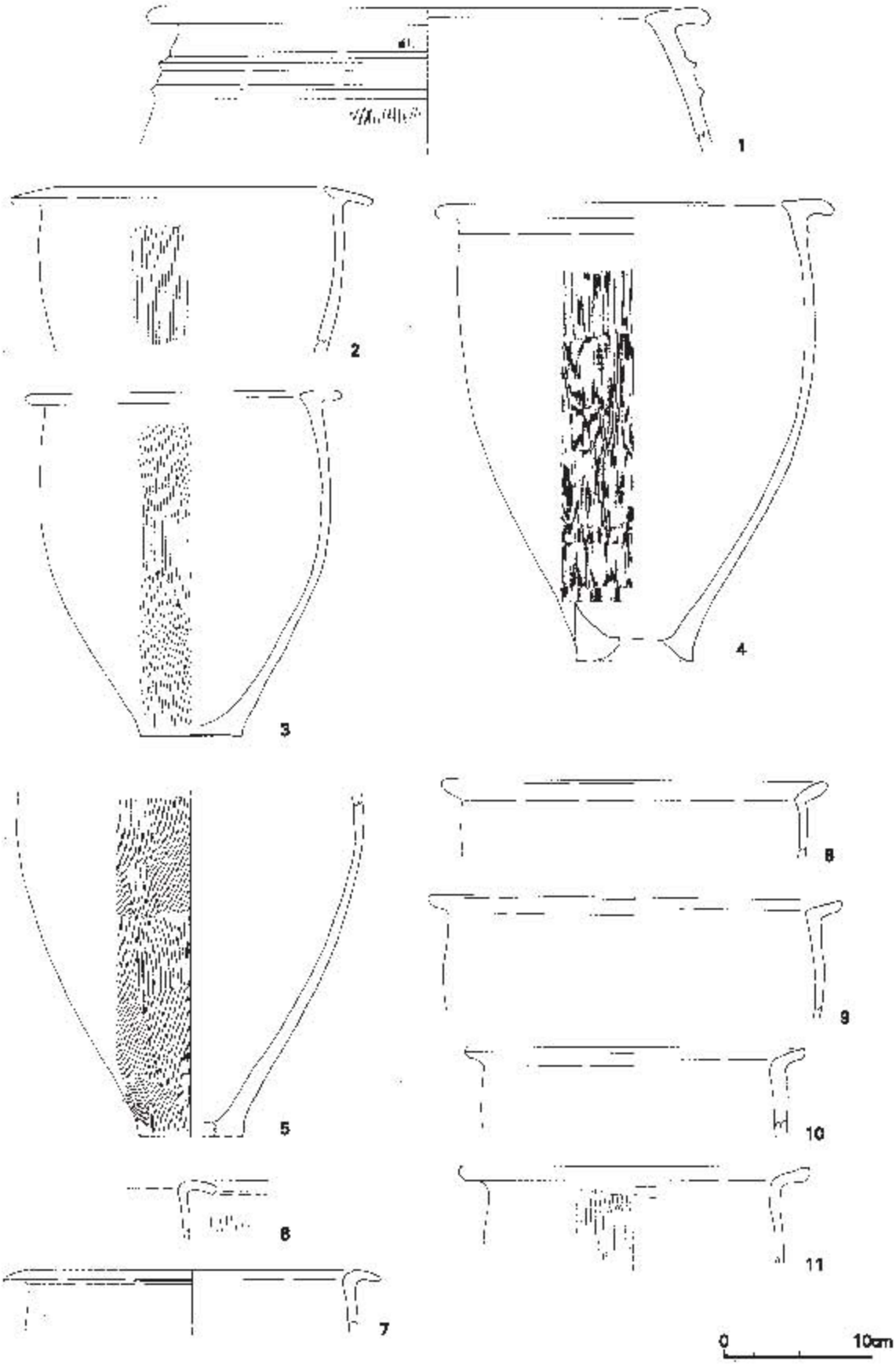


図 41　SK11292 土坑出土土器 3（1/4）

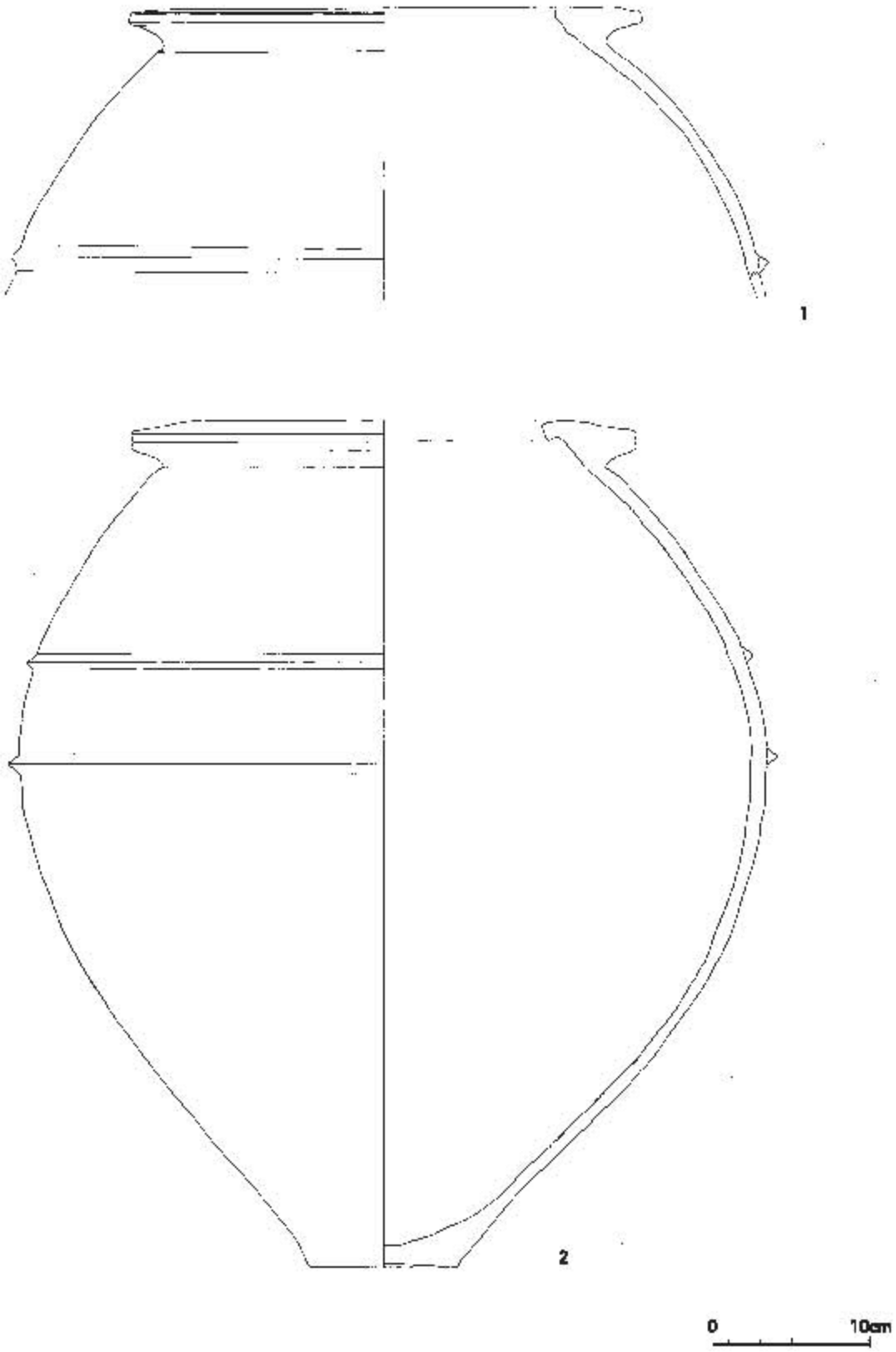


図 42　SK11292 土坑出土土器 4（1/4）

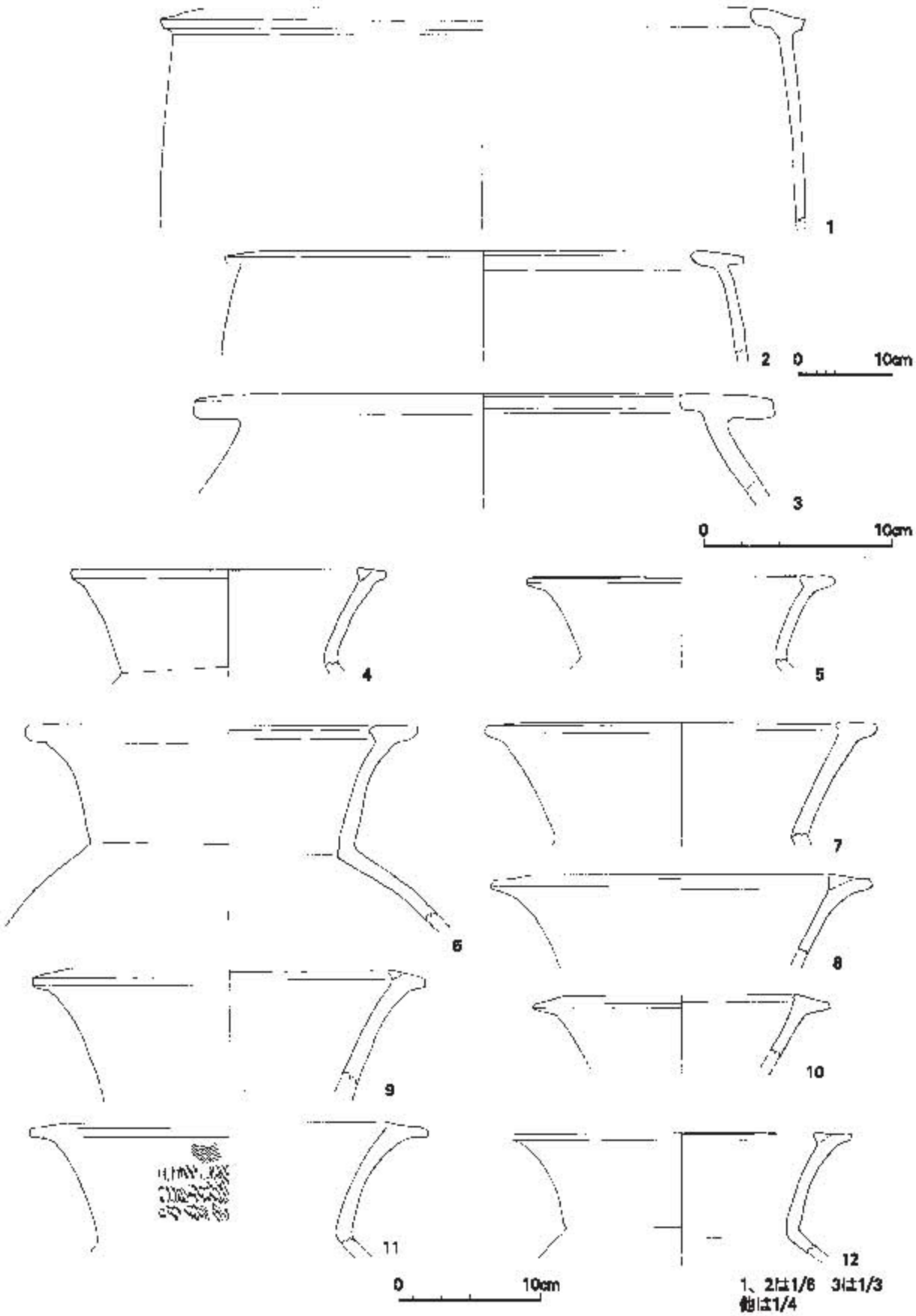


図43　SK11292土坑出土土器5（1/4、1/6、1/3）

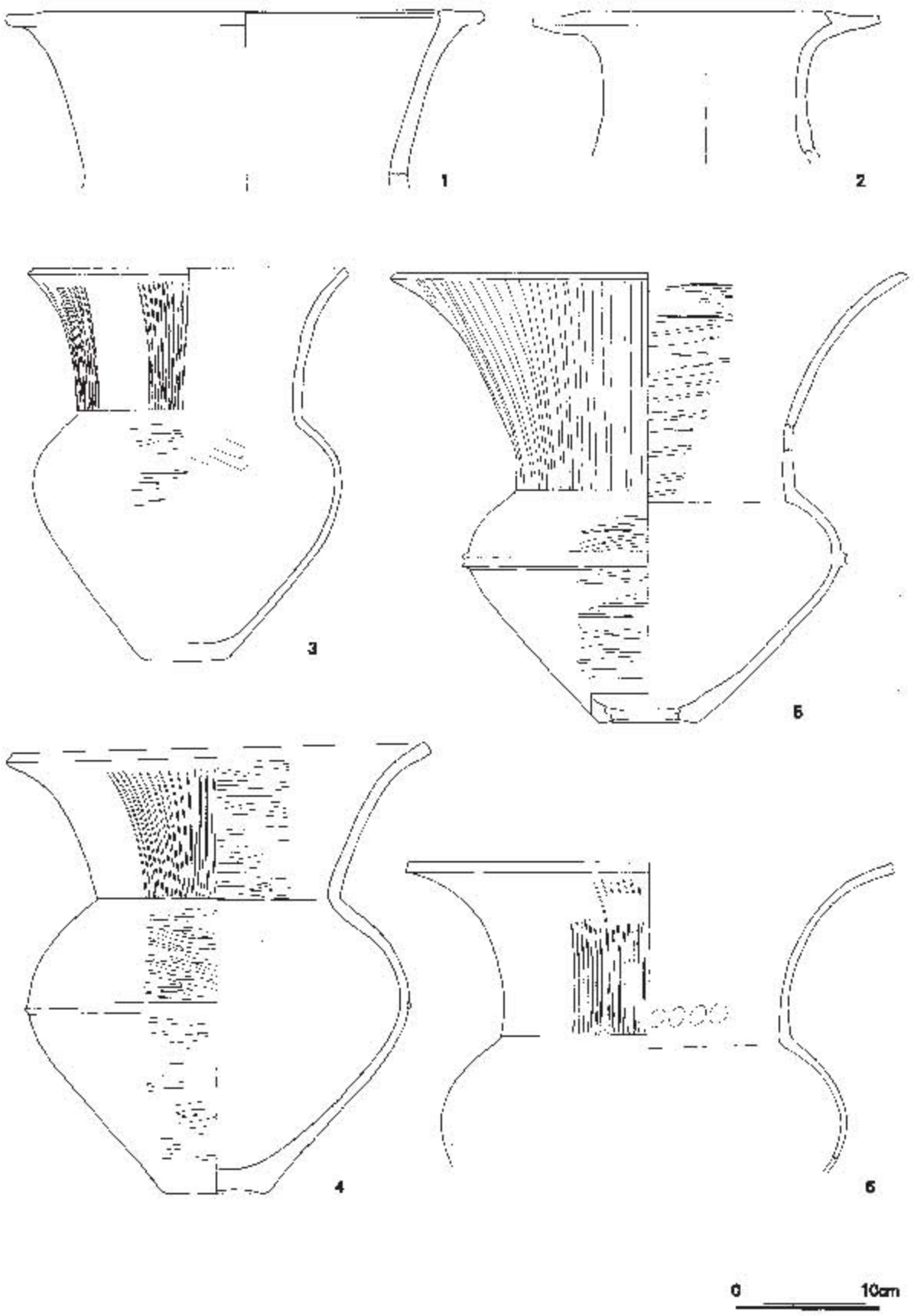


図 44　SK11292 土坑出土土器 6（1/4）

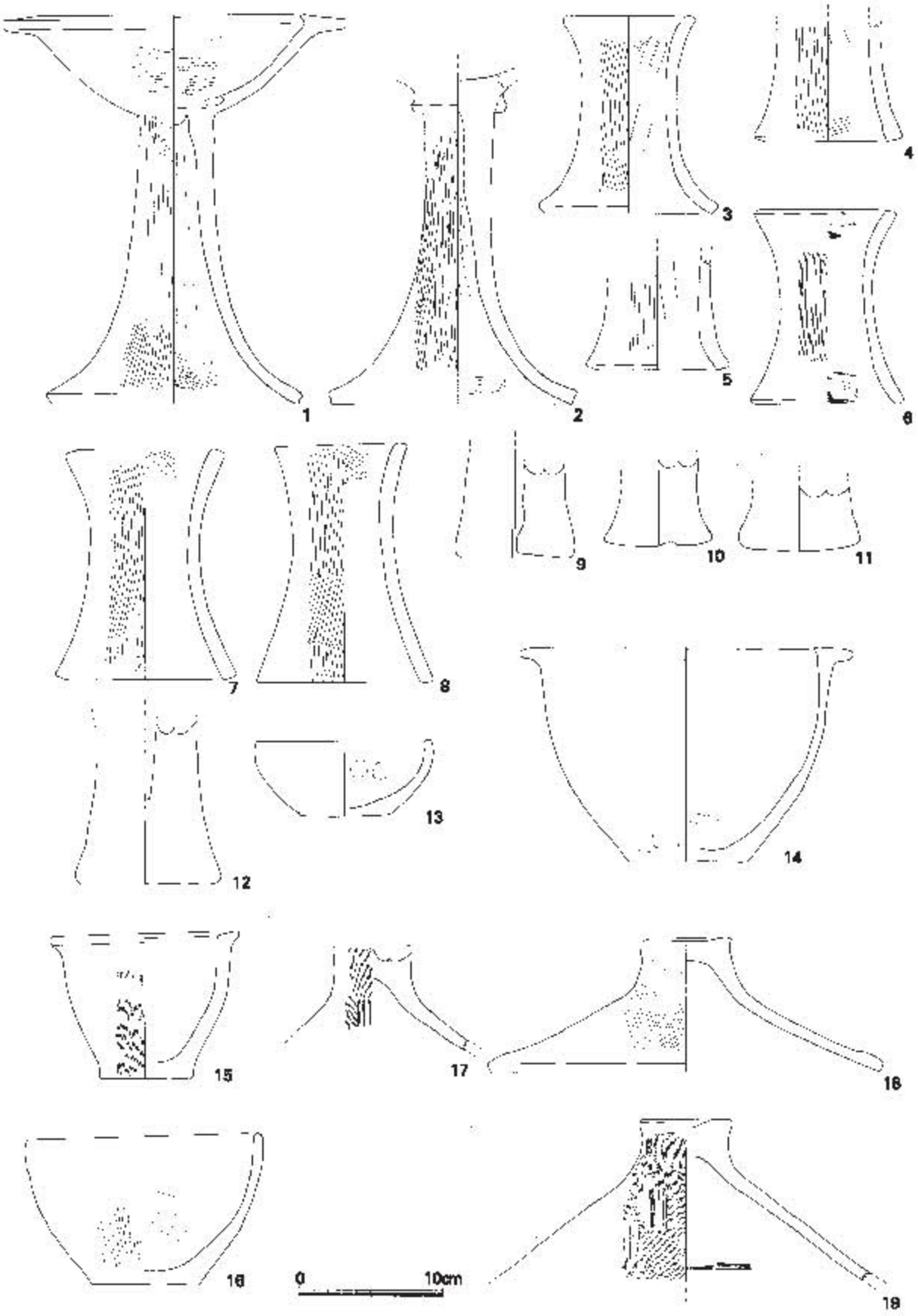


図 45　SK11292 土坑出土土器 7（1/4）

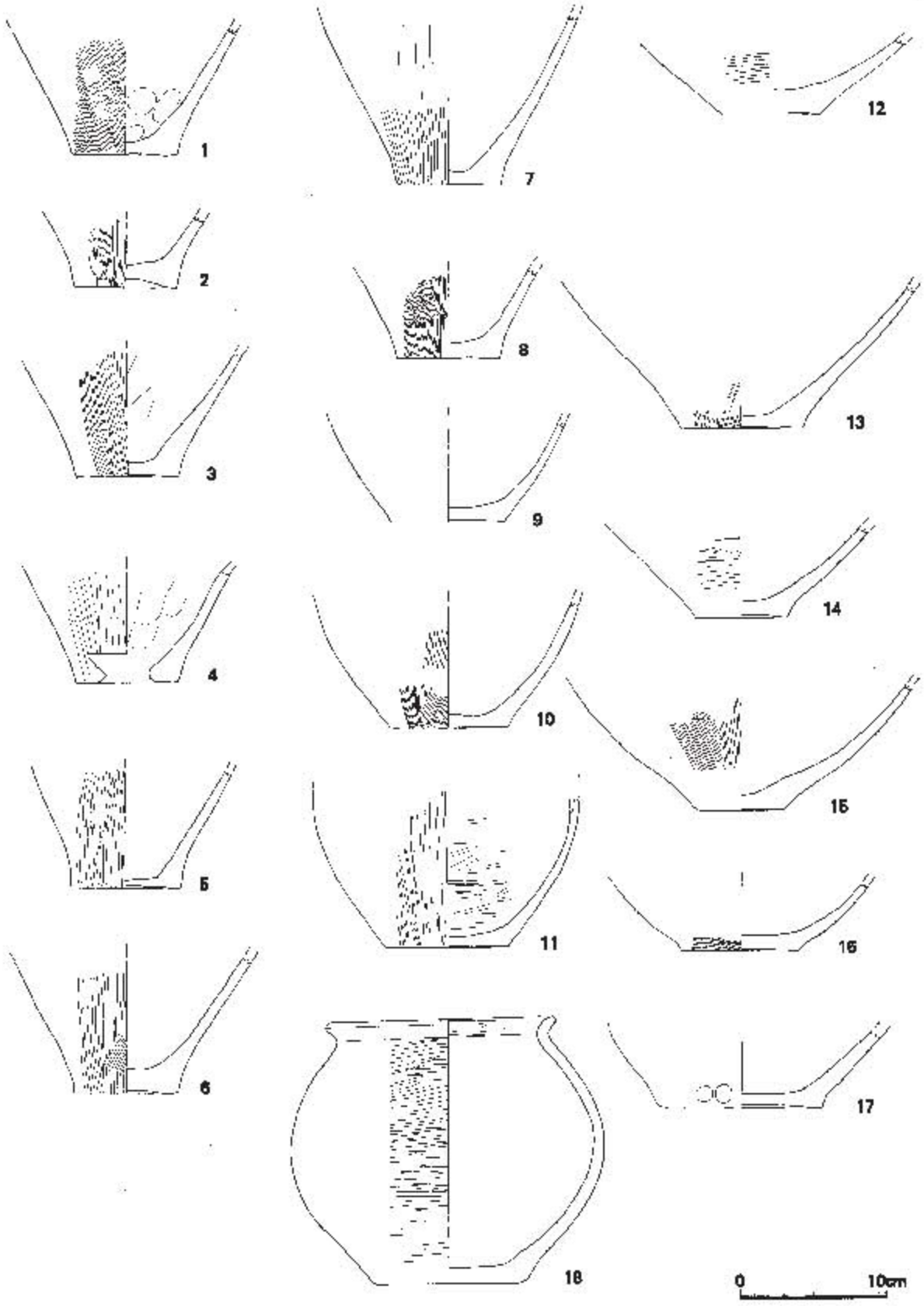


図46　SK11292土坑出土土器8（1/4）

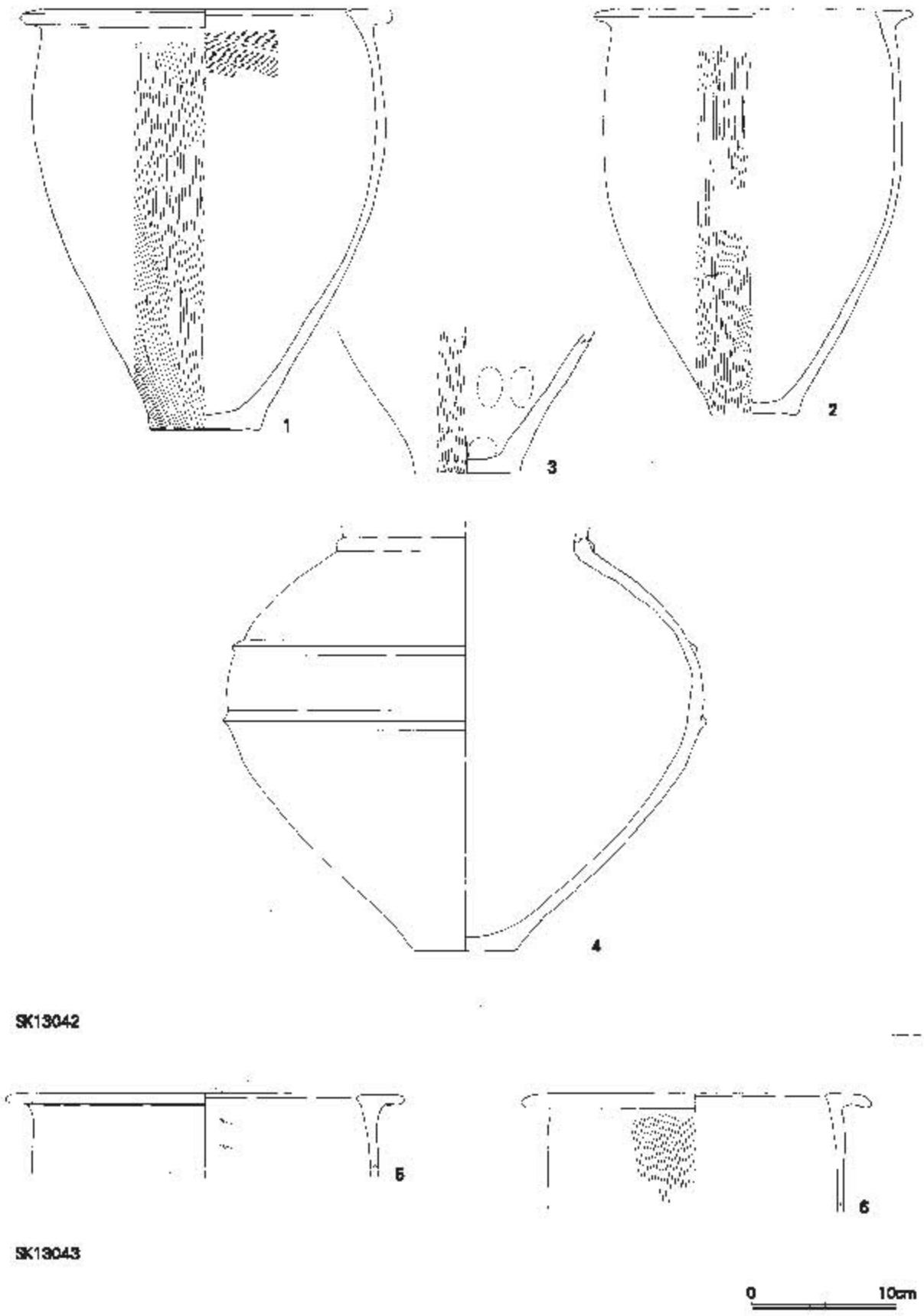


図47　土坑出土土器1（1/4）

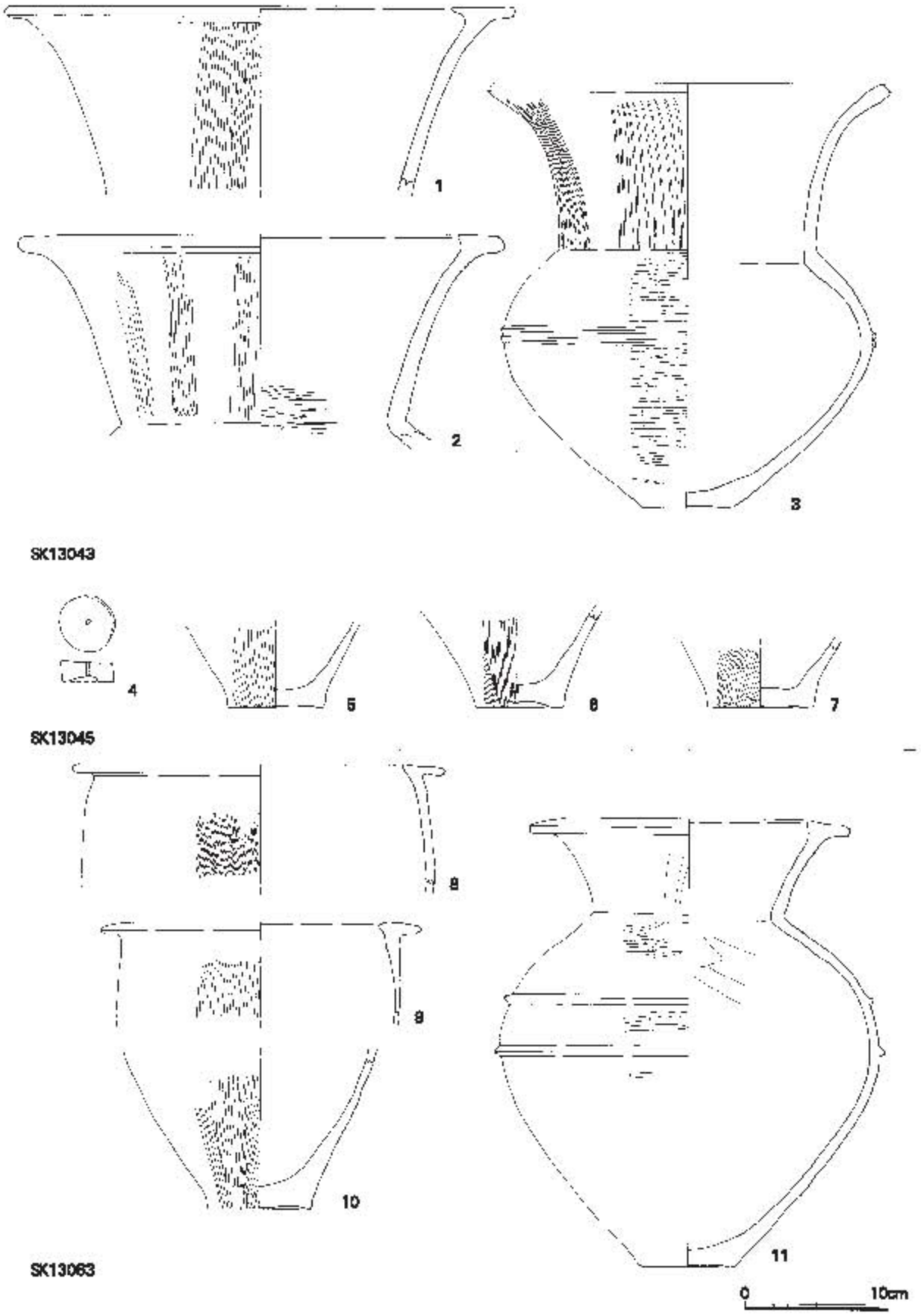


図48　土坑出土土器2（1/4）

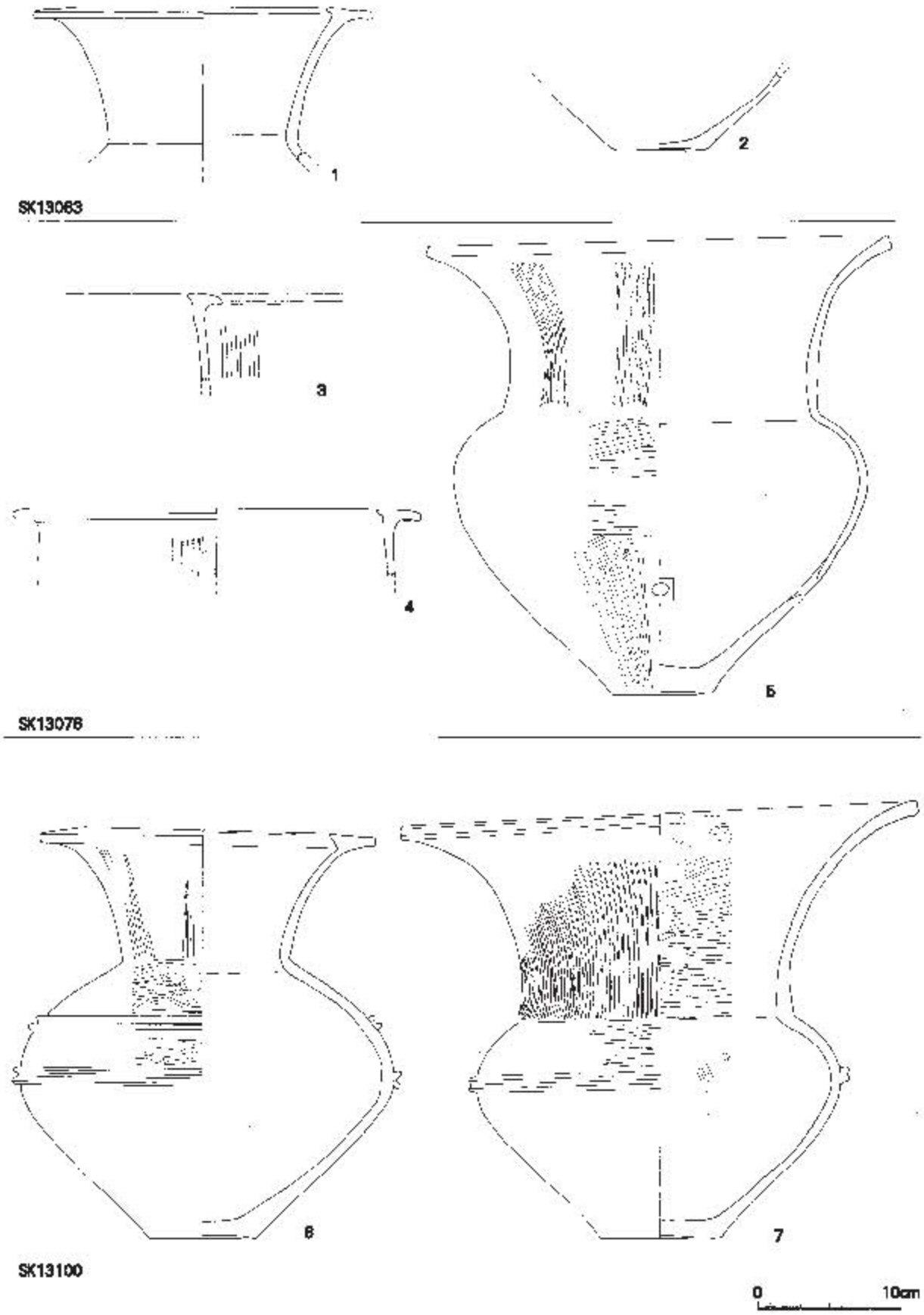


図49　土坑出土土器3（1/4）

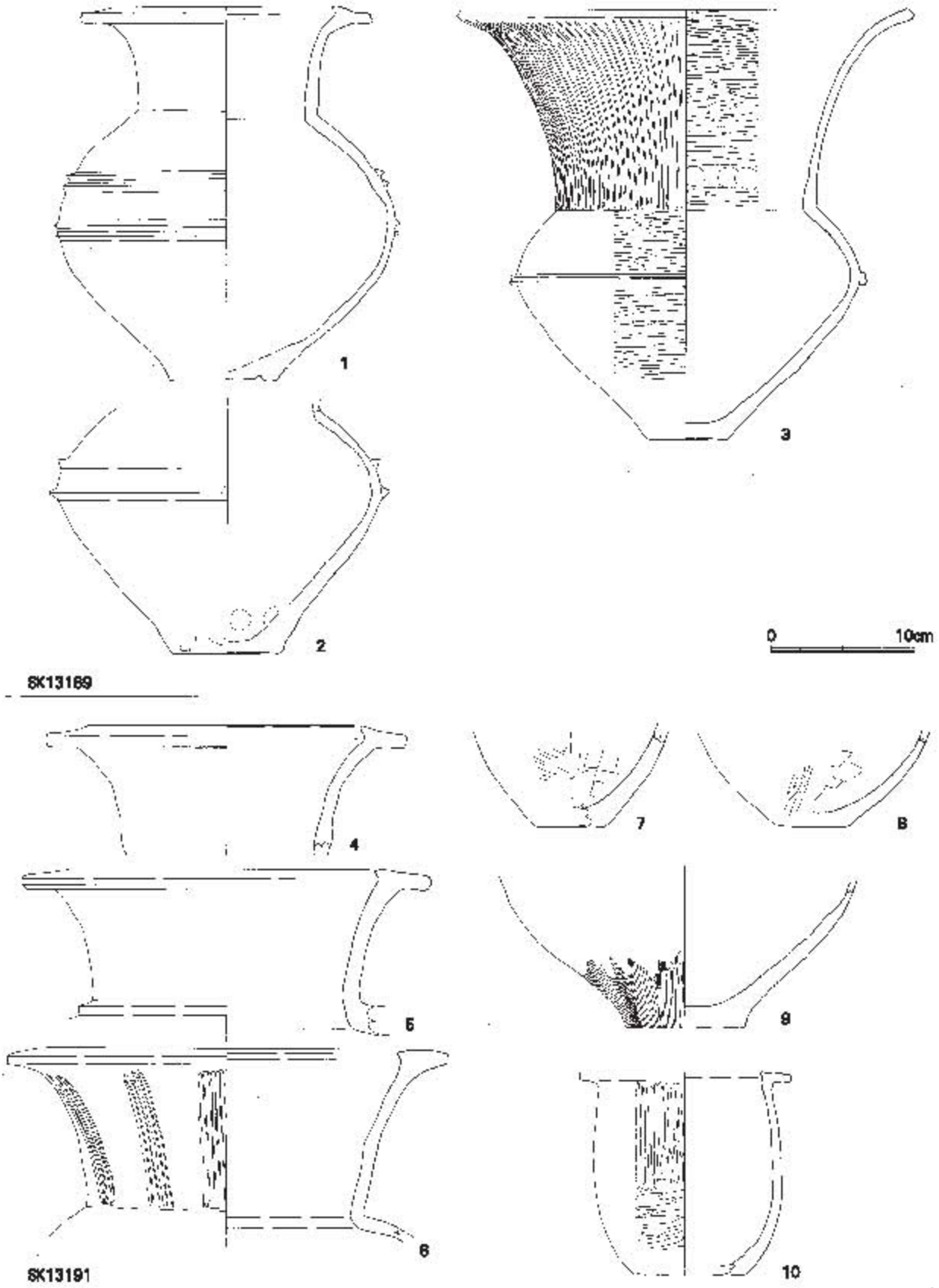


図50　土坑出土土器4（1/4）

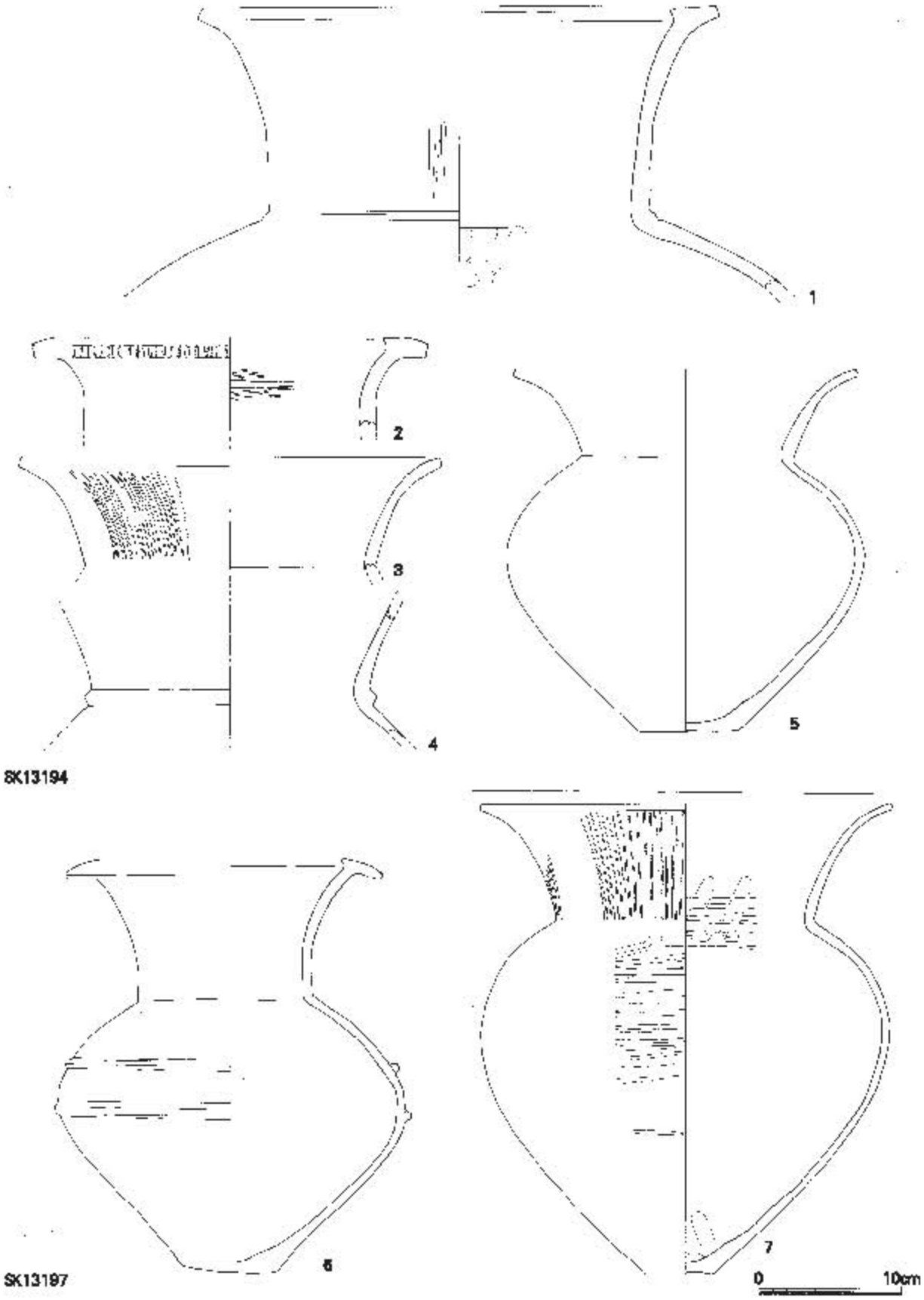


図51　土坑出土土器5（1/4）

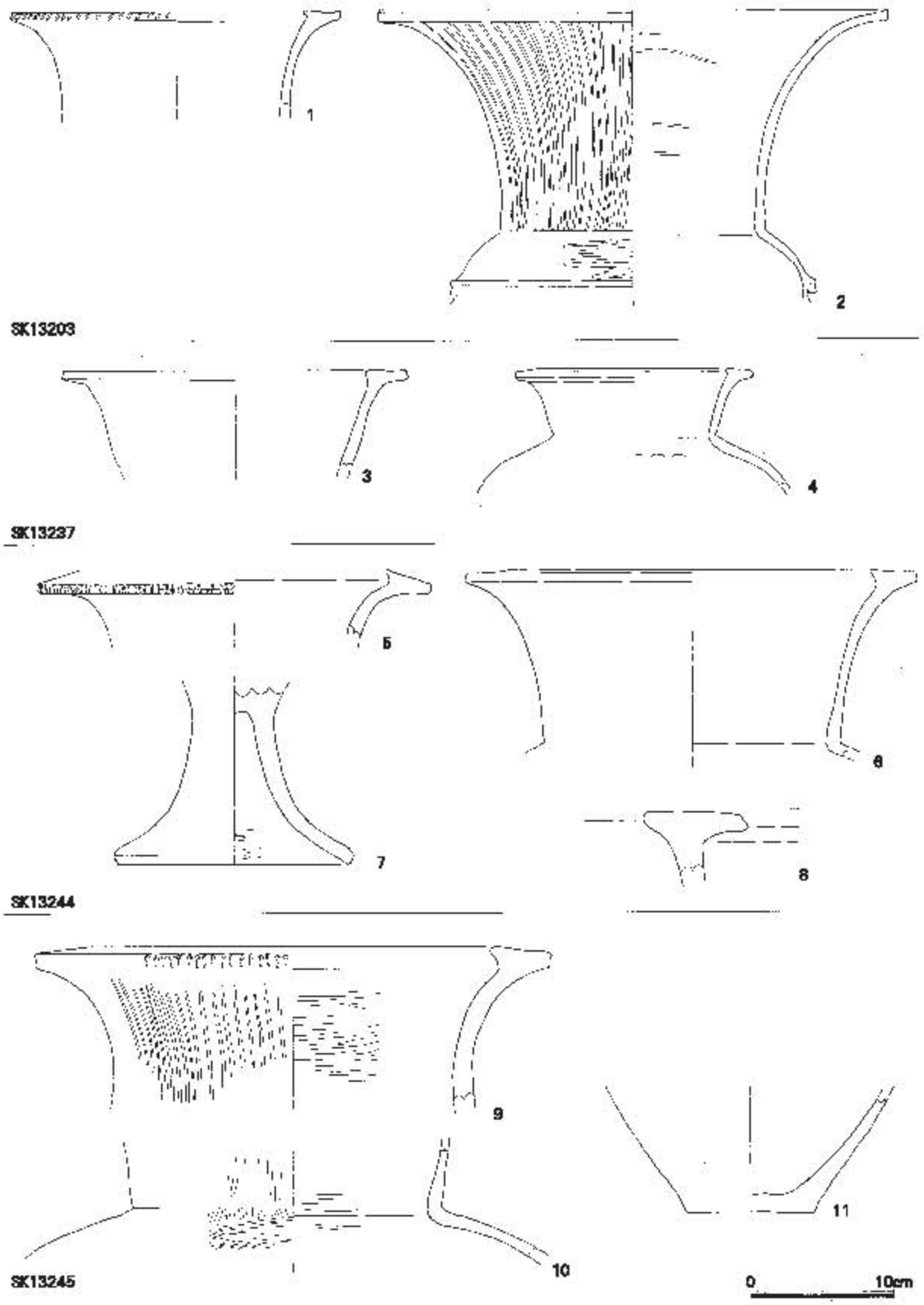


図52　土坑出土土器6（1/4）

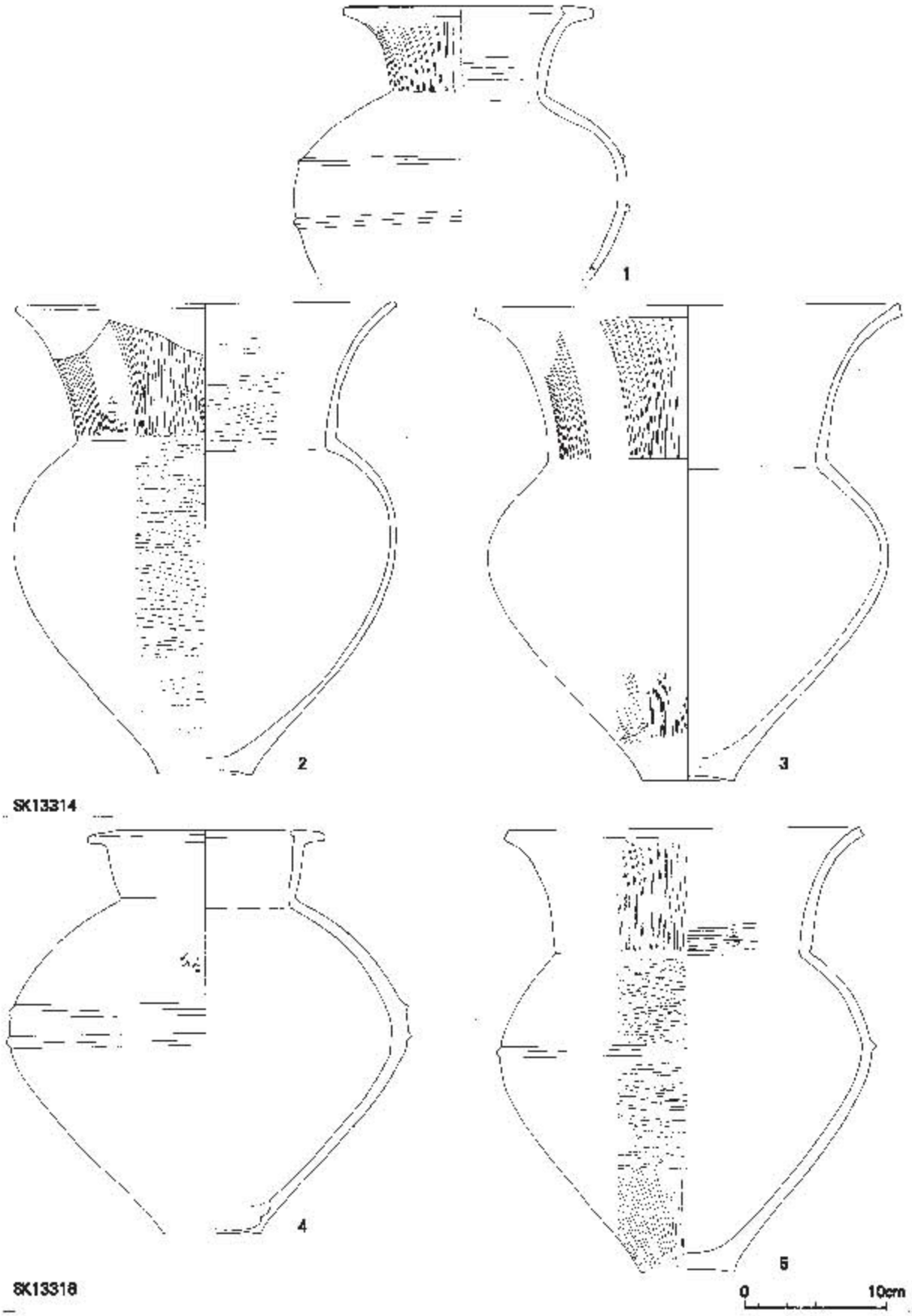


図53　土坑出土土器７（1/4）

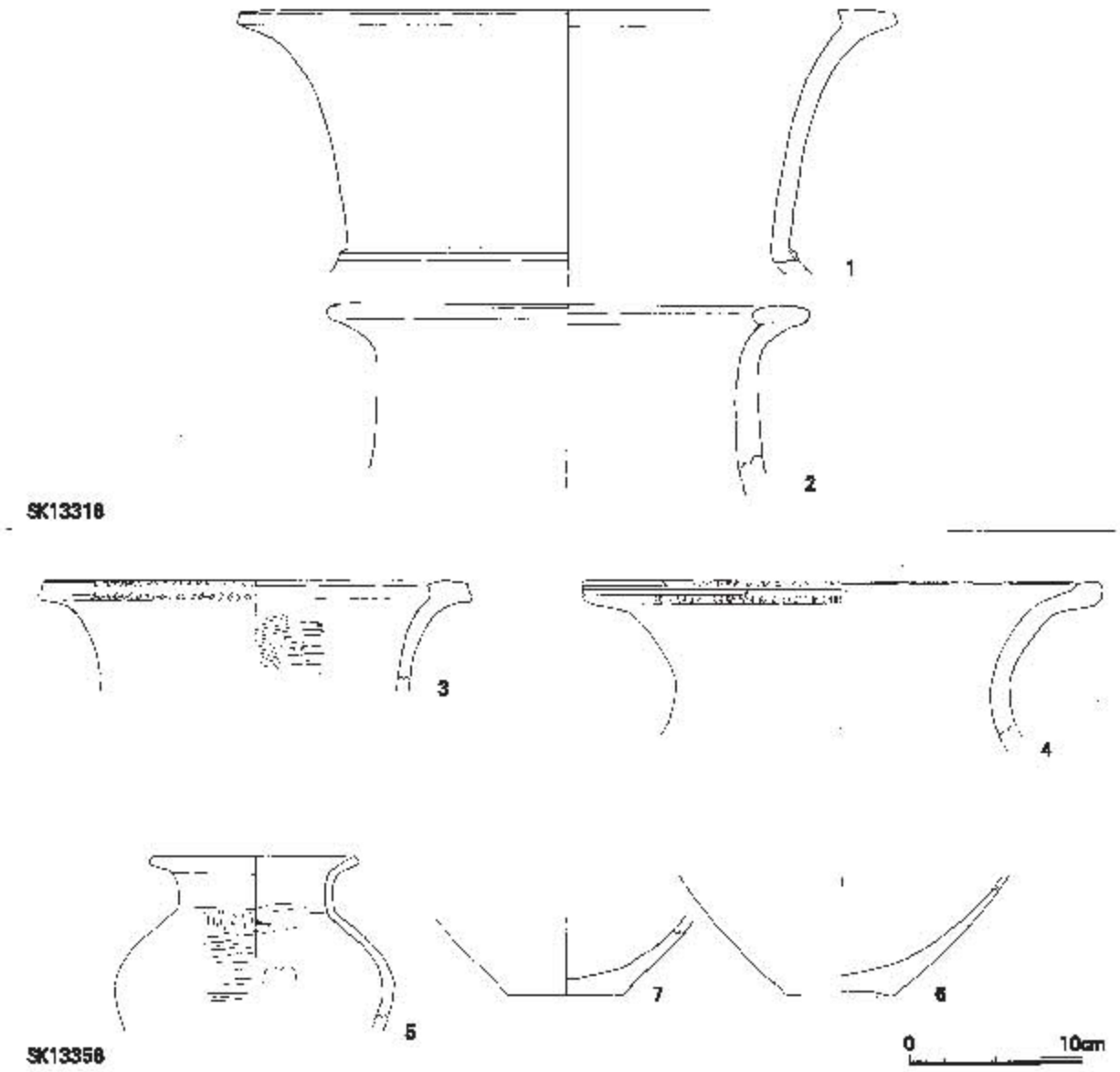


図54　土坑出土土器８（1/4）

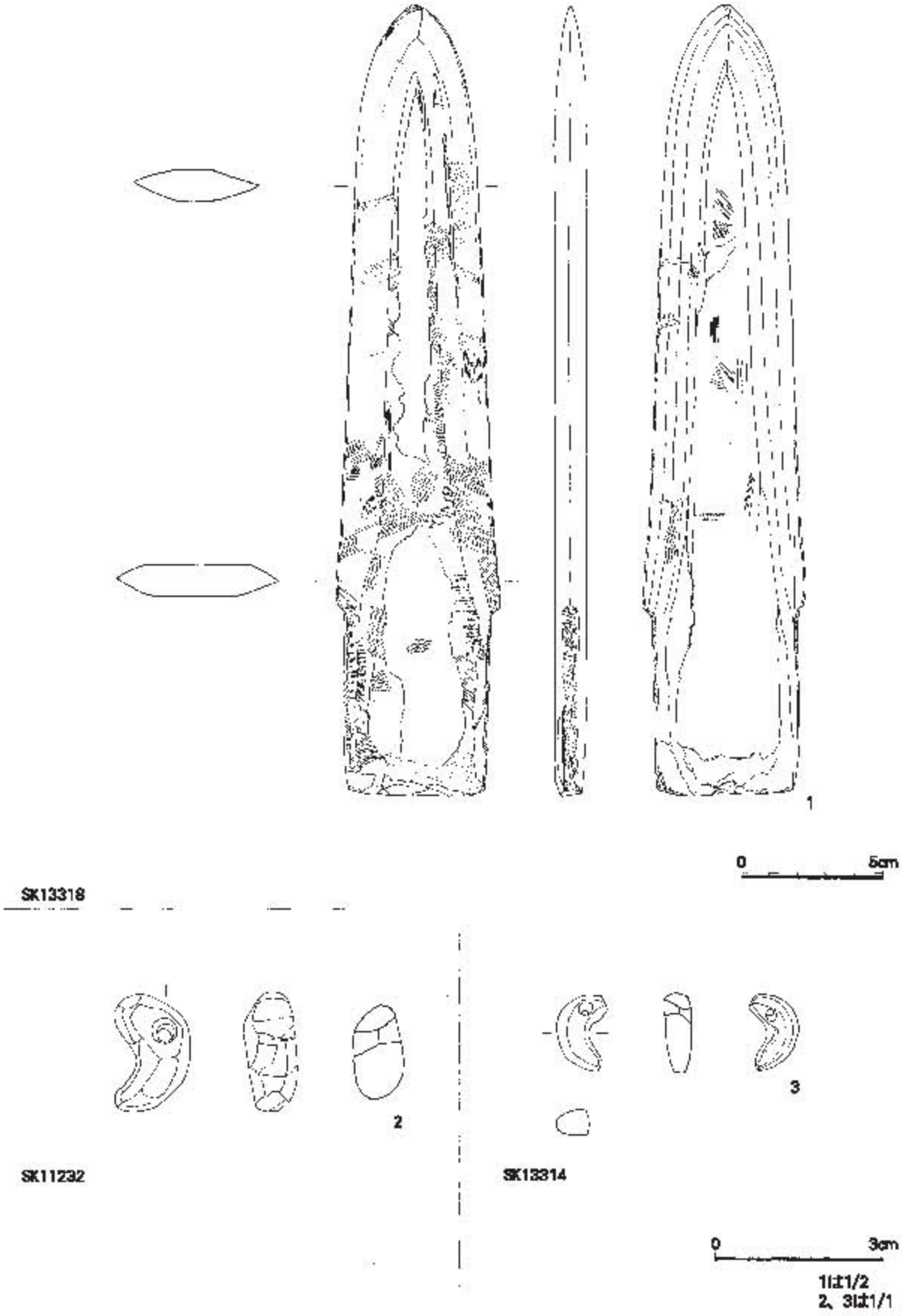


図 55　土坑出土石器・勾玉（1/2、1/1）

表6　土壙墓、土坑出土土器一覧表(1)

（　）は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量（cm）				調整方法	登録番号
					器高	口外径	胴部径	底径		
36-1	SK13155	土壙墓	埋土	壺	6.9	(24.2)	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000992
〃-2	SK13155	土壙墓	埋土	壺	4.8	(17.0)	-	-	外：ヨコナデ後暗文 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000993
〃-3	SK13155	土壙墓	埋土	壺	4.5	(35.5)	-	-	外：ミガキ 口：ヨコナデ 内：ヨコナデ	08000994
〃-4	SK13328	土壙墓	No.1	壺	30.1	35.9	26.8	7.8	外上部：暗文 外下部：ミガキ 内上部：ミガキ 内下部：ナデ	08000513
〃-5	SK13339	土壙墓	No.1	壺	31.4	28.2	24.0	5.0	外上部：暗文 内下部：ナデ	08000580
39-1	SK11292	土坑	-	甕	9.1	(29.8)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001584
〃-2	SK11292	土坑	-	甕	12.5	(32.2)	(29.6)	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001585
〃-3	SK11292	土坑	-	甕	7.8	27.8	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001626
〃-4	SK11292	土坑	-	甕	5.4	(28.1)	-	-	外：ハケメ 口：ハケメ 内：ナデ	08001745
〃-5	SK11292	土坑	-	甕	7.3	(25.5)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001747
〃-6	SK11292	土坑	-	甕	8.7	(27.0)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001748
〃-7	SK11292	土坑	No.262	甕	32.3	28.5	25.5	7.4	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：工具ナデ	08001800
〃-8	SK11292	土坑	-	甕	30.6	19.7	22.7	7.1	外：ナデ後ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001669
〃-9	SK11292	土坑	-	甕	6.7	(26.0)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001746
〃-10	SK11292	土坑	-	甕	11.4	(31.4)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001587
〃-11	SK11292	土坑	-	甕	5.2	(26.6)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001744
〃-12	SK11292	土坑	-	甕	7.6	27.8	-	-	外：ハケメ？ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001737
40-1	SK11292	土坑	No.37	甕	6.6	26.0	-	-	外：ハケ後ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001627
〃-2	SK11292	土坑	No.251,300	甕	8.6	26.4	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001738
〃-3	SK11292	土坑	-	甕	17.1	30.0	27.8	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001583

表7　土壙墓、土坑出土土器一覧表(2)

（　）は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量（cm）				調整方法	登録番号
					器高	口外径	胴部径	底径		
40-4	SK11292	土坑	-	甕	27.0	32.2	30.4	-	外：ハケメ 　　突帯からヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001769
〃-5	SK11292	土坑	-	甕	7.1	-	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001586
〃-6	SK11292	土坑	-	甕	13.7	46.8	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001589
〃-7	SK11292	土坑	-	甕	9.0	(40.2)	-	-	外：ハケメ 　　突帯からヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001590
〃-8	SK11292	土坑	-	甕	13.3	(27.6)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001588
〃-9	SK11292	土坑	-	甕	4.1	(20.6)	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001739
〃-10	SK11292	土坑	-	甕	12.2	(24.9)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001743
41-1	SK11292	土坑	-	甕	9.1	(38.0)	-	-	外：ハケメ 　　突帯からヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001591
〃-2	SK11292	土坑	-	甕	10.7	(24.5)	-	-	外：ハケメ 口：ハケメ 内：ナデ	08001749
〃-3	SK11292	土坑	-	甕	23.2	21.4	19.0	6.9	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001767
〃-4	SK11292	土坑	-	甕	31.1	22.2	24.0	7.8	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001668
〃-5	SK11292	土坑	-	甕	22.8	-	-	7.1	外：ハケメ 内：ナデ	08001768
〃-6	SK11292	土坑	-	甕	3.9	-	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001755
〃-7	SK11292	土坑	-	甕	3.7	(25.5)	-	-	外：不明瞭 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001754
〃-8	SK11292	土坑	-	甕	4.7	(26.1)	-	-	外：ナデ 口：ナデ 内：ナデ	08001753
〃-9	SK11292	土坑	-	甕	7.5	(28.0)	-	-	外：ハケ後ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001750
〃-10	SK11292	土坑	-	甕	5.4	(23.0)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001752
〃-11	SK11292	土坑	-	甕	6.5	(23.7)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ハケメ	08001751

表８　土壙墓、土坑出土土器一覧表(3)

（　）は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点 No.	器種	法量（cm）				調整方法	登録番号
					器高	口外径	胴部径	底径		
42-1	SK11292	土坑	-	壺棺	17.6	32.7	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：不明瞭	07002040
〃-2	SK11292	土坑	-	壺棺	54.7	32.2	48.2	9.6	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	07002042
43-1	SK11292	土坑	-	壺棺	21.9	(67.0)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ハケ後ナデ	08001740
〃-2	SK11292	土坑	-	壺棺	10.5	(54.0)	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001741
〃-3	SK11292	土坑	-	壺棺	5.4	(31.1)	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001742
〃-4	SK11292	土坑	-	壺	7.0	(22.2)	-	-	外：タテナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001592
〃-5	SK11292	土坑	-	壺	6.1	21.8	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ヨコナデ	08001593
〃-6	SK11292	土坑	-	壺	13.8	27.2	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001687
〃-7	SK11292	土坑	-	壺	8.2	(27.6)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001596
〃-8	SK11292	土坑	-	壺	5.7	(27.0)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001597
〃-9	SK11292	土坑	-	壺	8.3	(27.8)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001598
〃-10	SK11292	土坑	-	壺	4.6	(20.9)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001599
〃-11	SK11292	土坑	-	壺	8.6	22.5	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ヨコナデ	08001686
〃-12	SK11292	土坑	-	壺	8.5	(23.9)	-	-	外：ハケ後ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001594
44-1	SK11292	土坑	-	壺	11.2	(33.2)	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001595
〃-2	SK11292	土坑	-	壺	9.7	(24.1)	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ヨコナデ	08001648
〃-3	SK11292	土坑	-	壺	27.2	(22.2)	21.4	6.0	上部外：暗文 下部外：ヘラミガキ 上部内：上下ナデ 下部内：ナデ	08001801
〃-4	SK11292	土坑	-	壺	31.2	29.4	26.8	7.0	上部外：暗文 下部外：ヘラミガキ 上部内：ヘラミガキ 下部内：ナデ	08001798
〃-5	SK11292	土坑	-	壺	31.0	(35.2)	(26.8)	(6.9)	上部外：暗文 下部外：ミガキ 上部内：ミガキ 下部内：ナデ	08001690

表9　土壙墓、土坑出土土器一覧表(4)

( )は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量(cm)				調整方法	登録番号
					器高	口外径	脚部径	底径		
44-6	SK11292	土坑	-	壷	20.6	33.8	28.2	-	外：不明 内：ナデ	08001729
45-1	SK11292	土坑	No.173	高杯	27.1	24.0	-	裾部 17.9	上部外：ナデ 下部外：ヘラミガキ 口：ヨコナデ 上部内：ヘラミガキ 下部内：ハケメ 脚部径：ヨコナデ	08001790
〃-2	SK11292	土坑	No.39	高杯	23.1	-	-	裾部 17.4	下部外：ヘラミガキ 上部内：ナデ 下部内：シボリ痕	08001811
〃-3	SK11292	土坑	No.4	器台	13.8	(9.4)	-	裾部 12.6	口：ヨコナデ 外：ハケメ 裾部：ヨコナデ 内：ナデ	08001805
〃-4	SK11292	土坑	-	器台	8.4	-	-	裾部 10.4	外：ハケメ 内：ナデ・ハケ	08001806
〃-5	SK11292	土坑	-	器台	8.0	-	-	裾部 10.1	外：ハケメ 下裾：ヨコナデ 内：ナデ	08001807
〃-6	SK11292	土坑	-	器台	13.6	10.0	-	裾部 10.9	口上外：ヨコナデ 外：ハケメ 下外：ヨコナデ 口上内：ハケメ 内：ナデ下 下内：ハケメ	08001803
〃-7	SK11292	土坑	No.154	器台	16.1	11.1	-	裾部 12.7	外：ハケメ 内：上下方向ナデ	08001802
〃-8	SK11292	土坑	-	器台	16.7	9.3	-	裾部 12.4	外：ハケメ 受部：カキメ 内：上下方向ナデ	08001804
〃-9	SK11292	土坑	-	支脚	7.6	-	-	(8.3)	外面：ナデ	08001808
〃-10	SK11292	土坑	-	支脚	6.1	-	-	7.6	外面：ナデ	08001809
〃-11	SK11292	土坑	-	支脚	4.5	-	-	8.5	外面：ナデ	08001810
〃-12	SK11292	土坑	-	支脚	11.4	-	-	(10.3)	外面：ナデ	08001813
〃-13	SK11292	土坑	-	椀	5.3	12.3	-	6.4	外面：ナデ 内面：ナデ	08001812
〃-14	SK11292	土坑	-	鉢	15.0	23.4	-	8.4	外面：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001792
〃-15	SK11292	土坑	-	鉢	10.3	13.3	-	6.6	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ 底外：ナデ	08001793
〃-16	SK11292	土坑	No.63	鉢	10.6	16.6	-	7.4	外面：ヘラミガキ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001791
〃-17	SK11292	土坑	-	壺	7.3	-	-	-	外：ハケメ 内：ナデ	08001797
〃-18	SK11292	土坑	-	壺	9.4	摘み部 6.3	口縁部 (27.7)	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001795
〃-19	SK11292	土坑	-	壺	11.4	摘み部 6.5	-	-	外：ハケメ 摘み部：ナデ 内：ナデ	08001796

表10　土壙墓、土坑出土土器一覧表(5)

（　）は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量（cm）				調整方法	登録番号
					器高	口外径	胴部径	底径		
46-1	SK11292	土坑	-	壺？	8.6	-	-	7.2	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001629
〃-2	SK11292	土坑	-	壺？	4.9	-	-	7.0	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001630
〃-3	SK11292	土坑	-	壺？	8.5	-	-	7.0	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001631
〃-4	SK11292	土坑	-	壺？	7.7	-	-	7.0	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001632
〃-5	SK11292	土坑	-	壺？	8.0	-	-	7.6	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001633
〃-6	SK11292	土坑	-	壺？	9.3	-	-	7.2	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001634
〃-7	SK11292	土坑	-	壺？	11.5	-	-	7.2	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001635
〃-8	SK11292	土坑	-	壺？	6.5	-	-	7.0	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001637
〃-9	SK11292	土坑	-	壺？	6.7	-	-	7.8	外：ナデ 底：ナデ 内：ナデ	06001736
〃-10	SK11292	土坑	-	壺？	8.6	-	-	8.2	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001628
〃-11	SK11292	土坑	-	壺？	10.7	-	-	8.4	外：ミガキ 底：ナデ 内：ミガキ	06001636
〃-12	SK11292	土坑	-	甕？	5.2	-	-	6.6	外：ミガキ 底：ナデ 内：ナデ	06001730
〃-13	SK11292	土坑	-	甕？	9.7	-	-	8.5	外：ハケ後ナデ 底：ナデ 内：ナデ	06001731
〃-14	SK11292	土坑	No.260	甕？	6.2	-	-	6.2	外：ヘラミガキ 内：ナデ	06001733
〃-15	SK11292	土坑	-	甕？	8.5	-	-	5.6	外：ハケメ 底：ナデ 内：ナデ	06001735
〃-16	SK11292	土坑	-	鉢？	4.7	-	-	8.0	外：ナデ 外下：ハケメ	06001732
〃-17	SK11292	土坑	-	鉢？	5.4	-	-	10.8	外：ハケメ 外下：指押さえ	06001734
〃-18	SK11292	土坑	-	？	18.2	15.7	21.4	10.0	外胴部：ヘラミガキ 底：ナデ 口外：ヨコナデ 口内：ヘラミガキ 内：ナデ	06001799

表11　土壙墓、土坑出土土器一覧表(6)

（　）は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量（cm）				調整方法	登録番号
					器高	口外径	脚部径	底径		
47-1	SK13042	土坑	No.3 No.48 No.54	壺	29.0	25.8	24.4	7.6	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001091
〃-2	SK13042	土坑	-	壺	28.0	22.3	20.8	6.0	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：不明瞭	08001092
〃-3	SK13042	土坑	No.54	壺？	9.3	-	-	7.2	外：ハケメ 内：ナデ 底：ナデ	08000978
〃-4	SK13042	土坑	No.11	壺	28.5	-	33.0	7.2	外：ナデ 突：ヨコナデ 内：ナデ 底：ナデ	08000977
〃-5	SK13043	土坑	No.1,267	壺	5.1	(27.5)	-	-	外：ヨコナデ 口：ヨコナデ 内：ケズリ	08000983
〃-6	SK13043	土坑	No.14	壺	7.7	(24.3)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000984
48-1	SK13043	土坑	No.60	壺	29.6	(28.3)	-	-	外：ミガキ 突：ヨコナデ 口：ナデ 内：ナデ	08000981
〃-2	SK13043	土坑	No.2,3,5,26,30, 96,101,264,276	壺	14.5	34.1	-	-	口：ヨコナデ 内：ナデ	08001445
〃-3	SK13043	土坑	No.7,8,9,11, 12,90	壺	12.7	35.8	-	-	口：ヨコナデ 内：ナデ	08000982
〃-4	SK13045	土坑	埋土	紡錘車	厚み 1.4	径 3.9	-	-	-	08000998
〃-5	SK13045	土坑	埋土	壺？	5.3	-	-	6.6	外：ハケメ 内：ナデ 底：ナデ	08000996
〃-6	SK13045	土坑	埋土	壺？	6.5	-	-	6.0	外：ハケメ 内：ナデ 底：ナデ	08000997
〃-7	SK13045	土坑	埋土	壺？	4.4	-	-	7.4	外：ハケメ 内：ナデ 底：ナデ	08000995
〃-8	SK13063	土坑	No.4, 埋土	壺	8.4	(26.0)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000864
〃-9	SK13063	土坑	No.5, 埋土	壺	6.5	(22.3)	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000865
〃-10	SK13063	土坑	No.4, 埋土	壺	10.6	-	-	7.2	外：ハケメ 内：ナデ 底：ナデ	08000868
〃-11	SK13063	土坑	No.1	壺	31.3	22.3	27.4 (突合)	6.7	外：ヘラミガキ (脚部下不明瞭) 口：ヨコナデ 内：工具ナデ (脚部下不明瞭)	08001447
49-1	SK13063	土坑	No.3, 埋土	壺	10.8	23.8	-	-	外：ナデ 口：ナデ 内：ナデ	08000867
〃-2	SK13063	土坑	埋土	壺	5.4	-	-	6.3	外：ナデ 内：ナデ 底：ナデ	08000866

表12　土壙墓、土坑出土土器一覧表(7)

（　）は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量（cm）				調整方法	登録番号
					器高	口外径	胴部径	底径		
49-3	SK13076	土坑	No.2	甕	5.4	28.5	-	-	外：ハケメ（不明瞭） 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000991
〃-4	SK13076	土坑	No.2	甕	6.2	-	-	-	外：ハケメ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000990
〃-5	SK13076	土坑	No.1	壺	32.0	32.8	29.0	7.0	外：ミガキ 口：ヨコナデ 内：ナデ 底：ナデ	08000989
〃-6	SK13100	土坑	No.1	壺	28.7	23.5	27.4（突合）	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001097
〃-7	SK13100	土坑	No.2	壺	30.5	36.3	26.7（突合）	8.4	外：不明 口：ヘラミガキ 内：胴部上ハケメ 胴部下：工具ナデ	08001446
50-1	SK13189	土坑	No.8	壺	28.0	20.4	24.0（突合）	7.4	外：工具ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000985
〃-2	SK13189	土坑	No.9, 埋土	壺	17.3	-	23.8（突合）	7.8	胴部上：ナデ 胴部下：工具ナデ 内：ナデ底：ナデ 底：ナデ	08000986
〃-3	SK13189	土坑	No.10	壺	29.7	31.2	25.0（突合）	5.7	外：ヘラミガキ 底部付近ナデ 内：ヘラミガキ 底：ナデ	08001460
〃-4	SK13191	土坑	-	壺	8.6	25.1	-	-	口：ヨコナデ 内：ヨコナデ	08001448
〃-5	SK13191	土坑	-	壺	11.5	28.5	-	-	口：ヨコナデ 内：ナデ	08001450
〃-6	SK13191	土坑	No.4	壺	12.7	30.9	-	-	外：ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000848
〃-7	SK13191	土坑	No.3	甕	6.7	-	-	4.8	外：ヘラミガキ 内：工具ナデ 底：ナデ	08001451
〃-8	SK13191	土坑	No.11	甕	6.3	-	-	5.0	外：不明瞭 内：工具ナデ 底：ナデ	08001452
〃-9	SK13191	土坑	No.2	壺？	9.8	-	-	4.3	外：ナデ 底部付近：ハケメ 内：ナデ	08000846
〃-10	SK13191	土坑	No.6	甕	14.1	14.75	13.2	-	胴部上：ミガキ 胴部下：ヨコミガキ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08000847
51-1	SK13194	土坑	No.21	甕棺	19.9	(36.6)	-	-	外：不明瞭 口：ヨコナデ 内：指頭圧痕	08001093
〃-2	SK13194	土坑	No.17	壺	6.5	(27.9)	-	-	口：ナデ	08001095
〃-3	SK13194	土坑	No.10,11,12,16	壺	8.0	(29.7)	-	-	口：ヨコナデ	08001094
〃-4	SK13194	土坑	No.2,3,5,8	壺	9.5	-	-	-	内：ナデ	08001096
〃-5	SK13194	土坑	No.18	壺	25.5	24.3	25.2	7.0	外：ヘラミガキ 口：ヘラミガキ 内：ナデ 底：ナデ	08000882

表13　土壙墓、土坑出土土器一覧表(8)

( )は推定

挿図番号	出土遺構	種　別	出土地点No.	器種	法量(cm)				調整方法	登録番号
					器高	口外径	胴部径	底径		
51-6	SK13197	土坑	No.1,2,埋土	壷	29.0	(22.7)	-	6.7	外：不明瞭 口：ヨコナデ 内：ナデ 底：ナデ	08000988
〃-7	SK13197	土坑	No.2,3	壷	33.0	(29.0)	-	4.7	外：不明瞭 口：ヨコナデ 内：ナデ 底：ナデ	08000987
52-1	SK13203	土坑	埋土	壷	6.8	(23.0)	-	-	口：ナデ	08000804
〃-2	SK13203	土坑	No.4	壷	19.9	(35.6)	-	-	外：ミガキ	08000805
〃-3	SK13237	土坑	埋土	壷	6.8	(24.3)	-	-	口：ヨコナデ	08000887
52-4	SK13237	土坑	埋土	壷	8.2	(16.6)	-	-	外：ナデ 口：ナデ 内：ナデ	08000888
〃-5	SK13244	土坑	埋土	壷	4.8	(27.5)	-	-	口：ナデ	08000877
〃-6	SK13244	土坑	No.2	壷	12.5	(31.6)	-	-	口：ナデ	08000876
〃-7	SK13244	土坑	No.4	高杯	12.1	-	-	(16.8)	支脚上部：不明瞭 支脚下部：ハケメ 内支脚下部：ハケメ 内支脚上部：ナデ	08000878
〃-8	SK13244	土坑	埋土	甕棺	4.6	-	-	-	口：ヨコナデ	08000879
〃-9	SK13245	土坑	-	壷	10.9	(36.3)	-	-	口：ヨコナデ	08001462
〃-10	SK13245	土坑	埋土	壷	7.7	-	-	-	外：ヘラミガキ 内：ナデ	08001463
〃-11	SK13245	土坑	埋土	甕？	8.1	-	-	9.0	外：不明瞭 内：ナデ 底：不明瞭	08001464
53-1	SK13314	土坑	No.2,4,10	壷	18.9	17.5	-		外：ミガキ 口：ナデ 内：ナデ	08000884
〃-2	SK13314	土坑	No.1	壷	33.2	(26.9)	-	-	外：ヘラミガキ 内：ナデ	08001461
〃-3	SK13314	土坑	No.5	壷	30.4	30.1	-	6.4	外：ナデ 内：ナデ	08000881
〃-4	SK13318	土坑	No.18	壷	28.4	16.7	-	6.9	外：ハケ後ナデ 口：ヨコナデ 内：ナデ	08001098
〃-5	SK13318	土坑	No.19	壷	31.2	25.3	-	6.7	口：ヨコナデ	08001099
54-1	SK13318	土坑	No.11	壷	14.8	(38.2)	-	-	口：ヨコナデ	08000865
〃-2	SK13318	土坑	No.2	甕	10.2	(28.0)	-	-	外：ミガキ 内：ナデ	08000866
〃-3	SK13358	土坑	埋土	甕	5.9	(25.1)	-	-	口：ヨコナデ	06000872
〃-4	SK13358	土坑	No.7	甕	9.3	(30.2)	-	-	口：不明	06000871
〃-5	SK13358	土坑	No.9	壷	9.6	12.2	-	-	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	06000874
〃-6	SK13358	土坑	No.5	壷？	6.2	-	-	6.1	内：ナデ	06000875
〃-7	SK13358	土坑	No.1,2	壷？	3.8	-	-	6.6	外：ナデ 内：不明	06000873

表14　土壙墓、土坑出土石器・青銅器一覧表

挿図番号	遺構番号	種別	出土地点No.	器種	法量(cm)			備考	登録番号
					全長	最大幅	最大厚		
37-1	SK13362	土壙墓	No.1	磨製石鏃	9.4	2.2	0.7	完形	06003932
〃-2	SK13362	土壙墓	No.2	磨製石鏃	9.7	2.0	0.3		06003933
〃-3	SK13362	土壙墓	No.3	磨製石鏃	10.3	2.4	0.5		06003934
〃-4	SK13363	土壙墓	No.1	磨製石鏃	(4.6)	2.2	0.3		06003935
〃-5	SK13385	土壙墓	No.1	切先	(6.0)	2.1	0.7	先端の一部、青銅製	06003946
〃-6	SK13385	土壙墓	No.2	石剣切先	(13.4)	3.4	0.8	基部欠損	06003947
55-1	SK13318	土坑	No.1	石戈	27.9	5.8	1.1		06003938

表15　土壙墓、土坑出土玉類一覧表

挿図番号	遺構番号	種別	出土地点No.	器種	材質	法量(mm)					穿孔方向	登録番号
						全長	最大幅	最大厚	孔径			
									最大	最小		
38-1	SK13346	土壙墓	No.30	勾玉	硬玉	9.8	5.8	3.4	1.9	1.8	両面	10000758
〃-2	SK13353	土壙墓	No.1	垂飾	硬玉	10.0	4.5	4.0	2.2	0.8	両面	06003922
〃-3	SK13371	土壙墓	No.1	勾玉	硬玉	19.5	13.5	6.7	3.4	3.3	両面	06003920
〃-4	SK13371	土壙墓	No.2	獣形勾玉	硬玉	31.6	14.2	9.8	4.7	4.6	両面	04002391
55-2	SK11232	土坑	-	勾玉	硬玉	21.2	14.6	8.8	4.7	4.1	両面	03001622
〃-3	SK13314	土坑	No.1	勾玉	硬玉	13.5	8.4	5.3	2.5	1.9	両面	06003919

表16　土壙墓、土坑出土管玉一覧表

個体番号	遺構番号	種別	出土地点No.	法量(mm) 全長	直径	孔径 最大	孔径 最小	穿孔方法	材質	種別	残存状況
1	SK13346	土壙墓	No.1	6.20	3.10	1.48	1.36	両面	碧玉	管玉	
2	SK13346	土壙墓	No.2	8.26	3.00	1.46	1.46	両面	碧玉	管玉	
3	SK13346	土壙墓	No.3	6.60	4.34	1.44	1.28	両面	碧玉	管玉	
4	SK13346	土壙墓	No.4	9.90	3.50	1.68	1.50	両面	碧玉	管玉	
5	SK13346	土壙墓	No.5	6.48	3.30	1.44	1.38	両面	碧玉	管玉	
6	SK13346	土壙墓	No.6	6.40	3.10	1.56	1.44	両面	碧玉	管玉	
7	SK13346	土壙墓	No.7	7.46	3.14	1.60	1.50	両面	碧玉	管玉	
8	SK13346	土壙墓	No.8	11.56	3.18	1.66	1.74	両面	碧玉	管玉	
9	SK13346	土壙墓	No.9	7.40	3.20	1.44	1.16	両面	碧玉	管玉	
10	SK13346	土壙墓	No.10	4.86	3.15	1.78	1.54	両面	碧玉	管玉	一端欠損
11	SK13346	土壙墓	No.11	7.04	2.76	1.46	1.44	両面	碧玉	管玉	
12	SK13346	土壙墓	No.12	5.70	3.36	1.50	1.28	両面	碧玉	管玉	
13	SK13346	土壙墓	No.13	4.58	3.06	1.58	1.50	両面	碧玉	管玉	一端欠損
14	SK13346	土壙墓	No.14	6.04	3.12	1.40	1.02	両面	碧玉	管玉	
15	SK13346	土壙墓	No.15	4.82	3.14	1.82	1.66	両面	碧玉	管玉	
16	SK13346	土壙墓	No.16	8.72	3.26	1.78	1.64	両面	碧玉	管玉	
17	SK13346	土壙墓	No.17	8.14	3.02	1.56	1.44	両面	碧玉	管玉	
18	SK13346	土壙墓	No.18	7.96	3.02	1.64	1.32	両面	碧玉	管玉	
19	SK13346	土壙墓	No.19	5.74	3.12	1.16	1.08	両面	碧玉	管玉	
20	SK13346	土壙墓	No.20	8.94	3.04	1.62	1.48	両面	碧玉	管玉	
21	SK13346	土壙墓	No.21	8.00	3.02	1.42	1.32	両面	碧玉	管玉	
22	SK13346	土壙墓	No.22	7.70	3.42	1.68	1.50	両面	碧玉	管玉	一端欠損
23	SK13346	土壙墓	No.23	6.44	3.58	1.66	1.62	両面	碧玉	管玉	
24	SK13346	土壙墓	No.24	8.24	3.10	1.38	1.30	両面	碧玉	管玉	
25	SK13346	土壙墓	No.25	9.76	3.22	1.70	1.54	両面	碧玉	管玉	
26	SK13346	土壙墓	No.26	8.28	3.30	1.40	1.30	両面	碧玉	管玉	
27	SK13346	土壙墓	No.27	8.24	3.02	1.52	1.32	両面	碧玉	管玉	
28	SK13346	土壙墓	No.28	7.34	2.86	1.50	1.36	両面	碧玉	管玉	
29	SK13346	土壙墓	No.29	7.10	3.10	1.58	1.56	両面	碧玉	管玉	一端欠損
30	SK13346	土壙墓	埋土	6.34	2.72	1.44	1.22	両面	碧玉	管玉	
31	SK13353	土壙墓	No.2	5.96	2.88	1.42	1.04	両面	碧玉	管玉	
32	SK13372	土壙墓	No.1	14.28	4.16	2.06	2.00	両面	碧玉	管玉	一端欠損
33	SK13372	土壙墓	No.2	19.80	3.68	2.06	1.78	両面	碧玉	管玉	
34	SK13314	土坑	No.2	5.40	2.66	1.32	1.08	両面	碧玉	管玉	
35	SK13314	土坑	No.3	4.76	2.66	1.50	1.44	両面	碧玉	管玉	
36	SK13314	土坑	埋土中	5.46	2.56	1.18	1.10	両面	碧玉	管玉	
37	SK13314	土坑	埋土中	7.48	3.30	1.88	1.82	両面	碧玉	管玉	
38	SK13322	土坑	No.1	7.40	3.64	1.44	1.34	両面	GT	管玉	
39	SK13322	土坑	No.2	6.80	2.86	1.08	1.08	両面	GT	管玉	
40	SK13322	土坑	No.3	11.10	3.50	1.56	1.34	両面	GT	管玉	
41	SK13322	土坑	埋土中	8.30	3.64	1.58	1.48	両面	GT	管玉	
42	SK13327	土坑	No.1	10.52	3.28	1.78	1.64	両面	碧玉	管玉	
43	SK13327	土坑	No.2	7.26	3.38	1.42	1.42	両面	碧玉	管玉	一端欠損
44	SK13327	土坑	No.3	6.80	3.12	1.48	1.38	両面	碧玉	管玉	
45	SK13351	土坑	No.1	6.00	3.16	1.62	1.42	両面	碧玉	管玉	
46	SK13378	土坑	No.1	6.70	2.88	1.50	1.26	両面	碧玉	管玉	
47	SK13387	土坑	No.1	16.52	3.80	1.68	1.58	両面	碧玉	管玉	
48	SK13387	土坑	No.2	10.42	4.02	1.64	1.50	両面	碧玉	管玉	
49	SK13387	土坑	No.3	8.88	4.02	1.64	1.62	両面	碧玉	管玉	
50	SK13387	土坑	No.4	11.64	4.16	2.07	1.78	両面	碧玉	管玉	
51	SK13399	土坑	No.1	7.76	2.20	0.90	0.84	両面	碧玉	管玉	

Ⅴ． 古墳時代の遺構と遺物

１，概要

本章に掲載する古墳５基は 11 区、12 区、13 区に立地する。11 区～ 13 区は調査年度ごとに便宜的に設定したものであり、以下、調査区とは 11 区～ 13 区を指す。

５世紀代の帆立貝形前方後円墳１基、円墳３基、６世紀代の前方後円墳１基を検出した。本調査区内の西側には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての墳墓群が築造されるが、古墳時代中・後期の古墳群はおもに調査区東側に南北方向に並ぶ。ST12002 古墳のみが古墳時代初頭の墳墓群の中に築造されるが、墳墓群と切りあうことはない。５基の古墳は墳丘を大きく削平され、内部主体は ST11141 古墳が基底石石材の一部を残すだけで、他の４基は掘り方も検出できず、周溝のみの遺存状態であった。

２，遺構

（1）ＳＴ１１００２古墳

調査区の北東部に位置する。本古墳に隣接して北方約 3.5 mには ST11067 が、南西約５mには ST11141 が、西方約 35 mに ST12002 がある。墳丘は削平を受け、盛土および内部主体も遺存せず周溝のみの検出である。前方部先端が明確でないため、円墳か前方後円墳か調査時から整理作業時においても悩んだ。しかし、前方部北側の周溝が明瞭に北西方に延びていることから帆立貝形前方後円墳と判断した。

墳丘基底面から弥生時代後期後半～終末の竪穴住居である SH11217 や SH11174 を検出した。また、前方部北側は弥生時代終末の竪穴住居である SH11228 をきって本墳周溝が掘削される。

墳丘・周溝

墳丘長 25.2 m、周溝外長 28.5m、後円部径 21.3 m、前方部幅 10.5m、前方部長 3.5 m、くびれ部幅 7.4 mを測る帆立貝形前方後円墳である。主軸は N78°Wである。周溝幅は約４～5m で、深さは 0.6m ～0.7m である。周溝断面形は逆台形で、周溝の立ち上りは緩やかである。周溝埋土は大きく５層からなる。上層から１層：黒褐色砂質土、２層：褐色砂質土、３層：にぶい黄褐色砂質土、４層：黒褐色砂質土、５層：にぶい黄橙色砂質土である。周溝埋土上層は部分的に葺石転石を含む。周溝底面は南側から北側にかけて 40cm の比高差がある。

前方部北側の周溝は明瞭に北西方に延び、くびれ部の屈曲も明瞭である。また、前方部南側の周溝も西方に伸びる。調査時の遺構原図には撹乱との記載がみえたが、撹乱の範囲が明確に記されておらず、前方部に伸びる周溝と捉えた。

後円部の墳丘裾部には鉢巻状に葺石がめぐる。遺存する葺石の幅は 50cm ～ 70cm で葺石の積み上げ方、配し方は ST11141 に比べ丁寧である。葺石は青緑色をした玄武岩？と花崗岩からなる。本遺跡周辺の丘陵部は花崗岩地帯であり、玄武岩？は本遺跡から北東約 3km の鏡山の中腹部で産出している。葺石の石材比率は玄武岩の塊石が多く、部分的に花崗岩が用いられる。石材の大きさは幼児頭大～人頭大である。

墳丘は地山削り出し整形のち若干の盛土をし、その上に葺石を数段配する。墳丘盛土は墳丘裾部のみに遺存する。

表17　古墳一覧表

古墳名	墳形	規模 (m)		主体部	主な出土遺物					備考（時期決定出土遺物）	時期
					土器	土製品	鉄製品	玉類	その他		
ST11002	帆立貝形前方後円墳	周溝外長	28.5	不明			鏃形鉄器 石突 1	滑石製 勾玉 1		須恵器壺口縁部片	ST11141 より古い。
		墳丘長	25.2								
		周溝幅	4.0～5.0								
		周溝の深さ	0.6～0.7								
ST11067	円墳	周溝外径	20.4	不明	須恵器 杯身 1、土師器 直口壺 1、椀 4、鉢 1	人形 土製品 9	環状鏡 板付轡 1		水晶 原石 4	環状鏡板付轡、須恵器、土師器	TK47
		墳丘径	16.8								
		周溝幅	1.9～4.5								
		周溝の深さ	0.55～0.80								
ST11141	円墳	周溝外径	21.4～23.7	竪穴系横口式石室	須恵器 瓶1、土師器椀 1	器材 埴輪片 2	無遊環鏡轡 1、無引手鏡轡 1、鉄鏃 1	滑石製 勾玉 1、ガラス 小玉 13		無遊環鏡轡 1、無引手鏡轡 1、須恵器	TK208～TK23
		墳丘径	18.2								
		周溝幅	3.4～5.0								
		周溝の深さ	0.35～0.70								
ST11158	前方後円墳	周溝外長	37.5	不明	須恵器 杯身蓋					須恵器、杯身蓋	TK43
		墳丘長	33.0								
		周溝幅	2.0～6.0								
		周溝の深さ	0.6～0.9								
ST12002	円墳	周溝外径	17.7	不明			U字形鍬 鑄先			U字形鍬鑄先、須恵器小壺	不明、TK47～MT15
		墳丘径	14.5								
		周溝幅	1.1～3.5								
		周溝の深さ	0.33～0.65								

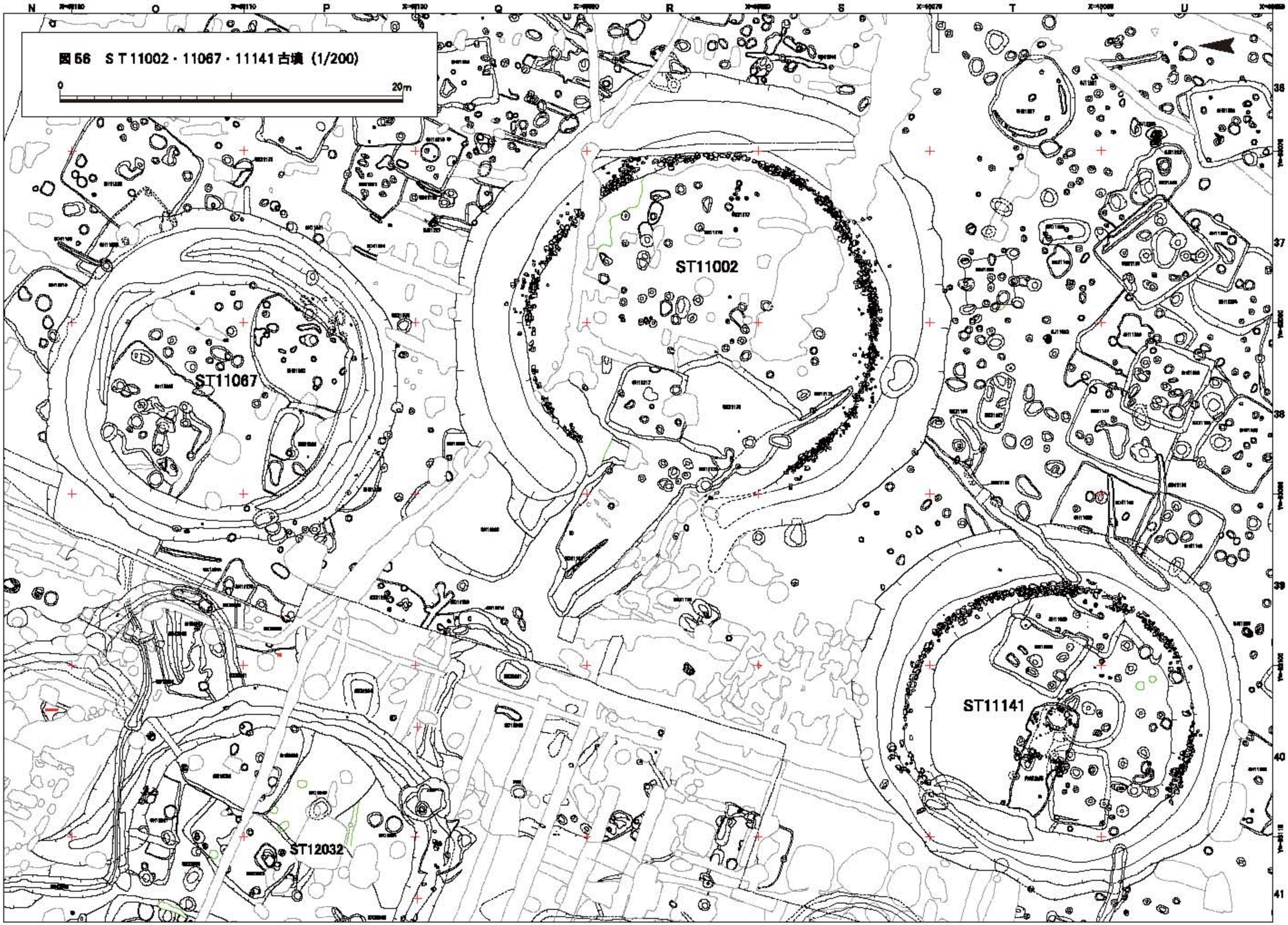


図56　ＳＴ11002・11067・11141古墳（1/200）

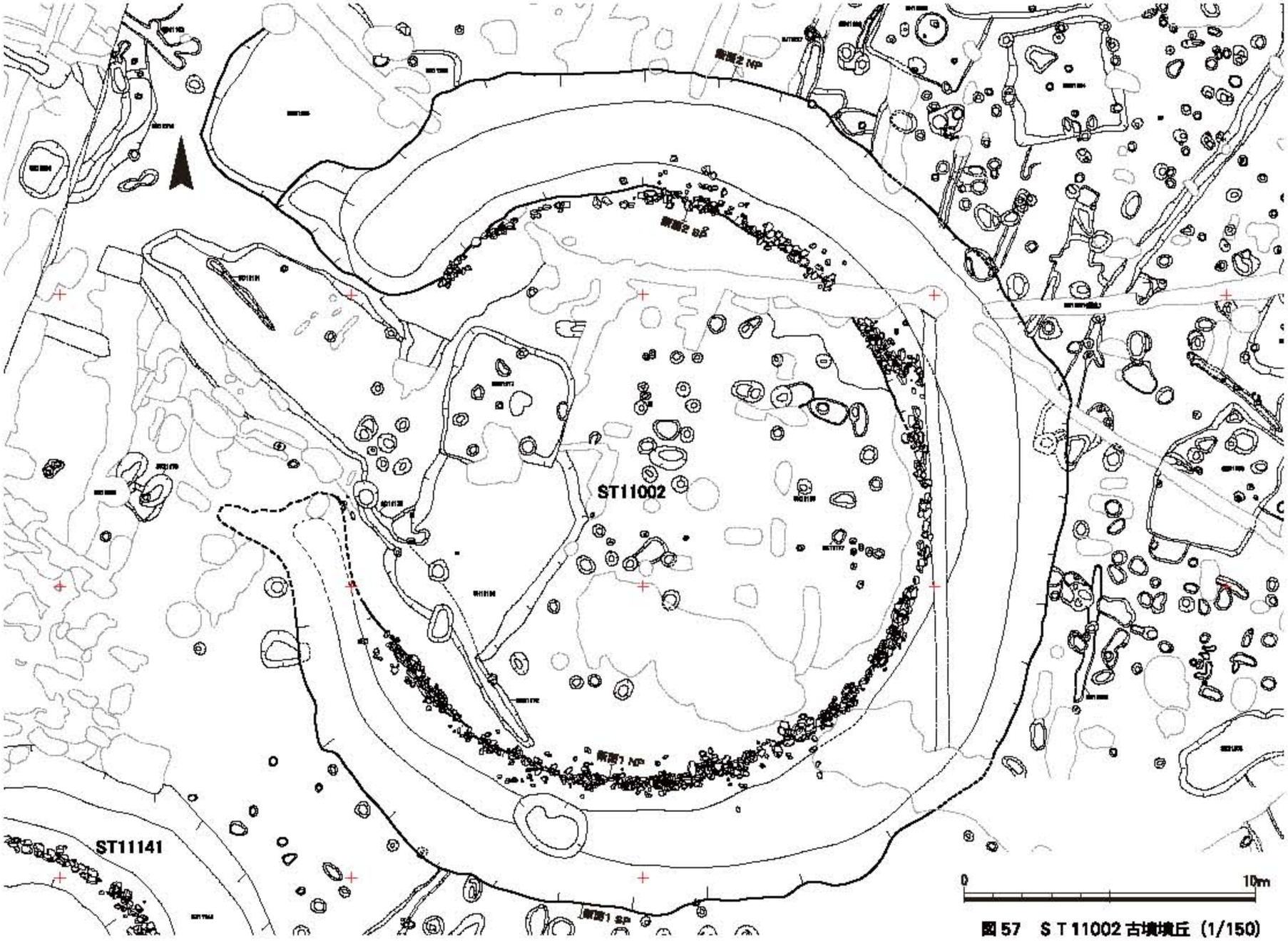


図57　ＳＴ11002古墳墳丘（1/150）

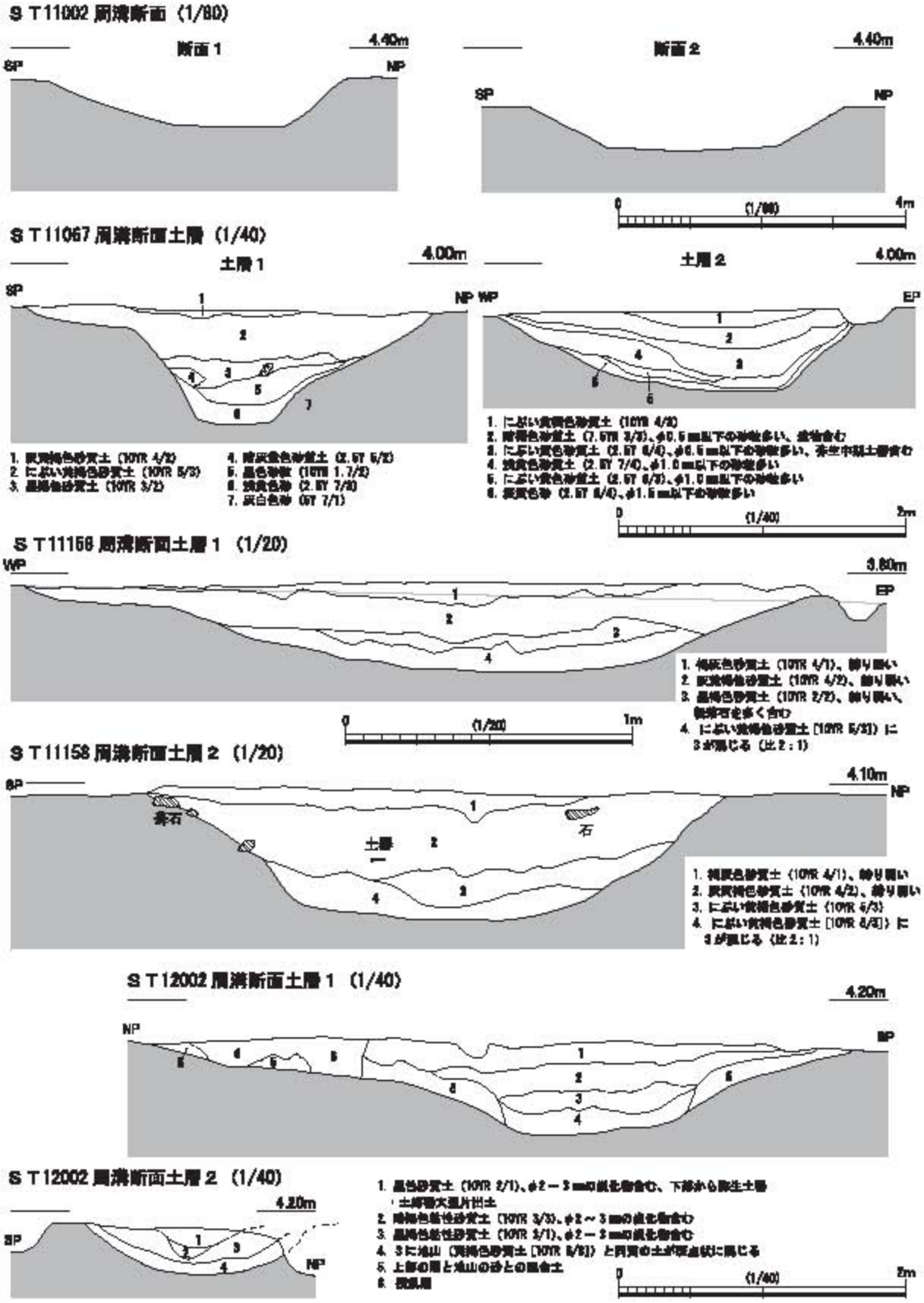


図 58　ＳＴ11002・11067・11158・12002 土層断面図（1/20,1/40,1/80）

内部主体

主体部および掘り方も削平を受け遺存しない。

遺物の出土状況

滑石製勾玉（図 67-6）や石突きの雛形鉄器（図 67-6）が周溝埋土中から出土した。また、葺石直上（S-37 区画）から鉄滓が出土しているが、古墳に伴うものかは不明である。周溝内からは弥生時代中期、後期、古墳時代前期～後期までの遺物が出土しており、築造時期を示す遺物には恵まれない。

（2）ＳＴ１１０６７古墳

調査区の北方中央部に位置する。本古墳に隣接して南方約 3.5m には ST11002 が、西方約 33 m には ST12002 があり、5 世紀代の古墳群を形成する。本古墳の西方約 3 m には SX12012 や SX12081 の周溝墓や西方約 9m の ST12032 はいずれも古墳時代初頭の墳墓群である。墳丘基底面では SH11229、SH11230、SH11231 が周溝北側では SH11212、SH11216、SH11253 などの竪穴住居と切り合うがこれらの竪穴住居は弥生時代後期、弥生時代終末期、古墳時代初頭であり、これらの竪穴住居の上に古墳が造られる。墳丘は削平を受け、盛土および内部主体も遺存せず周溝のみの検出である。

墳丘・周溝

墳丘径 16.8m、周溝外径 20.4m の円墳である。周溝幅 1.9 m～4.5m、深さは 0.55 m～0.80m を測り、断面形は底面が狭い逆台形である。周溝埋土は大きく 6 層に分かれる。上層から 1 層：灰黄褐色砂質土、2 層：にぶい黄褐色砂質土、3 層：黒褐色砂質土、4 層：暗灰黄色砂質土、5 層：黒色砂質土、6 層：浅黄色砂質土である。周溝幅は東側が広く西側が狭いがこれは墳丘西側がより削平を受けた結果と思われる。

墳丘裾部には葺石はめぐらない。

内部主体

主体部および掘り方は削平を受け遺存しない。

遺物の出土状況

土師器直口壺 1 と椀 2 点（図 70-1、2、4）はまとまって周溝西側・0-39 区画から出土した。3 点の土器は配置したようにすべて伏せた状態であった（PL.20-1）。この 3 点の土器から南方約 8m の地点から須恵器杯身（図 70-7）が出土した。P-39 区画にあたり周溝外側の肩部からの出土で、口縁部を上にして、杯身の中に土師器鉢が入った状態で出土した（PL.20-2）。

馬具（轡）および水晶原石は周溝西側・P-39 区画から出土した。土製人形は周溝の北側・N-38、O-38 区画から出土した。数メートルの範囲内で散在して、溝底から浮いた状態で出土した。周溝において馬壙は検出できなかったが、轡の出土から馬の殉葬や供犠が考えられる。

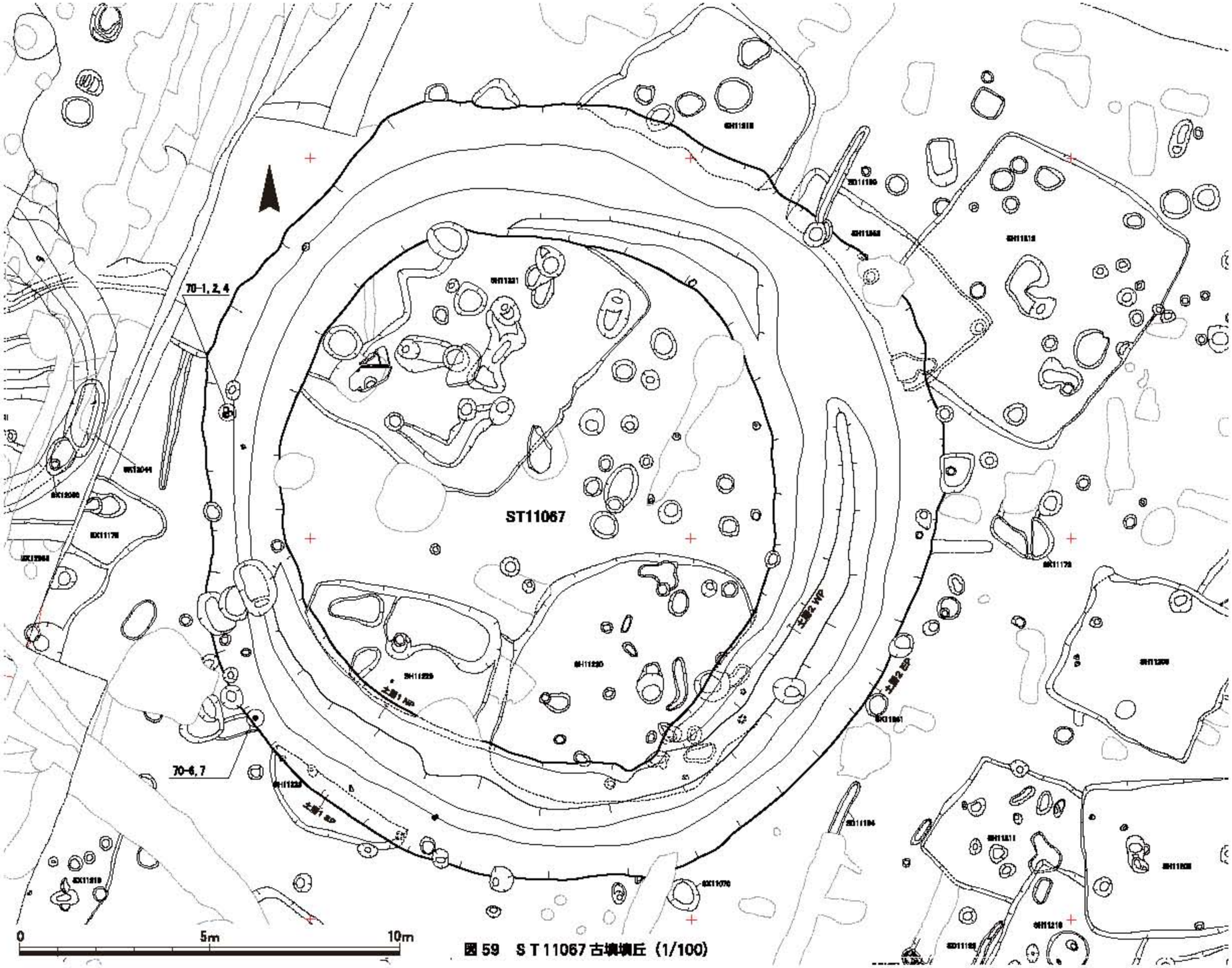


図 59　ＳＴ 11067 古墳墳丘（1/100）

（3）ＳＴ１１１４１古墳

調査区のほぼ中央に位置し、砂丘微高地上でも中央にあたる。本古墳に隣接して北東方約５ｍにはST11002の周溝がある。北西約29ｍにはST12002が、南方約14mにはST11158がある。

墳丘は削平を受け、内部主体の石室石材の一部と周溝のみが遺存する。墳丘基底面からはSH11068、SH11069、SH11291、SH11293などの弥生時代中期と弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居を検出した。これらの竪穴住居の上に古墳が造られる。

本古墳の周溝北西部の一部を唐津市教育委員会が調査を実施している。以下、その調査結果を報告書をもとに記す。

唐津市教育委員会の調査

1986年、宅地造成に伴い唐津市教育委員会が調査を実施した。その調査区は本事業の11区、12区、13区にまたがる。唐津市教育委員会の調査区の南西隅で確認、調査された古墳周溝はST11141周溝の一部にあたる。唐津市教育委員会調査では５号墳として報告されるが周溝内から多くの遺物が出土している。周溝北西部の5.6m ×2.2mの範囲から一括供献の祭祀遺構が検出された。これは須恵器甕3、蓋杯8、有蓋高杯5、鼎1、坩1、土師器杯1が配置され、他に鎌、鉋、刀子等の鉄器類、ガラス製小玉、琥珀小玉、滑石製臼玉などの玉類、有孔円板等も出土した。鉄器、玉類は甕にいれられていたものが散布した状況であったという。この一括供献の祭祀遺構の中心より2m北側に須恵器蓋杯1、土師器杯2の集積も検出され、さらに、同遺構の中心より約８ｍ東側の溝底から鉄矛１が出土した。図78・79は報告書からの転載図面である。鉄鐸や雛形鉄器の出土は注目される。

墳丘・周溝

墳丘径18.2ｍ、周溝外径23.7mの円墳である。周溝外径は21.4ｍ～23.7ｍとややいびつな墳形である。周溝幅は3.4ｍ～5.0ｍで深さは0.35 ～0.7ｍである。周溝断面形は不整なレンズ状である。周溝の立ち上りは緩やかであり、部分的に垂直にちかいたちあがりも見られる。周溝埋土は大きく４層からなる。上層から１層：灰黄褐色砂質土、２層：にぶい黄褐色砂質土、３層：にぶい黄褐色砂質土、４層：にぶい黄橙色砂質土であり、２層、３層は葺石の転落石や土師器、弥生土器を多く含む。

墳丘裾部には葺石が平面Ｃの字形にめぐる。石室開口部である墳丘西側には葺石はまわらない。墳丘は地山削り出し整形のち若干の盛土をし、その盛土の上に葺石を数段積み上げる。その積み上げ方はST11002に比べ雑である。葺石の大きさは幼児頭大～人頭大である。葺石石材は青緑色をした玄武岩？と花崗岩からなり、石材比率は花崗岩が多い。

内部主体

西方に開口する竪穴系横口式石室である。石室の大半は削平を受け奥壁の基底石１石と袖部付近の石材のみの遺存である。主体部はSH11293とSH11291の埋没後に構築されており、地山が砂丘であることなどから石室床面や石室石材の抜き跡なども検出できなかった。

奥壁は径1.5ｍ× 1.3mの扁平な巨石を立てるが、現況は大きく内傾して倒れる。奥壁内面は赤色顔料が一面に塗布される。

奥壁から約1.7mの位置に十数個の石材が見られる。約1.3ｍの間隔をおいて左右両側に径約40cm～70cmの石材を平積みする。左側壁は３段で右側壁は１～２段の平積みである。左右の石積みの長さは約90cmで、左側壁は高さ約40cm、右側壁は高さ約30cm遺存する。これらの石積みは石室構造上、前庭側壁と考える。

石室内で主軸方向にトレンチを設定し掘り下げ、土層観察を行い石室内を掘り下げたが地山が砂地で

あることなどから腐食化が進行し明確な床面を検出できなかった。また、石室石材の抜き跡なども検出できず、石室プランを明確にすることは困難であった。石室内奥壁側から約 20cm の高低差でガラス小玉が出土した。ガラス小玉の出土位置と奥壁から床面を想定した。また、左右前庭側壁基底石と床面は約 30cm の高低差がみられる。框構造が想定でき竪穴系横口式石室と考えた。

石室は平面長方形で、規模は長さ約 2m、中央幅約 1.4 mを想定した。前庭側壁と石室幅がほぼ同じであることなどから無袖型竪穴系横口式と思われる。

石室掘り方は 不整な長方形で遺存高さは約 10cm ～ 20cm である。前庭部床面も明確には検出できなかった。

遺物の出土状況

石室内の奥壁よりからガラス小玉が出土した。また、周溝内から完形の須恵器鼎が口縁部を下にして出土した。この鼎は唐津市教委調査の一括供献の祭祀遺構の中心から南方約 2 ～ 3m の位置にあたる。周溝内での祭祀は石室の右側周溝内で執り行われたことがわかる。

また、盾形埴輪片 2 点が葺石裏込め内（S-39 区画）から出土した。

この他、周溝内から轡が 2 点出土した。馬壙は検出できなかったが、馬の殉葬や供犠が考えられる。

参考文献

唐津市教育委員会 1987『中原遺跡』唐津市文化財調査報告書第 18 集

（4）ＳＴ１１１５８古墳

調査区の南側中央に位置する。本古墳の北方約 14m には ST11141 がある。ST11067、ST11002、ST11141 と南北方向に並んだ古墳の最南部に位置し、砂丘微高地の尾根上にあたると思われる。

主軸を東西方向にとる前方後円墳であるが、前方部の南半部は逆Ｌ字形に大きく削平される。墳丘主軸方位は N73° W である。墳丘も大きく削平を受け、周溝と墳裾を回る葺石が遺存する。内部主体も削平され、後円部のほぼ中央に石室石材と思われる大形石材が一石見られるのみである。後円部の墳丘基底面では甕棺墓や祭祀土坑を検出した。甕棺墓群は細形銅矛や硬玉製勾玉や碧玉製管玉を副葬した厚葬墓群でありＡ群として報告した（佐賀県教育委員会 2010 年『中原遺跡Ⅳ』）。また、このＡ群甕棺を囲むように３つの祭祀土坑がみられるが、これについては本報告になる。

本古墳北側の後円部から周溝内から東西方向に一列に並ぶ 4 箇所のトレンチを確認した。これは 1965 年の日仏合同調査の第一トレンチである（橋口達也 1982）。第一トレンチの８区から９区にかけて検出された古墳時代後期の石組遺構は本古墳の葺石であることが判明した。

墳丘・周溝

墳丘長 33.0 m、周溝外長 37.5m、後円部径 23.0 m、前方部幅推定 13m、くびれ部幅推定 9.5 mを測る前方後円墳である。周溝幅は 2.0 ～ 6.0m で、深さは 0.6m ～ 0.9m である。周溝断面形はレンズ状～逆台形である。周溝埋土は大きく 4 層からなる。上層から 1 層：褐灰色砂質土、2 層：灰黄褐色砂質土、3 層：黒褐色砂質土、4 層：にぶい黄褐色砂質土に 3 層が混じる。

墳丘裾部には葺石が全周する。周溝内の斜面部に 2 ～ 3 列からなる石材を配して葺石としている。葺石の遺存状態や周溝内への転落した石材の量などから墳丘裾部のみに配されていたと思われる。石材は幼児頭大～人頭大で石材は花崗岩である。

内部主体

主体部および掘り方も削平のため検出できなかった。墳丘のほぼ中央に 1.7 m × 0.7 mの大形石材が

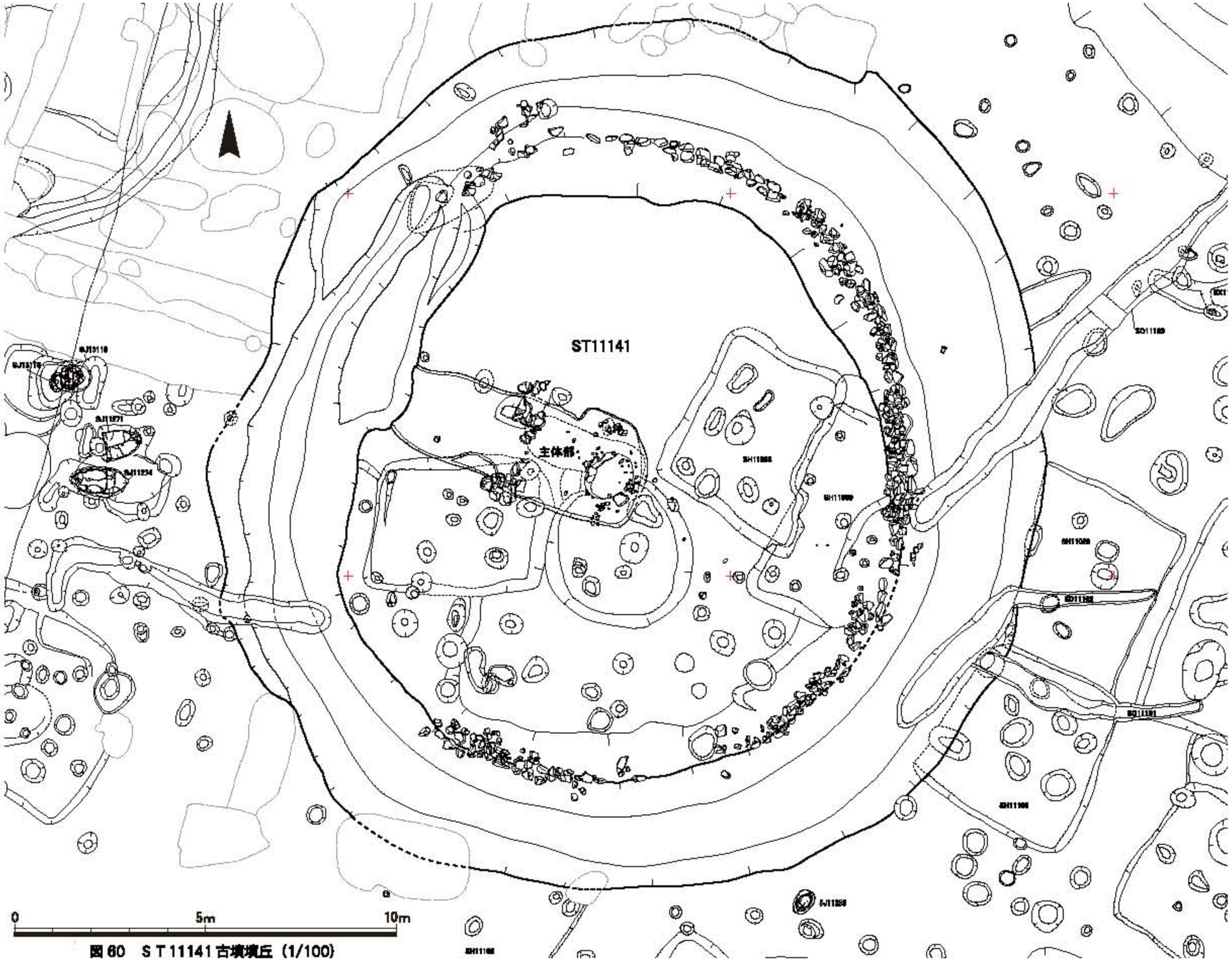


図 60　ＳＴ11141 古墳墳丘（1/100）

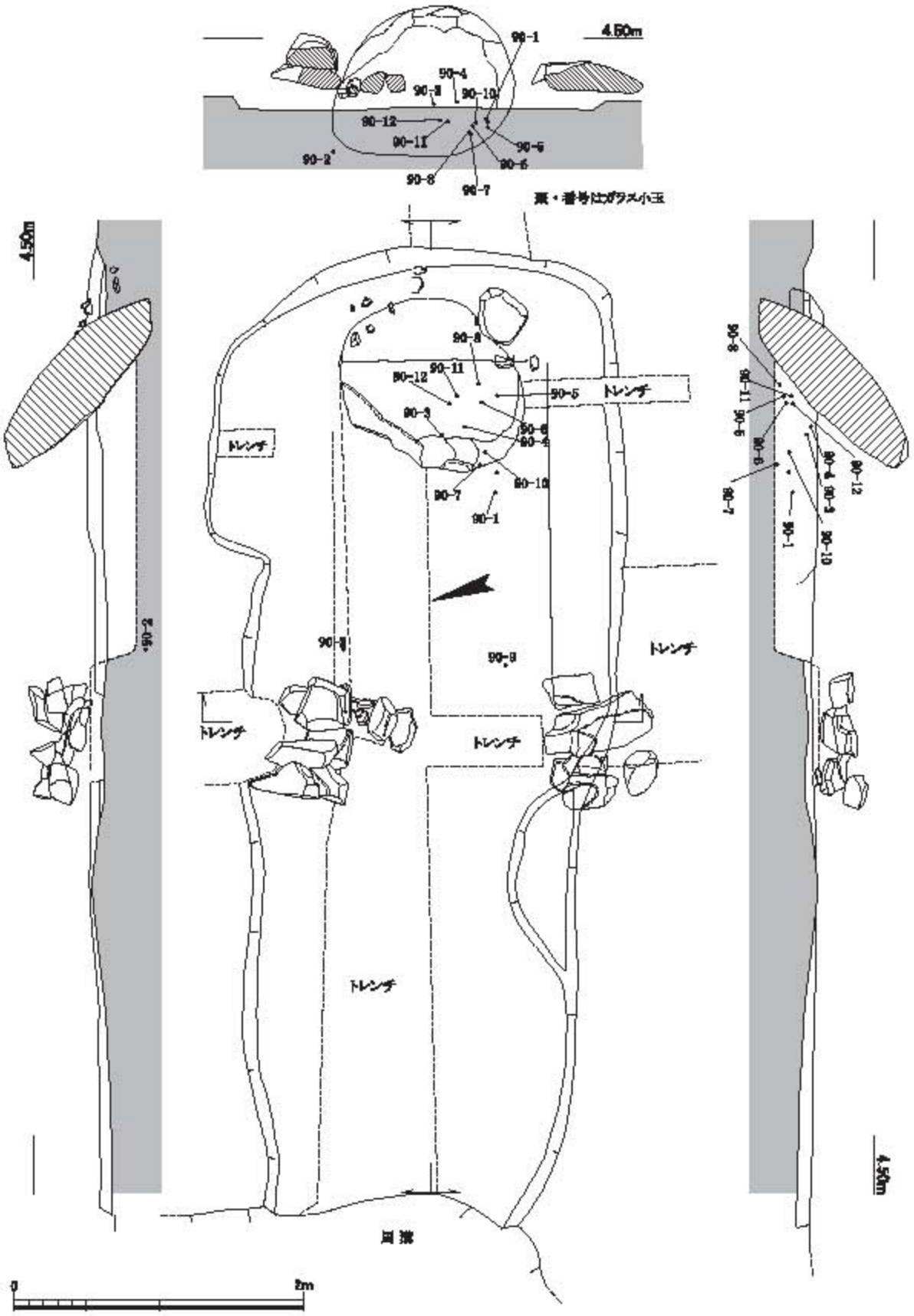


図61　ＳＴ11141古墳内部主体（1/40）

みられた。花崗岩であり、横穴式石室の石材と思われる。

遺物の出土状況

周溝内から６世紀後半代の須恵器、土師器や古墳時代前期の土師器、弥生時代のガラス製管玉が出土している。この他図示していないが弥生時代中期～後期の土器も出土している。

参考文献

橋口達也 1982「中原遺跡」『末盧国』六興出版

（5）ＳＴ１２００２

調査区の北西部に位置する。本古墳の東方約 33m には ST11067 が、東方約 35 mには ST11002 が、南東約 29m には ST11141 がある。ST11067、ST11002、ST11141 の３基の古墳は数メートルの間隔をおいて南北方向に並び、墳形や規模も類似するが、本墳はこれらから約 30m 離れ、墳径、周溝ともに小規模である。本古墳に隣接して東方約 3m には ST12032 が、南方から東方数メートルには唐津市教育委員会が調査した方形周溝墓群が立地する。これらは古墳時代初頭の墳墓群であり、本古墳は調査前半段階までは古墳時代初頭の円形周溝墓と考えていたが、周溝埋土中からＵ字形鍬鋤先や須恵器が出土したことから、古墳時代初頭の墳墓群とは時期を異にすることが判った。

周溝の東側は SD12007 と SD12022 から切られる。また、墳丘基底面は現在の住宅基礎工事による多くの撹乱孔がみられた。

墳丘は削平を受け、盛土および内部主体も遺存せず周溝のみの検出である。削平のためか周溝幅は一定せず、周溝南側は広いものの、東側、西側は狭い。

墳丘・周溝

墳丘径 14.5 m、周溝外径 17.7 mの円墳である。周溝幅は 1.1 m～3.5m で、深さは 0.33 ～ 0.65 m を測る。周溝埋土は大きく５層からなる。上層から１層：黒色砂質土で、１層の下部から弥生土器片や土師器片など比較的大型土器片が出土した。２層：暗褐色粘性砂質土で、下部は漸次的に３層と混じる。３層:黒褐色粘性砂質土で径２～3mm の炭化物を含む。４層:地山と同層に３層が斑点状に混じる。５層：地山と同層に４層が混じる。４層と５層は同一層と考えてもいいだろう。

内部主体

主体部および掘り方も削平を受け遺存しない。

遺物の出土状況

周溝内からＵ字形鍬鋤先や古墳時代中・後期の須恵器、土師器が出土している。

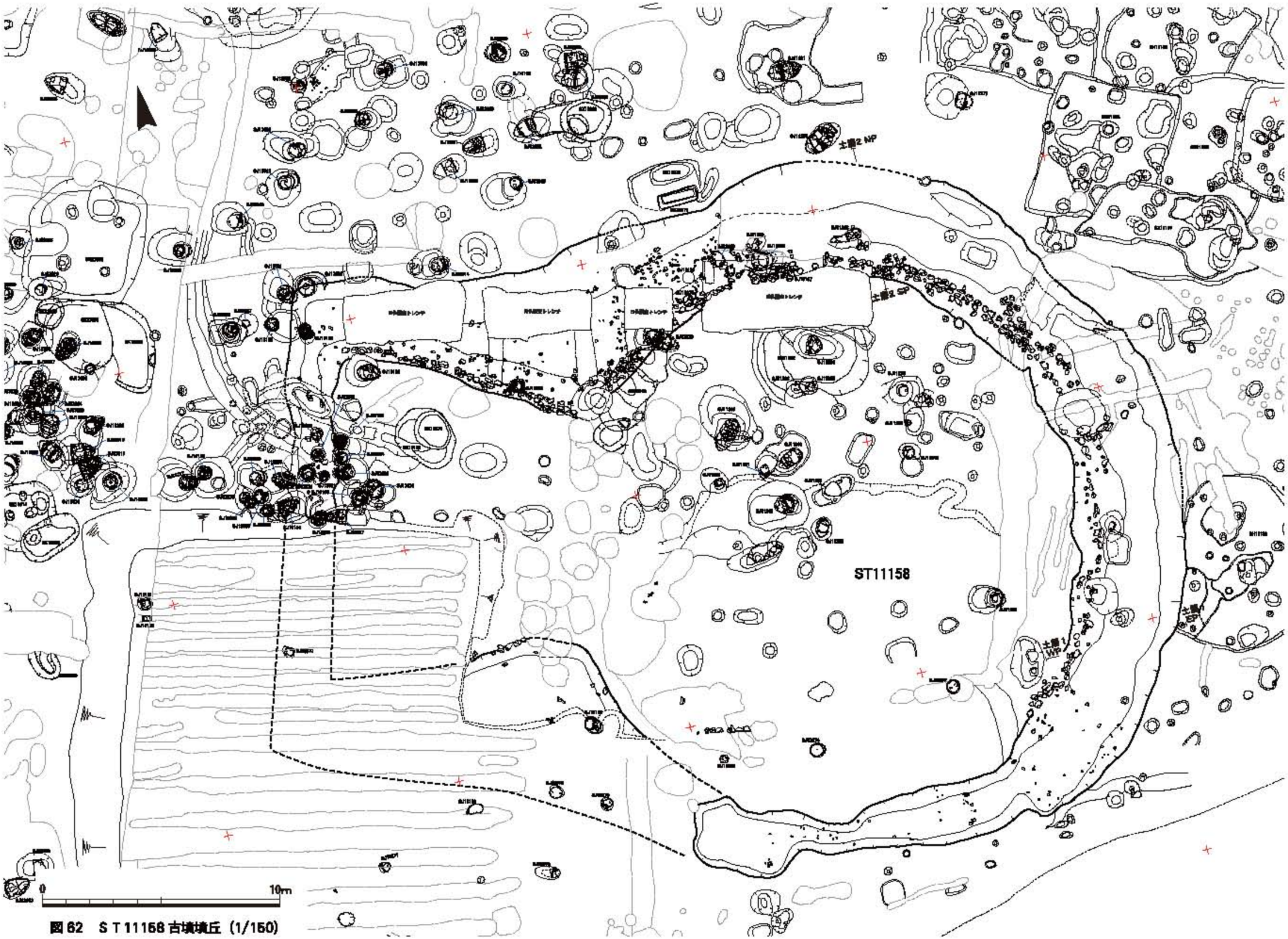


図 62　ＳＴ 11158 古墳墳丘（1/150）

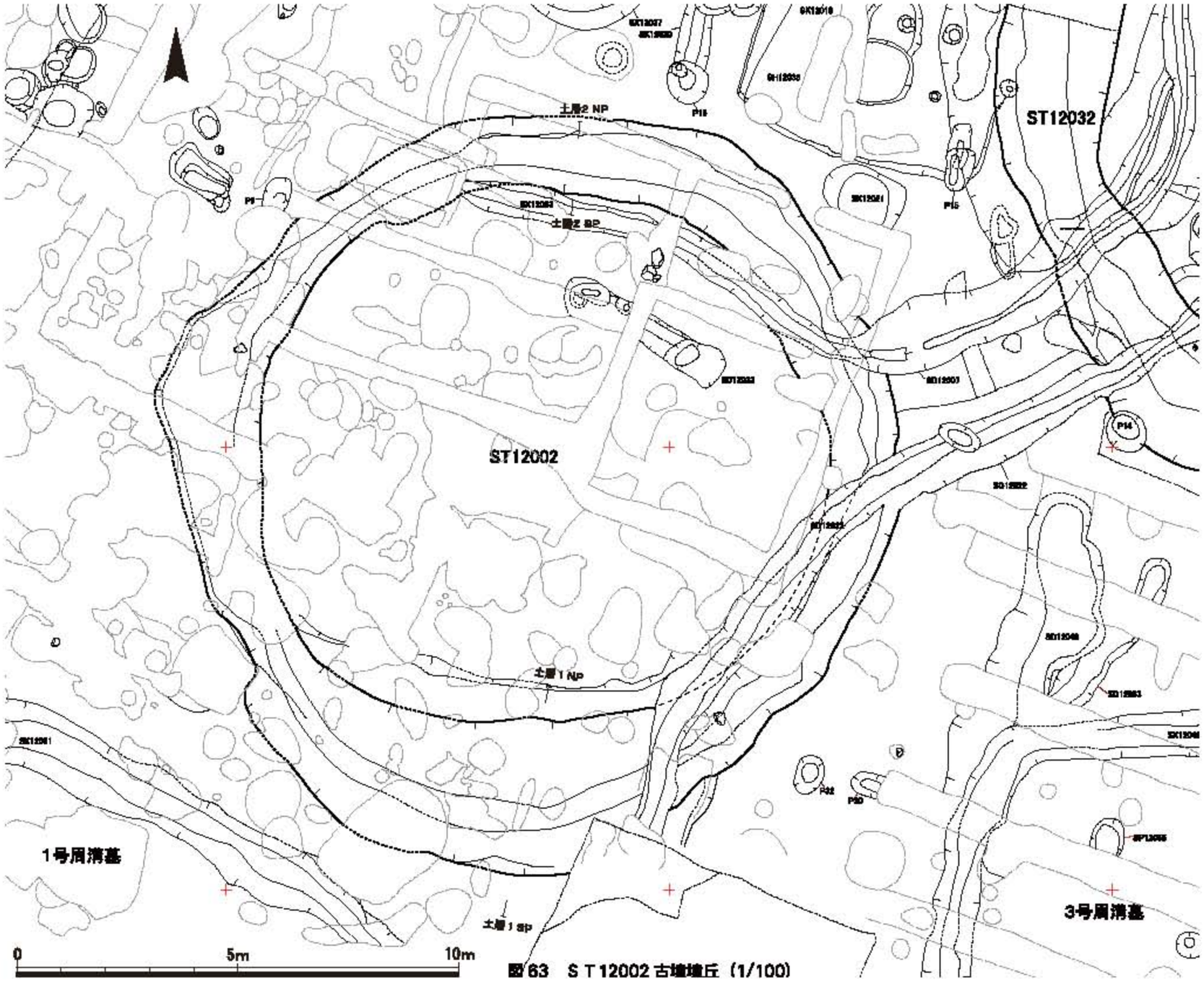


図63　ＳＴ12002古墳墳丘（1/100）

3，遺物

（1）ＳＴ１１００２古墳出土遺物

①土器

周溝や墳丘上から土師器、須恵器、弥生土器が出土している。本古墳は弥生時代の竪穴住居の上に築造されており、また、本墳築造後には古墳時代後期の集落が形成されているため、これらの土器が混入していると思われる。出土土器の大半は本古墳に伴うものではないと思われる。

図 64-1 ～ 4 は土師器甕である。1 は体部外面をタテおよび斜め方向のハケ、内面はタテ方向のヘラ削り。2 は布留型甕の口縁部である。肩部外面ヨコハケ、内面ヨコ方向のヘラ削り。3、4 は外反口縁で、肩部内面は斜めハケ。5 は壺の肩部である。二重口縁壺か？肩部内面に粘土輪積み痕が残る。

6 ～ 13 は土師器の甕口縁部である。6 は弥生土器の可能性あり。胎土は砂粒を含まず土師器質である。内面ナデ？7 は肩部内面斜め方向ヘラ削り、口縁部内面がわずかに窪む。8 の肩部がはり、口縁部は短く外反する。内面ヘラ削り。9、11、12 はなで肩で、口縁部は外反する。内面ヘラ削り。10、13 は直胴に短い口縁部。10 は体部内面ヨコナデ、13 は体部内面ヘラ削り。

図 65-1 ～ 10 は弥生土器の甕口縁部である。図 66-1 ～ 11 は弥生土器の甕底部である。中期から後期、終末期までみられる。11 は終末期の台付甕の底部である。12、13 は弥生土器、袋状口縁壺の口縁部片である。ともに袋部が未発達であり、13 はわずかに袋状にする。12 は精製、13 は粗製土器である。14 は弥生土器、広口壺である。頸部は直立気味にわずかに外反し、鋤先口縁である。

図 67-1 は弥生土器、袋状口縁壺である。袋状の口縁部が未発達である。内面に袋部を整形するための稜が明瞭にはいる。肩部と胴部に断面三角突帯が回る。粗製土器である。2 ～ 3 は山陰系の二重口縁壺（甕の可能性あり）の口縁部片である。色調は灰白色と在地土器とは異なる。4 は二重口縁壺の口縁部片である。色調は橙色である。

図 68-1 は弥生土器の屈曲口縁の壺である。底部は小さな平底である。2 は土師器、直口壺、体部内面ナデ、外面ハケ。3 は土師器、壺の胴部片、胴部外面下半に煤？付着、内面はヘラ削り。4、5、6 は土師器、屈曲口縁の鉢である。4 は体部外面、ヘラ状工具で削り、ナデ仕上げ。6 は体部内面、ヘラ削り。口縁部をわずかに外反させる。7、8、9 は土師器、素口縁鉢である。平底である。10 ～ 16 は素口縁鉢である。丸底である。

図 69-1 は土師器、台付鉢である。2 は弥生土器、高杯である。脚部外面はタテの磨きを施す。3 は土師器、高杯である。脚裾部には径約 1cm の円孔の四方透かしあり。4 ～ 6 は弥生土器、器台である。7 ～ 9 は弥生土器、低支脚である。9 は外面に叩きを明瞭に残す。

10 は須恵器、広口壺の口縁部片である。口縁端部を上方につまみあげ、口縁外面に一条の沈線を回す。頸部外面に自然釉付着。11 ～ 15 は須恵器杯身である。たちあがり高は 1.3cm ～ 0.7cm である。16 ～ 19 は須恵器杯蓋である。須恵器のなかで本墳の時期を示すと考えられるのは 10 のみであろう。杯身、杯蓋はすべて 6 世紀後半で流れ込みと考える。

②鉄製品

図 67-5 は周溝から出土した。石突きの雛形（ミニチュア）鉄器である。断面隅丸方形で、合わせ目がはいる。

③玉類

図 67-6 は周溝から出土した。滑石製勾玉である。牙形を呈し、全面を比較的丁寧に研磨する。

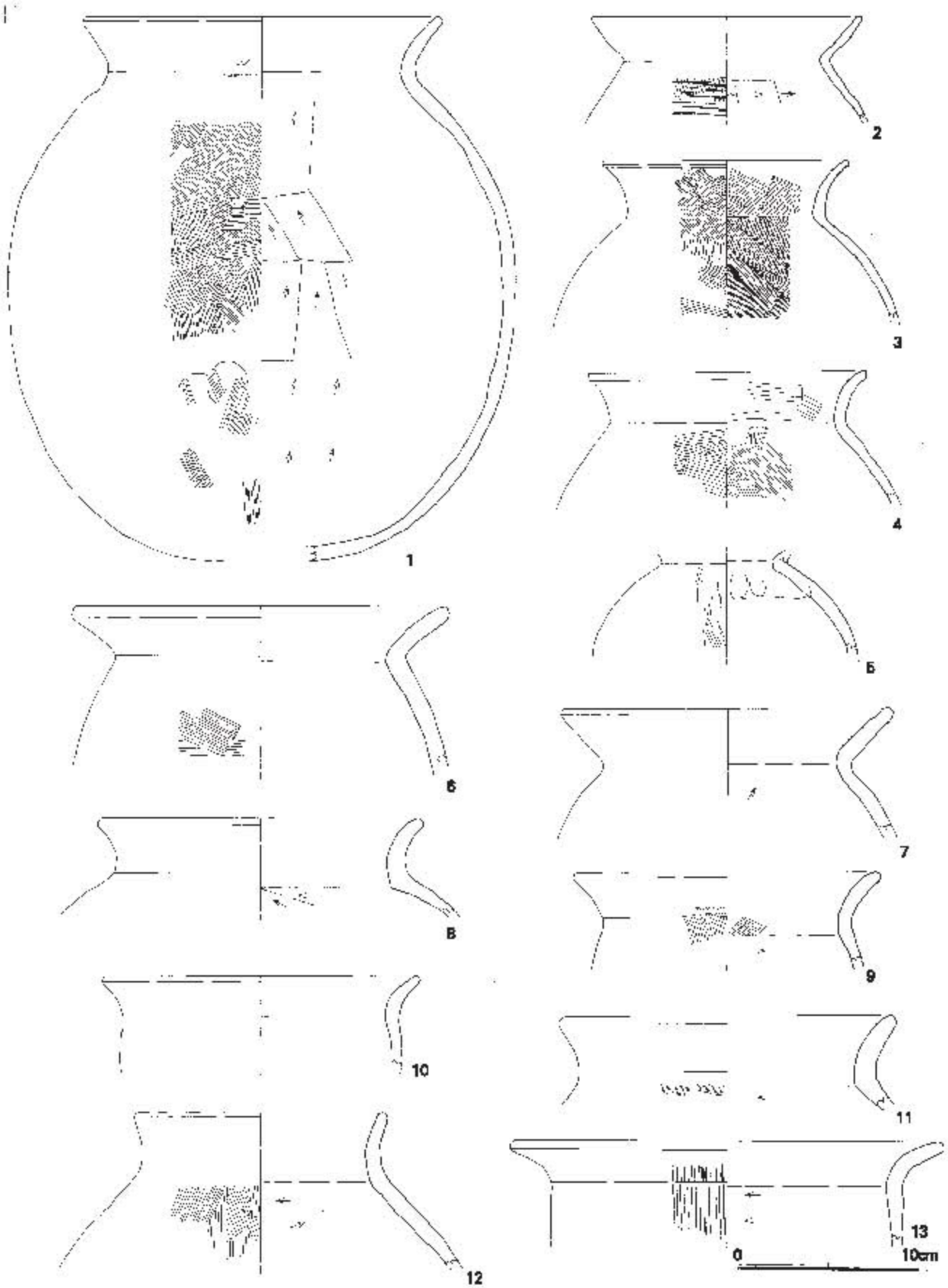


図 64　ST11002 古墳出土土器 1（1/3）

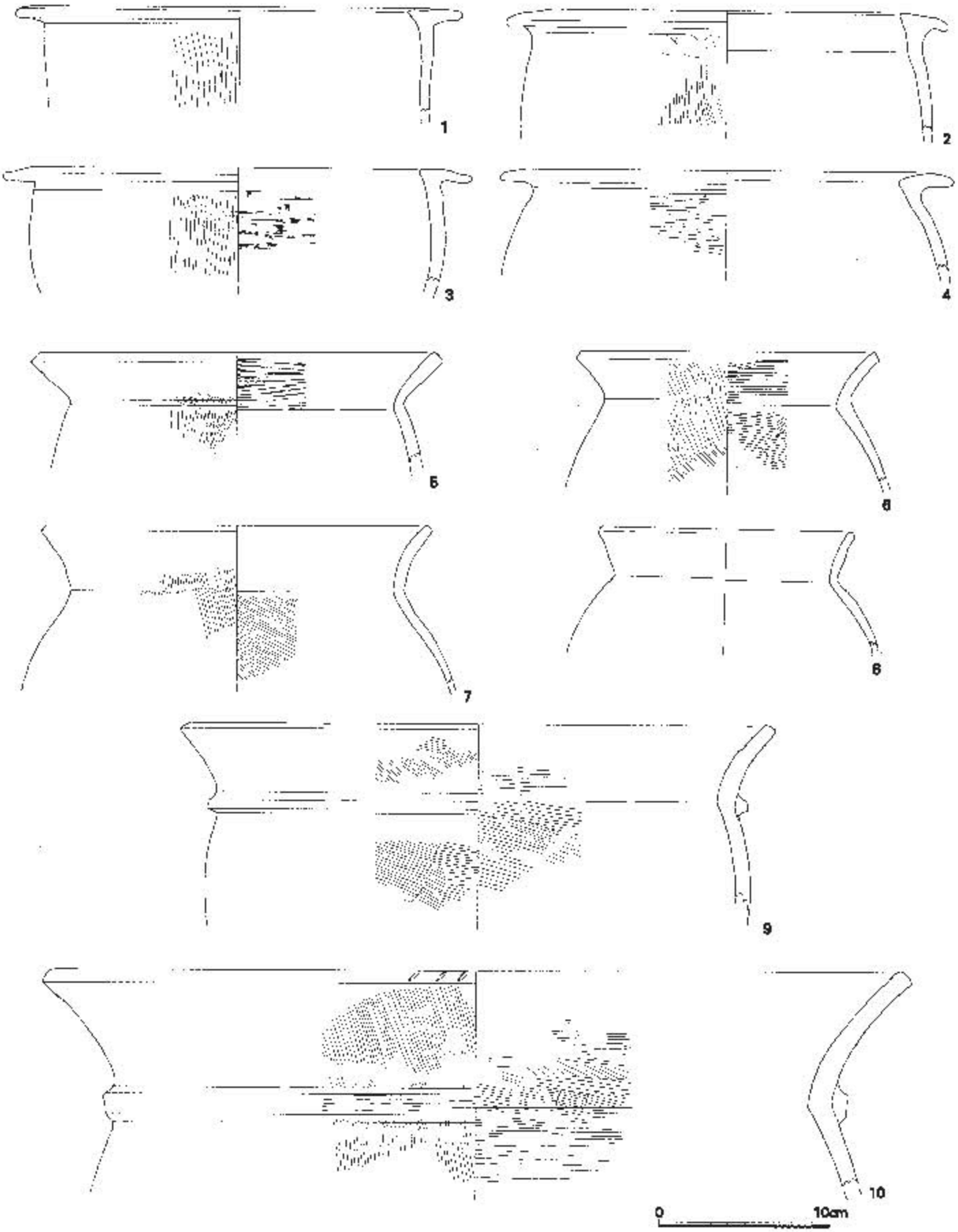


図 65　ST11002 古墳出土土器 2（1/3）

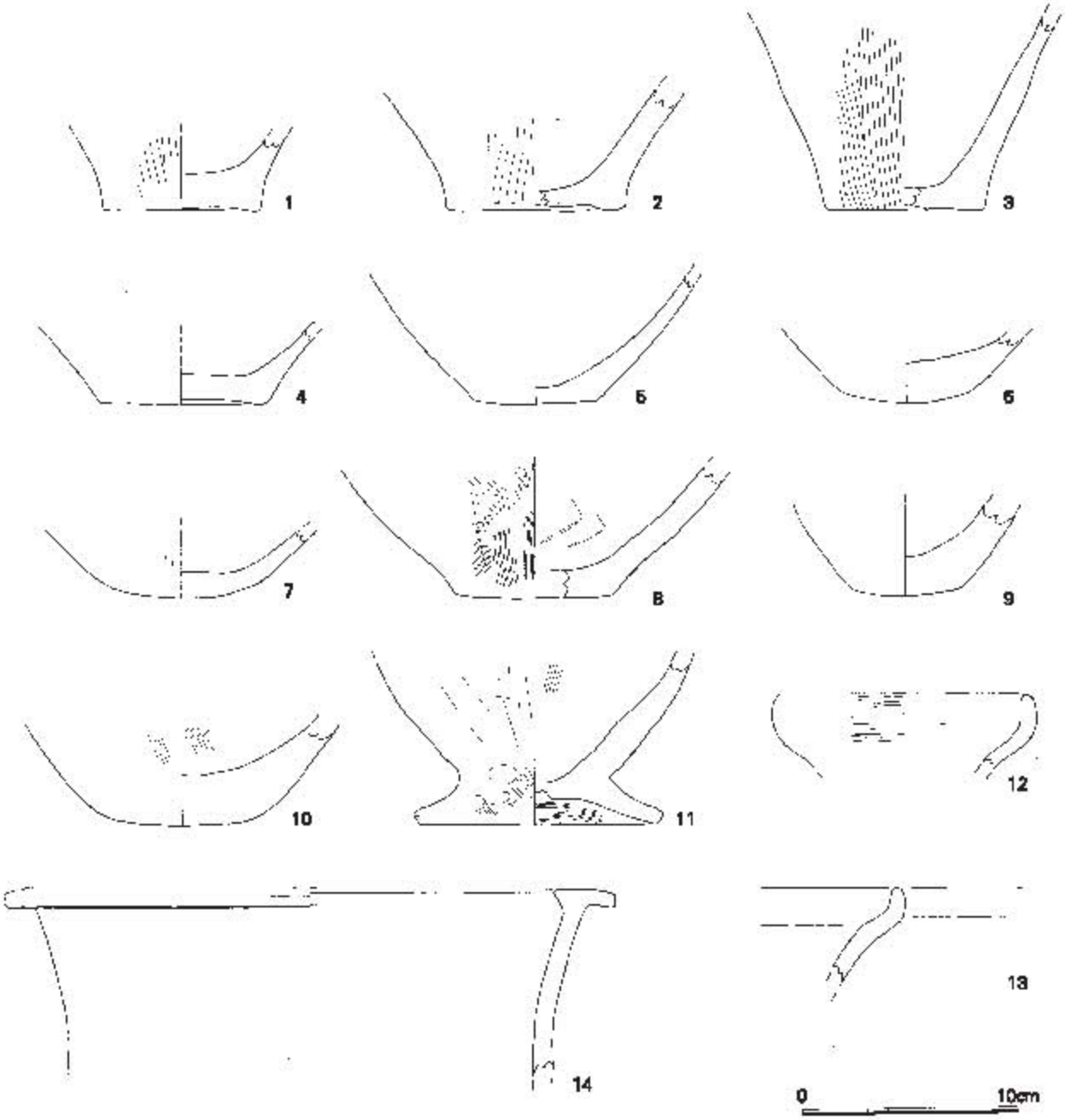


図 66　ST11002 古墳出土土器 3（1/3）

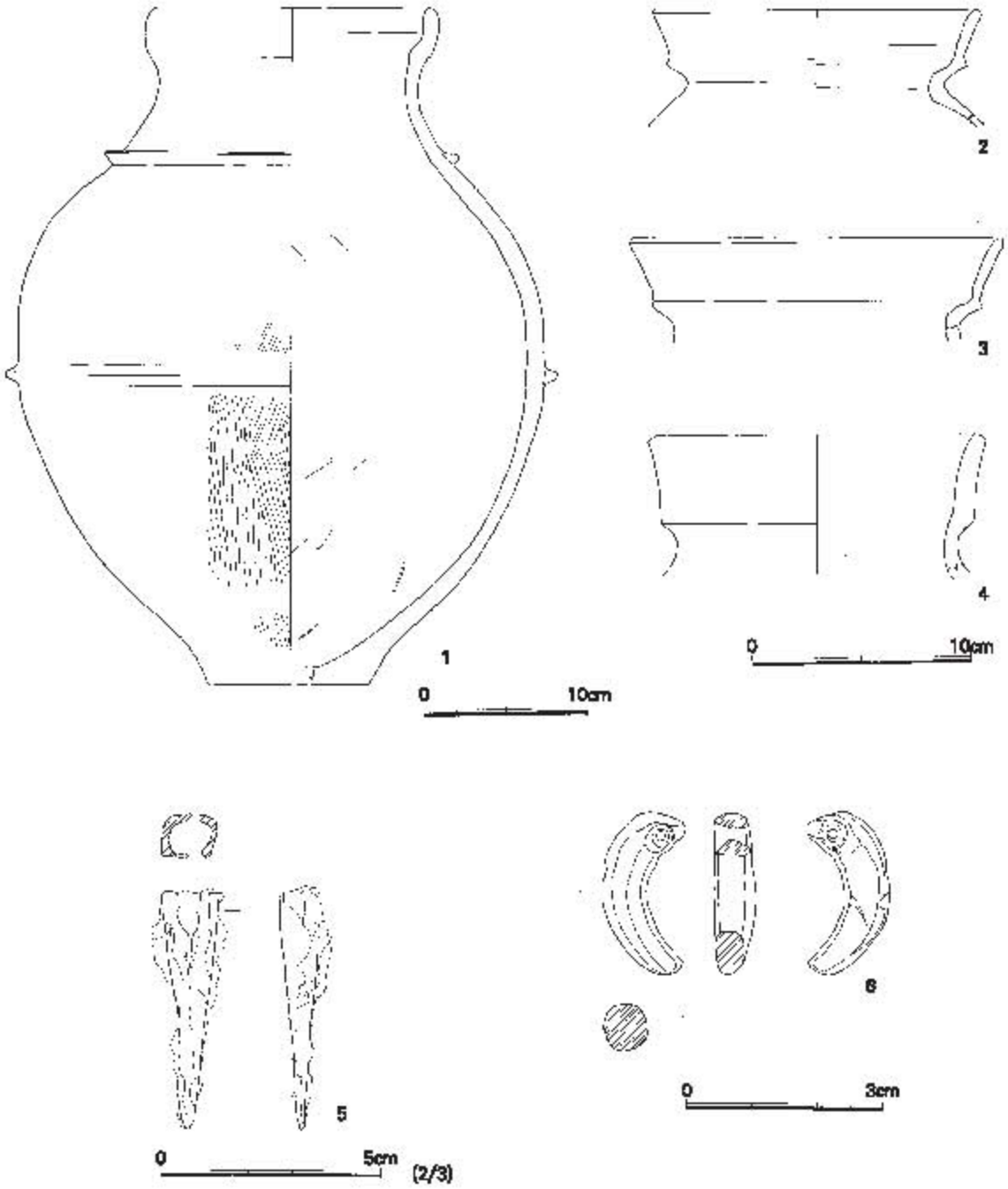


図 67　ST11002 古墳出土土器 4（1/3、1/4）・鉄製品（2/3）・玉類（1/1）

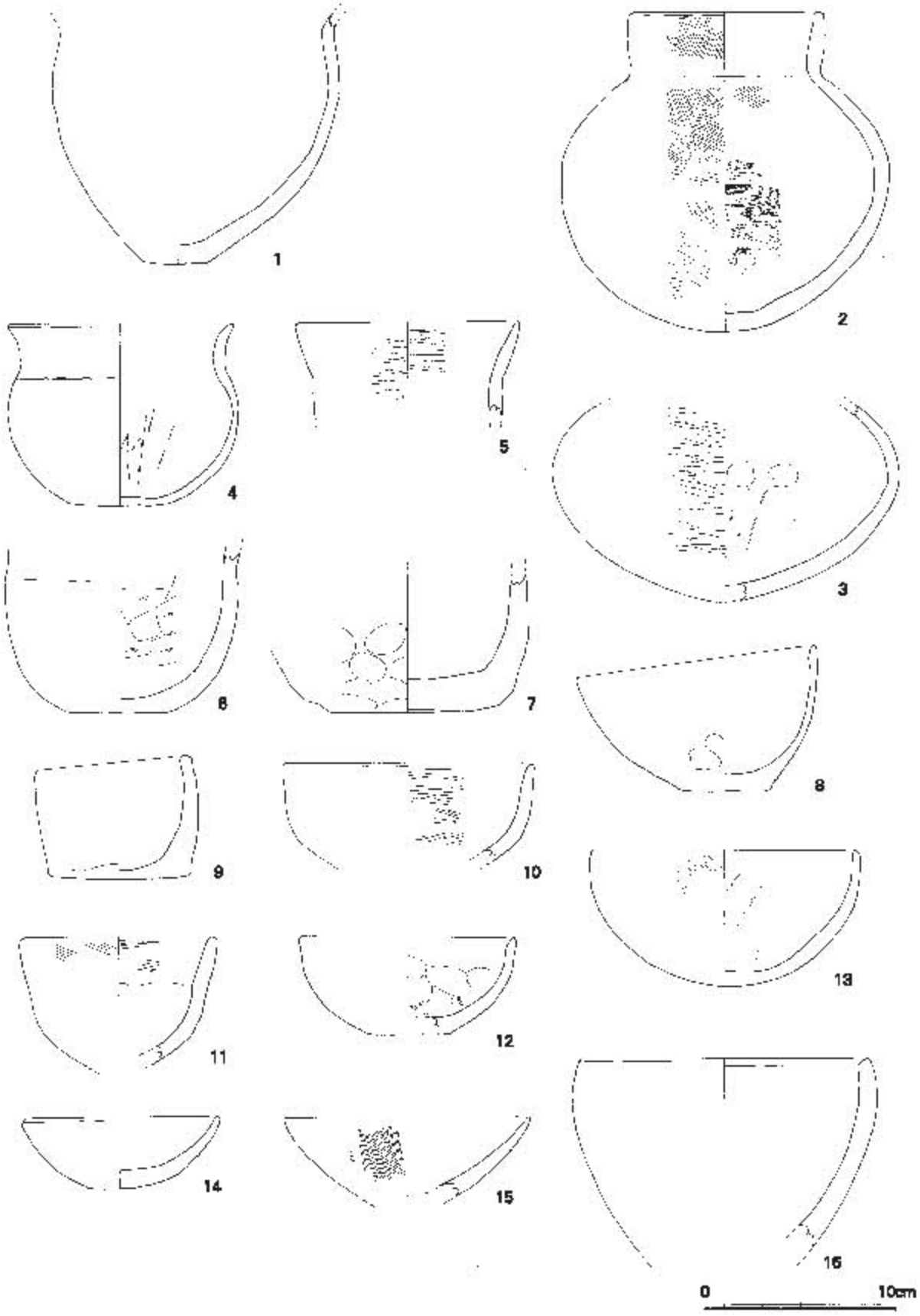


図 68　11002 古墳出土土器 5（1/3）

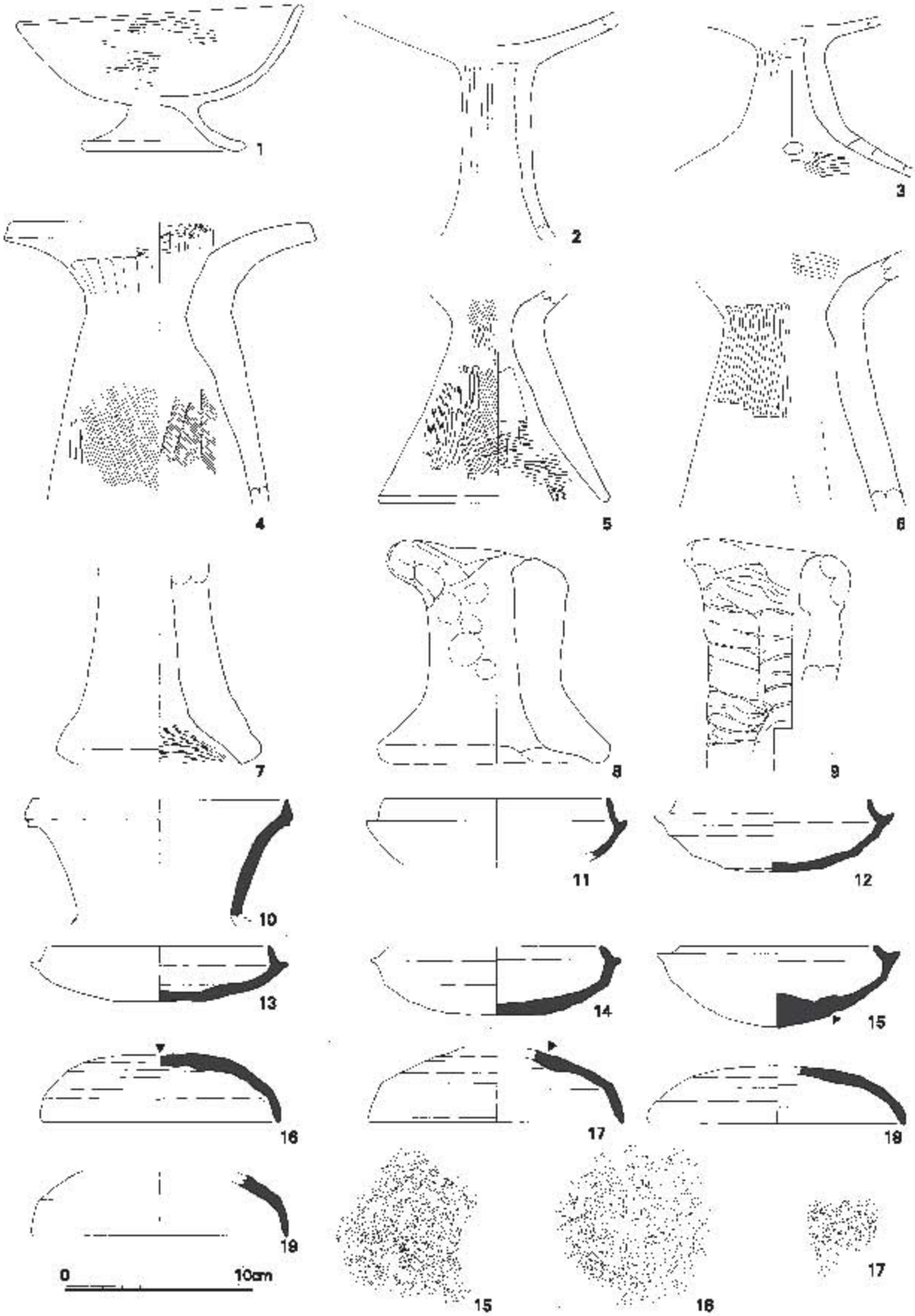


図 69　ST11002 古墳出土土器 6（1/3）

（2）ＳＴ１１０６７古墳出土遺物

①土器

図 70-1 ～ 7 は周溝の肩部から出土しているが、出土状況などから本墳に伴う土器と考えられる。それ以外は流れ込みなどもある。

1 は土師器直口壺、やや長めの口頸部の外面に暗文ふうの磨きがはいる。2 ～ 4 は土師器椀。2 は口縁部を短く外方に屈曲させる。内面全面、丁寧な磨きで仕上げる。3 ～ 5 は口縁部がわずかに内湾する素口縁の椀である。6 は平底、素口縁の粗製の鉢である。

7 は須恵器杯身、完形である。口径 9.55 cm と小さい。口唇部内面に段をもち、底部 3/4 回転ヘラ削り。8、9、10 は須恵器杯蓋である。8 は口縁部片、約 1/8 残存。口縁部外面と口唇部内面に沈線あり。9 は口唇部内面に沈線あり。器壁が薄い。天井部のヘラ削り痕は不明瞭である。10 は天井部 2/3 回転ヘラ削り。11 は広口壺口縁部片である。口唇部はわずかに上方につまみ上げ、外面に一条の沈線を回す。12 は須恵器鐙、完形である。口唇部は平坦に面取り、胴部下半は不定方向のヘラ削りである。

13 は土師器甕、体部外面、タテハケ。口唇部面とり。14 は須恵器模倣の土師器杯蓋、外面黒塗り。15 は須恵器模倣の土師器杯身である。

図 71-1 ～ 3 は土師器甕の口縁部片である。1 ～ 3 は布留型甕、1 は口唇部内側に肥厚する。器壁は薄い。

2、3 は内湾気味の口縁部で、3 はわずかに口唇部内側に肥厚する。4 は短く外反する口縁部で肩部内面はハケである。5 の肩部内面はヘラケズリである。6 は土師器、直口壺、球形の胴部に短く外方に開く口頸部がつく。7 は土師器、山陰系二重口縁壺の口縁部片である。8 は弥生土器、直口壺、胴部内面ナデ。9 は弥生土器、直口の鉢である。内外面ナデ。１０は土師器、高杯。脚裾部で屈曲し、外方に大きく開く。脚部外面、細かな磨き。11 は土師器、小型精製器台、口縁部で屈曲させる。12 は弥生土器、鉢。内面、磨き状に丁寧に仕上げる。

図 72-1 ～ 4 は弥生土器、甕口縁部片である。1 ～ 3 は逆 L 字形で、4 はくの字形である。5 はくの字形の屈曲口縁鉢である。胴部内外面ハケ。6 から 11 は甕の底部片である。すべて平底である。

図 73-1 ～ 4 は弥生土器、甕底部片である。1 は平底、2 ～ 4 は平底である。5 ～ 7 は弥生土器、広口壺である。5 は素口縁で、6、7 は鋤先口縁である。7 は頸部外面に暗文を施し、赤色顔料塗彩。8 は弥生土器、袋状口縁壺の口縁部片。9 は弥生土器、支脚である。断面円形である。

②人形土製品

図 74-1 ～ 9 は人形土製品である。焼成は土師質で、色調は黄褐色である。粘土塊を貼り付けたあと指頭でつまみ出して手足を作り出す。顔は目や口をヘラ状工具の先端部でヘラ描きすることで表現している。両側に広げた短い手と逆 V 字形に広げた足など 9 点とも同じつくりである。完形のものはなく、手、足、頭部などいずれかを欠損する。破損した土製品を祭祀として用いていると思われる。

1 は右手と左足を欠損する。顔は目や口をヘラ状工具の先端部でヘラ描きすることで表現している。足部は逆 V 字形に指でつまみ出す。背面に指頭圧痕とヘラ状工具の痕跡が残る。白色砂粒混入。

2 は右手と左足を欠損する。顔は目や口をヘラ状工具の先端部でヘラ描きすることで表現している。右足裏は平坦気味に仕上げる。右足側面は指頭圧痕が残る。白色大粒砂混入。

3 は両手、両足を欠損する。顔は目や口をヘラ状工具の先端部でヘラ描きすることで表現している。胴部はややスリムである。白色砂粒混入。

4 は両手、両足を欠損し、顔面の一部を剥離する。顔は目や口をヘラ状工具の先端部でヘラ描きすることで表現している。白色砂粒混入。

5は両手と胴下半部と頭部上半を欠損する。特に左手部は大きく欠損する。顔には口の表現らしき痕跡がみられる。白色砂粒混入。

6は頭部と足部のみの遺存である。同一個体であるかは不明であり、頭部を6-1、足部を6-2とした。顔は目や口をヘラ状工具の先端部でヘラ描きすることで表現している。後頭部は突起状に作り出す。白色砂粒混入。

7は右手、両足を欠損する。他の人形土製品に比べてやや大形であり、胴部上半に多くの指頭圧痕が残る。顔の表現は他のものと違い、工具の刺突による。砂粒を多く含む。白色砂粒混入。

8は頭部から左手と右足を欠損する。右手は短くひねり出す。白色砂粒混入。

9は右足部のみの遺存である。足は最も忠実に表現され、足裏面は平坦に仕上げる。白色砂粒混入。

人形土製品の類例は糸島市三雲屋敷遺跡4号住居、春日市下白水大塚古墳、糸島市志摩町御床松原遺跡表土採集資料などがある。これらのすべて足は表現せず、平坦面に安定して据えられるように造られている。糸島市三雲屋敷遺跡4号住居跡では男女一対の人形土製品で、性器が表現され髪形は男女の違いがわかるように細かく作られている。ミニチュア土器4点、大型の瑪瑙製勾玉が供伴する。古墳時代前期。春日市下白水大塚古墳は古墳時代後期の前方後円墳で4体の人形土製品が出土している。糸島市志摩町御床松原遺跡採集品は5世紀代か。10体の土製品は目、口、鼻の表現が明らかなもの、小さいながら男性器が精巧に摘みだされているもの、男性器に手足がつけられたようなもの、体の前後さえ分からないものなどがある。

参考文献

糸島市三雲屋敷遺跡：前原市教育委員会2004「文化財ニュース」VOL 1
：前原市教育委員会2006「三雲・井原遺跡V」市文報90集
春日市下白水大塚古墳：小郡市埋蔵文化財センター図録1998「古代人の顔」平成10年度特別展
糸島市志摩町御床松原遺跡：前原市立伊都歴史資料館図録『糸高の博物館』1997年

③水晶原石

4点の水晶原石が出土している。全長3cmたらずである。すべて断面六角形で、小口は錐状に尖る。1は片側小口面全面が研磨される。2は片側小口面が部分的に研磨される。3、4は片側小口面が欠損する。

これ以外にもSH11210住居跡からやや大型の水晶原石が出土している。

④馬具

図76は円環状の素環轡と模式図である。環状の鏡板に二連の銜と引手をそれぞれ連結する。鏡板は径7mmの断面円形の鉄棒を環状に曲げる。外径は6.5cmである。銜は鉄棒の両端を環状にまげて連結する。一本の銜の全長は9.4cmである。引手は断面多角形で両端を蕨手状に曲げて鏡板に連結する。全体的に鉄芯部が空洞化し遺存状態は悪い。

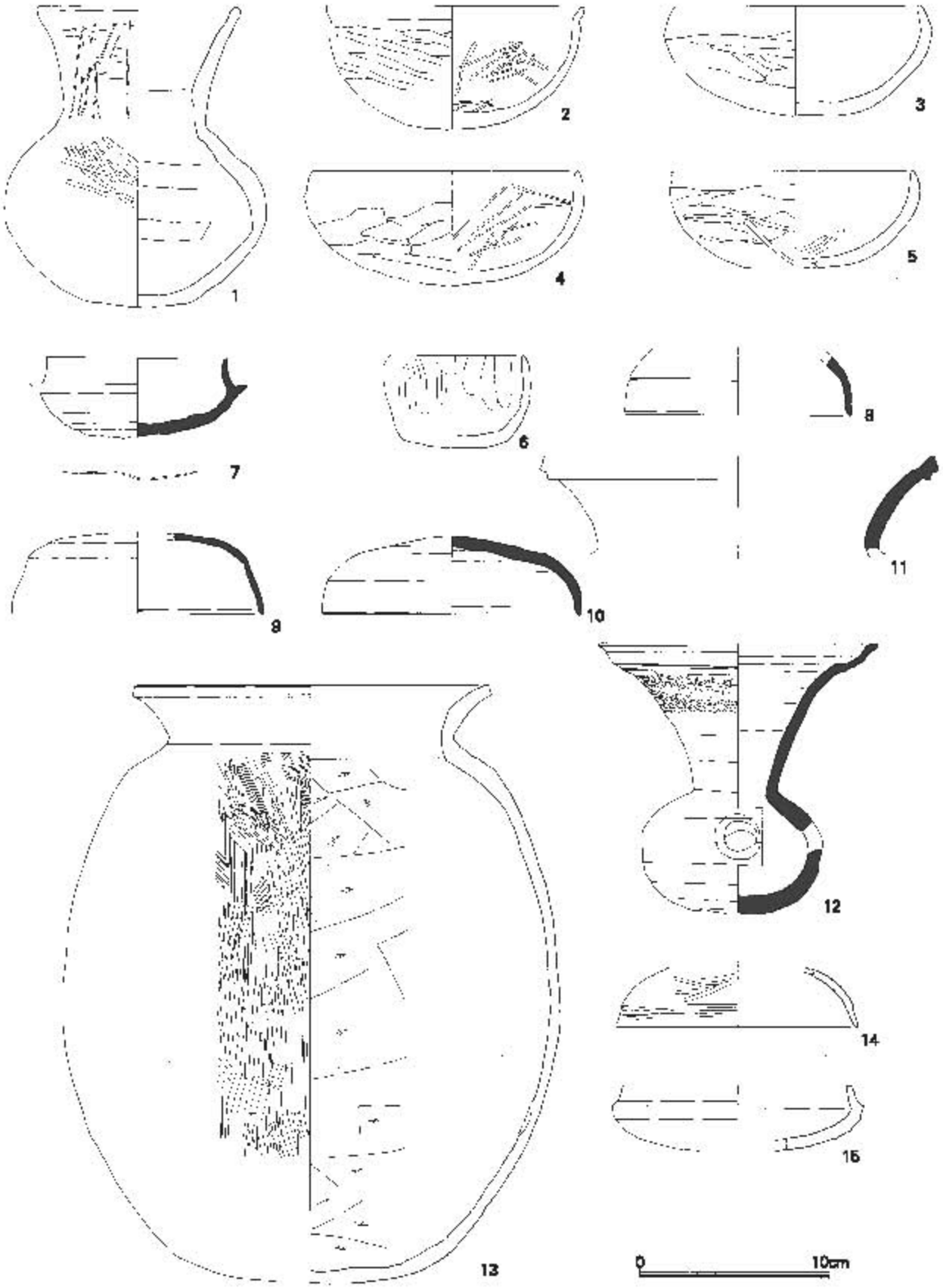


図 70　ST11067 古墳出土土器 1（1/3）

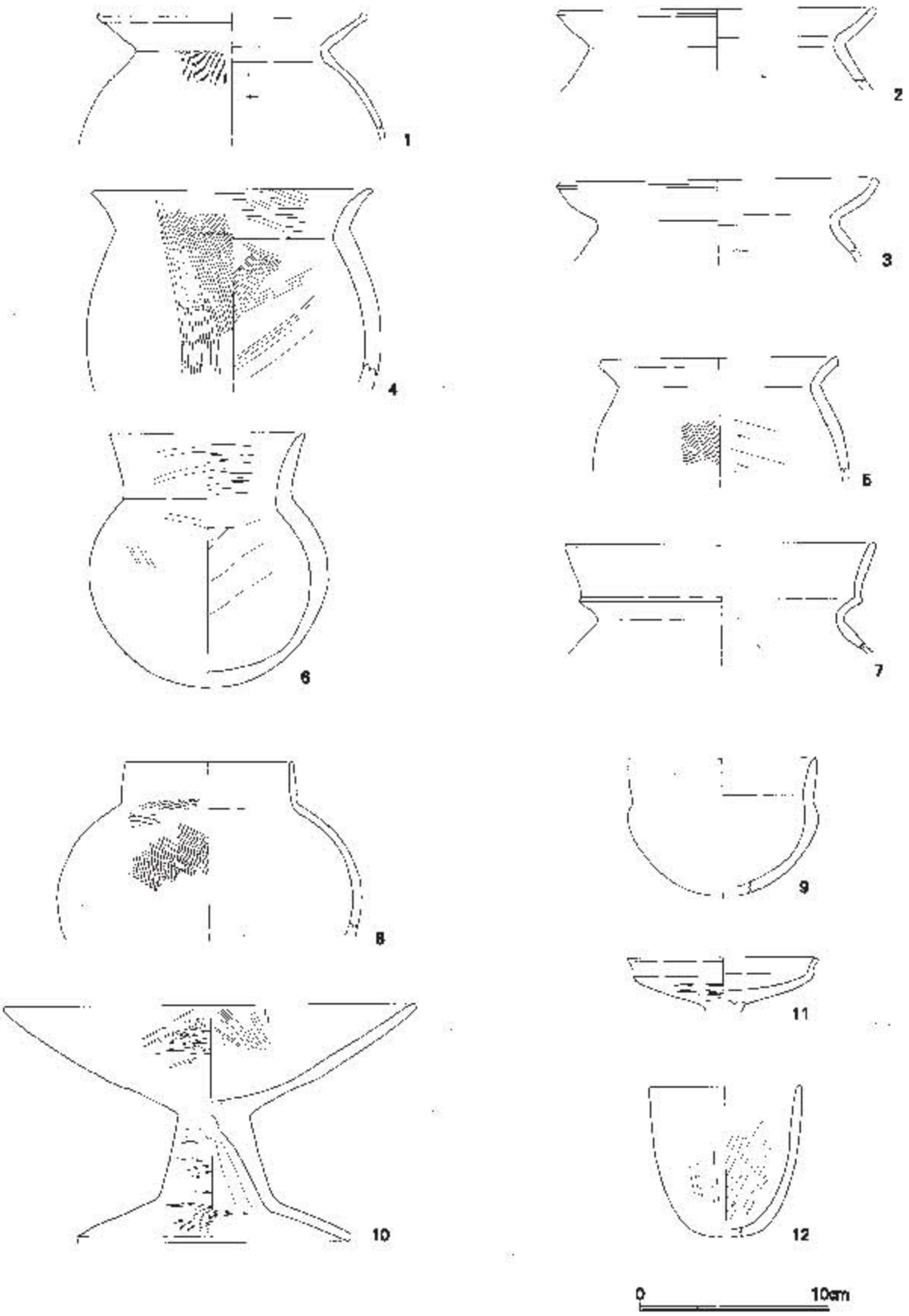


図 71　ST11067 古墳出土土器 2（1/3）

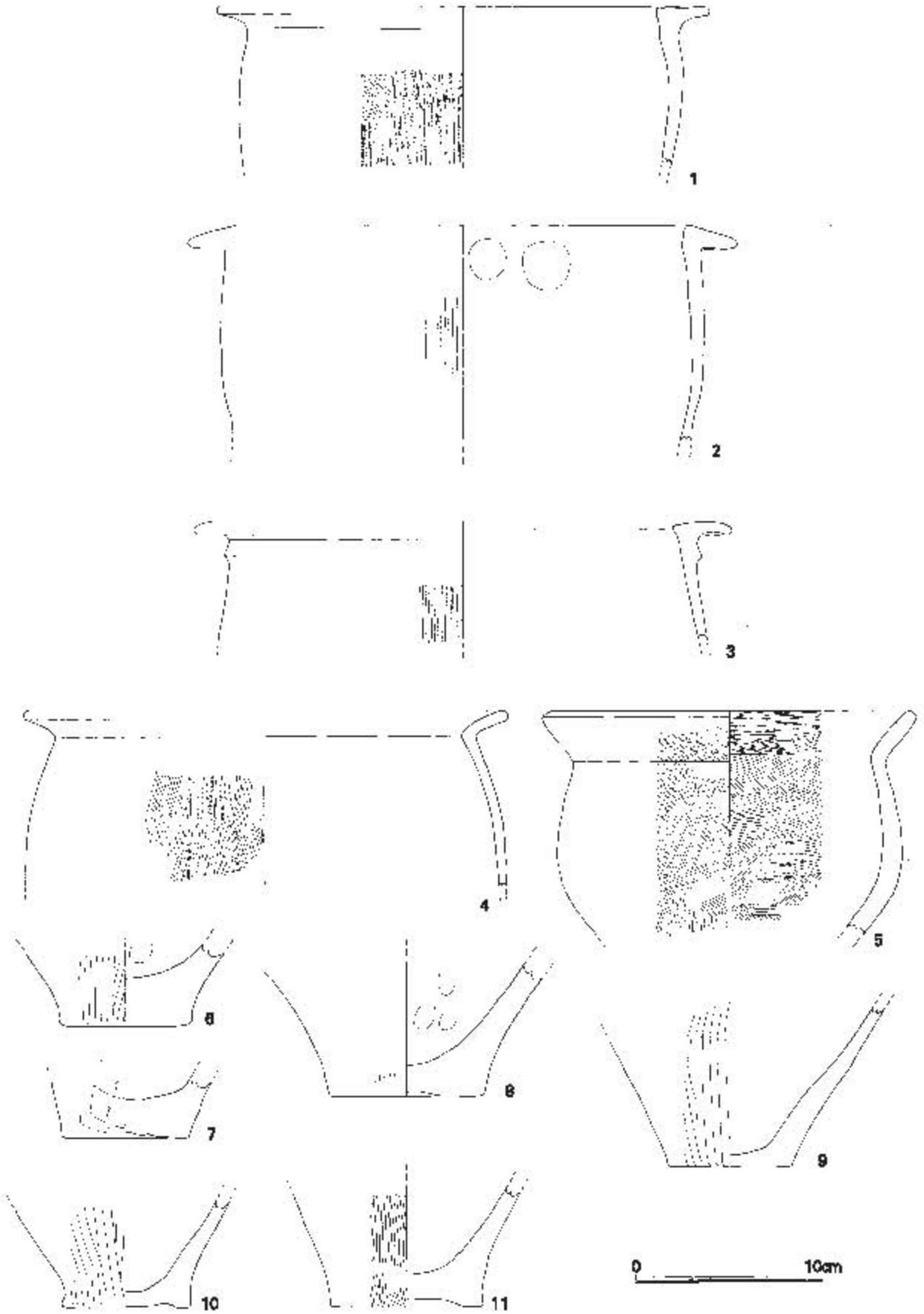


図 72　ST11067 古墳出土土器 3（1/3）

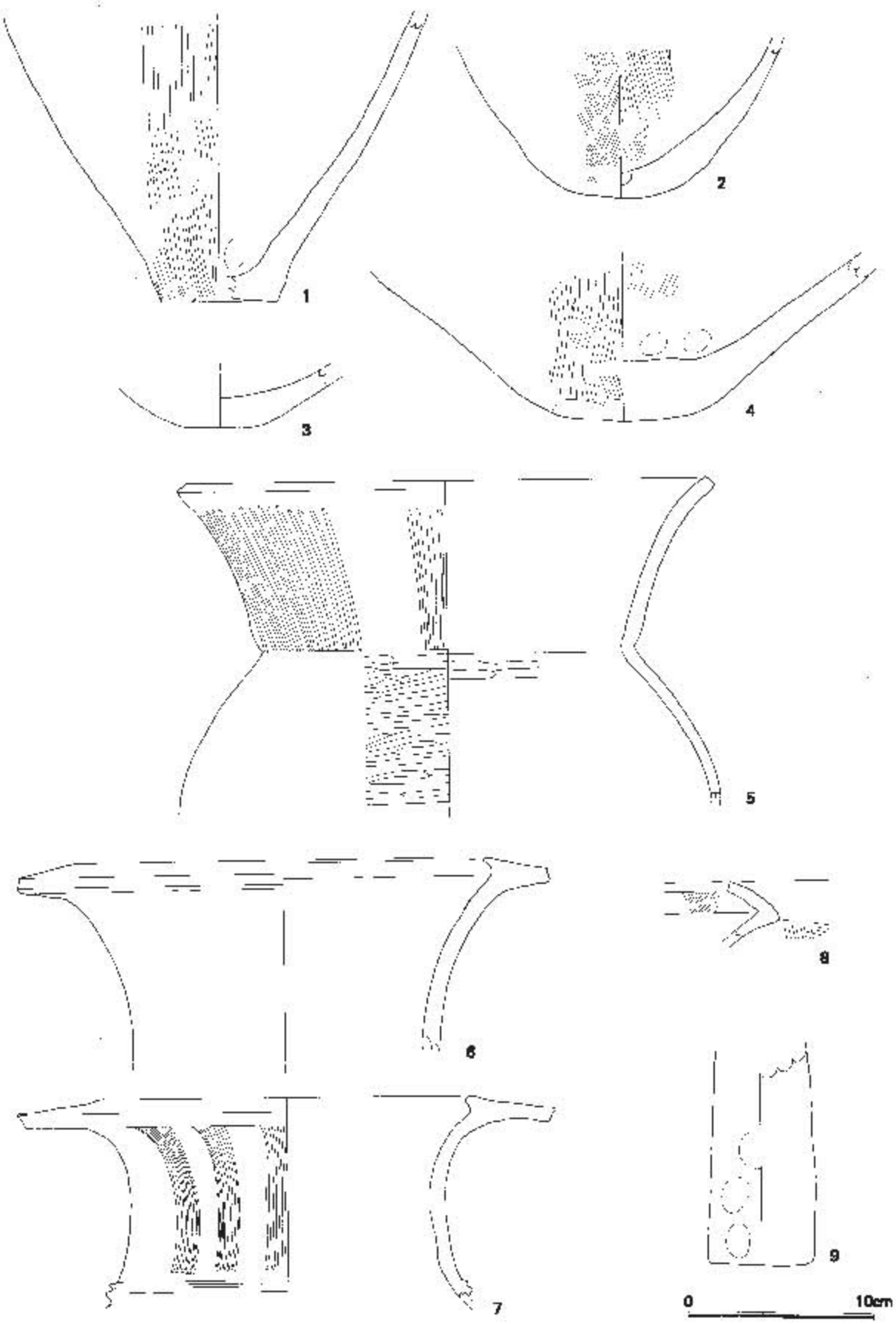


図 73　ST11067 古墳出土土器 4（1/3）

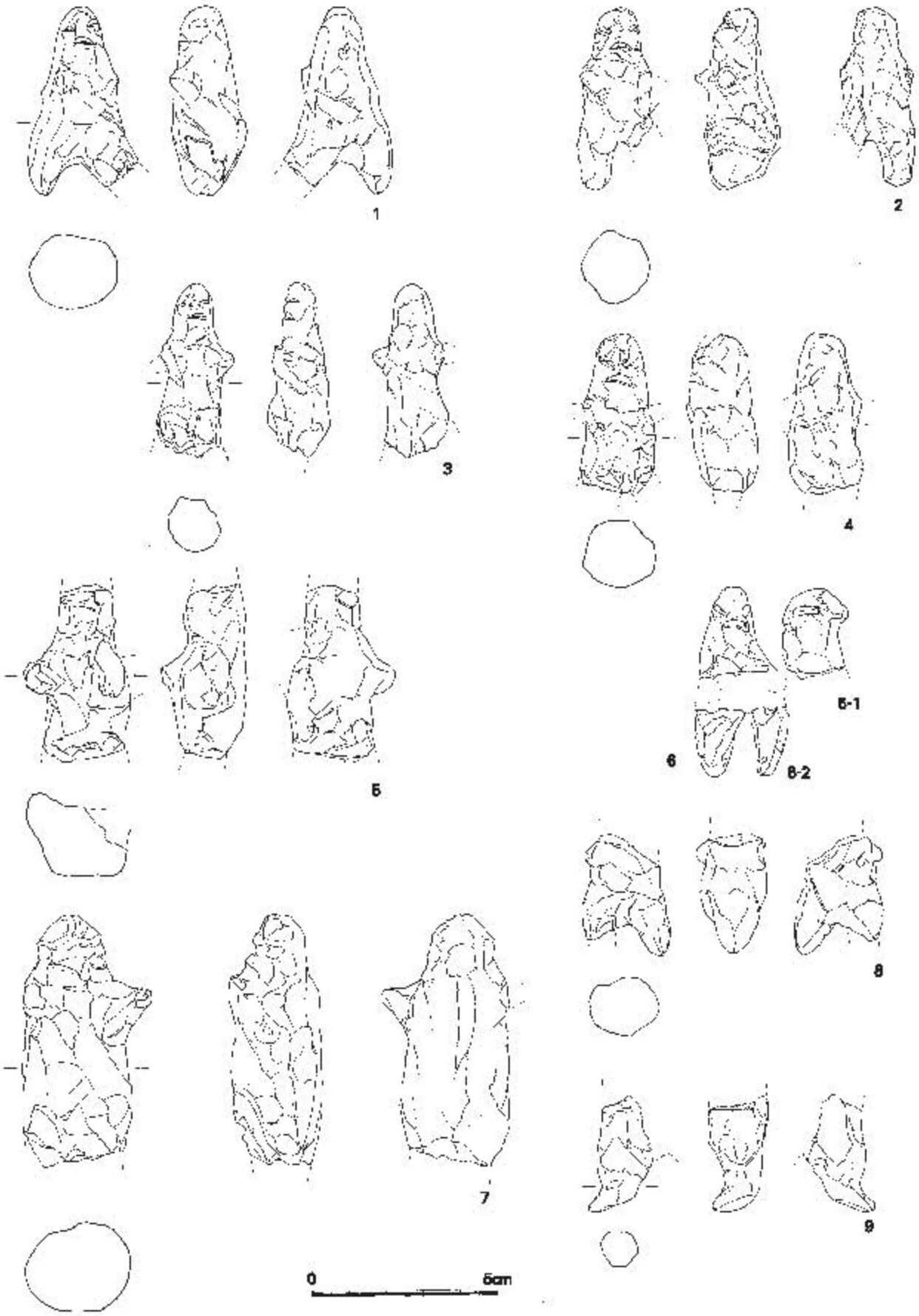


図 74　ST11067 出土土製人形 (2/3)

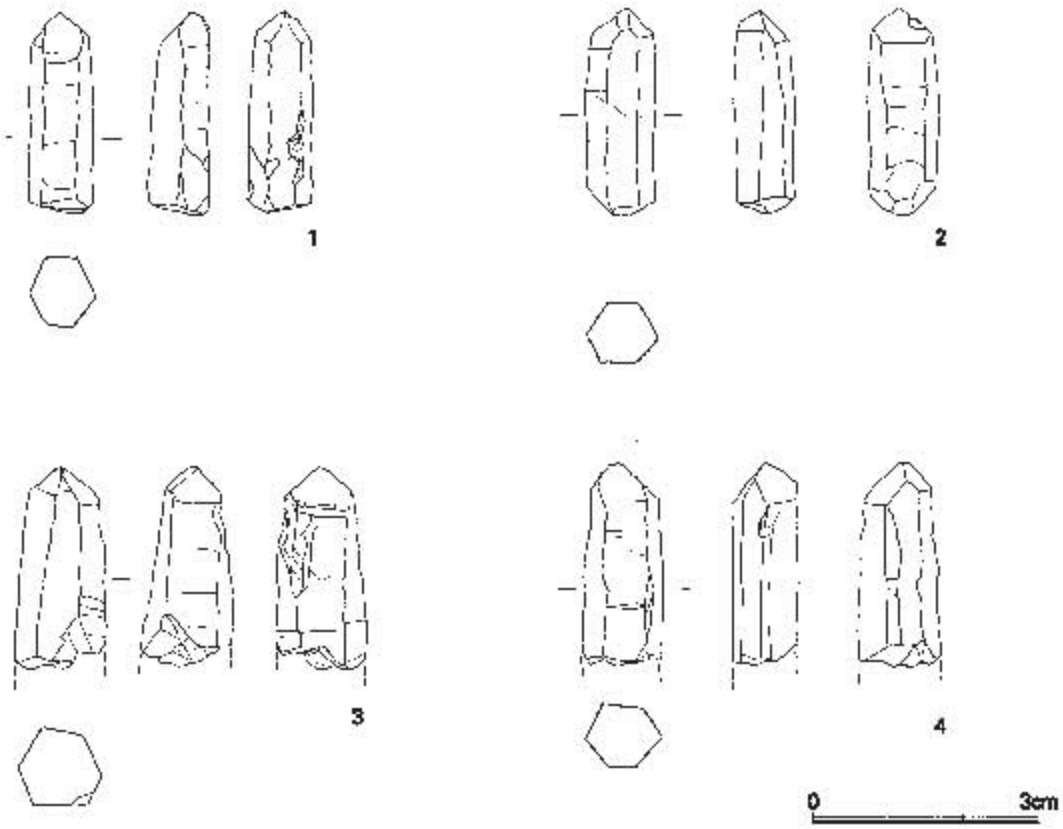


図75　ST11067出土水晶原石（1/1）

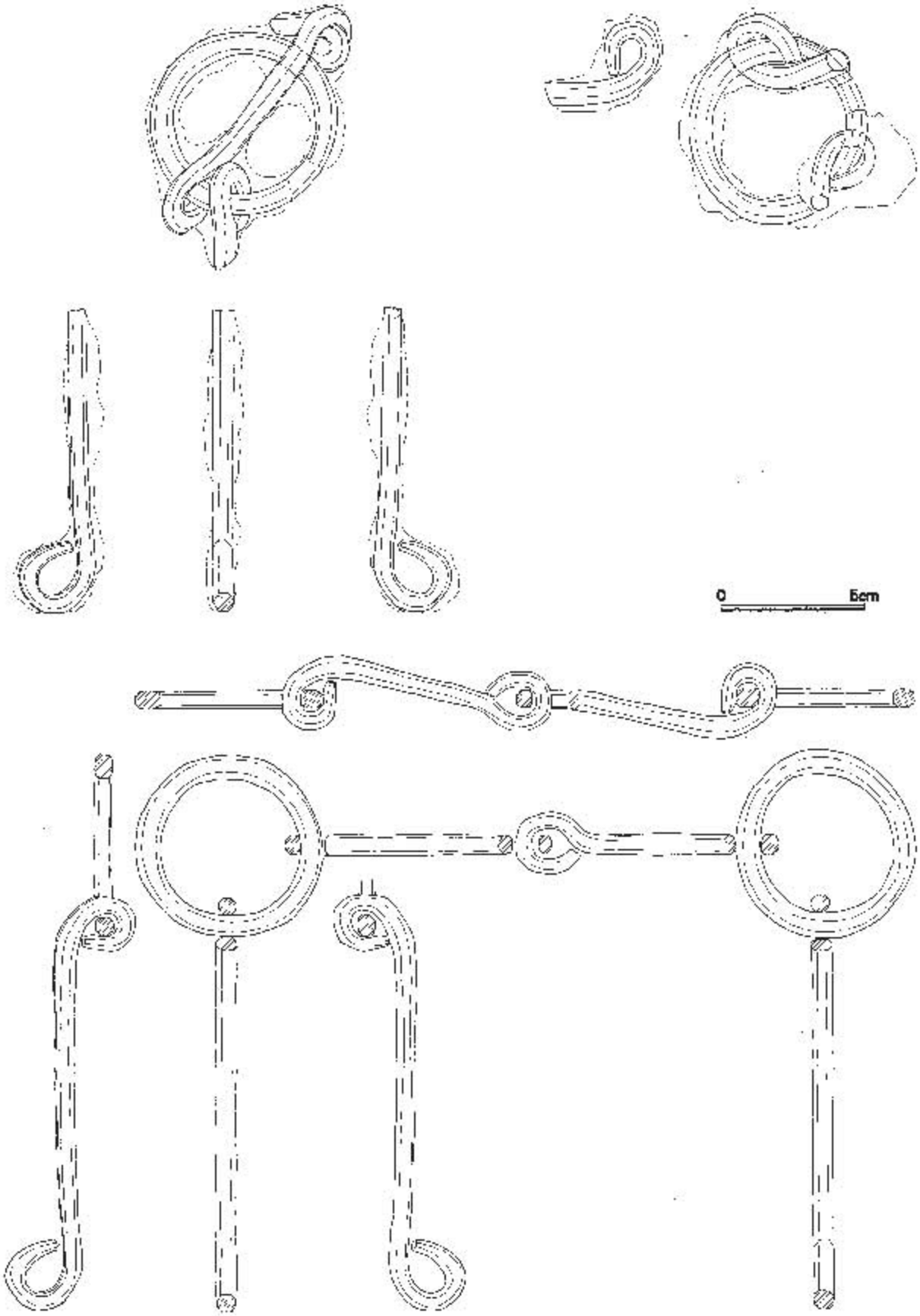
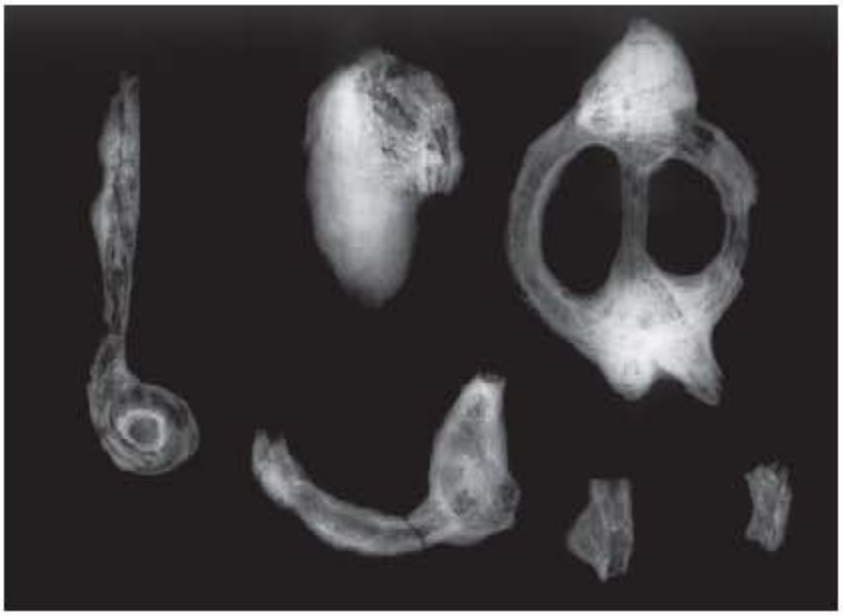


図 76　ST11067 古墳出土鬱（1/2）・模式図



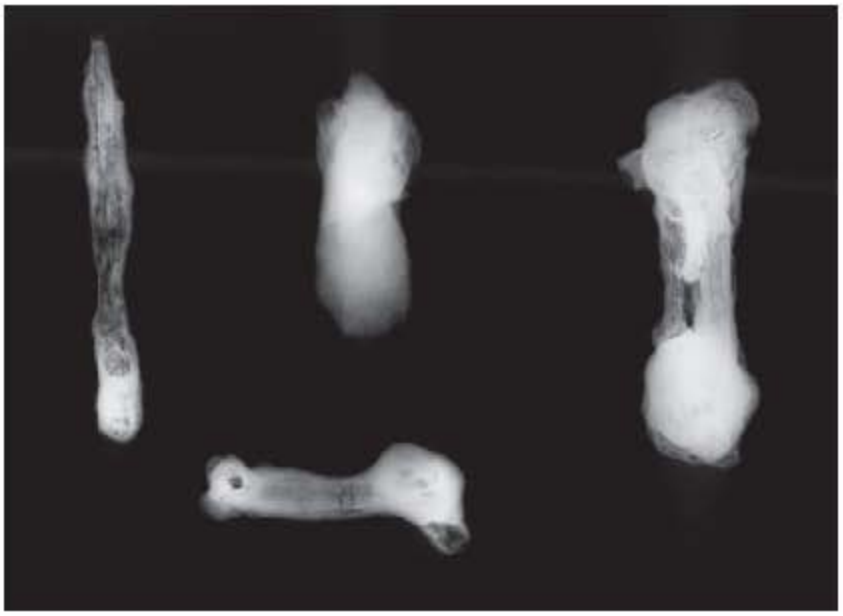


図 77　ST11067 古墳出土鬱X線写真

（3）ＳＴ１１１４１古墳出土遺物

①土器

本古墳の築造、追葬を示す遺物は図78の唐津市教育委員会調査の出土遺物がある。これらはすべて周溝出土で、一括して出土した遺物群もあり古墳出土遺物群としては良好な資料である。本事業の調査出土土器で本墳の時期を示す資料は図80-1～3がある。他の弥生時代終末期～古墳時代前期の土器群は混入である。

図80－1は須恵器、鼎である。偏球形の胴部中位に二条の沈線を回す。胴部と口頸部に櫛描波状文を施文する。櫛描波状文は部分的に乱れる。胴下半部はヘラ削りのちナデ仕上げ。2、3は土師器、椀である。2は完形、体部～底部にかけて、ナデのち不定方向のヘラ削り。3は約1/3残存、外面、ナデ。赤色顔料の痕跡が部分的に残る。4～11は土師器、甕口縁部片である。布留型甕もしくはその影響をうけた甕である。口縁部は内湾（4、7、8、9、10）するものと直線的（5、6、11）があり、胴部外面ヨコハケ、内面ヨコ方向のヘラ削りを施す。4は肩部外面に一条の波状線あり。5は肩部外面に斜めの櫛描列点文を連続施文する。6は口唇部内面肥厚。7は肩部外面に一条の直線沈線施文。11は口唇部内面わずかに肥厚する。

図81-1～10は土師器、甕である。1、4は外反気味の口縁部で胴部上半部はハケ、下半部はヘラ削りである。1は胴部外面、叩きのちハケ、4は胴部外面ハケ。2は胴部外面斜めハケ、内面ヘラ削り。3は肩部外面ヨコハケ、内面ヘラ削り。5は口縁部内外面ハケ、肩部外面叩きのちナデ、内面ハケ？6、7は肩部内面ハケ。8は肩部内面ヘラ削り。9は胴部外面タテ方向のカキ削りのちナデ、内面ナデ。器高17.3cmの小型の甕である。10はなで肩で内面は粗いヘラ削り。

図82-1～8は土師器、甕である。1は胴部中位に接合痕あり。上半部と下半部を別々につくり接合したと思われる。肩部外面、右上がりの叩き、接合付近はヨコの叩き、胴部内面ナデ。2はほぼ完形、平底で、胴部下半に接合痕らしき痕跡あり。胴部上半内外面斜めハケ、胴部下半外面カキ削り。3は肩部内外面、斜めハケ。4は体部内面、ヘラ削り、体部外面ハケ。布留型甕である。5、6は小型の甕。胴部内面ヘラ削りのちナデ。外面、ハケのちナデ。6は胴部外面タテハケ、内面ヘラ削りのちナデ。7は胴部外面ハケ、内面雑なヘラ削り。器壁は厚く、粗製の甕である。8は口縁部が短く外反、胴部内面ヘラ削り。7、8は中、後期の土師器であろう。

図83-1～4は土師器、甕である。1～5は甕肩部の土器片である。1、2、3は外面ヨコ方向叩き、内面ヘラ削り。4は外面ヨコ方向叩き、内面ナデ。口縁部近くの内面はナデを施す。1も同様である。5の色調は橙色で1～4と異なり、色調は在地の土器に類似する。6～11は土師器、壺である。6は完形、口頸部は直口し、口唇部は上方につまみあげる。胴部下半部に明瞭な接合痕がみられる。内外面ハケ。7は畿内系広口壺、肩部外面磨き、内面削りのちナデ。8、9は小型の直口壺である。8は口頸部～胴部外面ハケ、胴部内面ハケ。9は胴部外面ハケ、内面ヨコナデ。10は直口壺、器壁が厚い。11は二重口縁壺、肩部内面ヘラ削り。

図84-1～20は土師器、鉢である。1～3は精製の小型丸底鉢である。口縁部はわずかに内湾する。1、2は外面ハケ、3は内外面磨き。4、5、6は屈曲口縁の鉢である。器壁は厚く粗製である。7は口縁部を口縁部を短く外反する。体部上半部内外面ハケ。8、9、10、11、13は素口縁の鉢である。8は内外面ナデ。9は体部外面上半ハケ、下半カキ削り状。10は内面ハケ。12は平底気味で口縁部にかけてやや内傾する鉢である、古墳時代後期か。14、15、16は素口縁の浅鉢である。17は手づくねの浅鉢、18は手づくねの屈曲口縁の鉢である。19、20は須恵器杯蓋模倣土師器である。底部（天井部）は平

坦気味になる。

図85-1～3は土師器、台付鉢である。1、2は素口縁である。3はやや内湾する台（脚）部のみ遺存。4～7は土師器高杯である。4、5は杯部が有段になる。4は口縁部を上方に屈曲させる。5は脚部中実、内外面磨き。6、7は深い杯部片。8、9は弥生土器、器台である。10、11は須恵器杯蓋。12、13は須恵器杯身である。14は須恵器、鉢。胴部中位に二条の沈線を回す。胴部下半から底部は回転ヘラ削り。15は須恵器模倣の土師器鉢である。14を模倣している。底部ヘラ削り。

②埴輪

埴輪片2点が出土した。これ以外は全く出土していない。周辺にも埴輪を埋置した古墳はない。1は周溝葺石の裏込め、S-39区画から出土した。盾形埴輪である。上下は不明である。表面に三条の横方向と垂直から斜め方向のヘラ描きを施す。裏面は剥離している。硬質で焼成良好。

2は墳丘T-39区画から出土した。盾形埴輪か？あるいは蓋形埴輪など器材埴輪であろう。表裏面にそれぞれ直線一条のヘラ描きを施す。実測図正面の上下は面取り、右側縁は部分的に面取りされている。硬質で焼成良好。

③鉄製品

馬具

周溝内から2点の鑣轡（ひょうくつわ）が出土している。図87-1は無引手鑣轡である。2本の銜（はみ）は内環で連結する。銜は一条捩り技法でつくられる。銜外環は内径2.5cm×2.8cmで、外環端部を銜の身部に巻きつけて環状にする。銜内環は鉄棒を環状にまわす。銜長は10.5cm、11.2cmである。立聞用金具は一部欠損するがコの字で先端部は尖る。

図89は鑣轡とその模式図である。X写真では、中央に1本の鉄棒が見えるため、1本捩りか、1本の鉄棒を芯に、そこに別な鉄棒を捩ってからめたかいずれかで、時期的に前者の可能性が高い。銜外環に一条線蕨手状の引き手が連結する。二連の銜は連結部で破損し、連結状況は不明である。二連の銜は左右で鉄棒の太さが若干異なり右側がやや細い。引手長は15.0cmである。銜外環部に立聞用金具が鹿角の一部とともに錆着している。

鉄鏃

図87-2は鉄鏃である。周溝内で馬具（図89）の近くから出土した。鏃身部は柳葉形で、茎部先端は欠損する。

④玉類

図90-1～13はガラス小玉である。石室内の奥壁近くの床面から出土した。80cm×50cmの範囲で約25cmの高低差をもって出土した。直径は8mm前後と規格をもち、長さは4.10mmから8.75mmとばらつきがみられる。従って形態的には長円筒形から扁平形と異なる。色調はすべて群青色である。すべてソーダ石灰ガラスで、着色材はコバルトで製作技法は引き伸ばし技法である。図90-2、8は小口が平坦に研磨されている。

図90-14は滑石製勾玉である。両側穿孔。孔周辺は両面とも平坦気味に磨く。

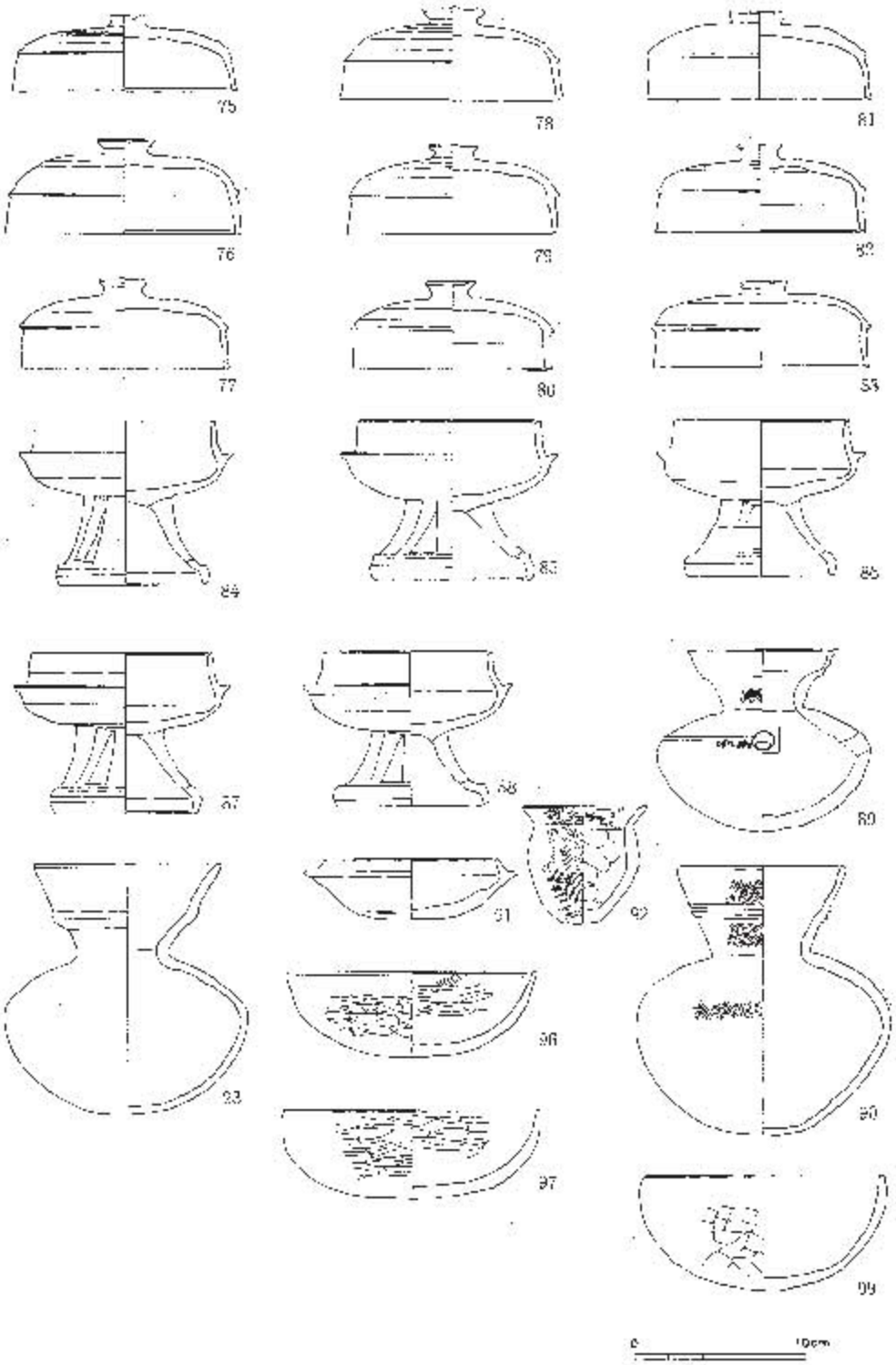


図78　ST11141古墳(5号墳)出土遺物1 (1/4) 唐津市教育委員会調査分

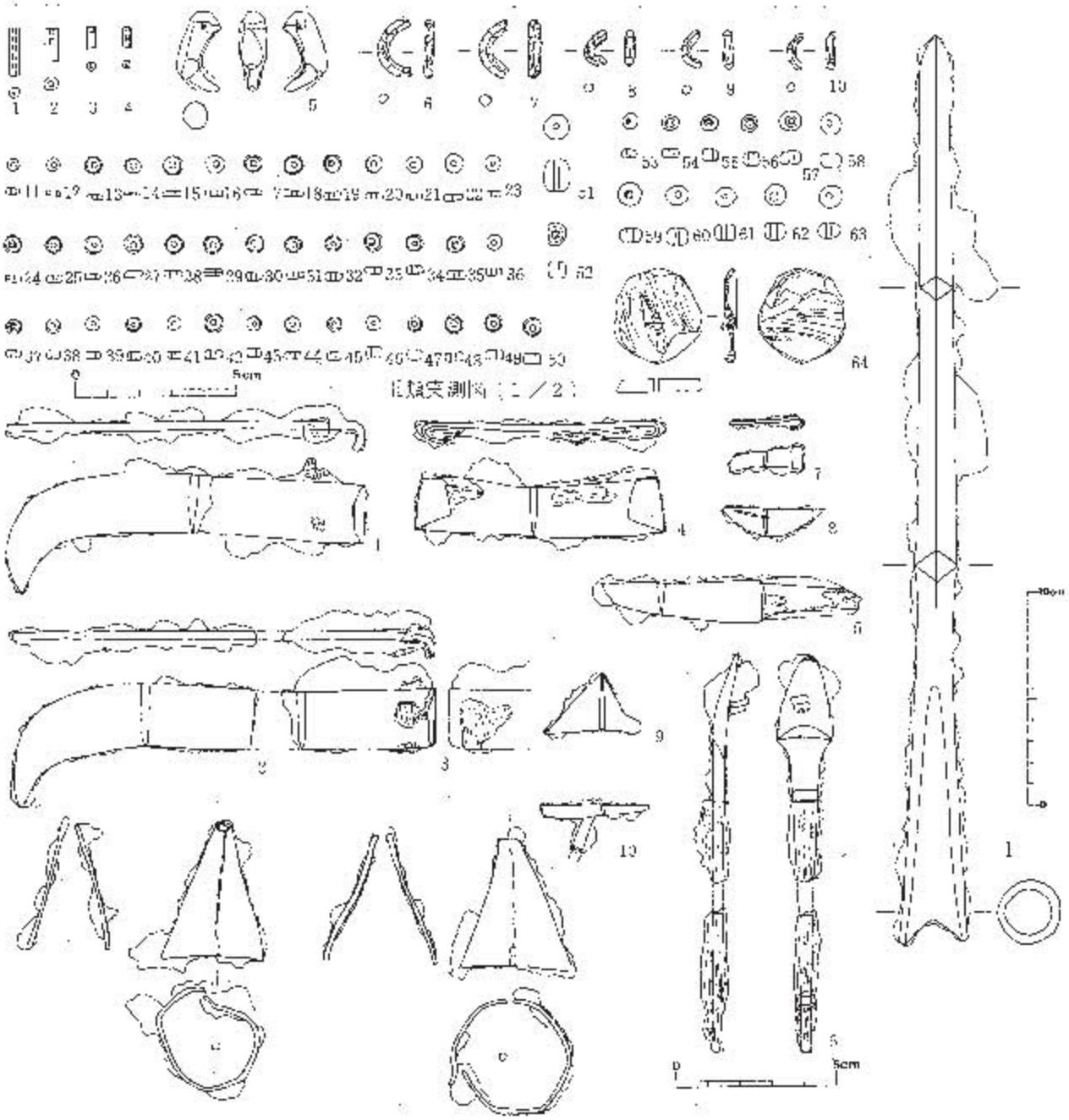


図79　ST11141古墳(5号墳)出土遺物2（1/2、1/3）唐津市教育委員会調査分

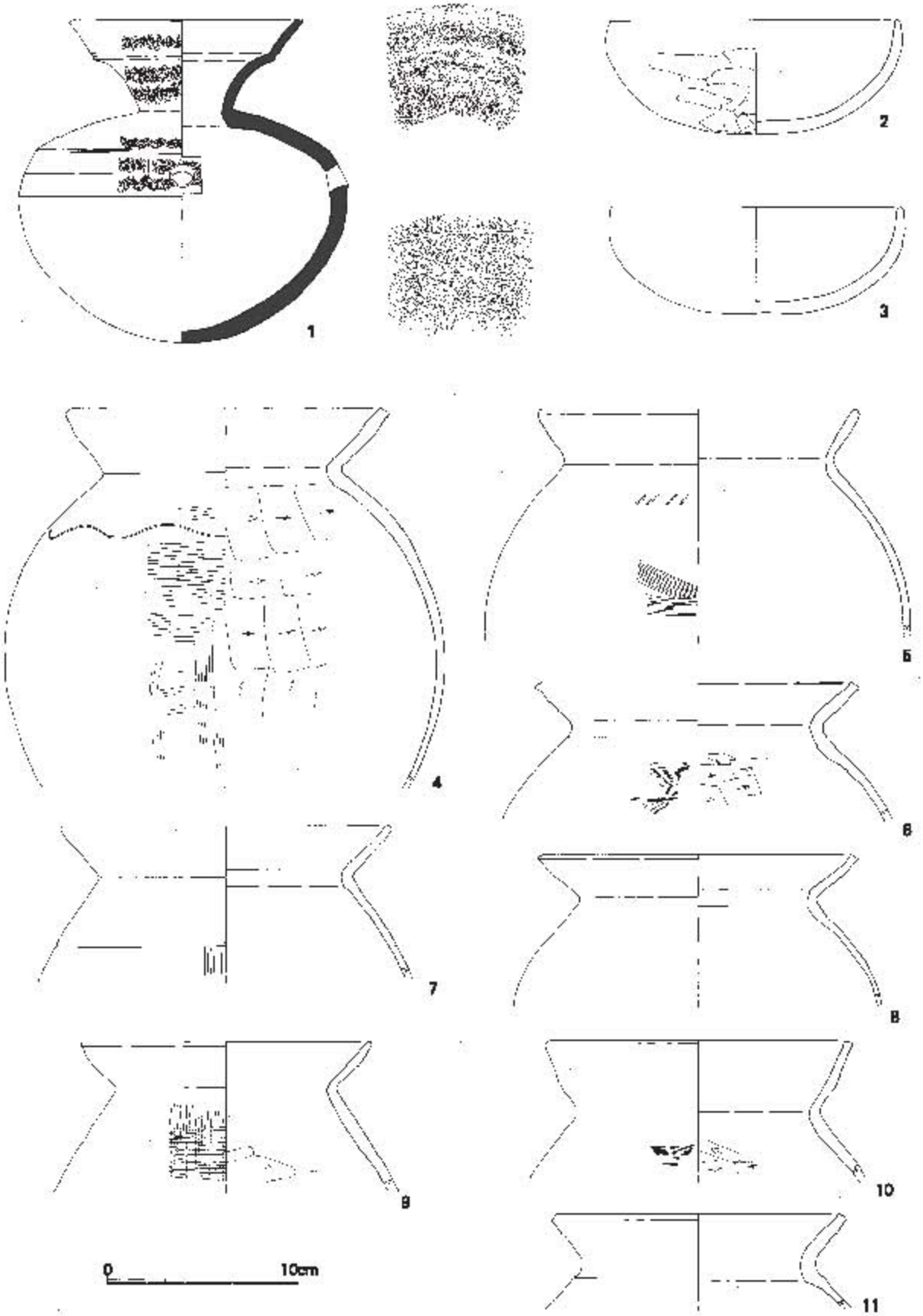


図 80　ST11141 古墳出土土器 1（1/3）

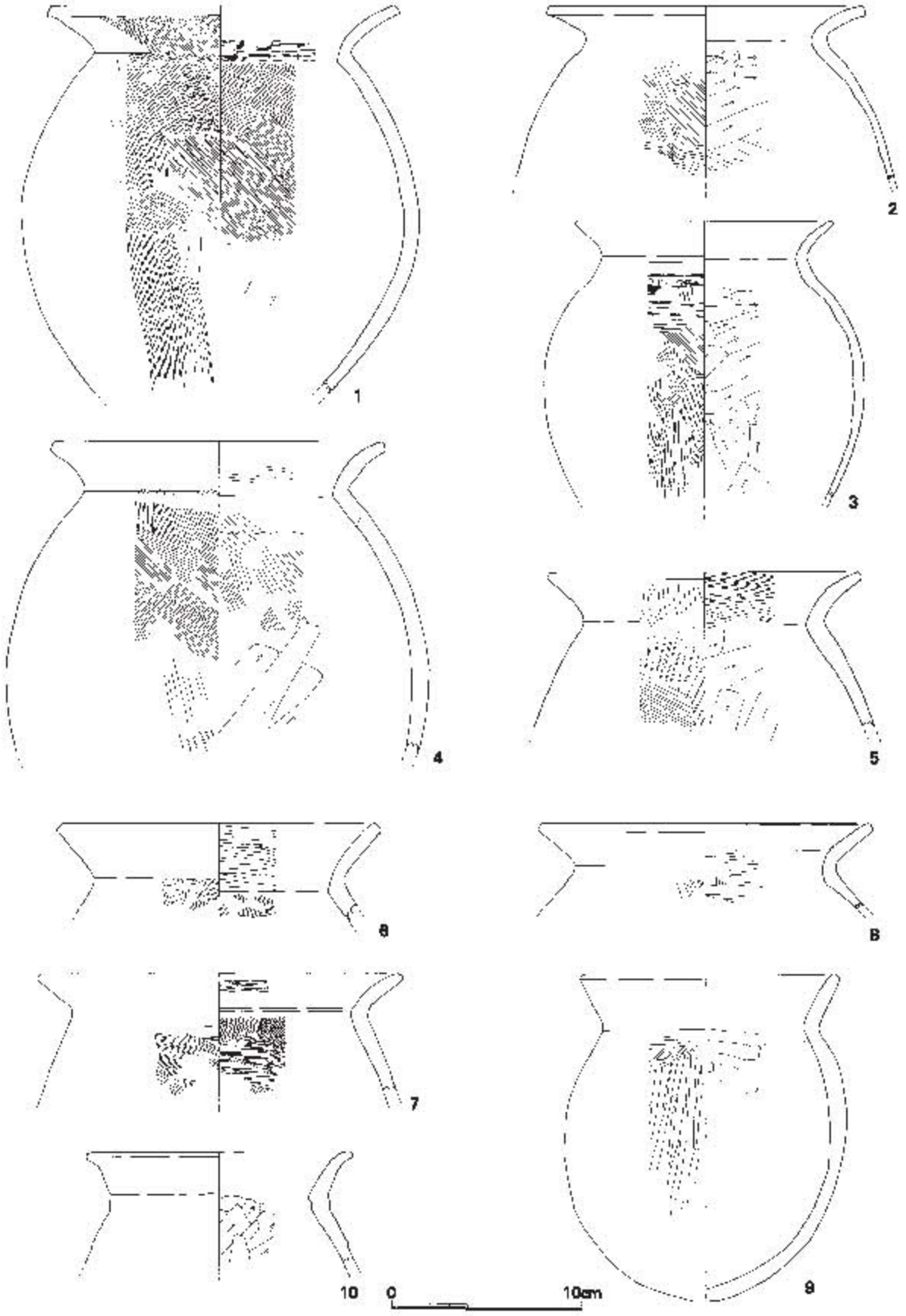


図 81　ST11141 古墳出土土器 2（1/3）

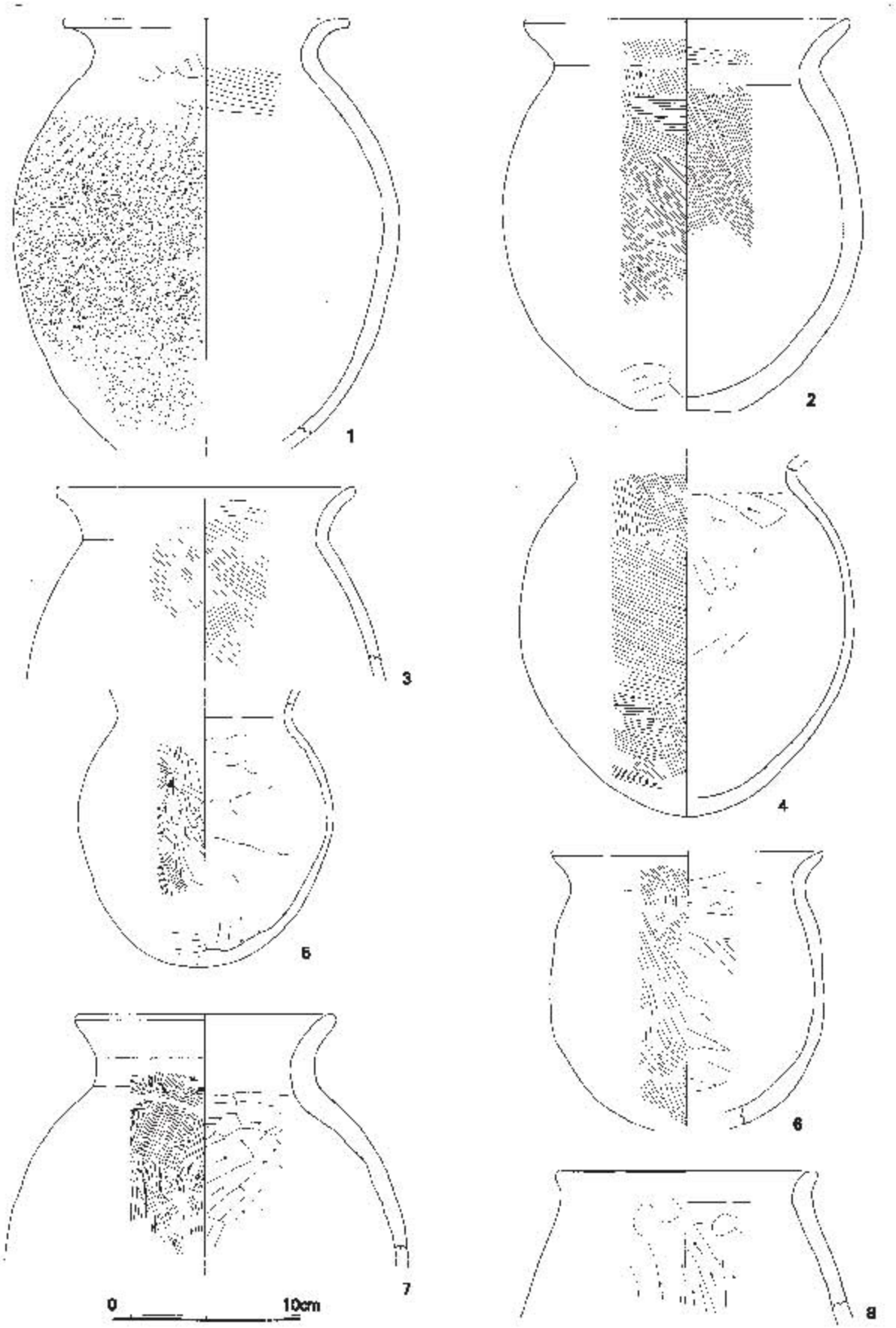


図 82　ST11141 古墳出土土器 3（1/3）

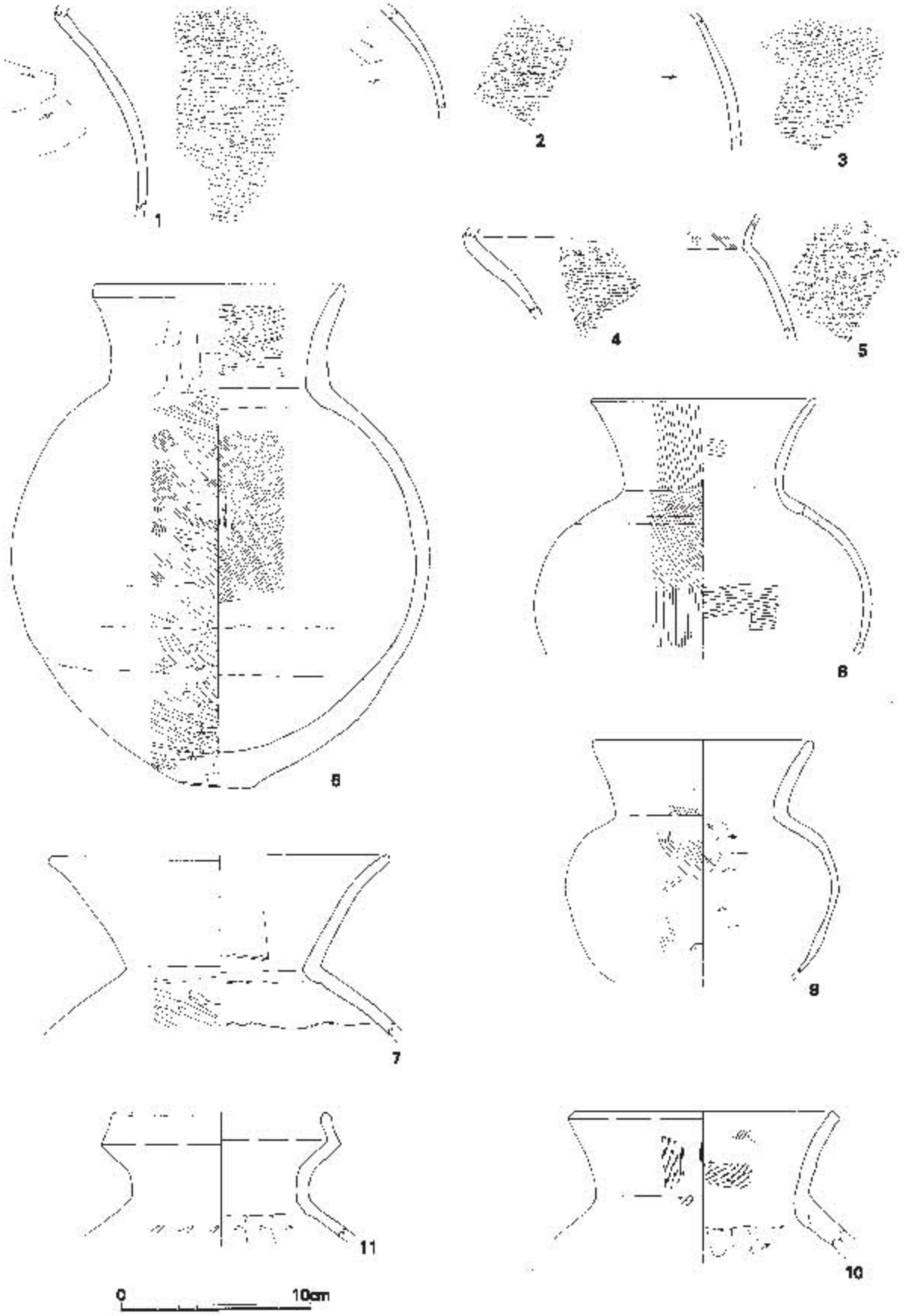


図 83　ST11141 古墳出土土器 4（1/3）

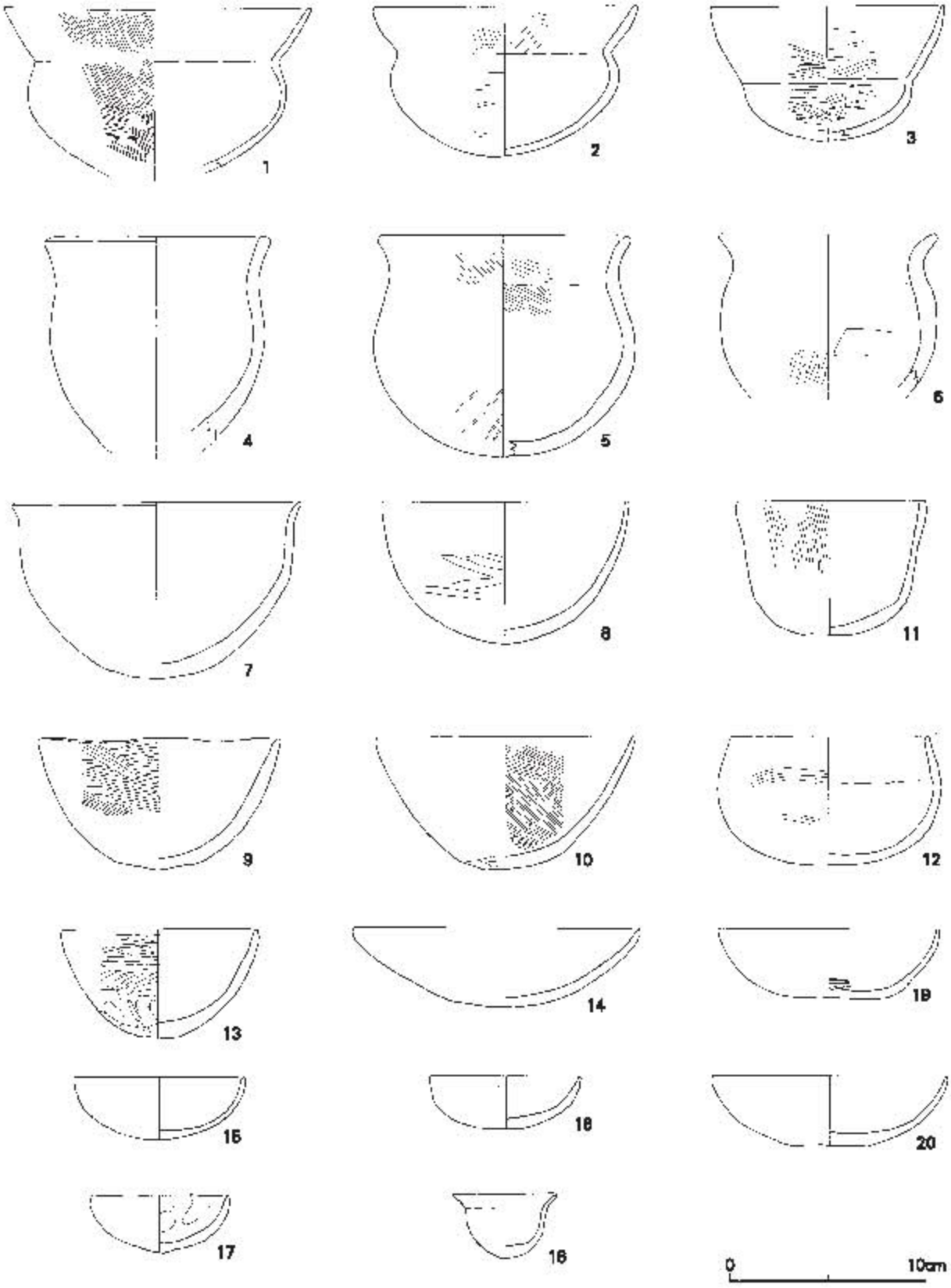


図 84　ST11141 古墳出土土器 5（1/3）

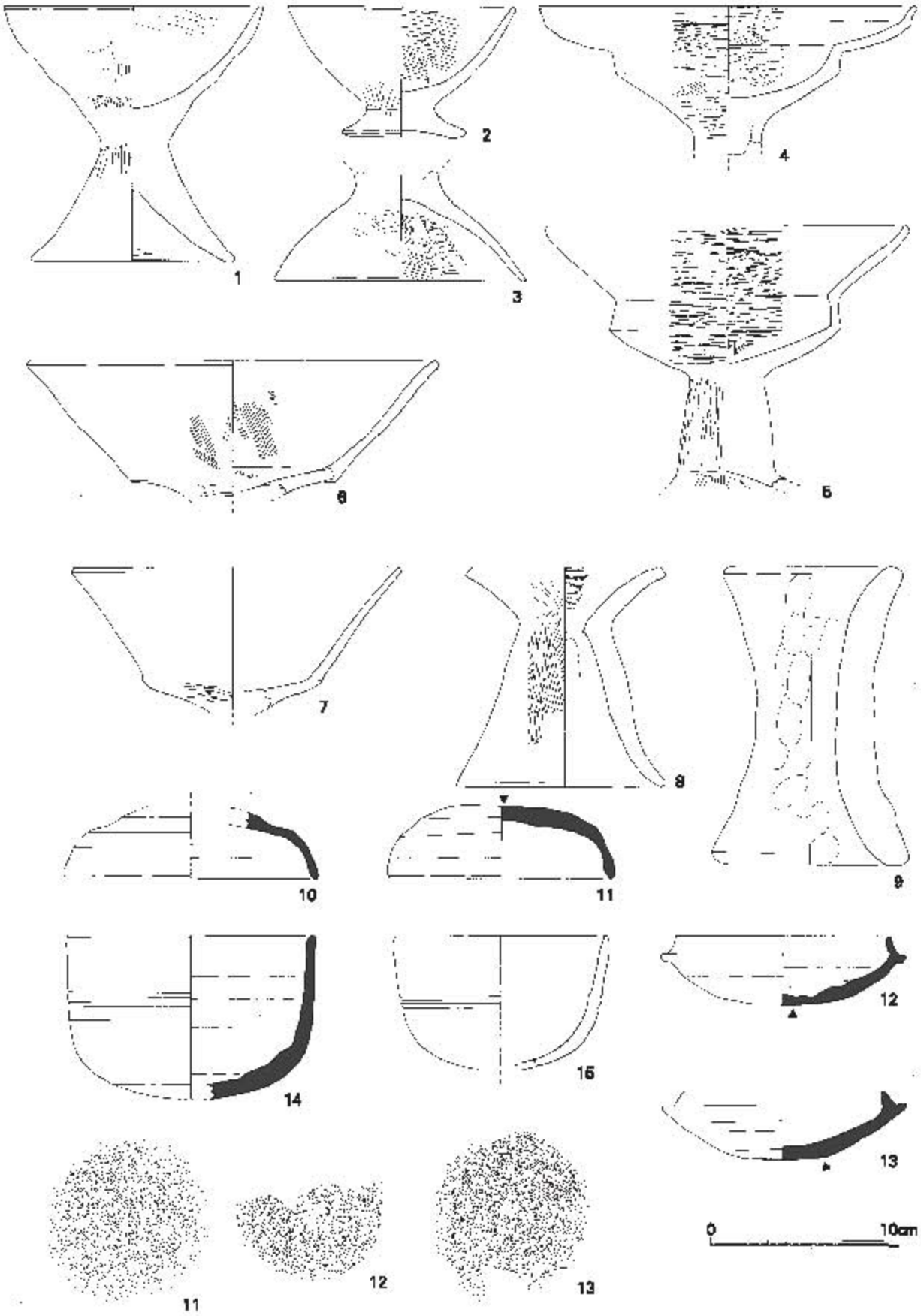
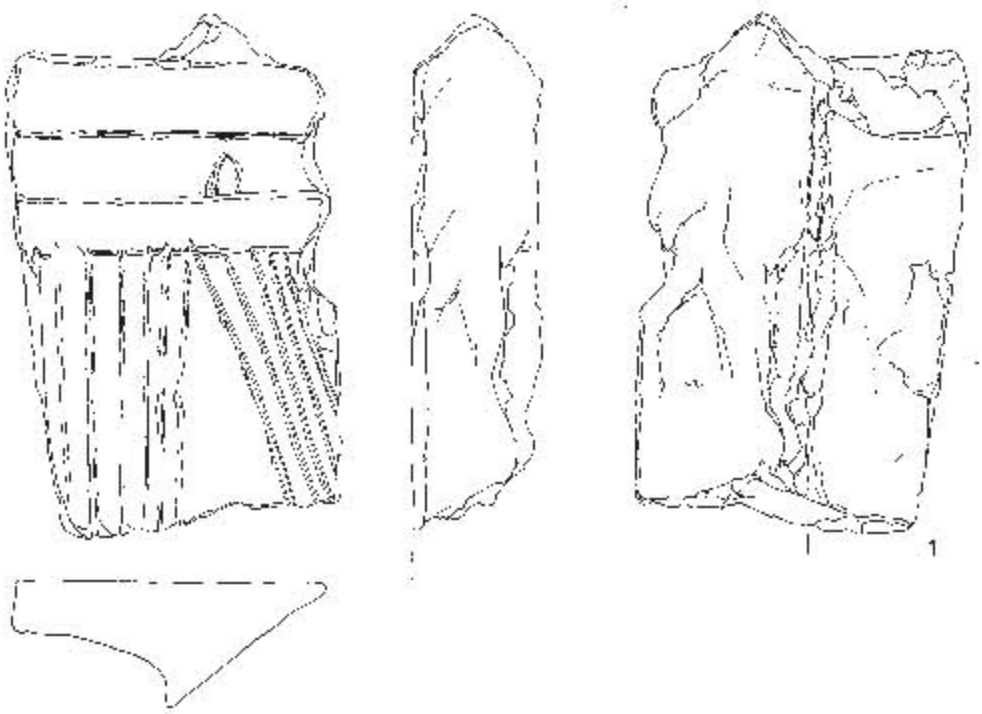


図 85　ST11141 古墳出土土器 6（1/3）



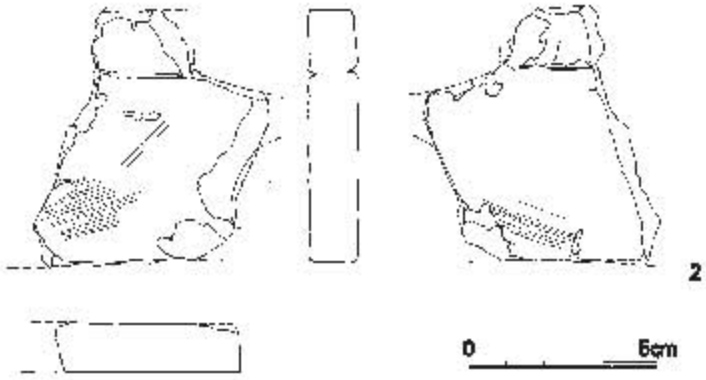


図 86　ST11141 古墳出土埴輪（1/2）

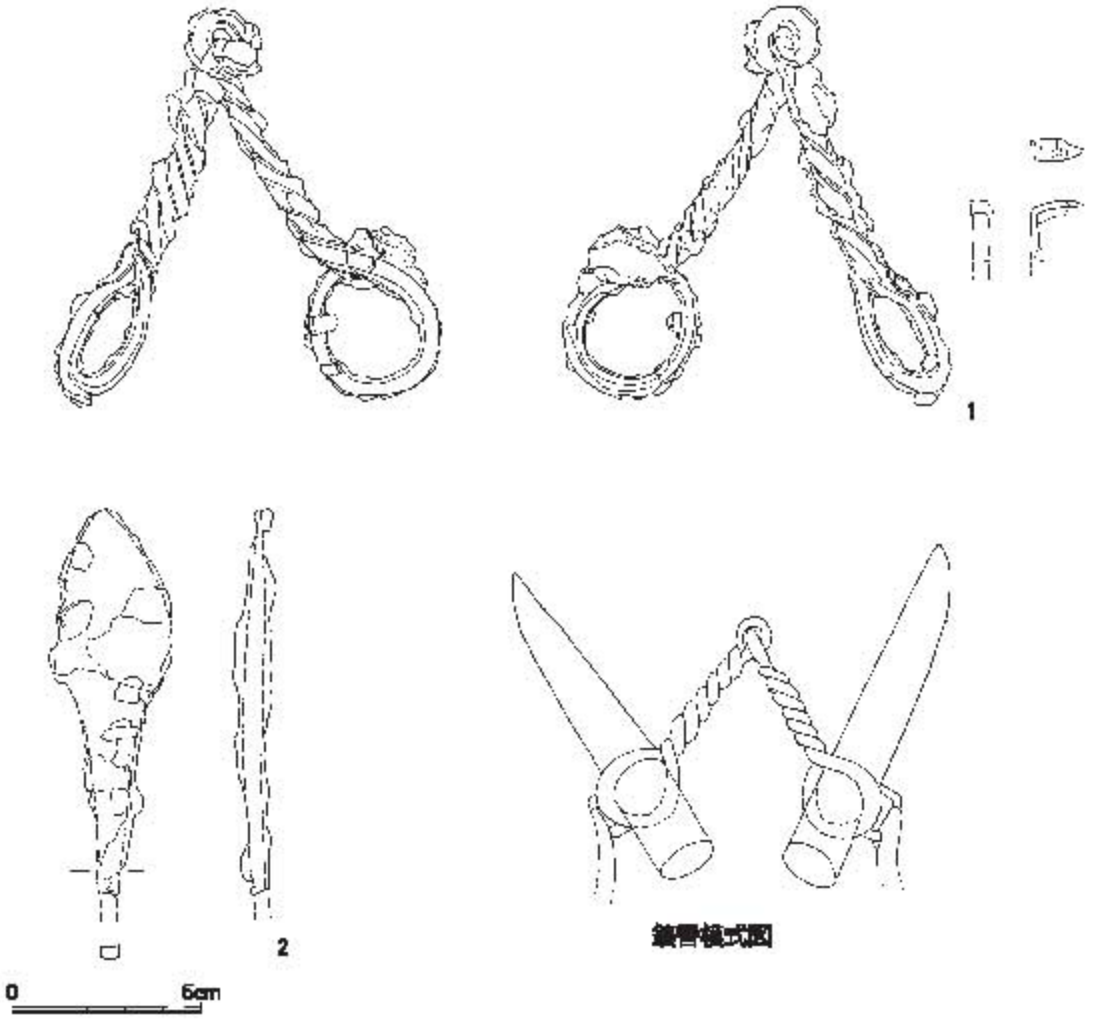


図 87　ST11141 古墳出土鉄製品（1/2）

図 88　ST11141 古墳出土鐙 X 線写真

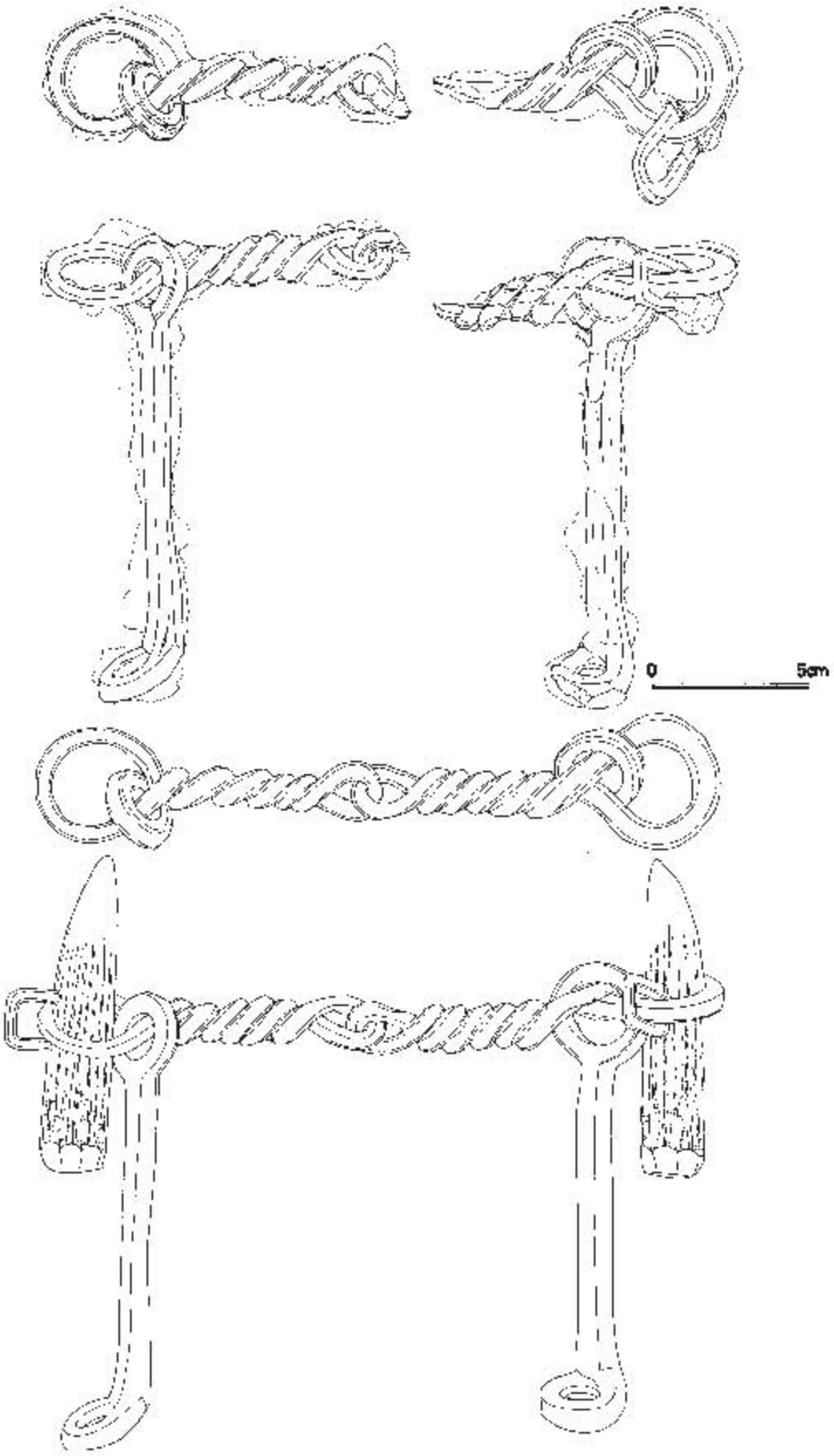


図 89　ST11141 古墳出土轡（1/2）・模式図

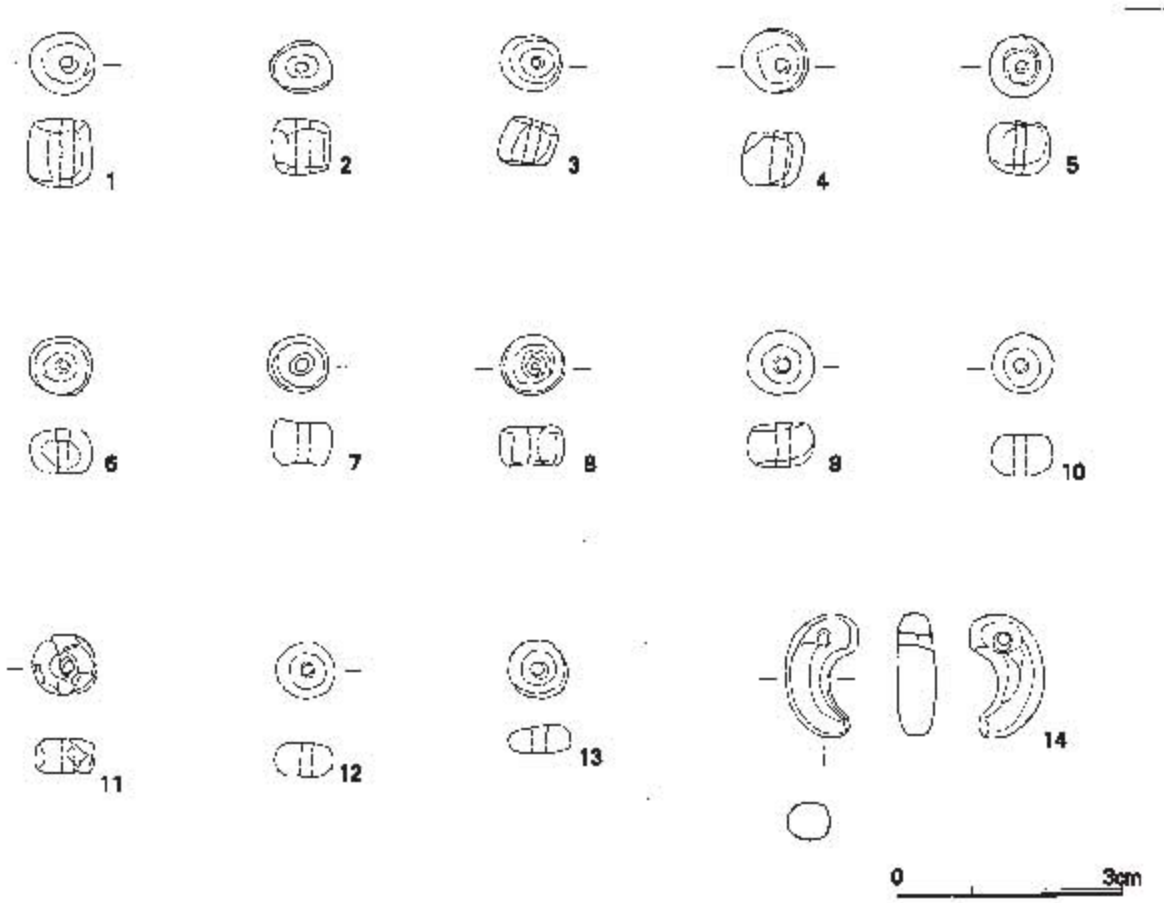


図90　ST11141古墳出土玉類（1/1）

（4）ＳＴ１１１５８古墳出土遺物

①土器

周溝などから須恵器、土師器、弥生土器、陶質土器が出土している。古墳の築造時期を示さない弥生土器が多量に出土しており、周辺の遺構からの流れ込みであろう。

法量、形態の特徴

図91-1～13は須恵器杯蓋である。1は口唇部内面に部分的に沈線を施す。天井部約1/3回転ヘラ削り。2～11は口唇部を丸くおさめる。2は天井部を約2/3を入念に回転ヘラ削りする。3は天井部約1/2回転ヘラ削り。4は天井部約1/2回転ヘラ削り。天井部外面にヘラ記号あり。5は天井ほぼ全面に自然釉がかかり調整不明。内面にヘラ記号あり。6、7は天井部約1/2回転ヘラ削り。8は天井部約1/3回転ヘラ削り。8は天井部約1/3回転ヘラ削り。9は口縁部を短く外反する。9、10は天井部約1/2回転ヘラ削り。11は口縁部片。12は天井部約1/3静止ヘラ削り。13は平坦な天井部片。

図91-14～図92-4は須恵器杯身である。14、15は生焼け須恵器で焼成、胎土が類似する。たちあがり高は1.5cm、1.4cmと他の杯身に比べて高い。16、17は底部約1/2回転ヘラ削り。18は底部が平坦で、約1/3回転ヘラ削りのちナデ。胎土、調整が他の杯身と異なる。19、20、21、22は底部約1/2回転ヘラ削り。19は底部外面にヘラ記号あり。23、24、25は底部約2/3回転ヘラ削り。23は焼成時に歪む。底部にヘラ記号あり。26は底部約1/2回転ヘラ削り。27は底部雑な回転状のヘラ削り。28、29は底部約1/2回転ヘラ削り。図92-1、2は底部が平坦でヘラ記号あり。1はヘラ切り未調整、

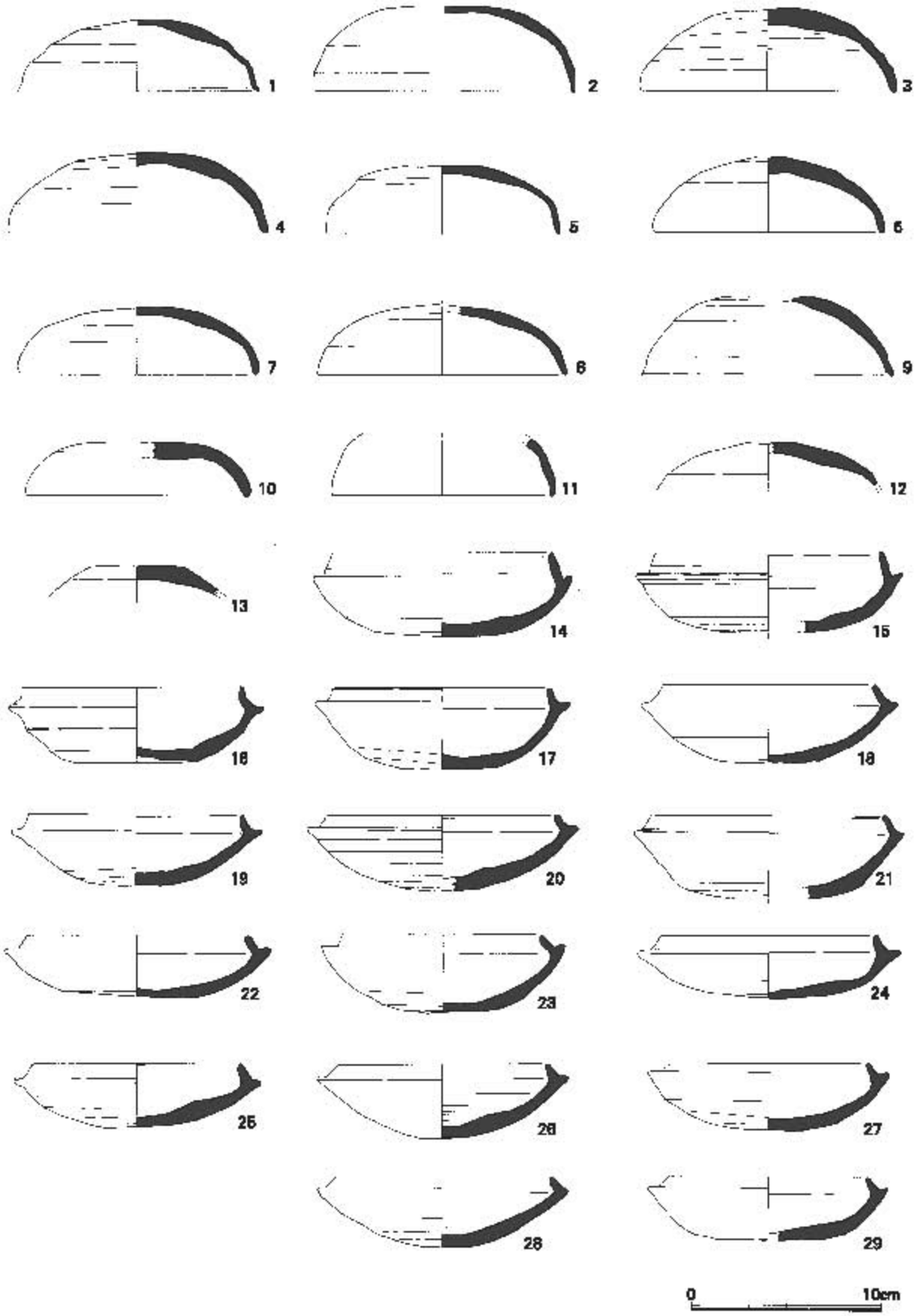


図 91　ST11158 古墳出土土器 1（1/3）

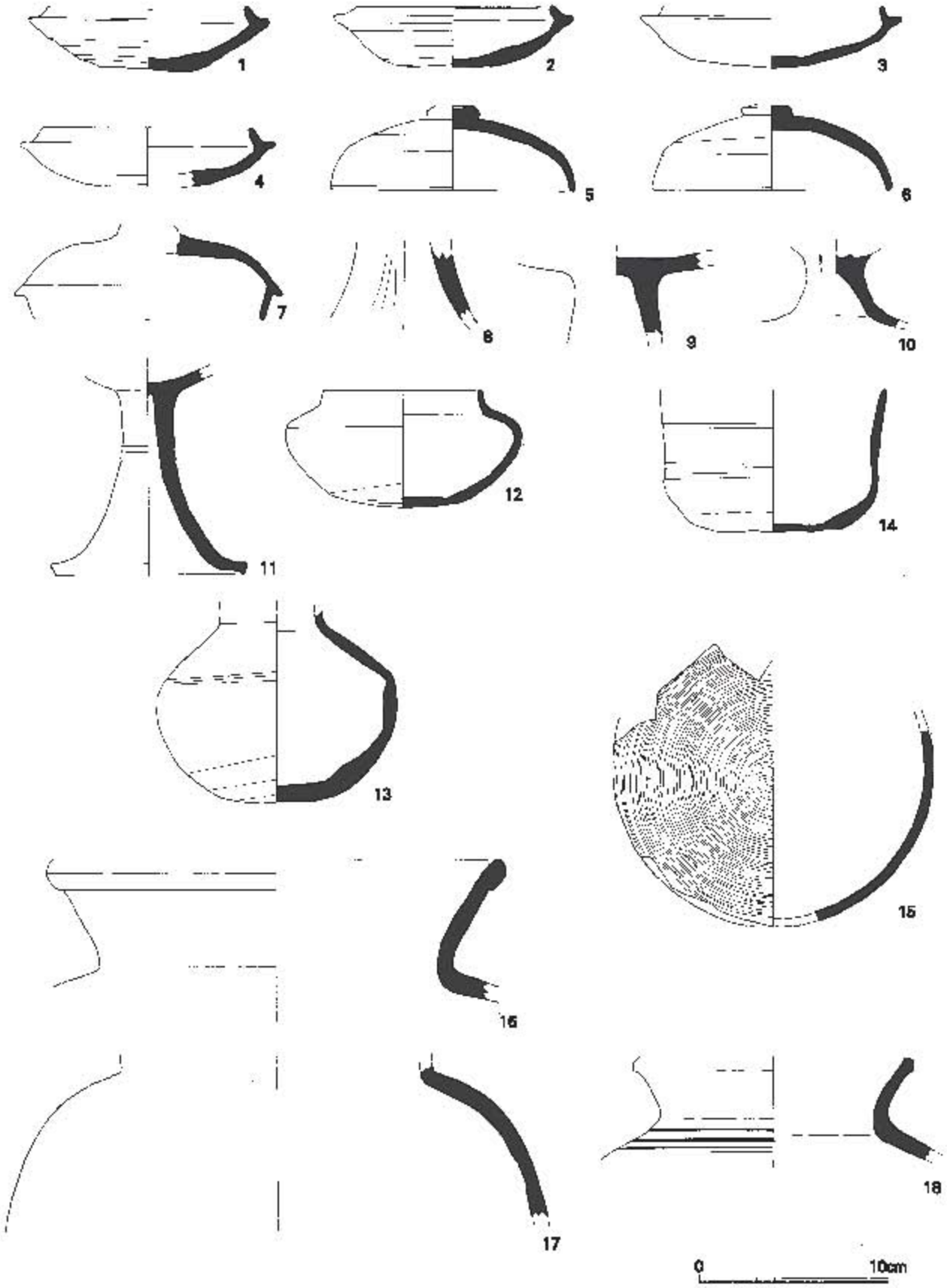


図 92　ST11158 古墳出土土器 2（1/3）

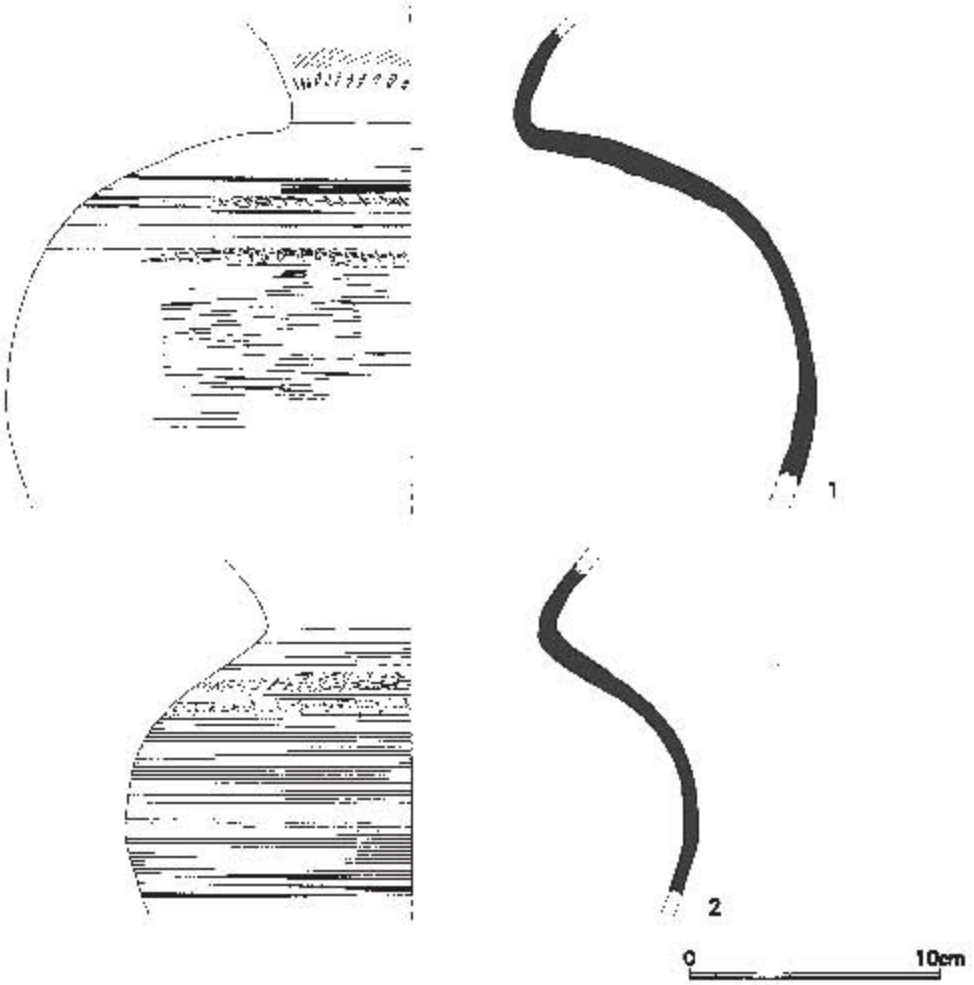


図 93　ST11158 古墳出土土器 3（1/3）

2 は回転ヘラ削り。3 はヘラ切り後工具によるヨコナデ。

図 92-5 ～ 7 は須恵器のつまみ付き蓋である。5、6 は素口縁で、7 はかえりがつく。5 のつまみ部はより窪む。5、6 は天井部約 1/2 回転ヘラ削り。

図 92-8 ～ 11 は須恵器高杯である。脚部のみの遺存である。8 は短脚 1 段透かしで長方形の透かしをもつ。本古墳出土土器では型式的に最も古い時期の土器になる。9 は古代の高杯か？ 10 は形態不明である。短脚の外反する裾部、くびれ部中央に三角突帯を回す。その上方にはヘラによる縦方向の刻みが不規則に施される。11 は脚部中央に二条の沈線を施す。縦方向一本のヘラ描きあり。

図 92-12、13 は須恵器壺である。12 は直立気味の短頸壺、13 は頸部欠損するが長頸壺であろう。肩部に退化した一条の沈線を回す。

図 92-14 は須恵器椀である。体部に二条の沈線を二段に施す。カキ目調整、底部不定方向ヘラ削り。図 92-15 は須恵器提瓶である。体部のみ遺存、カキ目調整。

図 92-16 ～図 93-2 は須恵器壺である。16 は内面同心円叩き。17 は焼成不良で、内面同心円叩き。18 は口縁端部外面に一条の沈線を施す。内面ナデ。図 93-1、2 は頸部および肩部に櫛描列点文を施す。外面カキ目、内面ナデ調整。

図 94-1 ～図 95-4 は土師器甕である。図 94-1 は口縁部はく字形で底部は平坦気味、内面はタテ方向

の粗いヘラ削り。2の口縁部は短いく字形で底部は平坦気味、内面はタテ方向の粗いヘラ削り。3は頸部内面に稜線あり。4は短く外反気味の口縁部である。5の口縁部は大きく外反する。外面タテ方向の細かなハケ。6は直立気味の短い口縁部、内面は斜め方向のヘラ削り。7、8、9は平底で、7と9の外面はタテ方向の粗いハケ。図95-1は肩部内面ハケ、胴部内面ヘラ削り、体部外面タテ方向のハケ。2は頸部内面に稜線あり。肩部内面ヨコ方向ヘラ削り。3は肩部内面ナデ、肩部に粘土輪積み痕あり。弥生土器の系譜であろう。4は口縁部内湾する布留型甕である。

図95-5は土師器二重口縁壺である。肩部内面ヘラ削り。

図95-6～9は土師器壺である。6、7は長頸壺である。6は外面赤褐色、7の肩部外面はタテハケ。8、9は体部のみ遺存。9は底部に黒斑あり。

図95-10～12は土師器鉢である。10は体部のみ遺存、底部平底気味。11は直立する短頸口縁。12は口縁部内面に稜をもつ。

図95-13は土師器小型器台である。口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。

図95-14は土師器鼓形器台である。外面ナデ。

図96-1～6は土師器高杯である。1は脚柱部が中実となる。外面磨き状、2は脚裾部で屈曲し、外方に開く。3は杯下半部のみ遺存、4、5、6は杯下半から脚部、脚部のみ遺存する。

図96-7～9は土師器甑である。7は口縁部のみ遺存、外面粗いタテハケ、内面ヘラ削り。8、9は底部。8は桟渡しの円孔が開く。

図96-10～17は土師器把手である。10～12は断面円形で、13～17は断面楕円形である。

陶質土器

図97-1～5は陶質土器である。すべて周溝から出土した。ST11158古墳の時期とは合わず混入と思われる。1、2は鉢形土器である。1は硬質であるが色調は内外橙褐色である。一見軟質土器にみえる。平底で口縁部は逆L字形に屈曲する。口縁端部は平坦に仕上げる。体部内外面ナデ。約2/3残存。

2は硬質で色調は内外灰色である。平底で口縁部は屈曲し外反する。口唇部は面とりされる。体部内面および外面上半部はナデ、体部外面下半部はヘラケズリ。約2/3残存。1、2は韓国全羅南道系で4世紀前半か？

3は高杯である。胎土は緻密で色調は灰色である。杯部外面に三条の沈線を回す。杯部内底面に工具による沈線状の刻みが残る。脚基部は太く、四方二段の長方形透かしを施す。脚部外面の中位に幅約5mmの凹線を回す。加耶地域に系譜が求められる。時期は定森秀夫氏から4世紀後葉～5世紀初頭とのご教示をえた。

4は高杯である。杯部片のみの残存である。色調は内外面やや赤色味を帯びる褐色で、器壁断面は褐色と橙褐色のサンドイッチ状である。杯体部は内湾し、口縁部はくの字形に屈曲するもののやや内湾気味である。加耶地域に系譜が求められる。時期は4世紀末～5世紀前半か。

5は高杯である。杯底部片のみの残存である。内外面の色調は灰褐色で、器壁断面は橙褐色である。長方形の四方透かしを施す。

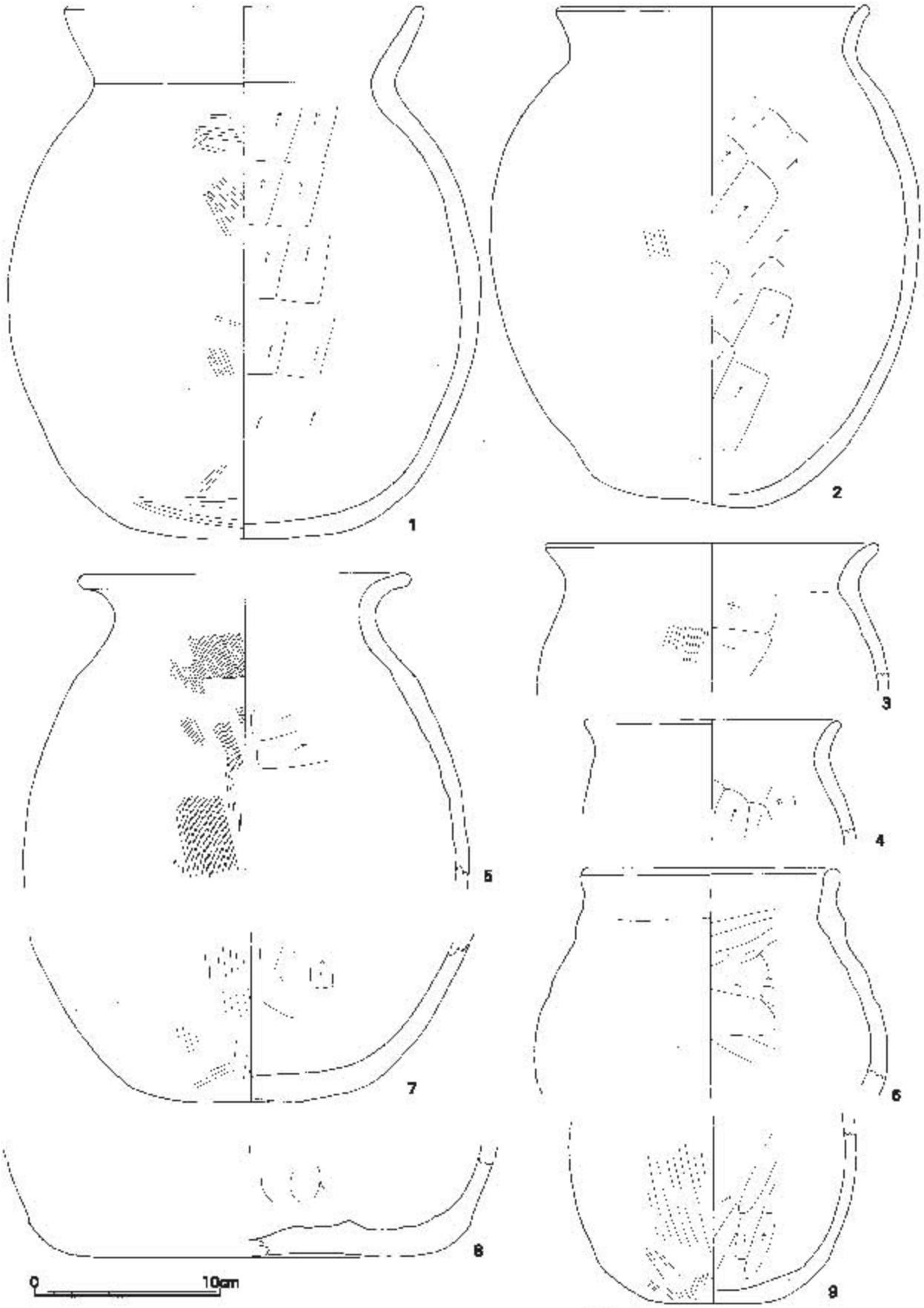


図 94　ST11158 古墳出土土器 4（1/3）

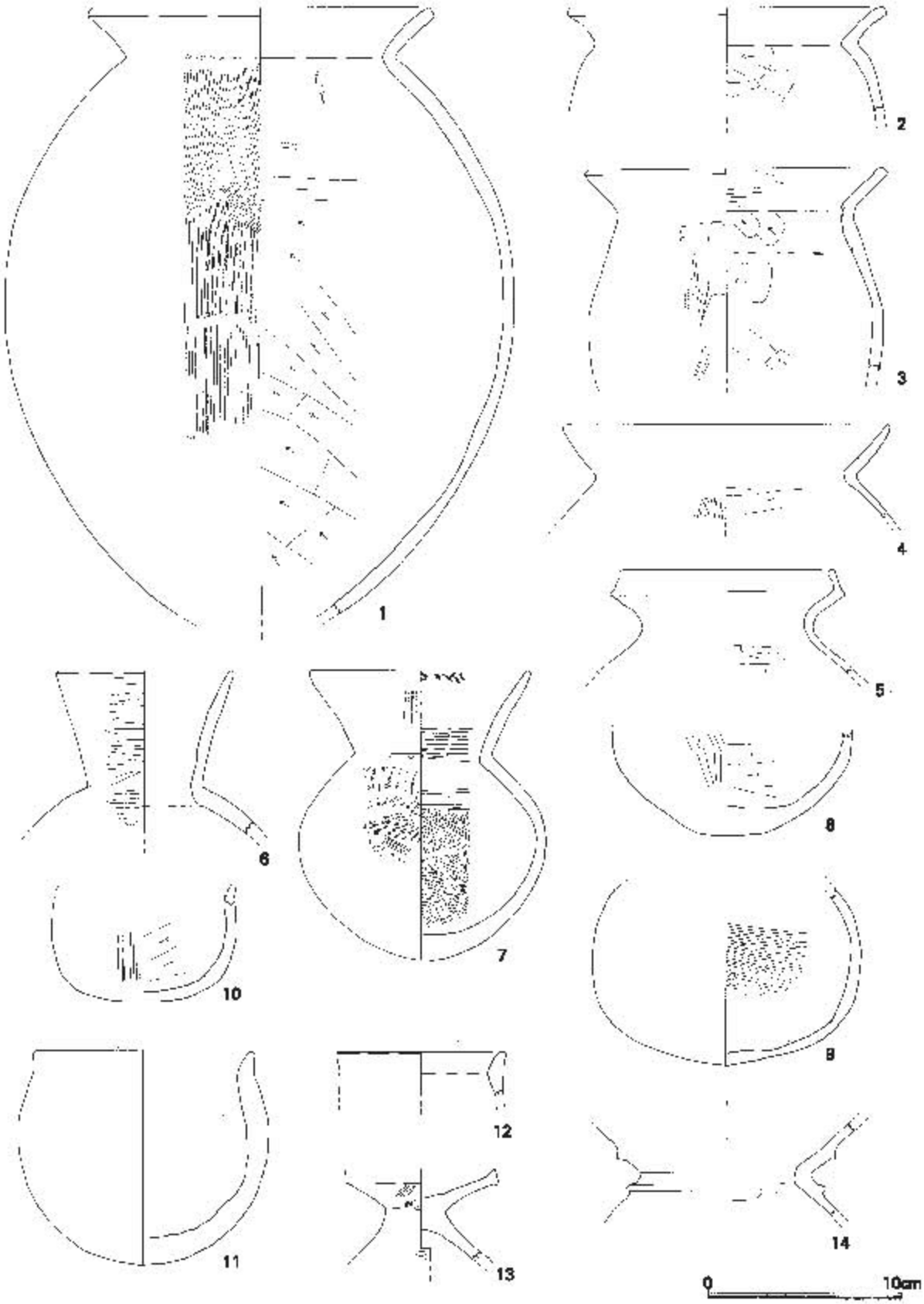


図 95　ST11158 古墳出土土器 5（1/3）

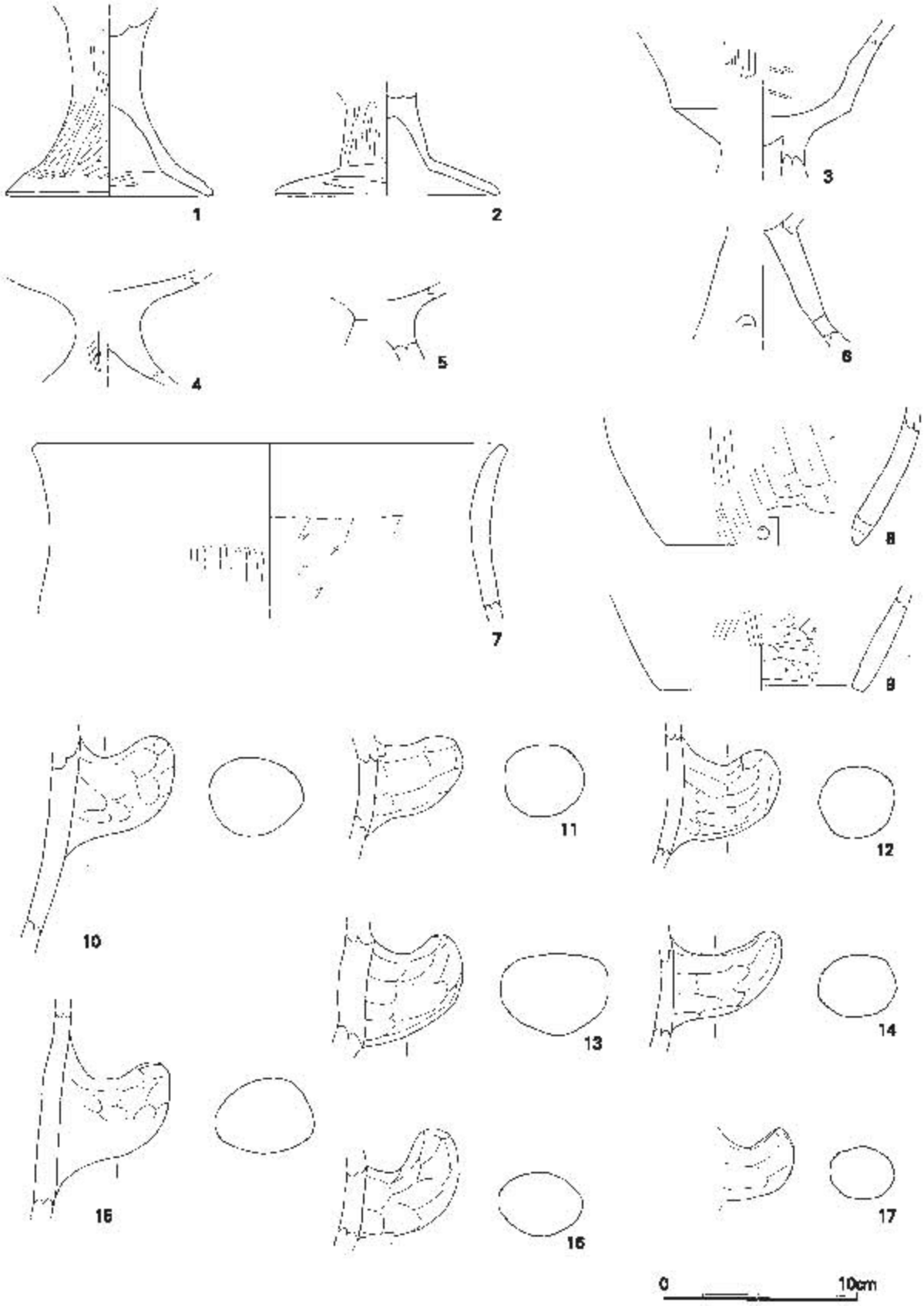


図 96　ST11158 古墳出土土器 6（1/3）

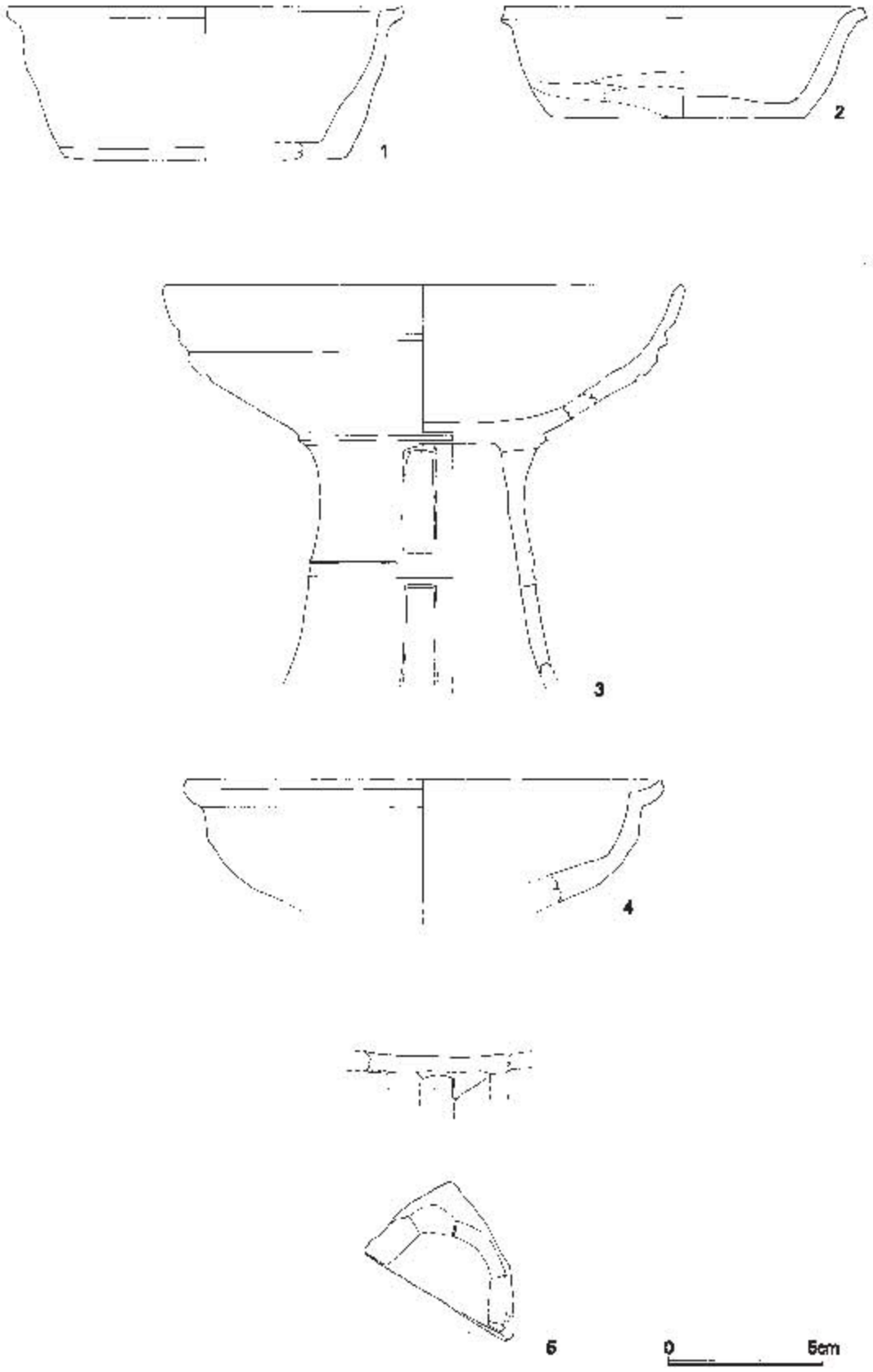


図 97　ST11158 古墳出土陶質土器（1/2）

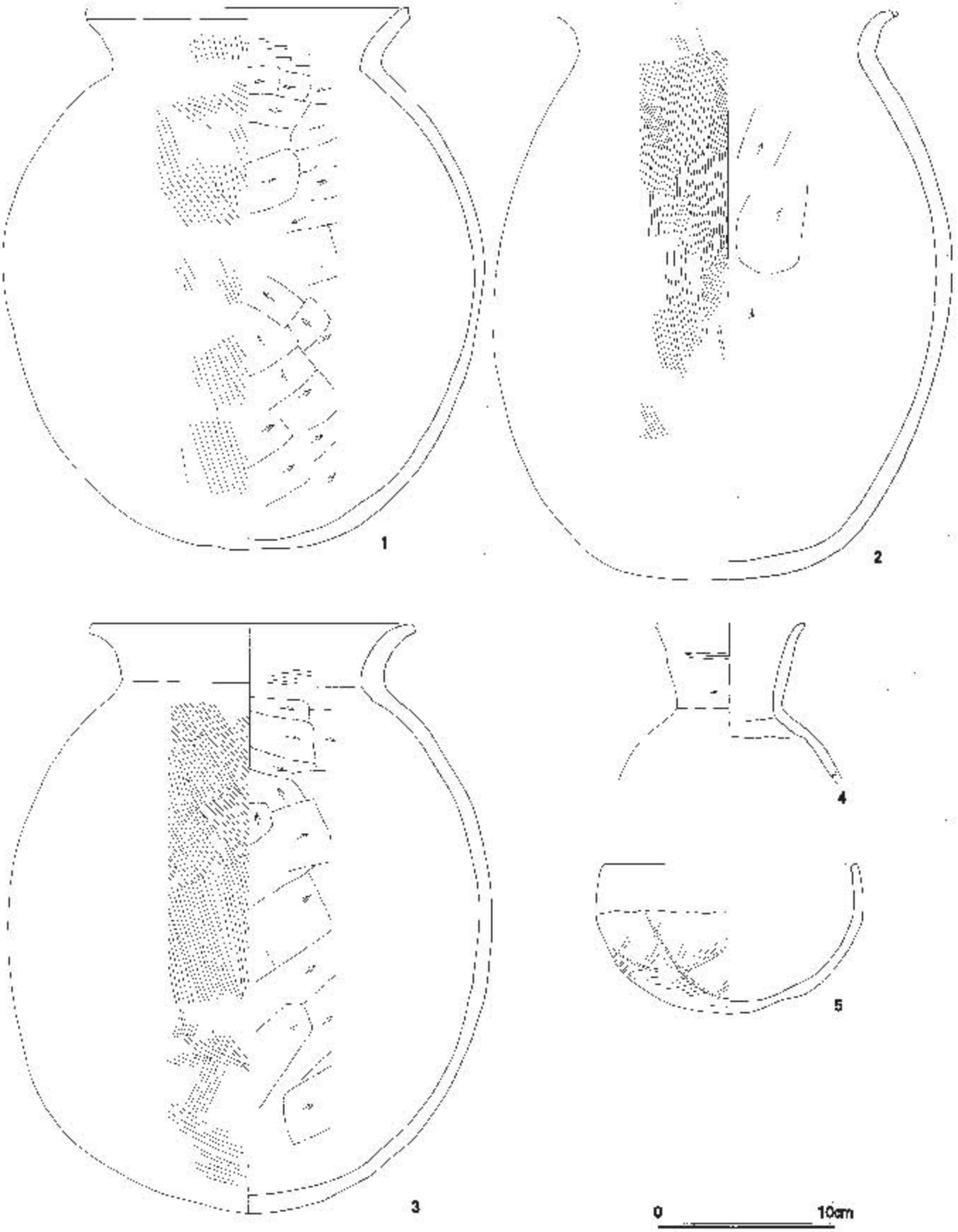


図 98　ST12002 古墳出土土器 1（1/3）

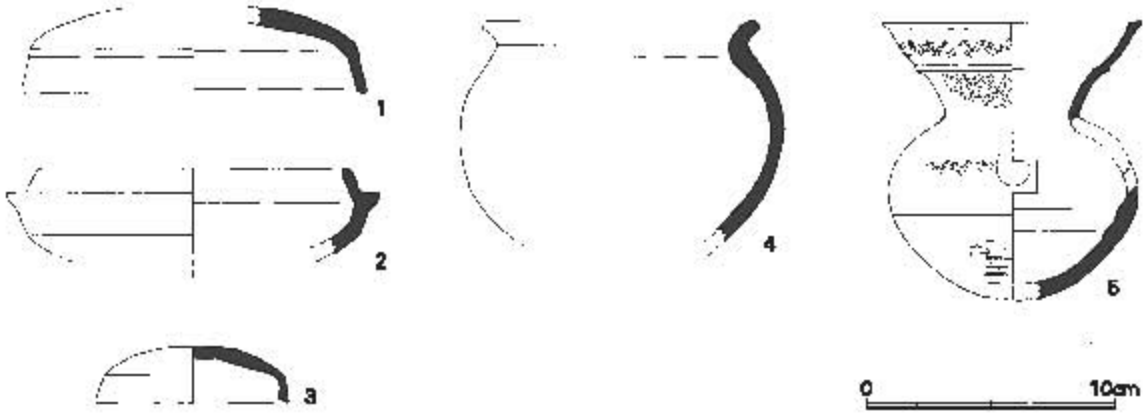


図 99　ST12002 古墳出土土器 2（1/3）

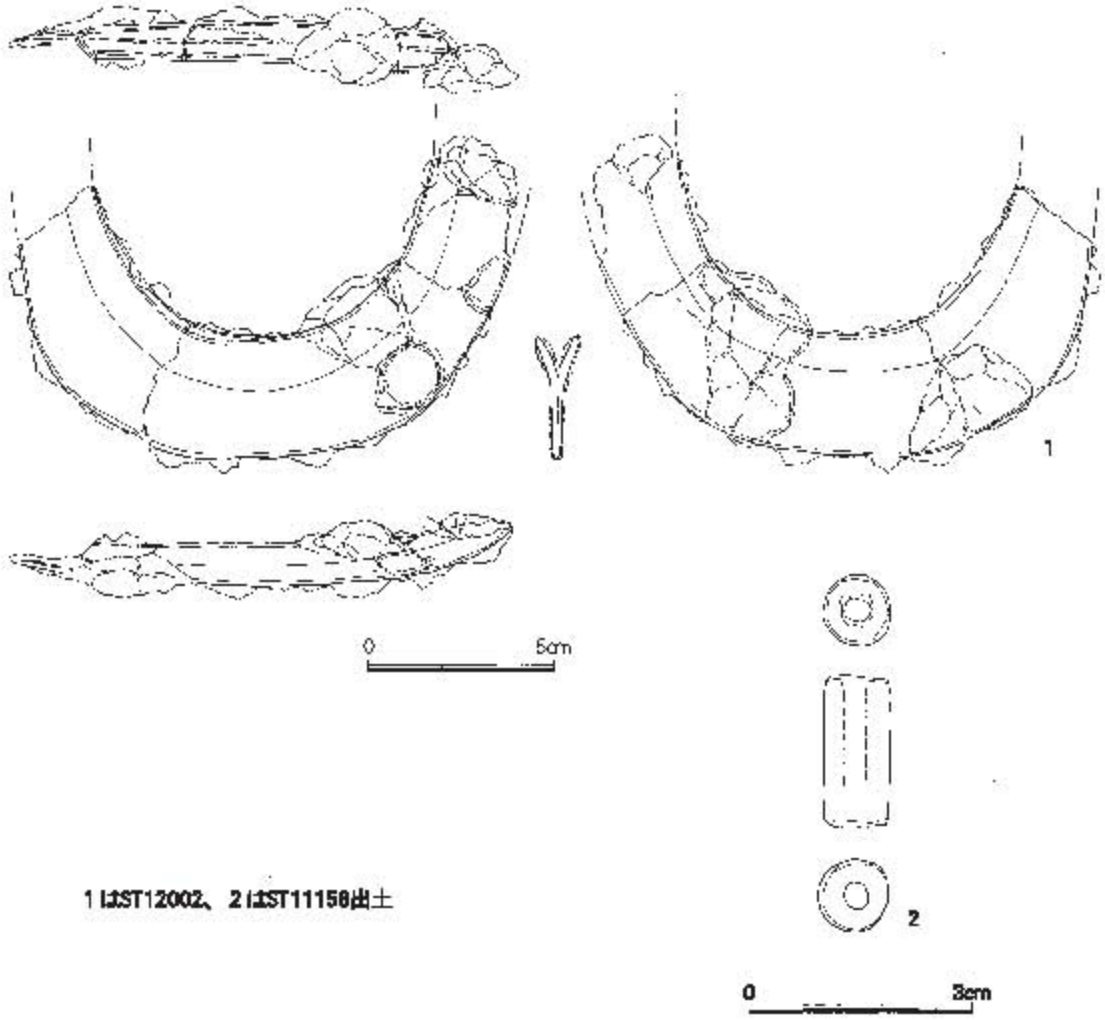


図 100　ST12002・11158 古墳出土鉄製品・玉類（1/2、1/1）

（5）ＳＴ１２００２古墳出土遺物

①土器

図 98-1 ～3 は土師器、甕である。3 点ともほぼ完形である。1 は球胴に若干外半気味の口縁部がつく。頸部内面に明瞭な稜がつく。口唇部外面は面とりされる。体部外面は短い斜めハケ。内面ヨコ方向ヘラ削り。2 は長胴甕である。平底気味、体部外面長いタテハケ。内面タテ方向ヘラ削り。3 は胴部最大径が中位より若干下にある。体部外面長いタテハケ、内面ヘラ削り。4 は直口壺、外半気味のやや長めの口頸部である。口頸部外面、タテハケのちヨコ方向磨き状。ST11067 出土直口壺（図 70-1）に類似する。5 は大型の素口縁鉢である。胴部下半から底部にかけて粗いハケ。粗製。

図 99-1 は須恵器杯蓋である。口唇部は内傾して面取りされる。天井部から口縁部にかけて大きく屈曲し、不明瞭な沈線を回す。2 は須恵器杯身である。立ちあがり高は 1.1cm で受け部は水平にのびる。3 は須恵器壺蓋である。口唇部は内傾して面取りされ、1 と類似する。天井部回転ヘラ削り。4 は須恵器壺、口縁部は短く外反し、口唇部は面取りされる。内外面ナデ。5 は**甕**、口唇部は水平に面取りされ、頸部中位にやや鋭い断面三角突帯を回す。

②鉄製品

図 100-1 はＵ字形鍬鋤先である。両側の耳部端部を欠損する。耳部から刃部にかけてＵ字形の緩やかなカーブを描く。魚津知克氏分類のＡ３ａ類にあたる。（魚津知克 2003「曲刃鎌とＵ字形鍬鋤先」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第 11 集）内縁の両側は傾き、耳幅と刃先長がほぼ同じである。刃部幅は 3.2cm である。Ｖ字溝の深さは錆に覆われて正確には判らないが約 0.5 ～ 1cm である。2 枚の鉄板を鍛接して作ったと思われる。

４，古墳群の形成過程について

（1）　各古墳の時期決定

本古墳群は墳丘上部の削平が著しく、主体部がかろうじて遺存していた ST11141 古墳以外、周溝のみの検出であった。また、地山が砂丘であり、本古墳群と弥生時代～古墳時代の集落が重複しているため周溝内出土土器は弥生時代中期～後期の土器が混入して出土した。このため古墳の時期を決定し、その形成過程を考えるにあたり、時期を決定する遺物の抽出に苦慮した。図 101、102 に各古墳の時期決定土器を掲載する。

とくに ST11002 古墳は時期決定が困難であった。図 101 に須恵器広口壺を掲載する。この他、古墳時代中期の土師器甕（図 64-1）が出土している。出土土器での時期決定は難しいが、葺石の配石状態を時期決定の根拠にした。本古墳群で葺石が配される 3 基の古墳のうち、ST11002 古墳に隣接する ST11141 古墳にも葺石が配される。両古墳の葺石を比較すると積み上げ、配し方は ST11002 古墳が丁寧である。また、ST11002 古墳の葺石石材は本遺跡周辺で産出しない玄武岩を多用するなど、ST11141 古墳葺石より明らかに丁寧であり、ST11141 古墳葺石は簡略化が進んでいる。中期の古墳 4 基のなかで、帆立貝形前方後円墳であり、古墳群の築造の契機になったと推定できる。従って、ST11141 古墳より古いと考えた。

ST11141 古墳は本調査出土の須恵器**甕**と唐津市教委調査出土の土器群がある。**甕**は大型と小型がある。ともに、肩部に櫛描波状文を施文し、肩部がはり、胴部は偏球形である。また、大型**甕**の口頸部基部が細い点は類例をみないが、古式の特徴と考えてよいだろう。**甕**の形態的特徴は田辺編年 TK208、中村編年Ｉ-3 に位置づけられる。

有蓋高杯の高杯はたちあがりが直立するもの２点と内傾するもの３点がある。脚部は短脚とやや長脚気味が１点みられる。口径や口唇部形態なども加味して田辺編年 TK208 ～TK23、中村編年Ⅰ-3 ～Ⅰ-4 にあたる。口頸部中位に二条の断面三角突帯がある壺は類例が少ないが偏球形の胴部形態は𤮔に類似する。この他に実測図はないが須恵器中型甕、広口壺の計４点も出土している。図 101 に中型甕の写真を掲載する。口縁部の下に断面三角形の突帯一条を回す。突帯の下には規則正しい櫛描波状文を施す。口縁下の三角突帯は古い要素であるが、櫛描波状文から TK208 か？

また、内部主体部が無袖型の竪穴系横口式石室であることと周溝出土土器は矛盾しない。以上のことから、本墳の築造は田辺編年 TK208、中村編年Ⅰ-3 併行と考える。

ST11067 古墳は周溝肩部の地山直上から出土した完形の須恵器杯身と配置されて出土した土師器直口壺、椀がある。須恵器杯身は口径 9.55cm と小さいことや口唇部内面に段を持つ特徴から田辺編年 TK47、中村編年Ⅰ-5 に位置づけられる。直口壺はやや長めの口頸部で外方に開く。胴部は偏球形である。拙稿 4B 期の壺 G3 にあたる。直口壺の類例は佐賀市修理田遺跡 SE2010 や本遺跡 ST11067 出土例などがある。土師器椀のうち口縁部を短く外方に屈曲させる図 70-2 の類例は吉野ヶ里町三津永田遺跡 SH10 出土例がある。同遺構からは須恵器杯身も出土しており、修理田遺跡例とともに本古墳と同時期の土器群といえる。

また、本古墳周溝からは環状鏡板付轡（円環轡）が出土している。周溝出土の馬具という点から殉葬馬と思われる。類例には福岡市吉武Ｓ群９号墳例、行橋市稲童８号墳例などがある。この円環轡は韓国百済漢城期の古墳からは出土せず、国内出現は韓国百済熊津遷都 (475 年) 以降の可能性が高い（桃崎祐輔 2005）。従って、本古墳出土の土器や円環轡から TK47 型式の実年代が５世紀第四半期以降であることも想定できる。

ST12002 古墳出土土器には須恵器𤮔、短頸壺、杯身・蓋、土師器甕、直口壺がある。𤮔は口縁部と胴下半部のみの遺存で全体の形態がわからないが、口頸部が短く、口頸基部は太いという特徴をもつ。頸部中位の断面三角突帯は比較的シャープである。以上のことから中村編年Ⅰ-5 に位置づけられる。短頸壺は類例をみつけることができず位置づけはできない。ただし、口唇部をシャープに面とりするなどのつくりは𤮔や杯蓋と共通する。杯蓋は復元口径 13.3cm、杯身は復元口径 12.2cm である。杯蓋の口唇部内面は内傾して面取りされる。田辺編年 MT15 型式・中村編年Ⅱ-1 か？

土師器直口壺は前述のとおり拙稿 4B 期の壺 G3 にあたる。これらのことから ST12002 古墳出土土器は田辺編年 TK47 型式、中村編年Ⅰ-5 ～田辺編年 MT15 型式・中村編年Ⅱ-1 に位置づけられる。

ST11158 古墳からは６世紀後半の須恵器、土師器が多く出土している。その中で最も古時期の須恵器に短脚高杯の脚部（図 92-8）がある。中村編年のⅠ型式に属するだろうが、出土位置が周溝上層であることや小破片であり、これ以外にⅠ型式の土器はないことから混入と考える。

多くの杯身、杯蓋のうち、最も古い要素をもつものを掲載した。杯蓋は復元口径 13.0cm、13.9cm、杯身は復元口径 11.8cm、12.0cm である。杯蓋の口唇部内面や口縁部と天井部境に沈線を有するものはほとんどない。図 91-1 の口唇部のみわずかに沈線状である。田辺編年 TK43 型式、中村編年Ⅱ-4 に併行する。

最新時期では高杯脚部（図 92-11）は透かしがなく、中村編年Ⅱ-6 に、鉢（図 92-14）は中村編年Ⅲ-1 に位置づけられる。

（2）　古墳群の形成過程

中原遺跡は弥生時代終末の墳丘墓（区画墓）や木棺墓・土壙墓群や古墳時代前期の前方後円墳と周溝墓群が築造される。その後、古墳時代中・後期に本書に掲載する古墳群が築造される。弥生時代終末～古墳時代前期の墳墓は未報告であり、ここでは、本書に掲載する中・後期の古墳の形成過程についてふれる。

前方後円墳 2 基、円墳 3 基の古墳群は南北約 110m、東西約 80 mの比較的狭い墓域に築造される。また、これらは弥生時代終末～古墳時代前期の墳墓群を避けるように、砂丘微高地の東側に築造される。ST11067、ST11002、ST11141、ST11158 古墳は南北に連なり、ST11002、ST11158 前方後円墳の主軸は東西方向である。

これらの古墳群の築造順序は、ST11002 古墳→ST11141 古墳→ST11067 古墳→ST12002 古墳→ST11158 古墳である。そしてこれらの時期は ST11141 古墳は TK208 ～TK23、ST11067 古墳は TK47、ST12002 古墳は TK47 ～MT15、ST11158 古墳は TK43 型式期である。以上のように古墳時代中期から後期にかけて連続して築造された古墳群であり、ST11158 古墳は唐津地域の最後の前方後円墳になる。ST11002 古墳は帆立貝形前方後円墳であり、ともに松浦川流域の首長墓にあたる。ST11141、11067、12002 古墳は円墳であるが墳径 14.5m ～ 18.2 m と比較的大型であり、中小首長層に相当しよう。

近年の唐津地域の調査で、本遺跡古墳群と同時期あるいは近接時期の古墳群が玉島川流域や徳須恵川流域でも確認されてきている。それらの成果と合わせて、唐津地域の古墳時代中、後期の社会像を再検討する必要があろう。

参考文献

中野充編 1998「修理田遺跡Ⅱ」佐賀市教育委員会　佐賀市文報 90 集
福岡市教育委員会 2003「吉武古墳群」
小松譲 2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第 5 回九州前方後円墳研究会
桃崎祐輔 2005「稲童 21 号墳・8 号墳出土馬具の検討」『稲童古墳群』行橋市教育委員会
行橋市教育委員会 2005『稲童古墳群』

ST11002古墳

ST11141古墳

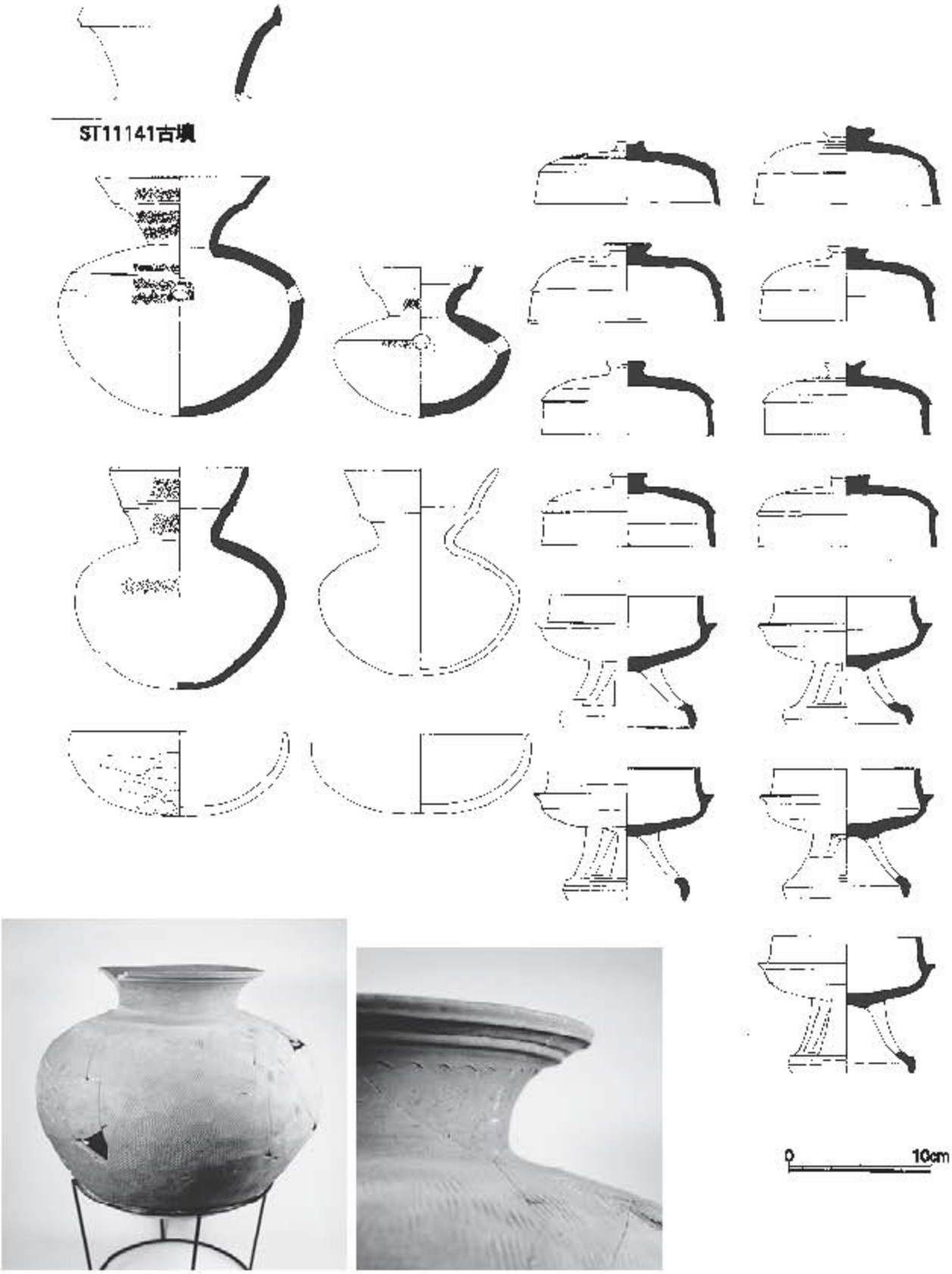
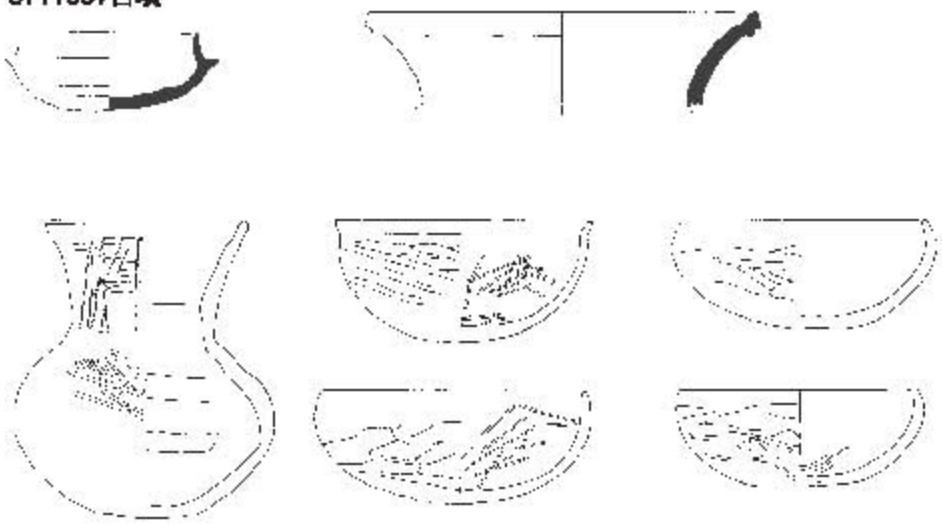
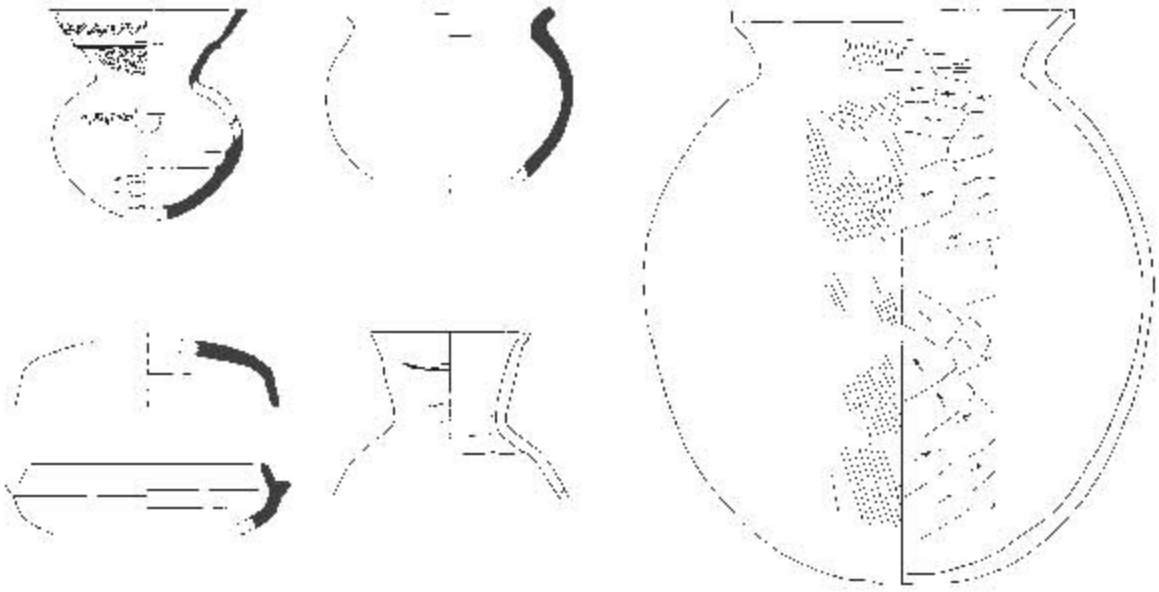


図 101 古墳時期決定土器群 1 (1/4)

ST11067古墳



ST12002古墳



ST11158古墳

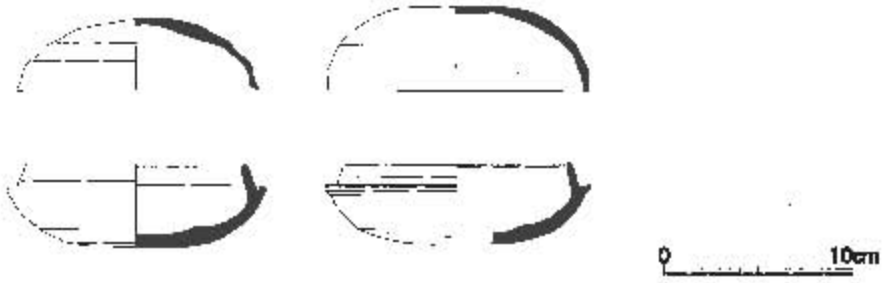


図 102　古墳時期決定土器群 2(1/4)

表16 古墳出土土器一覧表（1）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
64-1	ST11002 S-36	土師器	甕	(19.4)	残存 23.8	にぶい褐色	にぶい黄橙色	0.5～6.0mm 大の砂粒を多く含む	07000920
〃-2	ST11002 R-38	土師器	甕	(15.0)	残存 5.0	橙色	橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07000933
〃-3	ST11002 周溝 Q-38	土師器	甕	(13.4)	残存 8.7	にぶい褐色	にぶい黄橙色	0.5～5.0mm 大の砂粒を含む	07000922
〃-4	ST11002 周溝 O-38	土師器	甕	(15.3)	残存 7.1	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07000924
〃-5	ST11002 周溝 S-39	土師器	壺	—	残存 5.7	明赤褐色	明赤褐色	0.5～2.0mm 程の砂粒を含む	07000958
〃-6	ST11002 S-39	土師器	甕	(20.8)	残存 9.0	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07000926
〃-7	ST11002 Q-38	土師器	壺	(17.8)	残存 6.6	橙色	橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07000921
〃-8	ST11002 S-38	土師器	甕	(18.0)	残存 5.5	橙色	にぶい橙色	0.5～5.0mm 大の砂粒を含む	07000925
〃-9	ST11002 S-38	土師器	甕	(17.0)	残存 5.0	橙色	橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07000930
〃-10	ST11002 R-36	土師器	甕	(17.5)	残存 5.0	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07000927
〃-11	ST11002 S-37	土師器	甕	(18.0)	残存 5.0	橙色	橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07000931
〃-12	ST11002 R-36	土師器	壺	(14.0)	残存 8.4	橙色	橙色	0.5～4.0mm 大の砂粒を含む	07000928
〃-13	ST11002 周溝 Q-37	土師器	甕	(23.4)	残存 5.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07000923
65-1	ST11002 Q-38	弥生土器	甕	内径 (19.0) 外径 (26.2)	残存 6.2	褐灰色	褐灰色	微砂粒～3.0mm の砂粒を含む	06003769
〃-2	ST11002 S-39	弥生土器	壺	内径 (20.2) 外径 (26.0)	残存 6.9	浅黄橙色 にぶい橙色	橙色 にぶい橙色	1.0～3.0mm 前後の砂粒を含む	06003770
〃-3	ST11002 Q-38	弥生土器	甕	内径 (21.4) 外径 (27.6)	残存 6.7	橙色	橙色 にぶい橙色	1.0～3.0mm 前後の砂粒を含む	06003771
〃-4	ST11002 S-38	弥生土器	壺	内径 (20.2) 外径 (26.8)	残存 5.7	にぶい褐色	にぶい褐色	微砂粒～1.0mm の前後の砂粒を含む	06003768

表19 古墳出土土器一覧表 (2)

※口径の（ ）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	県遺物登録番号
65-5	ST11002	弥生土器	壺	(24.2)	残存 6.6	明赤褐色	明赤褐色	微砂粒～1.5mm の砂粒を含む	06003765
〃-6	ST11002 Q-38	弥生土器	壺	(17.8)	残存 7.6	橙色 にぶい橙色	橙色 にぶい橙色	1.0～4.0mm の砂粒を含む	06003766
〃-7	ST11002 S-36	弥生土器	壺	(22.8)	残存 9.5	橙色	橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07000929
〃-8	ST11002 Q-38	弥生土器	壺	(15.0)	残存 6.7	橙色	橙色	0.5～4.0mm 大の砂粒を含む	07000932
〃-9	ST11002 Q-38	弥生土器	壺	(35.0)	残存 11.1	橙色 にぶい橙色	橙色 にぶい橙色	1.0～2.0mm 前後の砂粒を含む	06003774
〃-10	ST11002 R-36	弥生土器	壺	内径 (39.0) 外径 (51.0)	残存 12.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1.0～3.0mm の砂粒を含む	06003775
66-1	ST11002 R-37	弥生土器	壺	底部径 (7.3)	残存 3.5	灰黄褐色	にぶい黄橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07000949
〃-2	ST11002 周溝 Q-38	弥生土器	壺	底部径 (8.4)	残存 5.6	橙色	橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07000947
〃-3	ST11002 Q-38	弥生土器	壺	底部径 (7.5)	残存 9.1	灰黄褐色	橙色	0.5～1.5mm 程の砂粒を多く含む	07000945
〃-4	ST11002 R-37	弥生土器	壺	底部径 (7.8)	残存 3.6	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07000950
〃-5	ST11002 R-36	弥生土器	壺	底部径 (6.0)	残存 6.0	にぶい橙色	褐灰色	0.5～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07000948
〃-6	ST11002 R-36	弥生土器	壺	底部径 (6.0)	残存 3.1	にぶい橙色	浅黄橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07000953
〃-7	ST11002 S-39	弥生土器	壺	底部径 (7.1)	残存 3.3	橙色	にぶい褐色	1.0～2.0mm 程の砂粒を含む	07000952
〃-8	ST11002 R-39	弥生土器	壺	底部径 (7.5)	残存 6.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	砂粒と小石を含む	07000946
〃-9	ST11002 S.T.37	弥生土器	壺	底部径 (5.1)	残存 4.3	橙色	にぶい橙色	1.0～2.0mm の砂粒を含む（小石を含む）	07000954
〃-10	ST11002 Q-37	弥生土器	壺	底部径 (7.5)	残存 4.6	灰黄褐色	にぶい褐色	0.5～2.5mm 程の砂粒を多く含む	07000951
〃-11	ST11002 周溝 S-37	弥生土器	台付壺	外径 (11.7)	残存 7.6	橙色	橙色	0.5～2.5mm 程の砂粒を多く含む	07000970
〃-12	ST11002 周溝 Q-37 Q-38	弥生土器	袋状口縁壺	(12.0)	残存 3.6	橙色	橙色	1.0～2.0mm の砂粒を含む	06003772

表20　古墳出土土器一覧表（3）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種　別	器種	法量（cm）		色　調		胎　土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
66-13	ST11002 Q-37	弥生土器	袋状口縁壺	-	残存 4.7	橙色	橙色	1.0mm 前後の砂粒を含む	06003773
〃-14	ST11002 S-37 S-38	弥生土器	広口壺	内径 (23.0) 外径 (28.7)	残存 8.9	にぶい赤褐色	にぶい橙色	1.0mm 前後の砂粒を含む	06003767
67-1	ST11002 周溝 R-36	弥生土器	袋状口縁壺	16.5	41.0	赤褐色	赤褐色	1.0 ～ 3.0mm の砂粒を多く含む	04000059
〃-2	ST11002 周溝	土師器	二重口縁壺	内径 (14.7) 外径 (15.1)	残存 5.1	灰白色	灰白色	細砂粒をわずかに含む	07000956
〃-3	ST11002	土師器	二重口縁壺	内径 (16.8) 外径 (17.3)	残存 4.3	灰白色	灰白色	細砂粒をわずかに含む	07000957
〃-4	ST11002 S-37	土師器	二重口縁壺	内径 (14.5) 外径 (15.6)	残存 6.4	橙色	橙色	0.5 ～ 1.5mm 程の砂粒をわずかに含む	07000955
68-1	ST11002 R-37	弥生土器	壺	-	残存 12.6	橙色	にぶい橙色		07000966
〃-2	ST11002 R-36	土師器	直口壺	(10.3)	残存 16.7	灰黄褐色	にぶい橙色	1.0 ～ 3.0mm 程の砂粒を多く含む	07000934
〃-3	ST11002 R-38	土師器	壺	-	残存 10.2	にぶい橙色	明褐色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒をわずかに含む	07000935
〃-4	ST11002 S-38	土師器	鉢	内径 11.7 外径 11.9	残存 9.6	橙色	にぶい橙色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒を含む	07000960
〃-5	ST11002 S-37	土師器	鉢	(11.8)	残存 5.1	橙色	にぶい赤褐色	細粒をわずかに含む	07000959
〃-6	ST11002 周溝 S-38	土師器	鉢	-	残存 8.4	にぶい黄橙色	にぶい橙色		07000976
〃-7	ST11002 周溝 S-37	土師器	鉢	-	残存 7.2	灰黄褐色	にぶい黄橙色		07000977
〃-8	ST11002 S-38	土師器	鉢	内径 (12.6)	7.7	明赤褐色	明赤褐色		07000971
〃-9	ST11002 周溝 R-36	土師器	鉢	底径 7.5	6.5	橙色	橙色		07000968
〃-10	ST11002 周溝 Q-38	土師器	鉢	内径 (13.0) 外径 (13.2)	残存 5.1	橙色	浅黄橙色	砂粒をほとんど含まない	07000964

表21　古墳出土土器一覧表（4）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
68-11	ST11002 周溝 Q-39	土師器	鉢	外径 (10.4)	残存 6.7	明褐色	にぶい褐色		07000973
〃-12	ST11002 周溝 R-39	土師器	鉢	内径 (11.2)	残存 5.1	橙色	明褐色		07000967
〃-13	ST11002 周溝 Q-38	土師器	鉢	内径 (13.7) 外径 (14.1)	7.1	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～1.0mm 程の砂粒を含む	07000963
〃-14	ST11002 周溝 Q-38	土師器	鉢	内径 (10.0) 外径 (10.5)	3.7	にぶい黄橙色	灰黄色		07000975
〃-15	ST11002 R-36	土師器	鉢	内径 (12.7)	残存 4.1	橙色	にぶい橙色		07000972
〃-16	ST11002 周溝 R-39	土師器	鉢	外径 (15.3)	残存 10.1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		07000969
69-1	ST11002 周溝 Q-38	土師器	台付杯	内径 15.2 外径 15.5	(高)7.8 (底)6.9	淡黄色	淡黄色	微細砂粒を含む	07000961
〃-2	ST11002 周溝 S-38 S-39	弥生土器	高杯	-	残存 11.6	橙色	橙色		07000943
〃-3	ST11002 周溝 Q-38	土師器	高杯	-	残存 8.3	にぶい橙色	にぶい橙色		07000944
〃-4	ST11002 周溝 Q-37	弥生土器	器台	受部径（外径）16.7	残存 14.8	橙色	橙色		07000936
〃-5	ST11002 R-36	弥生土器	器台	裾部径 (12.5)	残存 10.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		07000938
〃-6	ST11002 周溝 Q-38	弥生土器	器台	-	残存 13.0	にぶい黄橙色 橙色	にぶい黄橙色 橙色		07000940
〃-7	ST11002 周溝 S-37	弥生土器	支脚	裾部径外径 (11.0)	残存 10.2	橙色	橙色		07000937
〃-8	ST11002 周溝 S-37	弥生土器	支脚	底径外径 (12.5)	12.0	橙色	橙色		07000941
〃-9	ST11002 周溝	弥生土器	支脚	-	残存 11.5	橙色	橙色		07000942
〃-10	ST11002 Q-38	須恵器	広口壺	底部径 (13.6)	残存 6.0	灰色	灰白色 緑オリーブ灰色		07000978
〃-11	ST11002 Q-37	須恵器	杯身	(12.0) 受部径 (14.1)	残存 3.2	灰色	灰色		07000990

表22　古墳出土土器一覧表（5）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
69-12	ST11002 S-37	須恵器	杯身	(10.4) 受部径 (13.0)	3.9	灰色	灰色		07000986
〃-13	ST11002 R-36	須恵器	杯身	(12.0) 受部径 (13.9)	3.0	黄灰色	黄灰色		07000987
〃-14	ST11002 S-38	須恵器	杯身	(11.4) 受部径 13.5	3.7	黄灰色	黄灰色		07000988
〃-15	ST11002 S-38	須恵器	杯身	(10.4) 受部径 (13.0)	4.4	黄灰色	黄灰色		07000989
〃-16	ST11002 S-37 S-38	須恵器	杯蓋	内径 12.6	3.6	灰色	灰色		07000980
〃-17	ST11002 S-36	須恵器	杯蓋	内径 (13.6)	残存 3.2	灰色	灰色		07000983
〃-18	ST11002 S-37 S-38	須恵器	杯蓋	内径 (13.6)	残存 3.9	黄灰色	暗灰色		07000982
〃-19	ST11002 周溝 R-36	須恵器	杯蓋	内径 (13.7)	残存 3.0	灰色	灰色		07000981
70-1	ST11067 周溝 O-39	土師器	壺	10.4	15.9	橙色	明橙色	2.5mm 程度の白色砂粒を 1 個含む 0.1 ～ 3.5mm 程度の白色砂粒を少量含む	03001770
〃-2	ST11067 周溝 O-39	土師器	椀	13.7	6.6	赤橙色	赤橙色 灰褐色		03000118
〃-3	ST11067 周溝	土師器	椀	(12.7)	5.8	にぶい橙色明赤褐色	明赤褐色橙色	1.0mm ～ 5.0mm 程度の砂粒を少量含む	03000120
〃-4	ST11067 周溝 O-39	土師器	椀	14.0	6.1	赤橙色	赤橙色	1.5mm ～ 3.0mm 程度の砂粒を多く含む	03000117
〃-5	ST11067 周溝 O-39	土師器	椀	12.75	5.05	明赤褐色	明赤褐色	砂粒を少量含む	03000119
〃-6	ST11067 周溝 O-39	土師器	鉢	6.9 底径 5.8	4.9	灰黄褐色	にぶい黄橙色	白色砂粒を少量含む	03000121
〃-7	ST11067 周溝 P-39	須恵器	杯身	9.55	4.1	暗灰色	暗灰色	1.0 ～ 2.5mm 程度の砂粒を含む 1.0 ～ 3.0mm 程度の砂粒を含む	03000107
〃-8	ST11067 周溝 P-37	須恵器	杯蓋	(12.0)	残存 3.1	褐灰色	褐灰色		07001796
〃-9	ST11067 周溝 O-39	須恵器	杯蓋	(13.3)	残存 4.3	暗灰色	暗灰色		07001795

表23　古墳出土土器一覧表（6）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
70-10	ST11067 周溝 O-39	須恵器	杯蓋	(13.7)	4.2	黄灰色	黄灰色		07001794
〃-11	ST11067 P-39	須恵器	広口壺	-	残存 5.0	灰黄色	灰黄色		07001793
〃-12	ST11067 O-38	須恵器	瓶	14.75 底径 4.5	14.3	灰色	灰色	微砂粒から2.0mmの砂粒を多く含む	06003788
〃-13	ST11067 周溝 No.38	土師器	甕	(19.0)	31.6	にぶい褐色	にぶい褐色	微砂粒から4.0mmの砂粒を多く含む	06003789
〃-14	ST11067 周溝 O-39	土師器	模倣杯蓋	(12.8)	残存 3.0	橙色	黒褐色		07001792
〃-15	ST11067 O-39	土師器	模倣杯身	(12.1)	残存 3.4	灰黄褐色	灰黄褐色		07001797
71-1	ST11067 周溝 O-37	土師器	甕	(14.4)		浅黄橙色	浅黄橙色	細粒を含む	07001770
〃-2	ST11067 周溝 P-39	土師器	甕	(17.0)	残存 4.0	淡黄色	淡黄色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07001772
〃-3	ST11067 周溝 O-37	土師器	甕	(17.2)	残存 4.0	にぶい褐色	にぶい褐色	細粒を含む	07001771
〃-4	ST11067 周溝	弥生土器	壺	(14.8)	残存 10.0	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001775
〃-5	ST11067 墳丘 O-38	土師器	甕	(12.8)	残存 6.3	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001776
〃-6	ST11067 周溝 O-39	土師器	直口壺	(10.4)	13.5	橙色	橙色		07001788
〃-7	ST11067 周溝 O-37	土師器	二重口縁壺	(16.6)	残存 5.6	灰白色	灰白色	細粒を含む	07001773
〃-8	ST11067 周溝 O-37	弥生土器	壺	(8.9)	残存 8.9	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色		07001790
〃-9	ST11067 墳丘 O-37	弥生土器	鉢	(10.0)	残存 7.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		07001789
〃-10	ST11067 周溝 O-38	土師器	高杯	(22.0)	12.5				07001800
〃-11	ST11067 周溝 O-37	土師器	小型器台	(10.1)	残存 2.5	橙色	橙色		07001798

表24　古墳出土土器一覧表（7）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
71-12	ST11067 墳丘 P-37 P-38	弥生土器	鉢	(8.1)	残存 7.9	褐灰色	橙色	0.5～1.0mm 大の砂粒を含む	07001791
72-1	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	(26.9)	残存 8.5	橙色	にぶい橙色	0.5～1.0mm 大の砂粒を含む	07001761
〃-2	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	内径 (24.0) 外径 (29.4)	残存 11.6	橙色	橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001765
〃-3	ST11067 P-37	弥生土器	壺	内径 (22.4) 外径 (29.0)	残存 6.5	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～1.0mm 大の砂粒を含む	07001766
〃-4	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	内径 (21.0) 外径 (26.0)		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07001767
〃-5	ST11067 周溝 O-38	弥生土器	鉢	(20.2)	残存 12.0	にぶい橙色	にぶい橙色	細粒～5.0mm 大の砂粒を含む	07001774
〃-6	ST11067 周溝 P-39	弥生土器	壺	底部径 (7.2)	残存 4.5	橙色	橙色	1.0～2.0mm の砂粒を多く含む	07001781
〃-7	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	底部径 6.8	残存 3.4	橙色	橙色	1.0～2.5mm 程の砂粒を多く含む	07001786
〃-8	ST11067 周溝 O-37	弥生土器	壺	底径 (8.3)	残存 7.3	にぶい橙色	橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を含む	07001785
〃-9	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	底部径 6.7	残存 8.6	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を含む	07001784
〃-10	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	底部径 6.9	残存 5.8	灰黄褐色	浅橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を含む	07001779
〃-11	ST11067 周溝 P-38	弥生土器	壺	底部径 (8.2)	残存 6.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色 にぶい橙色	0.5～1.0mm 程の砂粒を多く含む	07001783
73-1	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	壺	底径 (6.4)	残存 15.1	橙色	にぶい橙色	0.5～3.0mm 程の砂粒を含む	07001777
〃-2	ST11067 墳丘 P-37 P-38	弥生土器	壺	-	残存 8.1	にぶい黄橙色	にぶい橙色	細砂粒を含む	07001782
〃-3	ST11067 墳丘 T-40	弥生土器	壺	底部径 4.4	残存 3.1	にぶい黄橙色	橙色	1.0～2.0mm の砂粒を多く含む	07001787
〃-4	ST11067 周溝 O-37	弥生土器	壺	-	残存 8.7	にぶい橙色	にぶい橙色	1.0～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07001778

表25　古墳出土土器一覧表 (8)

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	県遺物登録番号
73-5	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	広口壺	(29.2)	残存 17.5	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001764
〃-6	ST11067 周溝 P-37	弥生土器	広口壺	内径 (21.6) 外径 (28.8)	残存 10.8	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～4.0mm 大の砂粒を含む	07001763
〃-7	ST11067 周溝 O-37	弥生土器	広口壺	(29.2)	残存 11.0	橙色	橙色	0.5～4.0mm 大の砂粒を含む	07001762
〃-8	ST11067 墳丘 P-38	弥生土器	鋸状口縁壺	-	残存 3.2	橙色	橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07001769
〃-9	ST11067 周溝 P-37	土師器	支脚	底径 5.7	残存 11.7	橙色	橙色		07001801
80-1	ST11141 周溝 S-40	須恵器	蓋	12.1 体部径 17.2	17.5	灰色	灰色	3.5mm 以下の砂粒を含む	04000096
〃-2	ST11141 周溝 U-39	土師器	杯	15.2	6.0	橙色	橙色	1.0mm～2.0mm の白色砂粒 1.0mm～3.0mm の赤褐色砂粒 微細な雲母を含む	03000236
〃-3	ST11141 周溝 U-39	土師器	杯	(15.1) 外径 (15.5)	5.6	橙色	橙色	細砂粒を ごくわずかに含む	07001554
〃-4	ST11141 周溝 U-40	土師器	壺	16.2 外径 17.0	残存 19.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5mm 程の砂粒を含む	07001546
〃-5	ST11141 周溝 U-40 U-41	土師器	甕	(16.9)	残存 11.6	橙色	橙色	0.5～1.0mm 大の砂粒を含む	07001560
〃-6	ST11141 周溝 T-41	土師器	甕	(17.15) 頸部径 (13.3)	残存 7.0	にぶい橙色 灰黄褐色	にぶい橙色	2.0mm 以下の砂粒を含む	06003779
〃-7	ST11141 周溝 T-39	土師器	甕	(17.4)	残存 7.7	橙色	橙色	0.5～1.0mm 大の砂粒を含む	07001558
〃-8	ST11141 墳丘 T-40	土師器	甕	(16.6)	残存 7.5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07001557
〃-9	ST11141 周溝 U-40	土師器	甕	(15.2)	残存 7.5	浅黄橙色	浅黄橙色	0.5～1.0mm 大の砂粒を含む	07001556
〃-10	ST11141 周溝 U-40	土師器	壺	(16.25) 頸部径 (13.0)	残存 7.3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂粒を含む	06003780
〃-11	ST11141 周溝 TU-41	土師器	甕	(15.4)	残存 4.7	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～2.0mm 大の砂粒を含む	07001559
81-1	ST11141 包含層 T-40	土師器	甕	18.7	残存 20.5	黒色	橙色 暗赤灰色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001555

表26　古墳出土土器一覧表（9）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
81-2	ST11141 周溝 T-41	土師器	甕	(17.0) 頸部径 (12.85)	残存 9.15	明赤 褐色 橙色	にぶい 黄橙色 橙色	2.0mm 以下の 砂粒を含む	06003783
〃-3	ST11141 周溝 T-39	土師器	甕	(13.4)	残存 14.5	にぶい 黄橙色 灰黄褐色	にぶい 黄橙色 灰黄褐色	2.0mm 以下の 砂粒を含む	06003784
〃-4	遺構検出時 ST11141 T-40	土師器	甕	内径 17.3 外径 17.6	残存 16.4	橙色	にぶい 黄褐色		07001511
〃-5	ST11141 T-40	土師器	甕	内径 (15.7) 外径 (16.6)	残存 8.3	にぶい 褐色	にぶい 褐色	砂粒を ほとんど含まない	07001523
〃-6	ST11141 周溝 T-41	土師器	甕	(17.2) 頸部径 (13.3)	残存 5.2	灰褐色 にぶい 褐色	灰黄褐色	微砂粒を含む	06003778
〃-7	ST11141 墳丘 U-40	土師器	甕	(19.35) 頸部径 (15.7)	残存 6.3	橙色	にぶい 赤褐色	微砂粒を含む	06003777
〃-8	ST11141 周溝 T-41	土師器	甕	(17.8) 頸部径 (13.9)	4.55	にぶい 橙色	にぶい 橙色	2.0mm 以下の 砂粒を含む	06003776
〃-9	ST11141 T-40	土師器	甕	内径 (13.3) 外径 (13.9)	17.3	明赤褐色	明赤 褐色 黒褐色	細砂粒を わずかに含む	07001522
〃-10	ST11141 周溝 U-39	土師器	甕	(14.2) 頸部径 (11.55)	残存 6.0	にぶい 橙色 黒褐色	にぶい 褐色	2.0mm 以下の 砂粒を含む	06003781
82-1	ST11141 墳丘 T-40	土師器	甕	(15.0)	残存 21.9	明赤褐色	明赤褐色	1.0 ～ 1.5mm 程の 砂粒を多く含む	07001521
〃-2	ST11141-7 T-40	土師器	甕	内径 (17.1) 外径 (17.5)	20.9	明褐色	明褐色	0.5 ～ 1.5mm 程の 砂粒を多く含む	07001524
〃-3	S T 11141 T,U-39,40	土師器	甕	(15.8)	(9.2)	にぶい 褐色	にぶい 褐色	0.5 ～ 2.0mm 程の 砂粒を含む	07001525
〃-4	ST11141 T-40 遺構検出	土師器	甕	-	(18.7)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色		07001514
〃-5	ST11141 撹乱	土師器	甕	(9.25)	(14.1)	にぶい 褐色	にぶい 橙色 灰黄褐色	2.0mm 以下の 砂粒を含む	06003787
〃-6	ST11141-7 T-40 ST11141 T-40 遺構検出	土師器	甕	(14.5) 頸部径 (12.5)	残存 14.55	橙色褐色 にぶい 橙色	にぶい 橙色橙色 灰褐色	2.0mm 以下の 砂粒を含む	06003786
〃-7	ST11141 周溝 U-39	土師器	甕	(14.0) 頸部径 (11.8)	残存 12.6	明赤褐色	にぶい 黄橙色	4.0mm 以下の 砂粒を含む	06003785

表27　古墳出土土器一覧表 (10)

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種　別	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	色　調 内面	色　調 外面	胎　土	県遺物登録番号
82-8	ST11141 周溝 T-37 ?	土師器	甕	(14.05) 頸部径 (13.4)	残存 7.5	にぶい褐色灰黄褐色	にぶい橙色褐灰色	微砂粒を含む	06003782
83-1	ST11141 T-40	土師器	壺	-	残存 10.6	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5 ～ 1.0mm 程の砂粒をわずかに含む	07001529
〃-2	ST11141 周溝 U-41	土師器	甕	-	残存 5.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂粒をわずかに含む	07001532
〃-3	ST11141 検出時	土師器	壺	-	残存 6.6	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5 ～ 1.5mm 程の砂粒を含む	07001530
〃-4	ST11141 周溝 T-41	土師器	甕	-	残存 4.3	淡黄色	灰黄色	微細砂粒を含む	07001528
〃-5	ST11141 周溝 S-40	土師器	壺	-	残存 6.0	にぶい橙色	橙色	0.5 ～ 1.0mm 程の砂粒をわずかに含む	07001526
〃-6	ST11141 T-40	土師器	壺	12.8	26.4	橙色	橙色	1.0 ～ 2.0mm の白色砂粒を含む	03000213
〃-7	遺構検出時 ST11141 T-40	土師器	壺	内径 17.8 外径 18.2	残存 9.6	上橙色 下淡黄色	橙色		07001512
〃-8	T-40,41 墳丘 ST11141 周溝	土師器	壺	(12.0)	残存 13.2	にぶい黄橙色	にぶい橙色	細粒～ 3.0mm 大の砂粒を含む	07001561
〃-9	ST11141 周溝 T-39	土師器	壺	内径 11.4 外径 11.8	残存 12.5	橙色	橙色	砂粒をわずかに含む	07001548
〃-10	ST11141-5 T-40	土師器	二重口縁壺	内径 13.7 外径 14.4	残存 7.3	にぶい褐色	にぶい褐色	0.5 ～ 2.0mm (小石 4mm) を多く含む	07001547
〃-11	ST11141 周溝 T-U41	土師器	壺	内径 (11.2) 外径 (11.6)	残存 6.6	橙色	橙色	0.5 ～ 3.0mm 程の砂粒を含む	07001550
84-1	ST11141 T-39	土師器	鉢	(15.7)	残存 8.2	橙色	橙色		07001567
〃-2	ST11141 墳丘周溝 T-39	土師器	鉢	内径 (13.3) 外径 (13.7)	7.7	橙色	橙色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒を含む	07001552
〃-3	ST11141 周溝 U-39	土師器	鉢	(12.0)	残存 6.8	橙色	橙色		07001566
〃-4	ST11141 墳丘 T-40	土師器	鉢	内径 (10.6) 外径 (11.6)	残存 10.5	橙色	橙色	0.5 ～ 1.0mm 程の砂粒を含む	07001551

表26　古墳出土土器一覧表（11）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種　別	器種	法量（cm）		色　調		胎　土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
84-5	ST11141 周溝	土師器	鉢	内径（12.6） 外径（13.0）	残存 11.3	にぶい褐色 黒褐色	にぶい褐色 黒褐色	0.5mm 程の砂粒を含む	07001549
〃-6	ST11141 墳丘 T-40	土師器	鉢	内径（10.8） 外径（11.2）	残存 7.8	明赤褐色	にぶい褐色	0.5 ～ 1.0mm 程の砂粒をわずかに含む	07001553
〃-7	ST11141 周溝 T-39	土師器	鉢	（14.8）	9.1	橙色	橙色		07001575
〃-8	ST11141 墳丘 T-40	土師器	鉢	（12.7）	7.2	明赤褐色	明赤褐色		07001570
〃-9	ST11141 内墳丘 T-40	土師器	鉢	（12.4）	6.8	にぶい褐色	明赤褐色		07001565
〃-10	ST11141 周溝 T-39	土師器	鉢	（13.1）	6.8	明赤褐色	橙色		07001519
〃-11	ST11141 周溝 U-40	土師器	鉢	（9.7）	7.0	橙色	橙色		07001574
〃-12	ST11141 周溝	土師器	鉢	（10.2）	7.1	橙色	橙色		07001568
〃-13	ST11141-6 T-40	土師器	鉢	内径 9.9	5.5	明褐色	にぶい黄橙色		07001515
〃-14	ST11141 周溝 T-39	土師器	鉢	内径（14.7）	4.1	橙色	橙色		07001518
〃-15	ST11141 周溝 T-39	土師器	鉢	（8.8）	3.2	橙色	橙色		07001571
〃-16	ST11141 T-40 遺構検出	土師器	鉢	内径 7.6	2.7	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色		07001520
〃-17	ST11141 墳丘 T-40	土師器	鉢	7.0	3.0	黄灰色	黄灰色		07001572
〃-18	ST11141 T-40	土師器	鉢	（5.4）	3.3	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		07001573
〃-19	ST11141 遺構検出時	土師器	鉢	内径 11.2	3.6	橙色	にぶい橙色		07001517
〃-20	遺構検出時 ST11141 T-40	土師器	鉢	内径（12.0）	3.6	橙色	にぶい橙色		07001516
85-1	ST11141 墳丘 U-40	土師器	台付鉢	（13.9） 底部径 （10.9）	13.6	橙色	橙色		07001562

表29　古墳出土土器一覧表 (12)

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	県遺物登録番号
85-2	ST11141	土師器	台付鉢	底径 (6.7)	6.9	明赤褐色	明赤褐色		07001564
〃-3	ST11141 周溝 T-39	土師器	台付鉢	底径 (13.4)	残存 5.9	橙色	橙色		07001563
〃-4	ST11141 周溝 U-41	土師器	高杯	(20.3)	残存 7.3	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒を含む	07001541
〃-5	ST11141 墳丘 T-40	土師器	高杯	杯部 (19.2)	残存 14.0	にぶい黄橙色	橙色	0.5mm 程の砂粒を含む	07001543
〃-6	T・U-39,40 検出時 ST11141 T-40 墳丘	土師器	高杯	(21.5) 外径 (22.0)	残存 7.2	橙色	橙色	0.5 ～ 1.0mm 程の砂粒をわずかに含む	07001542
〃-7	溝構検出時 T-40 ST11141	土師器	高杯	外径 (17.6)	残存 7.6	橙色	橙色		07001513
〃-8	ST11141 内 溝構検出時 T-40	弥生土器	器台	受部径(10.0) 外径 (10.7) 裾部径(11.2)	11.7	橙色	橙色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒を多く含む	07001539
〃-9	ST11141 周溝 U-39	弥生土器	器台	受部径 (9.7) 裾部径 (10.6)	15.9	にぶい褐色	にぶい褐色	0.5 ～ 4.0mm (小石) 程の砂粒を多く含む	07001540
〃-10	ST11141 V-39	須恵器	杯蓋	(13.3) 外径 (13.6)	3.6	灰色	灰色	砂粒をごくわずかに含む	07001536
〃-11	ST11141 周溝 T-39	須恵器	杯蓋	(11.8) 外径 (12.1)	3.9	灰色	灰色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒を含む	07001535
〃-12	ST11141 T-39	須恵器	杯身	(11.4) 受部径 (13.2)	3.7	灰色	灰色	砂粒をわずかに含む	07001534
〃-13	ST11141 T-39	須恵器	杯身	10.7 受部径 13.1	3.7	灰オリーブ色	暗灰黄色	砂粒をほとんど含まない	07001533
〃-14	ST11141 T-39	須恵器	鉢	(13.0) 外径 (13.4)	8.8	暗灰黄色	暗灰黄色	0.5 ～ 2.0mm 程の砂粒を含む	07001538
〃-15	ST11141 周溝	土師器	鉢	(11.3)	残存 7.0	にぶい黄橙色	にぶい橙色	1.0mm 程の砂粒を多く含む	07001537
91-1	ST11158 X-40 X-41	須恵器	杯蓋	(13.0)	3.8	灰色	褐灰色	0.5 ～ 2.0mm 大の砂粒を含む	07001655
〃-2	X・W-42 ST11158 W-42	須恵器	杯蓋	13.9	4.5	黄灰色	黄灰色	0.5 ～ 3.0mm 大の砂粒を含む	07001661

表30　古墳出土土器一覧表（13）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
91-3	ST11158 上層 W-41 上層	須恵器	杯蓋	13.6	4.3	灰オリーブ色	灰オリーブ色	細粒～2.0mm大の砂粒を含む	07001654
〃-4	ST11158	須恵器	杯蓋	13.9	4.2	浅黄色	浅黄色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001657
〃-5	ST11158 X-41 W-41 下層	須恵器	杯蓋	(12.5)	3.6	黄灰色	灰白色	0.5～3.0mm大の砂粒を含む	07001658
〃-6	ST11158 No.34	須恵器	杯蓋	(12.4)	4.0	黄灰色	黄灰色	0.5～3.0mm大の砂粒を含む	07001656
〃-7	ST11158 No.13	須恵器	杯蓋	12.6	3.5	灰色	灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001653
〃-8	ST11158 V-41 下層 上層	須恵器	杯蓋	(13.4)	残存 3.6	黄灰色	黄灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001659
〃-9	ST11158 上層	須恵器	杯蓋	(13.4)	残存 4.2	黄灰色	黄灰色	0.5～5.0mm大の砂粒を含む	07001660
〃-10	ST11158 X-41	須恵器	杯蓋	(11.7)	残存 2.8	灰色	灰色	0.5～3.0mm大の砂粒を含む	07001663
〃-11	ST11158 X-40 X-41 上層	須恵器	杯蓋	(12.0)	残存 3.0	黄灰色	黄灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001662
〃-12	ST11158 No.37	須恵器	杯蓋	-	残存 2.0	灰色	灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001665
〃-13	ST11158 No.15	須恵器	杯蓋	-	残存 1.5	灰黄色	灰黄色	細粒を含む	07001666
〃-14	ST11158 ⑧ 周溝上層	須恵器（生焼け）	杯身	(11.8) 受部径 (13.9)	4.4	にぶい橙色	灰黄色	0.5～1.0mm程の砂粒を含む	07001616
〃-15	ST11158 上層 W-43	須恵器	杯身	(12.0) 受部径 (14.2)	残存 4.25	にぶい橙色	灰黄色	砂粒を含む（金雲母、石英、長石、赤色粒子Φ2.0mm）	09001275
〃-16	ST11158 上層	須恵器	杯身	(11.2) 受部径 (13.4)	4.0	灰色	灰色		09001281
〃-17	ST11158 X-41 W-41 下層	須恵器	杯身	11.4 受部径 13.5	4.3	灰色	灰色	0.5mm程の砂粒を含む	07001611
〃-18	ST11158 W-42 下層	須恵器	杯身	(11.4) 受部径 (13.6)	4.1	褐灰色	にぶい黄褐色	3.0mm以下の砂粒（白色・石英？）を含む	09001280
〃-19	ST11158 下層	須恵器	杯身	11.4 受部径 13.4	3.8	褐灰色	灰色	砂粒を少し含む（長石、石英、金雲母Φ4.0mm以下）	09001277

表31　古墳出土土器一覧表 (14)

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	色調 内面	色調 外面	胎土	県遺物登録番号
91-20	ST11158 W-42 周溝上層 No.8	須恵器	杯身	(12.5) 受部径 (14.4)	残存 4.05	灰赤色	灰色	砂粒を少し含む (長石、石英、金雲母 Φ5.0mm 以下)	09001276
〃-21	ST11158 W-41 上層 下層	須恵器	杯身	(12.6) 受部径 (14.45)	残存 4.4	黒褐色	灰色	砂粒を少し含む (長石、石英、金雲母 Φ4.0mm 以下)	09001278
〃-22	ST11158 上層	須恵器	杯身	11.8 受部径 14.2	3.3	灰色	灰白色	0.5 ～ 3.0mm 程の 砂粒を含む	07001610
〃-23	ST11158 上層	須恵器	杯身	10.6 受部径 12.9	4.1	灰黄色	暗灰色	細砂粒を わずかに含む	07001608
〃-24	ST11158 V・W-42 上層	須恵器	杯身	11.4 受部径 14.0	3.3	灰色	灰色	1.0 ～ 3.0mm 程の 砂・小石を多く含む	07001615
〃-25	ST11158 No.11	須恵器	杯身	11.0 受部径 13.2	3.4	灰色	灰色	砂粒を ごくわずかに含む	07001609
〃-26	No.20 ST11158 V・W-42 上層	須恵器	杯身	(11.2) 受部径 (13.4)	3.9	灰色	灰色	0.5 ～ 2.0mm 程の 砂粒を含む	07001612
〃-27	ST11158 W-42 No.6 上層	須恵器	杯身	10.5 受部径 12.8	3.5	灰色	灰色	砂粒をわずかに含む	07001607
〃-28	ST11158 X-40 X-41 上層	須恵器	杯身	11.7 受部径 13.4	3.7	灰色	灰色	2.0mm 大の砂粒 (雲母、石英等) 含む	09001279
〃-29	ST11158 No.11	須恵器	杯身	(10.6) 受部径 (12.8)	3.4	暗オリーブ灰色	暗オリーブ灰色	0.5 ～ 2.5mm 程の 砂粒をわずかに含む	07001617
92-1	ST11158 N-42 No.5 上層	須恵器	杯身	10.6 外径 10.8 受部径 12.9	残存 3.5	灰色	灰色	0.5 ～ 1.5mm 程の 砂粒を含む	07001606
〃-2	ST11158 W-42 No.4 上層	須恵器	杯身	10.4 受部径 12.8	3.2	黄灰色	黄灰色	細砂粒を わずかに含む	07001605
〃-3	ST11158 ⑧ 周溝上層	須恵器	杯身	11.7 受部径 14.0	3.3	灰色	灰色	微細砂粒を含む	07001614
〃-4	ST11158 No.12	須恵器	杯身	(11.0) 受部径 (13.6)	残存 3.1	黄灰色	黄灰色	細砂粒を わずかに含む	07001613
〃-5	X40,41 上層 ST11158 W-41 上層	須恵器	杯蓋	(12.8)	4.5	灰色	灰色	0.5 ～ 4.0mm 大の 砂粒を含む	07001599
〃-6	ST11158 下層	須恵器	杯蓋	12.5	4.5	暗オリーブ灰色	暗オリーブ灰色	0.5 ～ 2.0mm 大の 砂粒を含む	07001598

表32　古墳出土土器一覧表（16）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
92-7	X-40,41 ST11158	須恵器	杯蓋	12.2	残存 4.6	灰色	灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001600
〃-8	ST11158 上層	須恵器	高杯	-	残存 3.7	暗灰色	灰色	細粒を含む	07001604
〃-9	ST11158 Y-42～43 上層	須恵器	高杯	-	残存 4.4	褐灰色	褐灰色	0.5～3.0mm大の砂粒を含む	07001602
〃-10	ST11158 №27	須恵器	高杯	-	残存 4.0	灰色	灰色	細粒を含む	07001603
〃-11	ST11158 周溝 V・W-42 上層	須恵器	高杯	裾部径 10.5	残存 11.0	黒色	黒色	0.5～3.0mm大の砂粒を含む	07001601
〃-12	ST11158 №14	須恵器	壺	8.4	6.3	灰黄褐色	灰褐色	細粒～2.0mm大の砂粒を含む	07001596
〃-13	ST11158 W-41 上層	須恵器	壺	-	残存 10.1	灰色	灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001597
〃-14	ST11158 X-41 下層	須恵器	鉢	12.0	7.6	灰色	灰色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001595
〃-15	ST11158 W-41 上層	須恵器	提瓶	-	残存 10.5	灰色	灰色		07001715
〃-16	ST11158 W-42 上層	須恵器	甕	(23.7)	残存 7.5	灰黄色	灰黄色		07001711
〃-17	ST11158 №24	須恵器 （生焼け）	壺	-	残存 8.4	橙色	橙色	0.5～2.0mm大の砂粒を含む	07001678
〃-18	ST11158 V-42 W-42 上層	須恵器	壺	外径 (15.0)	残存 5.4	黄灰色	黄灰色		07001714
93-1	ST11158 W-42 №9、№23	須恵器	壺	-	残存 18.3	灰色	黒褐色		07001713
〃-2	ST11158 W-41 上層	須恵器	壺	-	残存 13.4	灰色	灰色		07001712
94-1	X-40,41 ST11158 上層	土師器	壺	(19.4)	28.8	橙色	橙色	0.5～6.0mm大の砂粒を含む	07001682
〃-2	ST11158 X-40 X-41 上層	土師器	甕	(16.5) 外径 (17.0)	27.1	にぶい黄橙色	にぶい橙色	1.0～3.0mm程の砂粒を含む	07001618
〃-3	ST11158 X-40 X-41 上層	土師器	甕	(17.4)	残存 7.4	灰黄褐色	にぶい橙色	0.5～2.0mm程の砂粒を多く含む	07001625

表33　古墳出土土器一覧表（16）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	原遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
94-4	ST11158 X-40 X-41 上層	土師器	甕	13.3 外径 13.8	残存 6.1	黒褐色	にぶい褐色	0.5～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07001628
〃-5	ST11158 X-40 X-41 上層	土師器	壺	(17.2) 外径 (17.9)	残存 16.6	にぶい黄橙色	にぶい橙色	0.5～3.0mm 程の砂粒を多く含む	07001623
〃-6	ST11158 下層	土師器	甕	外径 (14.1)	残存 11.7	にぶい褐色	明褐色		07001588
〃-7	ST11158 上層	土師器	壺	-	残存 8.7	にぶい橙色	にぶい褐色	砂粒をわずかに含む	07001621
〃-8	ST11158 上層	土師器	甕	底部径 (19.6)	残存 5.5	明赤褐色	黄灰色		07001589
〃-9	ST11158 上層	土師器	壺	底部径 (7.2)	残存 9.5	橙色	にぶい赤褐色		07001590
95-1	ST11158 X-40,41 下層 V-42 W-4 ?	土師器	甕	(18.0)	残存 31.5	にぶい黄橙色	橙色	0.5～5.0mm 大の砂粒を含む	07001652
〃-2	ST11158 北包含層	土師器	甕	内径 (16.2) 外径 (16.5)	残存 5.5	橙色	にぶい橙色		07001577
〃-3	ST11158 北包含層	弥生土器	甕	(16.2) 外径 (16.7)	残存 10.6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1.0～3.0mm 程の砂粒を含む	07001644
〃-4	ST11158 北包含層	土師器	甕	内径 (16.8)	残存 4.9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		07001576
〃-5	ST11158 北包含層	土師器	壺	内径 (10.6)	残存 5.3	明黄褐色	にぶい黄橙色		07001578
〃-6	ST11158 上層	土師器	壺	(9.0) 外径 (9.2)	残存 8.5	橙色	橙色	砂粒をわずかに含む	07001627
〃-7	ST11158 №30	弥生土器	壺	11.4	15.0	橙色	橙色	細粒を含む	07001685
〃-8	ST11158 №13	土師器	壺	底径 3.2	残存 5.4	灰黄褐色	明褐色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001679
〃-9	ST11158	土師器	広口壺 ?	-	残存 9.2	褐灰色	橙色		07001698
〃-10	ST11158 上層 W-41	土師器	鉢	底径 7.1	残存 4.5	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～4.0mm 大の砂粒を含む	07001680

表34　古墳出土土器一覧表（17）

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	県遺物登録番号
				口径	器高	内面	外面		
95-11	ST11158 W-42 下層	土師器	壺	(11.1) 外径 (11.5)	11.0	橙色	橙色	1.0～3.0mm 程の砂粒を多く含む	07001626
〃-12	ST11158 X-40 X-41 上層	土師器	鉢	(8.8)	残存 2.2	橙色	橙色		07001701
〃-13	ST11158 №15	土師器	器台	7.8	残存 4.8	橙色	橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001681
〃-14	ST11158 北包含層	土師器	壺	頸部径 (8.8)	残存 3.9	浅黄橙色	浅黄橙色		07001579
96-1	ST11158 上層 W-42	土師器	高杯	底径 (10.8)	残存 9.3	橙色	橙色	2.0～3.0mm 大の石粒を含む	07001700
〃-2	ST11158 V,W-41 上層	土師器	高杯	底径 (11.6)	残存 5.1	明赤褐色	明赤褐色		07001699
〃-3	ST11158	土師器	高杯	-	残存 6.9	橙色	橙色	0.5～3.0mm 大の砂粒を含む	07001667
〃-4	ST11158 №29	土師器	高杯	-	残存 5.5	橙色	橙色	1.0～2.0mm 大の砂粒を多く含む	07001691
〃-5	ST11158 №26	土師器	高杯	-	残存 3.3	にぶい橙色	赤褐色		07001694
〃-6	ST11158 西側	土師器	高杯	-	残存 6.2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～4.0mm 大の砂粒を含む	07001675
〃-7	ST11158 上層	土師器	甕	(24.7)	残存 8.6	橙色	橙色		07001696
〃-8	ST11158 上層	土師器	甕	底径 (9.8)	残存 6.7	橙色	黄橙色	1.0～2.0mm 程の砂粒をわずかに含む	07001638
〃-9	ST11158 上層	土師器	甕	底径 (10.6)	残存 5.0	橙色	橙色		07001593
〃-10	ST11158 上層	土師器	甕	-	残存 5.5	明褐色	橙色		07001591
〃-11	ST11158 下層	土師器	甕	-	残存 5.4	橙色	にぶい黄橙色	1.0～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07001630
〃-12	ST11158 V-42 W-42 上層	土師器	甕	-	残存 6.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	0.5～2.0mm 程の砂粒を含む	07001633
〃-13	ST11158 上層 W-43	土師器	甕	-	残存 6.0	にぶい橙色	にぶい橙色	0.5～3.0mm 程の砂粒を多く含む	07001631
〃-14	ST11158 上層	土師器	甕	-	残存 5.4	橙色	橙色	1.0～2.0mm 程の砂粒を多く含む	07001634
〃-15	ST11158 上層	土師器	甕	-	残存 5.5	橙色	橙色		07001592

表 36　古墳出土土器一覧表 (18)

※口径の（　）は復元径

挿図番号	出土地点	種　別	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	色　調 内面	色　調 外面	胎　土	県遺物登録番号
96-16	ST11158 X-40 X-41 下層	土師器	甕	-	残存 5.6	にぶい黄橙色	橙色	0.5 ～ 3.0mm 程の砂粒を多く含む	07001632
〃-17	ST11158 上層 V・W-42	土師器	甕	-	残存 3.8	橙色	橙色	1.0 ～ 2.0mm の砂粒を含む	07001635
97-1	ST11158 W-42,45 W-41,42	陶質土器	鉢形土器（杯）	(12.8)	5.0	橙褐色	橙褐色	径 1.0mm 以上の白色砂粒を含む	09004424
〃-2	ST11158 W-41,42 V-42　上層	陶質土器	鉢形土器（杯）	11.6	3.6	灰色	灰色	径 1.0mm の白色砂粒を含む	09004423
〃-3	ST11158 W-41・42 V-42	陶質土器	高杯	(16.7)	残存 12.5	灰色	灰色	緻密	09004426
〃-4	ST11158 Y-41 上層	陶質土器	高杯	(15.4)	残存 4.0	褐色	褐色	径 1.0mm 内外の白色砂粒を混入	09004425
〃-5	ST11158 下層	陶質土器	高杯	-	-	灰褐色	灰褐色	比較的緻密	09004427
98-1	ST12002 P-42 №2 ベルト 3 上層下層	土師器	甕	17.9 外径 18.1	30.2	にぶい褐色	橙色	0.5 ～ 3.0mm 程の砂粒を多く含む	07003075
〃-2	ST12002 Q-43№3	土師器	甕	(19.0)	残存 31.6	にぶい黄橙色	にぶい橙色		07003197
〃-3	ST12002 P-42№1 ベルト上層下部	土師器	甕	17.7 外径 18.2	32.8	橙色	橙色 にぶい黄橙色	1.0 ～ 4.0mm の砂粒を多く含む	07003076
〃-4	ST12002 O-43 №7	土師器	壺	外径 (8.3)	残存 8.7	明黄褐色	明黄褐色		07003199
〃-5	ST12002 P-44 上層№6	土師器	鉢	外径 (14.2)	8.4	橙色	にぶい黄橙色		07003198
99-1	P・Q-43,44 Q-43 ST12002 上	須恵器	杯蓋	(13.3)	残存 3.6	灰黄褐色	灰黄褐色	細粒を含む	07003154
〃-2	ST12002 Q-43	須恵器	杯身	(12.2)	残存 3.3	黄灰色	黄灰色	細粒を含む	07003153
〃-3	ST12002 Q-43 1 層下 №5-1	須恵器	壺蓋	7.7	2.2	黄灰色	灰色	細粒～ 2.0mm 大の砂粒を含む	07003155
〃-4	ST12002 Q-43№4	須恵器	壺	内径 10.7 外径 11.1	残存 8.8	黄灰色	黄灰色	細粒～ 2.0mm 大の砂粒を含む	07003152
〃-5	Q-43 ST12002 上	須恵器	瓶	(10.4)	残存 4.0	黄灰色	黄灰色	細粒を含む	07003156

表36　水晶原石一覧表

（　）は残存長

挿図番号	種　別	出　土　遺　構	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	県遺物登録番号
75-1	水晶	ST11067 周溝　P-39	2.65	0.85	0.9	06003892
〃-2	水晶	ST11067 周溝　P-39	2.9	1.0	1.0	06003889
〃-3	水晶	ST11067 周溝　P-39	(2.65)	(1.2)	1.25	06003890
〃-4	水晶	ST11067 周溝　P-39	(2.8)	1.1	0.9	06003891

表37　古墳出土鉄製品一覧表

挿図番号	種　別	遺　構　番　号	法　　量	県遺物登録番号
67-5	鏃形鉄器、石突	ST11002 周溝	全長 24.3cm、関幅 3.7cm、刃部長 14.0cm	10000661
76	素環鏡板付轡	ST11067 周溝	残存長 1.5cm、最大残存幅 1.15cm	10000762
87-1	鉸轡	ST11141 周溝	残存長 9.2cm、最大残存幅 1.5cm、	10000761
〃-2	鉄鏃	ST11141 周溝	全長 17.6cm、最大幅 7.0cm、最大厚 1.3cm	10000662
89	無引手鏃轡	ST11141 周溝	全長 6.2cm、幅 1.7cm、最大厚 0.2cm	10000760
100-1	U字形鉄鏃先	ST12002 周溝	全長 42.7cm、最大幅 3.2cm、	10000759

表38 古墳出土埴輪一覧表

＊復元値は（　　）

挿図番号	出土地点	種　別	法量（cm）			色　調		胎　土	備考	県遺物登録番号
			残存長	残存幅	残存厚	内面	外面			
86-1	ST11141 周溝 葺石裏込め S-39	盾形埴輪	(13.1)	(8.4)	(3.2)	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	2mm 以下 の砂粒を 含む		09001282
〃-2	ST11141 墳丘 T-39	盾形埴輪	(6.7)	(5.0)	(1.3)	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	1mm 以下 の砂粒を 含む		09001283

表39　古墳出土玉類一覧表

挿図番号	遺構番号	材質	種別	色調	法量（mm）					備考	県遺物登録番号
					全長	直径		孔径			
						最大	最小	最大	最小		
67-6	ST11002 周溝 S-36	滑石	勾玉	灰黒色	2.50	最大幅 9.0、最大厚 7.0					06003903
90-1	ST11141 石室 NO.9	ガラス	小玉	群青色	8.35	8.45	7.95	2.40	2.35		1000674
〃-2	ST11141 石室 NO.10	ガラス	小玉	群青色	7.45	7.80	6.75	2.00	1.85		1000675
〃-3	ST11141 石室 NO.2	ガラス	小玉	群青色	6.45	7.90	7.20	2.50	2.40		1000668
〃-4	ST11141 石室 NO.1	ガラス	小玉	群青色	7.30	8.35	8.30	2.45	2.40		1000666
〃-5	"ST11141 石室 NO.6	ガラス	小玉	群青色	6.70	8.00	8.00	1.65	1.50		1000672
〃-6	ST11141 石室 NO.5	ガラス	小玉	群青色	5.90	8.35	8.15	1.95	1.60		1000671
〃-7	ST11141 石室 NO.11	ガラス	小玉	群青色	6.10	7.95	7.40	2.00	1.60		1000676
〃-8	ST11141 石室 NO.12	ガラス	小玉	群青色	5.00	8.00	7.90	1.15	1.15		1000677
〃-9	ST11141 石室 NO.2	ガラス	小玉	群青色	5.90	8.60	8.55	2.40	2.00		1000667
〃-10	ST11141 石室 NO.7	ガラス	小玉	群青色	5.35	8.20	7.90	1.80	1.75		1000673
〃-11	ST11141 石室 NO.4	ガラス	小玉	群青色	5.35	8.50	8.00	2.00	2.00	破損	1000670
〃-12	ST11141 石室 NO.3	ガラス	小玉	群青色	4.45	7.55	7.40	2.00	2.00		1000669
〃-13	ST11141 石室横 T-40	ガラス	小玉	群青色	4.10	7.70	8.20	2.35	2.10		1000665
〃-14	ST11141 T-39	滑石	勾玉	灰黒色	25.00	最大幅 9.00、最大厚 7.00					06003904
100-2	ST11158 周溝 V-42、W-42	ガラス	管玉	青緑色	20.00	10.00		4.00	3.00		10000664

表40　古墳出土土製人形一覧表

（　）は残存長

挿図番号	種別	出土遺構	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	県遺物登録番号
74-1	土製人形	ST11067 周溝　O-38	5.1	(2.9)	2.0	06003896
〃-2	土製人形	ST11067 周溝　N-38	4.8	(1.9)	2.0	06003893
〃-3	土製人形	ST11067 周溝	(4.7)	(1.7)	1.7	06003894
〃-4	土製人形	ST11067 周溝　O-38	(4.3)	(2.0)	1.8	06003895
〃-5	土製人形	ST11067 周溝　O-38	(4.7)	(2.8)	2.3	06003899
〃-6-1	土製人形	ST11067 周溝　N-38,O-38	(2.45)	(1.9)	1.8	06003901
〃-6-2	土製人形		(1.9)	(1.3)	1.1	
〃-7	土製人形	ST11067 周溝　N-38	(6.8)	(2.9)	2.4	06003897
〃-8	土製人形	ST11067 周溝　O-38	(3.3)	(2.4)	1.8	06003900
〃-9	土製人形	ST11067 周溝　O-38	(3.1)	(1.5)	1.6	06003898

Ⅵ．総括

1，弥生時代土壙墓・土坑の形成過程

（1）はじめに

11区～13区の弥生時代の墳墓には甕棺墓、土壙墓がある。これらは砂丘微高地上に立地し、その墳墓群の墓域の全範囲を調査したことになる。墳墓群の内訳は甕棺墓281基、土壙墓14基であり、その時期はⅠ-1期（前期前半）に始まり、Ⅲ-1期（後期前半）で終わる。このうち墳墓形成が活発化するのはⅡ-2期～Ⅱ-4期である。また、細形銅矛、円環型銅釧、硬玉製玉類、碧玉製管玉などを副葬する甕棺墓群が群集する箇所が3群みられ、A群、B群、C群とした。

土坑は28基を掲載する。甕棺墓群の中に立地することや、多くの副葬品を出土した甕棺墓群であるA群、B群、C群を囲むように位置すること、さらに土坑出土土器の多くは赤色顔料塗彩の広口壺であることなどからその大半は祭祀土坑と考えられる。

甕棺墓の形成過程については『中原遺跡Ⅳ』で触れたため、ここでは本書掲載の土壙墓、土坑の形成過程について記す。その時期については『中原遺跡Ⅳ』の「唐津地域甕棺の器種・型式分類と編年試案」による。この中では壺D（広口壺）は資料が乏しく型式分類ができなかったが、本書掲載土器で資料が増えたため、各遺構の時期決定のためにも壺Dの型式分類を行い、土壙墓・土坑の分布と時期についてのまとめとしたい。

（2）壺D（広口壺）の型式分類

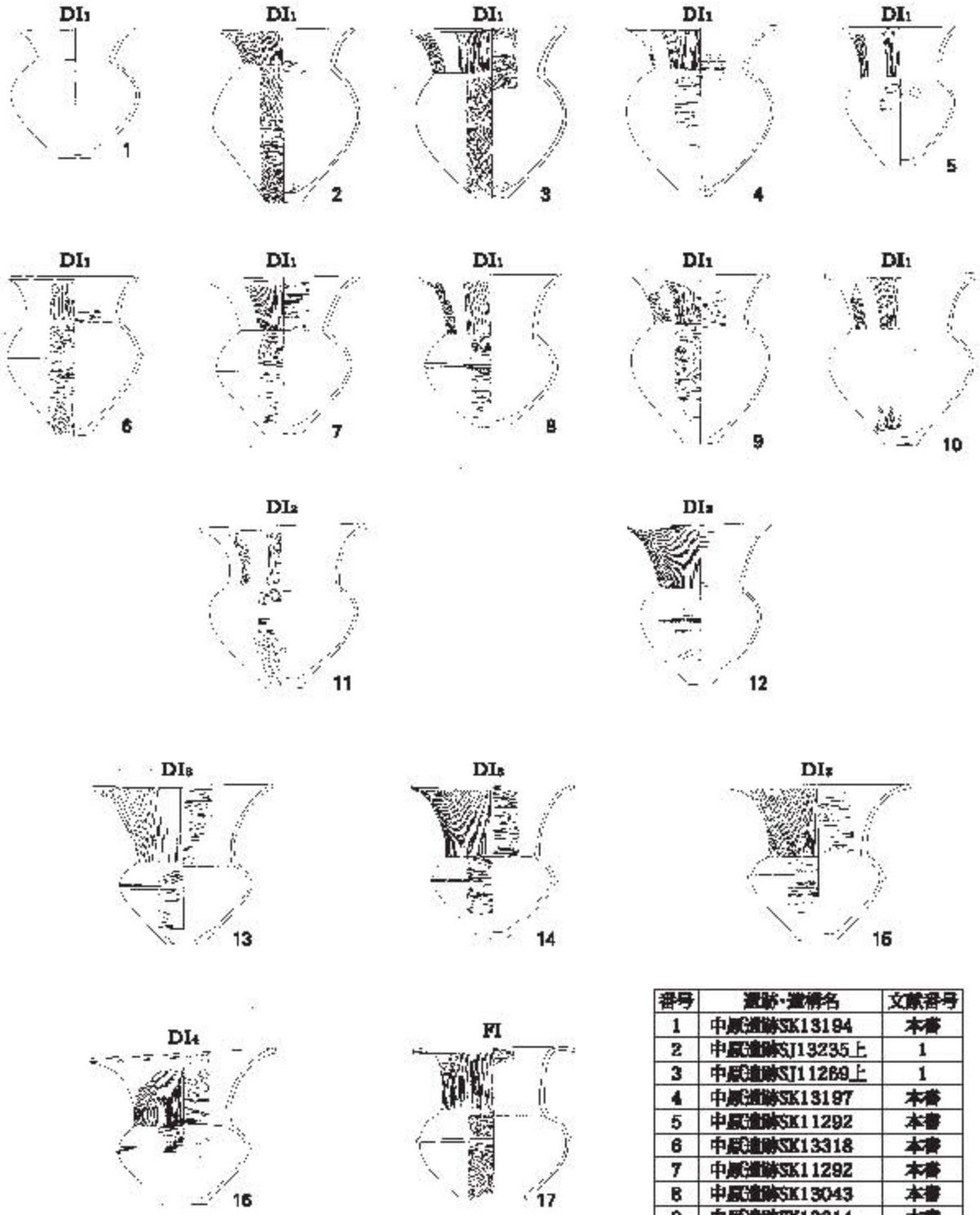
『中原遺跡Ⅳ』の「唐津地域甕棺の器種・型式分類と編年試案」で壺Dを口縁形態で2つに分類した。DⅠは素口縁の広口壺であり、DⅡは鋤先口縁の広口壺である。各遺構の時期決定のためと今後の唐津地域の弥生土器編年の基礎資料にするためにも型式分類を行う。資料は唐津地域出土の土器を対象にしたが完形品が少なく、特に大形甕や他の器種との一括資料がなく検証にあたっては他地域資料に頼らざるを得なかった。資料数が少ないが唐津地域の壺Dのうち完形品を対象に分類した。図103、104に壺Dの型式分類図を掲載する。

壺Dは口頸部が短く外反する→長く大きく外反するへの型式変化がみられる。壺DⅠは素口縁の広口壺である。壺DⅠ1は口頸部の長さが比較的短く、口径と胴部最大径がほぼ同じである。口頸部には暗文を施すものがある。無突帯と胴部最大径の位置に断面三角形あるいはM字形の突帯を回すものがある。

壺DⅠ2は口頸部の長さがやや長くなり、胴部最大径より口径が大きくなる。無突帯と胴部中位に断面三角形の突帯を一条回すものがある。

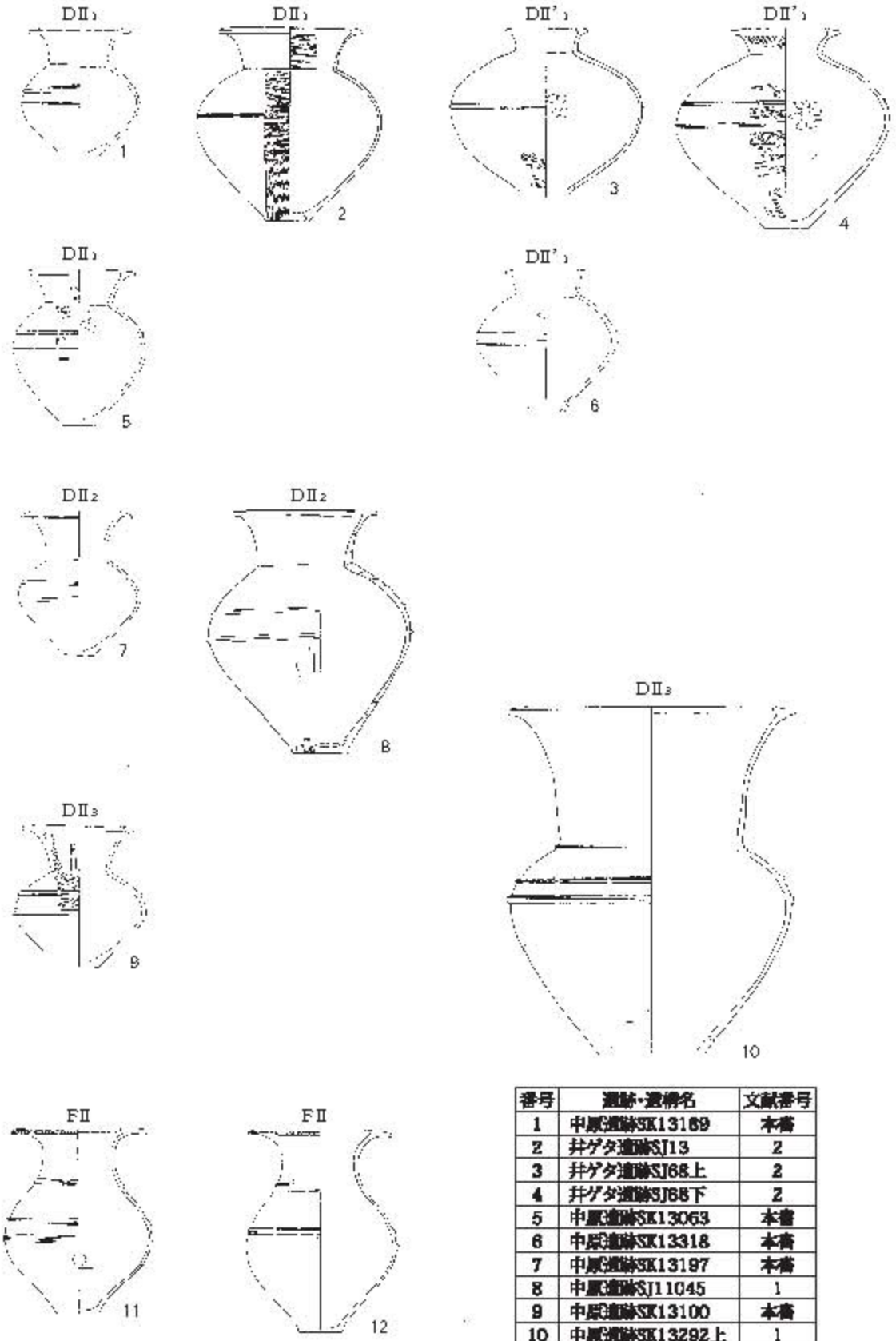
表41　壺D型式分類表

日常土器編年	中原編年	壺D	
		DⅠ	DⅡ
須玖Ⅰ	Ⅱ-2	DⅠ1	DⅡ1、DⅡ´1
	Ⅱ-3	DⅠ1、DⅠ2	DⅡ1、DⅡ´1、DⅡ2
	Ⅱ-4	DⅠ2、DⅠ3	DⅡ2、DⅡ3
須玖Ⅱ	Ⅱ-5	DⅠ3、DⅠ4	DⅡ3
	Ⅱ-6	DⅠ4、FⅠ	FⅡ



番号	遺跡・遺構名	文献番号
1	中尾C遺跡SK13194	本書
2	中尾C遺跡SJ13235上	1
3	中尾C遺跡SJ11269上	1
4	中尾C遺跡SK13197	本書
5	中尾C遺跡SK11292	本書
6	中尾C遺跡SK13318	本書
7	中尾C遺跡SK11292	本書
8	中尾C遺跡SK13043	本書
9	中尾C遺跡SK13314	本書
10	中尾C遺跡SK13314	本書
11	中尾C遺跡SK13076	本書
12	中尾C遺跡SK13339	本書
13	中尾C遺跡SK11292	本書
14	中尾C遺跡SK13189	本書
15	中尾C遺跡SK13328	本書
16	中尾C遺跡SK13100	本書
17	中尾C遺跡SJ11221	1

図103　壺D型式分類1（1/12）



番号	遺跡・遺構名	文献番号
1	中原遺跡SK13169	本書
2	井ゲタ遺跡SJ13	2
3	井ゲタ遺跡SJ68上	2
4	井ゲタ遺跡SJ68下	2
5	中原遺跡SK13063	本書
6	中原遺跡SK13318	本書
7	中原遺跡SK13197	本書
8	中原遺跡SJ11045	1
9	中原遺跡SK13100	本書
10	中原遺跡SK13292上	1
11	狭中野遺跡4号	3
12	狭中野遺跡8号	3

図104　壺D型式分類2（1/12）

壺ＤＩ３は口頸部が長くなり、大きく開く。胴部最大径より口径が壺ＤＩ２よりさらに大きくなる。胴部中位に断面Ｍ字形突帯を一条回す。

壺ＤＩ４は口頸部と胴部の型式変化がさらに進行したものである。

壺ＦＩは壺ＤＩの系譜で考えてよいだろう。頸部は直立し、口縁部で垂直気味に大きく屈曲する。

壺ＤⅡ１は口頸部の長さが比較的短く、胴部最大径より口径が小さい。突帯は胴部中位に１条回すものと、胴部中位と肩部にそれぞれ回すものがある。壺ＤⅡ１のうち、口頸部の長さが短く、口径が小さいものを壺ＤⅡ'１とした。

壺ＤⅡ２は口頸部の長さがやや長くなる。胴部突帯には断面三角形と台形がみられる。

壺ＤⅡ３は口頸部がさらに長くなる。図 104-9 は鋤先口縁内面をナデてシャープに仕上げる。胴部突帯には断面Ｍ字形が多くなる。大型甕Ｅと組み合う大型壺がみられる。

壺ＦⅡはなで肩の胴部に外反した鋤先口縁がつく胴部と肩部に三条のＭ字形突帯をまわす。

壺ＤⅡ４に相当する型式が唐津地域では見当たらなかった。鳥栖市柚比本村遺跡 SK1206 出土例（佐賀県教育委員会 2003『柚比遺跡群３　柚比本村遺跡Ⅰ・2 区』県文報第 155 集）が該当する。

表 39 に壺Ｄの型式分類をもとにした編年試案を掲載する。対象の広口壺は日常生活土器編年で適用されるべきものであろうが、大形甕との組み合わせあるいは祭祀土器として用いられており、本書掲載の土壙墓、土坑の時期決定と唐津地域の弥生土器編年の基礎資料にするため提示する。

（3）土壙墓の分布と時期

表 42 に土壙墓・土坑の時期、出土遺物一覧表を、図 105 にその位置図を掲載する。
土壙墓 14 基のうち土器が出土したのは３基であり、他に硬玉製玉類、碧玉製管玉、磨製石鏃、青銅製、石剣切先などが出土した。出土遺物から時期決定できる土壙墓は限られるが甕棺墓分布などを考慮し、土壙墓の時期などについてふれる。

土壙墓のうち、SK13155 はやや歪な平面形態であり、Ｂ群に隣接した北側に位置することなどから、祭祀土坑の可能性もある。

磨製石鏃３点を出土した SK13362 と SK13363 は主軸を同じにして近接して並ぶ。有茎磨製石鏃の類例が吉武高木遺跡 K125 甕棺墓（『吉武遺跡群Ⅷ』1996 福岡市教育委員会）にありⅡ-1（古段階）期と考えた。SK13285 は土壙の両小口に板石を配するやや特異な形態である。類例に福岡市吉武遺跡群１次調査４区 SK03 土壙墓がある（福岡市教育委員会 1998『吉武遺跡群Ⅹ』）。SK13362、SK13363、SK13285 は主軸を同じにして近接して分布することや周辺にはⅠ期～Ⅱ-1 期の甕棺墓群が分布することなどからその時期はⅡ-1（古段階）期とした。SK13385 もⅠ期～Ⅱ-1 期の甕棺墓群の分布範囲に位置する。墳墓の分布から考えればⅡ-1 期にあたる。青銅製切先と磨製石剣切先が出土しておりその出土状況から考えても被葬者は戦いの犠牲者であろう。SK13307 もⅠ期～Ⅱ-1 期の甕棺墓群の分布範囲に位置する。片側小口に板石を配する特異な形態である。

Ⅱ-2 ～Ⅱ-4 期は甕棺墓の盛期である。土壙墓も散在して分布する。SK13371 と SK13372 は主軸を揃えて、同一墓壙に並ぶ。両者の新旧関係は不明である。SK13371 から硬玉製の大形の櫛形勾玉と小形の勾玉が、SK13372 から碧玉製管玉２点が出土しており、土壙墓の中では注目される。この他、広口壺が出土した SK13328、SK13339 も同時期である。

SK13170、SK13353、SK13359 は３基が近接して分布する。３基の主軸は、まちまちである。その位置は U-42 区画で、Ⅱ-6 ～Ⅲ期の甕棺墓群の分布域である。但し、この範囲にⅡ-2 ～Ⅱ-4 期の甕棺

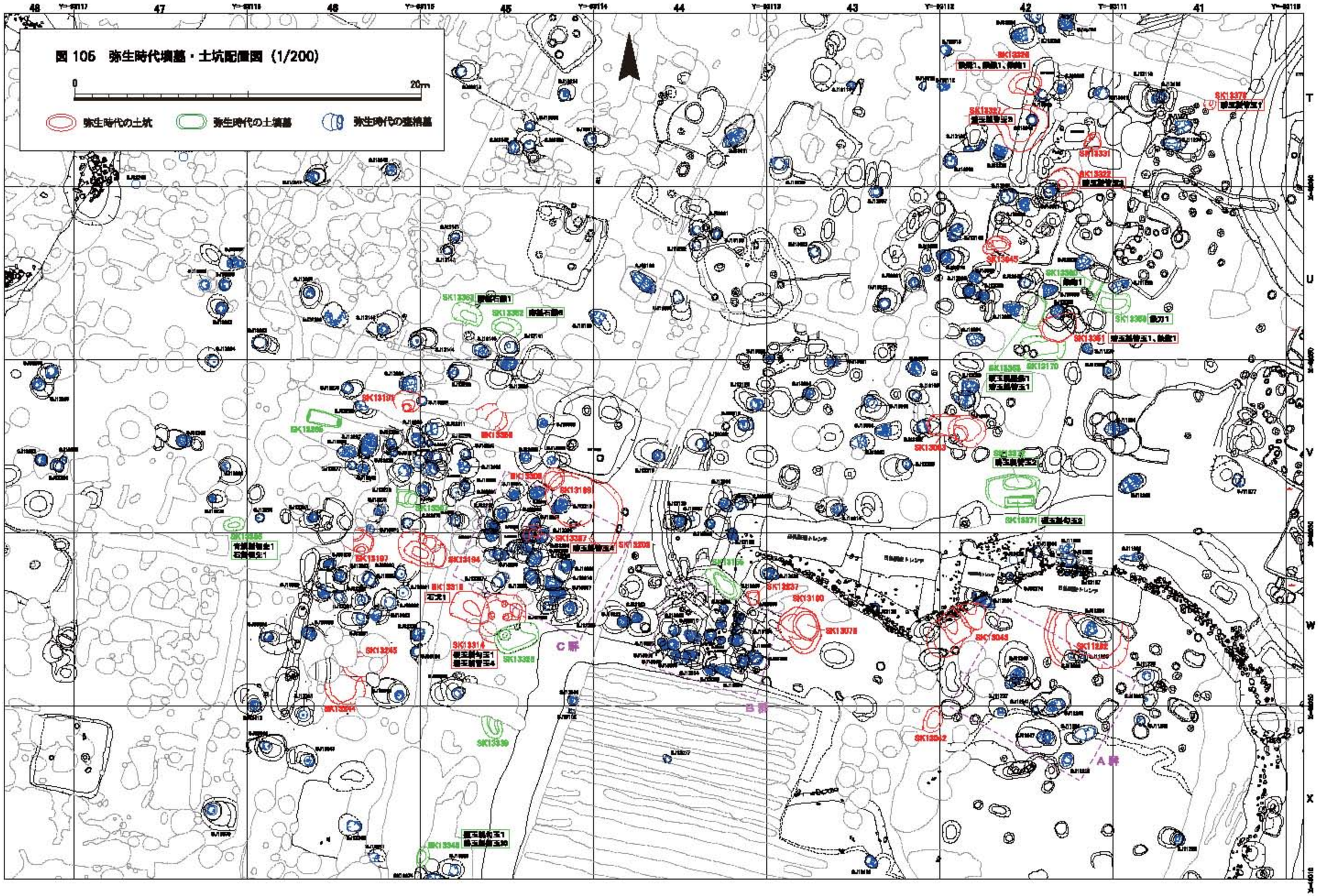


図 105　弥生時代墳墓・土坑配置図（1/200）

表42　土壙墓、土坑時期出土遺物一覧表

遺構番号	種　別	区　画	時　期	出土遺物					備　考
				土　器	擦製玉類	磨製玉類	磨製石鏃	その他	
SK13155	土壙墓	W-44	Ⅱ-2～Ⅱ-4	広口壺					祭祀土坑の可能性あり
SK13170	土壙墓	U-42	Ⅱ-2～Ⅲ						
SK13285	土壙墓	V-46	Ⅱ-1						
SK13307	土壙墓	V-46	Ⅱ						
SK13328	土壙墓	W-45	Ⅱ-4	広口壺					
SK13339	土壙墓	X-45	Ⅱ-3	広口壺					
SK13346	土壙墓	X-45,46	Ⅱ-6～Ⅲ		1	30			
SK13353	土壙墓	U-42	Ⅱ-2～Ⅲ		1	1			
SK13359	土壙墓	U-41,42	Ⅱ-2～Ⅲ					鉄刀1	
SK13362	土壙墓	U-45	Ⅱ-1（古）				3		
SK13363	土壙墓	U-45	Ⅱ-1（古）				1		
SK13371	土壙墓	V-42	Ⅱ-2～Ⅱ-3		2				
SK13372	土壙墓	V-42	Ⅱ-2～Ⅱ-3			2			
SK13385	土壙墓	V-47	Ⅱ-1～Ⅱ-4					石剣切先1 青銅製切先1	
SK11232	土坑	P-33	?		1				
SK11292	土坑	W-42	Ⅱ-2～Ⅱ-5	甕、甕棺、広口壺、高杯、器台、鉢、蓋、					土器多量に出土。SJ11294(Ⅱ-6)から切られる。
SK13042	土坑	X-42,43	Ⅱ-3,4	甕、広口壺					
SK13043	土坑	W-42,43	Ⅱ-2～Ⅱ-4	甕、広口壺					
SK13045	土坑	U-42	Ⅱ-3	甕					
SK13063	土坑	V-42	Ⅱ-2～Ⅱ-4	甕、広口壺					
SK13076	土坑	W-43	Ⅱ-3	甕、広口壺					
SK13100	土坑	W-43	Ⅱ-5	広口壺					
SK13189	土坑	V-45	Ⅱ-3,Ⅱ-4	広口壺					SJ13319(Ⅱ-5)から切られる。
SK13191	土坑	V-45,46	Ⅱ-2～Ⅱ-4	広口壺、甕					
SK13194	土坑	W-45,46	Ⅱ-2～Ⅱ-3	広口壺					
SK13197	土坑	W-46	Ⅱ-2～Ⅱ-3	広口壺					
SK13203	土坑	V-44,45	Ⅱ-3～Ⅱ-4	広口壺					
SK13237	土坑	W-44	Ⅱ-2～Ⅱ-3	広口壺					
SK13244	土坑	W-46	Ⅱ-2～Ⅱ-3	広口壺、高杯、甕					
SK13245	土坑	W-46	Ⅱ-3	広口壺					
SK13308	土坑	V-45	?						
SK13314	土坑	W-45	Ⅱ-2	広口壺	1	4			
SK13318	土坑	W-45	Ⅱ-1～Ⅱ-2	広口壺				石戈	
SK13322	土坑	T-42	Ⅱ-4,5以前			3			SJ13167(Ⅱ-4,5)から切られる。
SK13326	土坑	T-42	?					鉄鏃1、鉄鏃1、鉄鉇1	
SK13327	土坑	T-42	Ⅱ-3以前			3			SJ13049(Ⅱ-3)から切られる。
SK13331	土坑	T-42	?						
SK13351	土坑	U-42	Ⅱ-6以前			1		鉄鉋1	SJ13082(Ⅱ-6)から切られる。
SK13358	土坑	V-45	Ⅰ-3～Ⅱ-1	広口壺					
SK13378	土坑	T-41	?			1			
SK13387	土坑	V-45	?			4			
SK13399	土坑	U-50				1			ST13398の主体部か？

墓も分布するため、位置から時期を特定はできない。SK13353から硬玉製の小形の垂飾りと碧玉製管玉1点が出土しているが時期決定に欠ける。

SK13346から硬玉製の極小勾玉と碧玉製管玉30点が出土している。甕棺墓の密集部分布域から大きく離れる。Ⅱ-6～Ⅲ期の甕棺分布域にあるため当該期と考えた。

（4）土坑の分布と時期

土坑28基の大半は甕棺墓域内に位置することや、埋土中から赤色顔料塗彩の広口壺が出土していることから墳墓に伴う祭祀土坑であろう。これらと分布を異にする土坑にP-33区画のSK11232とU-50区画のSK13399がある。SK11232は平面円形の土坑で埋土中から硬玉製勾玉1点が出土している。SK13399は弥生時代のST13398墳丘墓内に位置する。調査時においてST13398の主体部という認識はなかった。遺構の形状など調査時の掘り下げに問題があるが、その主体部である可能性が高い。

祭祀土坑はおおきくⅠ～Ⅱ-1期とⅡ-2～Ⅱ-5期の2つの時期に分けられる。これは墳墓群の形成の画期と同じである。Ⅰ～Ⅱ-1期の土坑にSK13318、SK13358がある。同時期の甕棺墓や土壙墓の分布域内にある。SK13318の埋土最上層から石戈が出土した。

Ⅱ-2～Ⅱ-5期の土坑は多くの副葬品を出土した甕棺墓群であるA群、B群、C群を囲むかあるいは隣接するように分布する。A群、B群、C群の甕棺墓群はこれら土坑から掘り出した土を盛った墳丘をもっていたのかもしれない。土坑埋土中出土土器の大半が時期幅をもっており、土器の出土状況や完形土器が多いことから、墳墓が継続して埋葬されている期間、土坑内に祭祀土器が廃棄されたと思われる。

A群を囲むようにSK11292、SK13042、SK13043が分布する。とくにSK11292は平面隅丸方形の大形土坑であり多量の土器が出土した。その出土状況は東方から廃棄されたようであり、出土土器に煮沸具である甕が多いことは注目される。

B群に隣接して北側にSK13076、SK13100、SK13237がある。また、C群を囲むようにSK13203、SK13189、SK13308、SK13194、SK13314が分布する。大形の土坑であり、SK13203、SK13189、SK13308は切りあう。埋土中出土土器も同時期であり、近接した時期に掘削されたことが窺える。SK13314の最上層から硬玉製勾玉1が出土している。SK13318の石戈も最上層であり、これらは祭祀土坑の最終段階の供献の可能性がある。

これらと離れた土坑にSK13326、SK13327、SK13331、SK13322、SK13045、SK13351がある。これらのうち、SK13045以外は時期決定できる遺物が出土しいない。ただし、SK13322はSJ13167（Ⅱ-4,5期）から切られ、SK13327はSJ13049（Ⅱ-3期）から、SK13351はSJ13082（Ⅱ-6期）から切られる。このことにより、それぞれの時期が推定できる。

（5）土器の器種構成

SK11292から出土している土器の比率は甕が全体の50％を占めており、次いで壺が22％と約7割が甕と壺で、器台・支脚が12％となっている。また、丹塗りが施されている土器は全体では4点で、割合は高杯が1点、素口縁広口壺が3点である。甕には煤が付着して日用に使用されたと思われるものが7点出土している。

SK11292以外の土坑は全体で壺が約60％を占め、甕は約30％になっており、どちらも甕と壺で出土土器の大半を占めるがSK11292とは出土している割合が逆転している。丹塗りされている土器は、SK11292では85点中29点、内訳は、甕が17点、壺が11点、高杯が1点、鉢が3点、蓋が1点、

SK11292 以外では 62 点中 38 点となっている。土器の多くに磨耗が進んでいるものがあるため、実際はもっと多くの土器が丹塗りされている可能性がある。また、蓋・器台・支脚は SK11292 以外からは出土していない。SK13043 の図 48-2 の壺、SK13063 の図 48-8、9 の甕に煤が付着している。

土坑から出土している土器はⅡ-1 期からⅡ-5 期までの弥生時代中期の前半から後半にかけての須玖式を中心に出土している。器台や高杯といった祭祀専用に使われていたと思われる土器の出土数は少なく、SK11292 からの出土土器は、素口縁広口壺は完形で出土しているが、鋤先口縁広口壺の完形は出土しておらず、口縁部のみ出土している。SK11292 以外の土坑でも、素口縁広口壺の残存状況はよく、完形 15 点中、素口縁壺が 9 点、鋤先口縁壺が 6 点。11292 以外での全体での口縁部の割合は、判別できる口縁部のみの土器片を入れて、鋤先壺が 21 点、素口縁壺が 12 点であるから、鋤先は 21 点中 6 点、残存率は 3 割以下になり、素口縁は 12 点中 9 点であり、7 割以上の残存率と、大きな差が出ており、また高杯や器台も完形で出土していないことから、祭祀土器を打ち砕いて棄てる習慣が中原遺跡にもあったといえる。

11・13 区の祭祀土坑の出土土器比率から、素口縁と鋤先の両方の土器を用いて祭祀を執り行っていたと思われる。そして、SK11292 では甕がもっとも多く出土していることから、祭祀時に鋤先口縁で作った土器に供物をいれて祭った後、飲食物の入った甕や素口縁の壺で、大規模な食祭を行ったと考えられるのではないだろうか。そして、A 群の甕棺墓群に埋葬されていた出土遺物の多さと併せて、A 群に埋葬されているグループの被葬者は、この地域でかなりの有力者であるということと従来どおり考えられ、A 群を囲む SK1192 は、亡くなった有力者本人の時に、SK13042・13043 は有力者の親族関係の祭祀時に、出土している土器の差から、そのときに作られたものと考えられるのではないだろうか。その他の土坑では、壺の比率が多くなっており、甕の比率が少なくなっていることから、食祭の規模が小さくなっていると考えられ、権力は A 群に次ぐ集団であるということの裏付けになると思われる。

土坑に棄てられていた土器の特徴を、佐賀県にある祭祀土坑を出している他の遺跡と比べてみると、神埼市にある弥生時代中期後半から後期にかけての、二塚山遺跡群から出土している土器は、丹塗りされた高杯が多く出土している。同じく中期後半から後期にかけてのみやき町にある金の原遺跡では、高杯が出土していること、また甕の口縁部が鋤先口縁ではなく跳ね上げ口縁のものが多く出土している。鳥栖市にある柚比遺跡群では、鋤先口縁を持つ壺を中心に出土している。柚比遺跡群の範囲確認調査で調査したフケ遺跡では、高杯を多く出土し、甕は跳ね上げ口縁と鋤先口縁の両方が見られる。

（6）まとめ

本墳墓群は墓域を完掘した調査事例として貴重な資料を提供した。土壙墓は少数ではあるものの甕棺墓に混在するように墓地を構成していた。墳墓の形成過程も甕棺墓、土壙墓は同様の変遷をたどった。ただし、副葬品を所有した集団墓である A 群、B 群、C 群の中には土壙墓は造られなかった。

土坑の大半は墳墓に伴う祭祀土坑である。SK11292 は多数の土器が廃棄されていたが、その器種構成が注目される。煮沸具である甕が約 4 割を占めた。それに対して、その他の祭祀土坑では広口壺が約 6 割を占めていた。他地域の祭祀土坑の調査事例をみると大型器台や糸島地域の双口広口壺や袋状口縁壺など地域独特な祭祀土器のほか、このような器種構成の違いも明らかになるかもしれない。今後の研究に期待したい。

＊本文は（4）を吉野進一がそれ以外を小松譲が担当した。

図106　SK11292出土土器比率

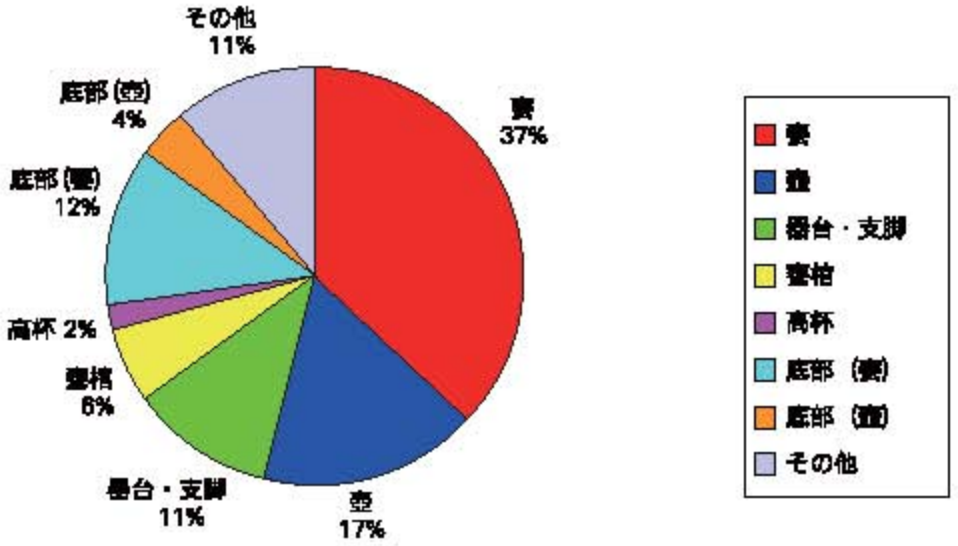
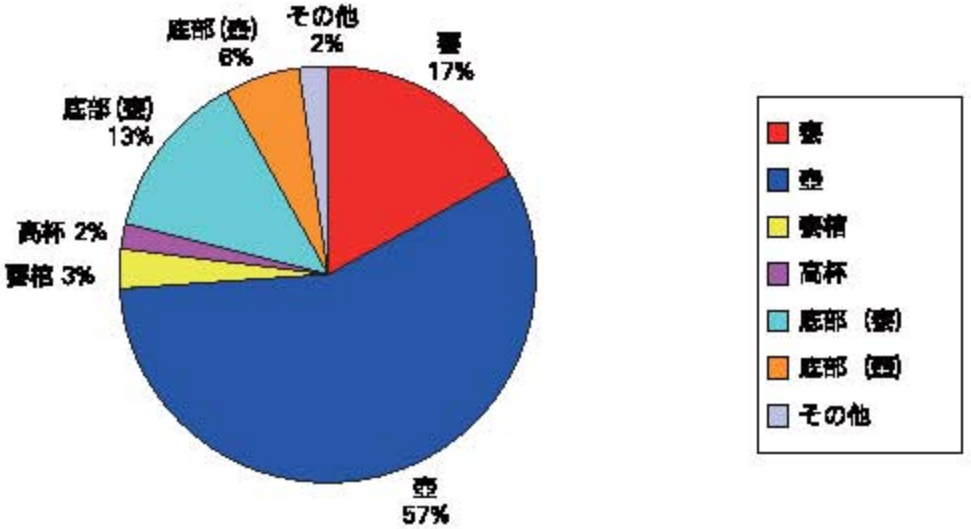


図107　SK11292以外出土土器比率



参考文献
1、小松譲 2010「唐津地域甕棺の器種・型式分類と編年試案」『中原遺跡Ⅳ』佐賀県教育委員会県文報 182 集
2、福岡市教育委員会 1996『吉武遺跡群Ⅷ』
3、福岡市教育委員会 1998『吉武遺跡群Ⅹ』
4、佐賀県教育委員会 1979 年『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第 46 集
5、北茂安町教育委員会 1997『金の原』北茂安町文化財調査報告書第 7 集
6、佐賀県教育委員会 2002『柚比遺跡群 2』佐賀県文化財調査報告書第 150 集
7、佐賀県教育委員会 2003『柚比遺跡群 3』佐賀県文化財調査報告書第 155 集
8、鳥栖市教育委員会 1984『フケ遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第 20 集
壺 D 型式分類図掲載報告書
1、佐賀県教育委員会 2010『中原遺跡Ⅳ』県文報第 182 集
2、佐賀県教育委員会 2000『堂の前・井ゲタ遺跡』県文報第 144 集
3、唐津市教育委員会 1985『湊中野遺跡』市文報第 14 集

2，弥生時代土壙墓・土坑・甕棺墓出土の鉄製品（補遺）

図 108 に弥生時代の土壙墓、土坑、甕棺墓出土の鉄製品を掲載する。本来なら第Ⅳ章で取り上げる項目であるが報告書作成の最終段階で、これらの鉄製品の存在に気づいたため編集の都合上、補遺の形で掲載することにした。また図 108-7 の鉄製鉈は SJ11286 甕棺墓出土である。『中原遺跡Ⅳ』で掲載すべきものであったがこれももれていた為、ここで掲載することにした。

1 は鉄刀である。SK13359 土壙墓出土。遺存状態は極めて悪い。背幅は 1.0cm、刀身幅は 2.3cm である。時期決定できる土器が出土していないが、遺構立地から弥生時代と考えた。図 108-6 のﾔﾘｶﾞﾝｹを出土した SK13360 と接する。

2、3、4 は SK13326 土坑出土。2 は鉄鎌である。基部最大幅は 2.8cm、刃部はわずかに内湾する。3 は鉄鏃である。厚さ 3mm の鉄板を裁断したかのようなつくりである。4 は鉈である。身断面は長方形である。刃部の鎬も不明瞭である。

5 は鉈である。SK13351 土坑出土。刃部に緩やかな鎬がはいる。身部に若干、裏すきがみられる。

6 は鉈である。SK13360 土壙墓出土。刃部で大きく湾曲する。刃部に不明瞭ながら鎬がはいる。身部は表すきである。身部の表面に布目痕？と木質部が遺存する。SK13360 土壙墓は本文では触れていない。埋土下層から鉈が出土した。

7 は鉈である。SJ11286 甕棺墓出土。上甕、下甕とも口縁部を欠失する。下甕は大型甕 F で、Ⅱ-6 期にあたる。刃部裏面は銷ぶくれで、鎬の有無は不明瞭である。身部は裏すきである。

表43 弥生時代土壙墓、土坑出土鉄製品一覧表

挿図番号	種　別	遺構番号	遺構種別	法量 (cm)	登録番号
108-1	鉄刀	SK13359	土壙墓	残存長 20.2、最大幅 2.3、厚さ 1.0	10000772
〃- 2	鉄鎌	SK13326No.2	土坑	残存長 9.1、最大幅 2.8、厚さ 0.3	10000769
〃- 3	鉄鏃	SK13326No.1	土坑	全長 3.9、最大幅 2.4、厚さ 0.2	10000768
〃- 4	鉄製鉈	SK13326No.3	土坑	全長 4.1、最大幅 1.4、厚さ 0.3	10000770
〃- 5	鉄製鉈	SK13351No.2	土坑	全長 3.8、最大幅 1.2、厚さ 0.3	10000771
〃- 6	鉄製鉈	SK13360No.1	土壙墓	残存長 9.6、最大幅 1.9、厚さ 0.25	10000767
〃- 7	鉄製鉈	SJ11286	甕棺墓	残存長 9.3、最大幅 1.9、厚さ 0.25	10000663

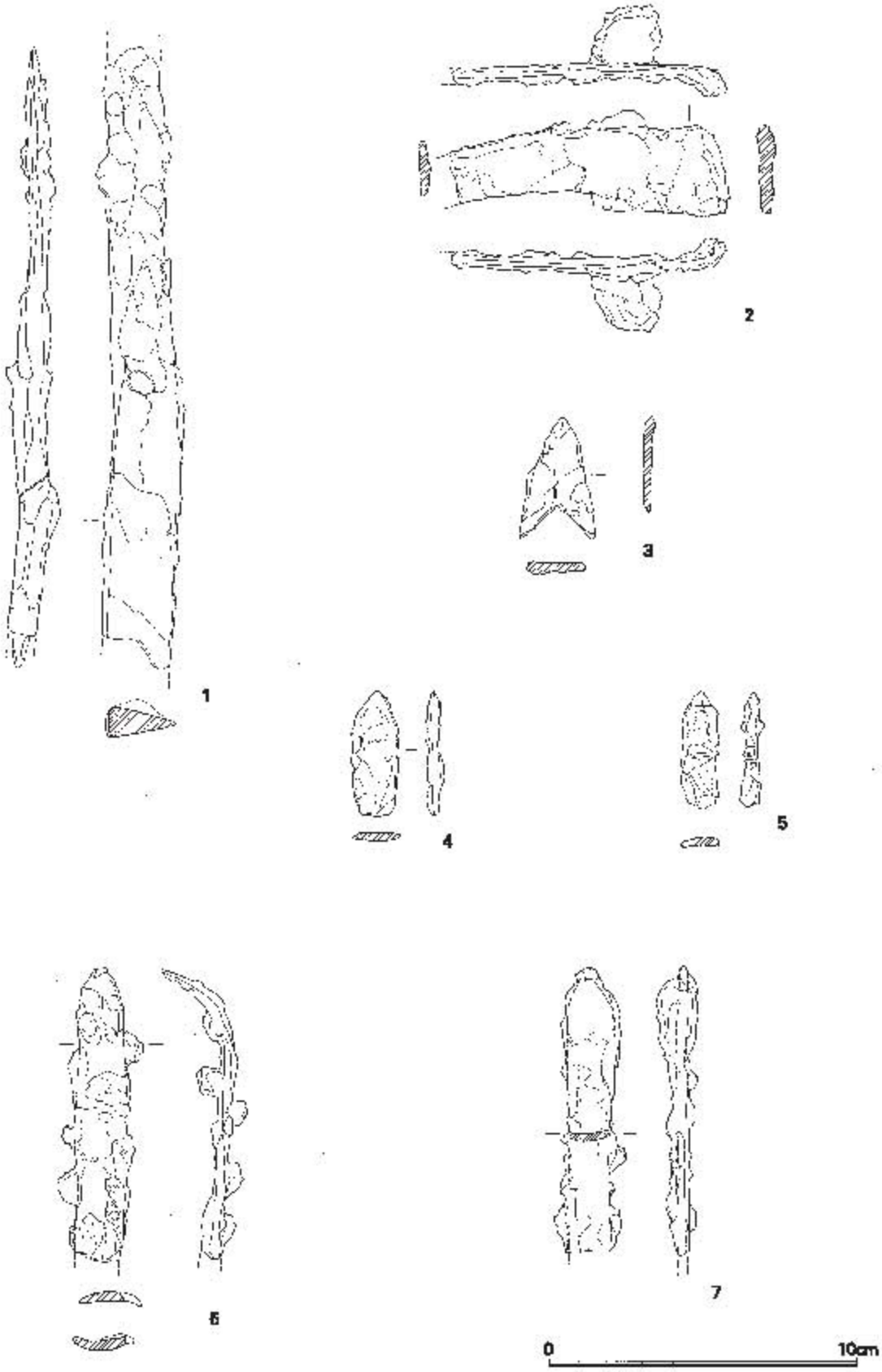


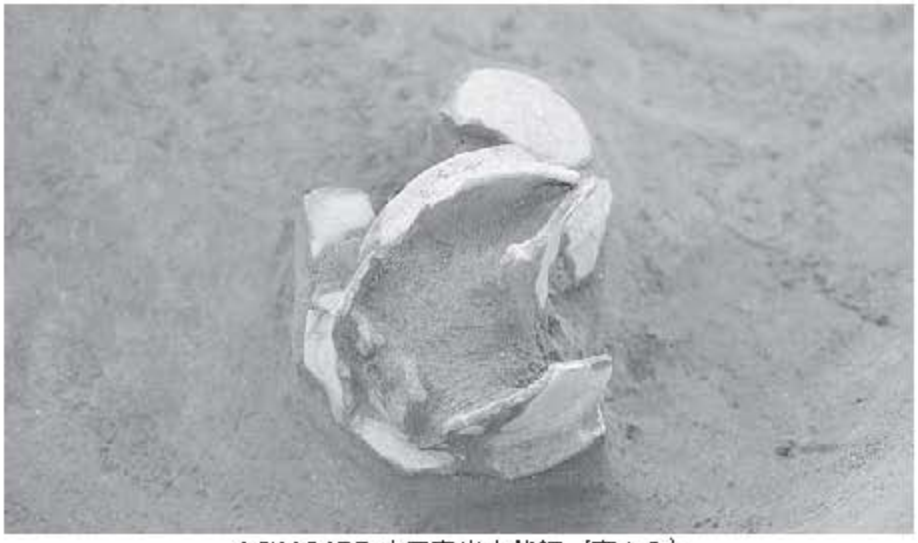
図 108　土壙墓、土坑、甕棺墓出土鉄製品（1/2）

1. 調査区全景（南東上空から）

2.11 区・12 区全景（真上から）

1. 調査区全景（南西上空から）

2. 調査区全景（北東上空から）



1.SK13155 広口壺出土状況（東から）

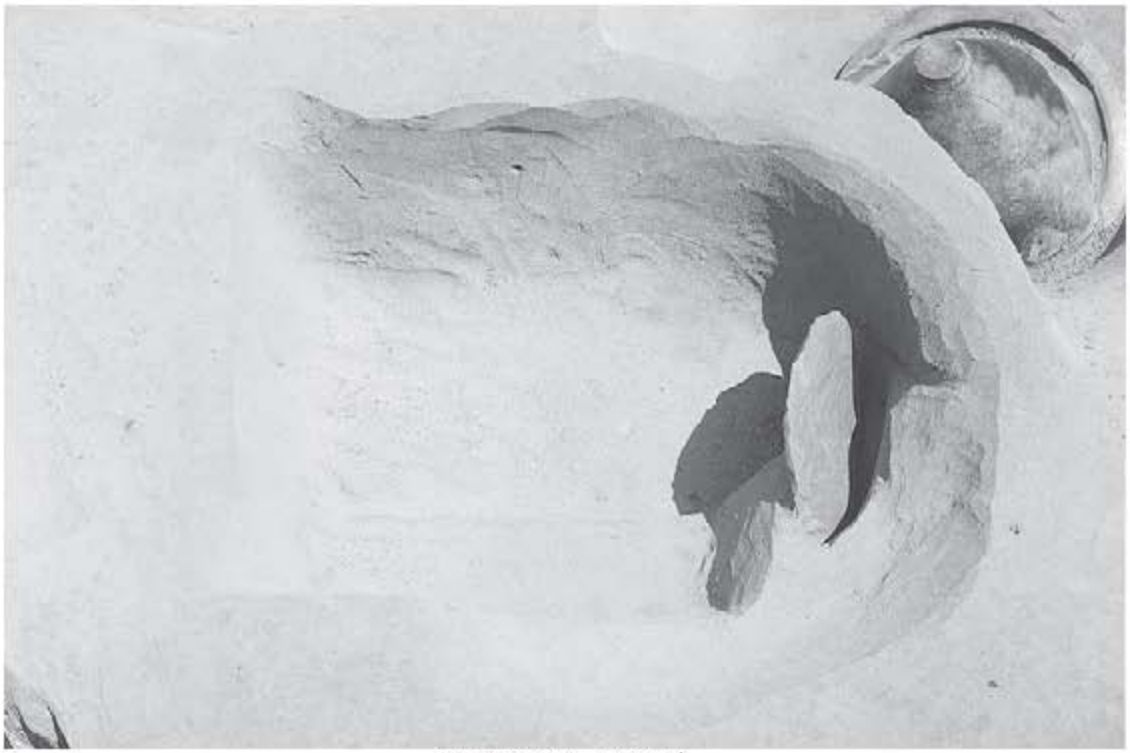
2.SK13285（西から）

3.SK13285 土層断面（西南から）

4.SK13285（南から）

1.SK13307（西から）

2.SK13307 土層断面（北から）

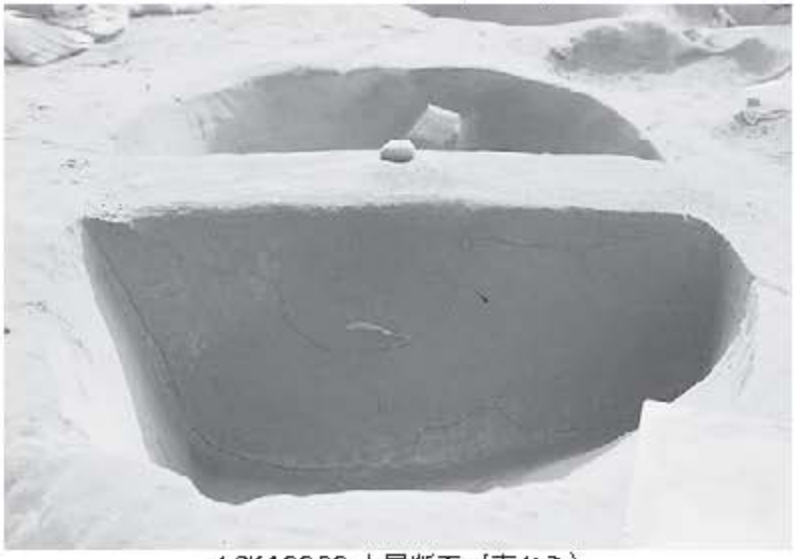


3.SK13307（南から）

3.SK13338壺片出土状況(南東から)

2.SK13338壺出土状況(南から)

1.SK13328 完掘（北から）



4.SK13328 土層断面（東から）

5.SK13328 土層断面（西から）

7.SK13339 完掘状況（西から）

6.SK13339（西から）

1.SK13346 完掘（西から）

2.SK13363北スイ製玉出土状況(西から)

3.SK13363管玉No.2出土状況(北から)

4.SK13362（北から）

5.SK13362磨製石鏃出土状況(北から)

6.SK13363（北から）

1.SK13371（手前）・SK13372（奥）（南から）

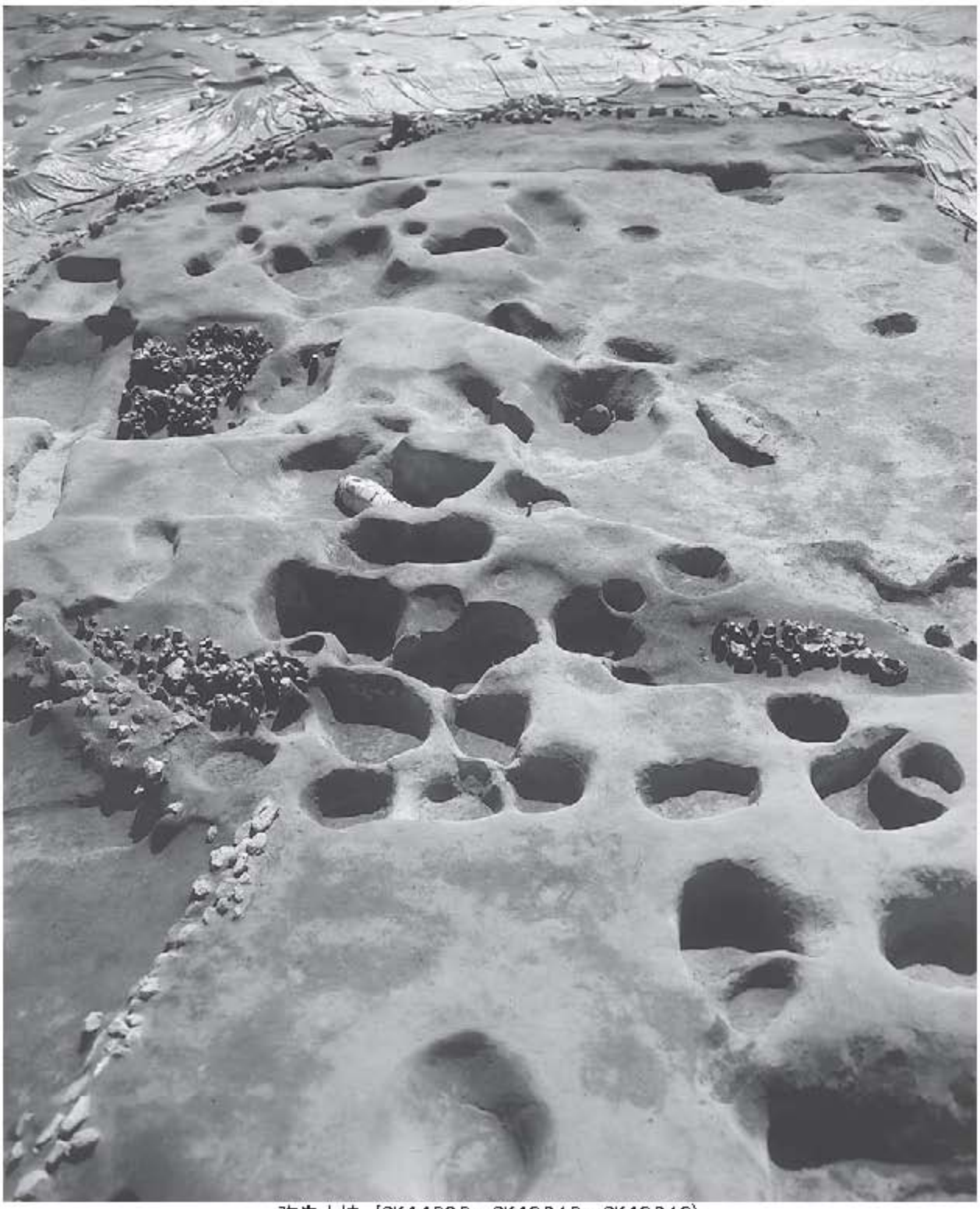
2.SK13371（右）・SK13372（左）（西から）

4.SK13372（西から）

3.SK13371（西から）

6.SK13385石剣・切先（東から）

5.SK13385（北から）



弥生土坑（SK11292・SK13042・SK13043）

1.SK11232（東から）

2.SK11292（南から）

3.SK11292（南西から）

1.SK13042（東南から）

2.SK13063（南から）

3.SK13076（北東から）

1.SK13100（東から）

3.SK13191（東から）

2.SK13191（南から）

4.SK13194（南から）

1.SK13197（南から）

2.SK13189・13203（北から）

3.SK13189・13203北壁土層断面(西から)

4. SK13189・13203北壁土層断面（北から）

5. SK13189・13203北壁土層断面(東から)

6.SK13244(南から)

1.SK13308（南東から）

3.SK13314 勾玉出土状況

2.SK13314（南から）

4.SK13314 完掘状況（北から）

1.SK13318(南から)

2.SK13318完掘状況(北から)

3.SK13318石戈出土状況(西から)

4.SK13322(西から)

5.SK13326(東から)

6.SK13326鉄鏃No.1出土状況(北から)

7.SK13326鉄鏃出土状況(北から)

8.SK13326鉄鏃No.3出土状況(南東から)

2.SK13327管玉No.2出土状況

1.SK13327管玉No.1出土状況(東から)

3.SK13331(南から)

5.SK13351周辺の完掘状況(東から)

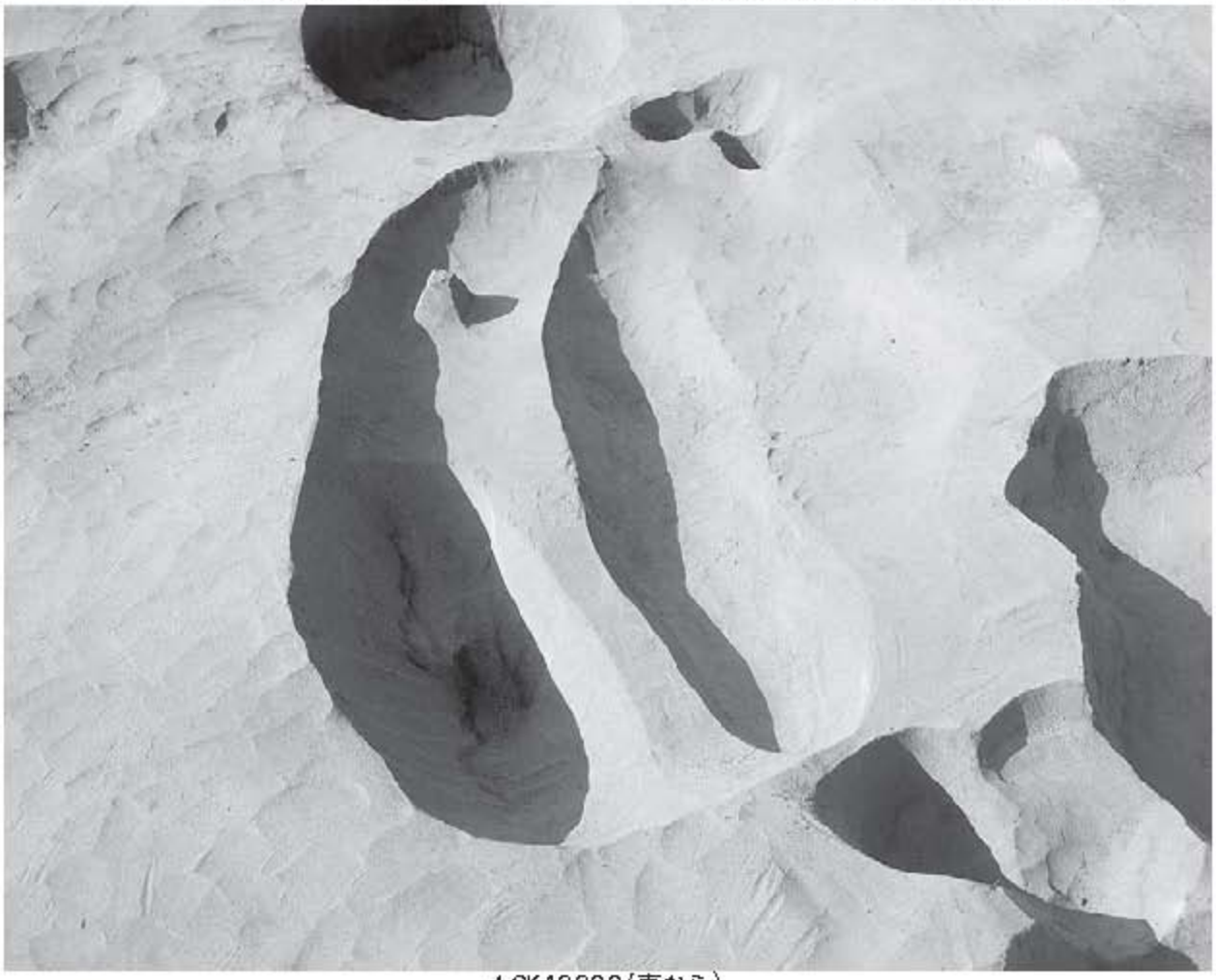
4.SK13351(北西から)

6.SK13358(南から)

1.SK13378(北から)

2.SK13378竪穴No.1・2・3出土状況(北から)

3.SK13378竪穴No.4出土状況(北から)



4.SK13399(東から)

1.ST11141・11002・11067古墳遠景(南上空から)

2.ST11002古墳1(西上空から)

3.ST11002古墳2(西上空から)

1.ST11002古墳土層(東から)

2.ST11067古墳とST11002古墳周溝

3.ST11067古墳(北から)

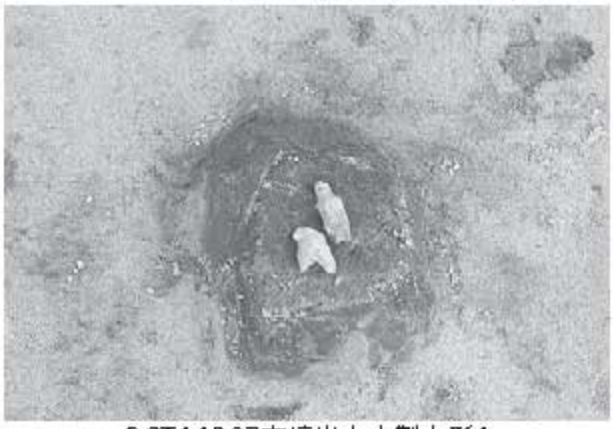
1.ST11067古墳(北西上空から)

2.ST11067古墳土層1

3.ST11067古墳土層2

1.ST11067古墳出土土師器

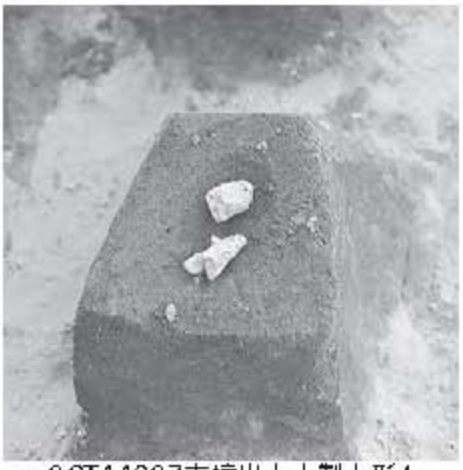
2.ST11067古墳出土須恵器



3.ST11067古墳出土土製人形1

4.ST11067古墳出土土製人形2

5.ST11067古墳出土土製人形3



6.ST11067古墳出土土製人形4

1.ST11141古墳1(真上から)

2.ST11141古墳2(南西から)

3.ST11141古墳3(真上から)

1.ST1114 1古墳4(西上空から)

2.ST1114 1古墳石室1(西から)

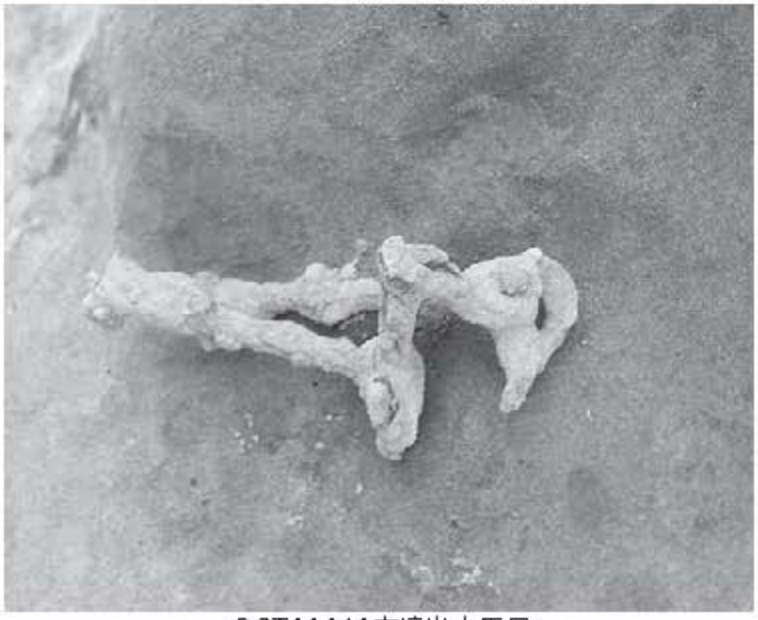
3.ST1114 1古墳石室2(北から)

1.ST11141古墳石室3(西から)

2.ST11141古墳石室4(西から)

3.ST11141古墳土層

1.ST11141古墳出土須恵器



2.ST11141古墳出土馬具

3.ST11141古墳出土馬具、鉄鏃

4.ST11141古墳出土鉄鏃

1.ST11158古墳1(西上空から)

2.ST11158古墳2(西上空から)

1.ST11158古墳3(真上から)

2.ST11158古墳4(西から)

3.ST11158古墳葺石(西から)

1.ST12002古墳と周溝墓群(北から)

2.ST12002古墳(南西から)

3.ST12002古墳周溝出土土器

1.SK13328土壙墓出土

2.SK13339土壙墓出土

3.SK11292土坑出土

4.SK11292土坑出土

5.SK11292土坑出土

6.SK11292土坑出土

7.SK11292土坑出土

8.SK11292土坑出土

9.SK11292土坑出土

SK13328・13339 土壙墓・SK11292 土坑出土土器

1.SK11292土坑出土

2.SK11292土坑出土

3.SK11292土坑出土

4.SK11292土坑出土

5.SK11292土坑出土

6.SK11292土坑出土

7.SK11292土坑出土

8.SK11292土坑出土

9.SK13042土坑出土

SK11292・13042 土坑出土土器

1.SK13042土坑出土

2.SK13042土坑出土

3.SK13043土坑出土

4.SK13063土坑出土

5.SK13063土坑出土

6.SK13076土坑出土

7.SK13100土坑出土

8.SK13100土坑出土

9.SK13189土坑出土

SK13042・13043・13063・13076・13100・13189 土坑出土土器

1.SK13189土坑出土

2.SK13189土坑出土

3.SK13189土坑出土

4.SK13191土坑出土

5.SK13194土坑出土

6.SK13194土坑出土

7.SK13197土坑出土

8.SK13197土坑出土

9.SK13203土坑出土

SK13189・13191・13194・13197・13203 土坑出土土器

1.SK13237土坑出土

2.SK13314土坑出土

3.SK13314土坑出土

4.SK13314土坑出土

5.SK13318土坑出土

6.SK13318土坑出土

7.SK13318土坑出土

8.SK13318土坑出土

9.SK13358土坑出土

SK13237・13314・13318・13358 土坑出土土器

1.ST11002古墳出土

2.ST11002古墳出土

3.ST11067古墳出土

4.ST11067古墳出土

5.ST11067古墳出土

6.ST11067古墳出土

7.ST11067古墳出土

8.ST11067古墳出土

9.ST11067古墳出土

ST11002・11067 古墳出土土器

1.ST11067古墳出土

2.ST11067古墳出土

3.ST11067古墳出土

4.ST11067古墳出土

5.ST11141古墳出土

6.ST11141古墳出土

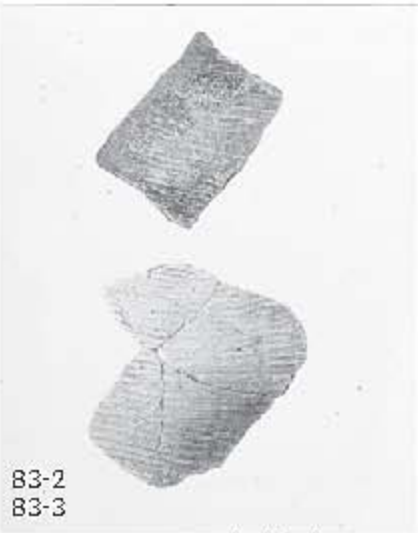
7.ST11141古墳出土

8.ST11141古墳出土

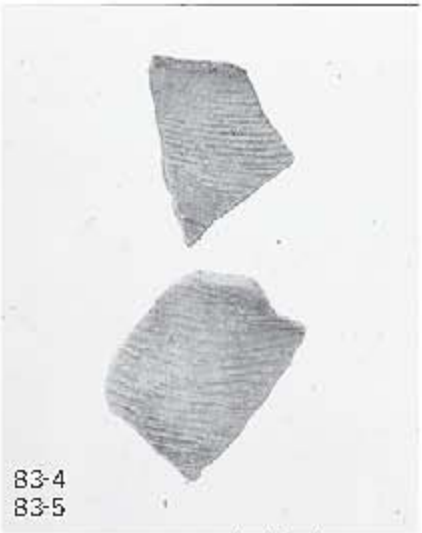
9.ST11141古墳出土

ST11067・11141古墳出土土器

1.ST11141古墳出土



2.ST11141古墳出土



3.ST11141古墳出土

4.ST11141古墳出土

5.ST11141古墳出土

6.ST11141古墳出土

7.ST11141古墳出土

ST11141 古墳出土土器

1.ST11158古墳出土須恵器1

2.ST11158古墳出土須恵器2

1.ST11158古墳出土須恵器3

2.ST11158古墳出土須恵器4

1.ST11158古墳出土須恵器5

2.ST11158古墳出土須恵器6

1 ST11158古墳出土須恵器7

2 ST11158古墳出土須恵器8

1.ST11158古墳出土

2.ST11158古墳出土

3.ST11158古墳出土

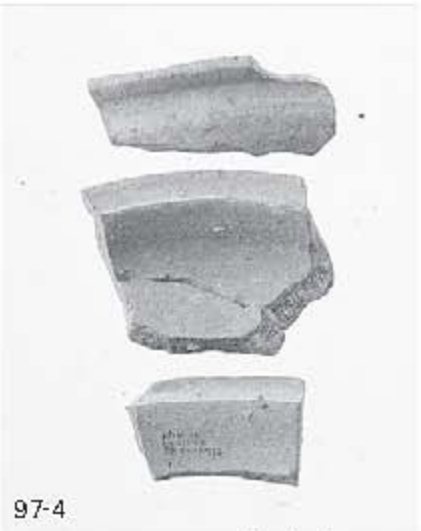
4.ST11158古墳出土

5.ST11158古墳出土

6.ST11158古墳出土

7.ST11158古墳出土

8.ST11158古墳出土



9.ST11158古墳出土

ST11158 古墳出土土器

1.ST11158古墳出土

2.ST12002古墳出土

3.ST12002古墳出土

4.ST12002古墳出土

5.ST12002古墳出土

6.ST12002古墳出土

7.ST12002古墳出土

ST11158・ST12002 古墳出土土器

1.ST11067古墳出土

2.ST11067古墳出土

3.ST11067古墳出土

4.ST11067古墳出土

5.ST11067古墳出土

6.ST11067古墳出土

7.ST11067古墳出土

8.ST11067古墳出土

9.ST11067古墳出土

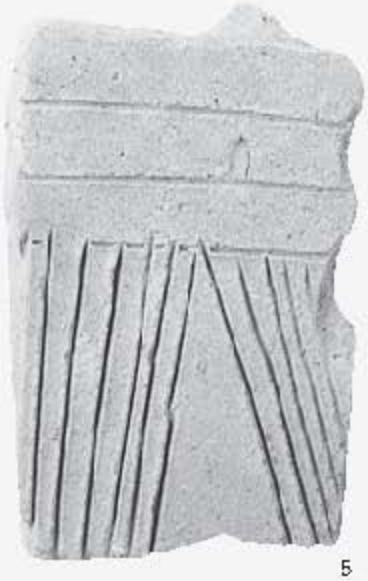
ST11067 古墳出土土製人形

75-1 1

75-2 2

75-3 3

75-4 4


5

86-1

6

86-2

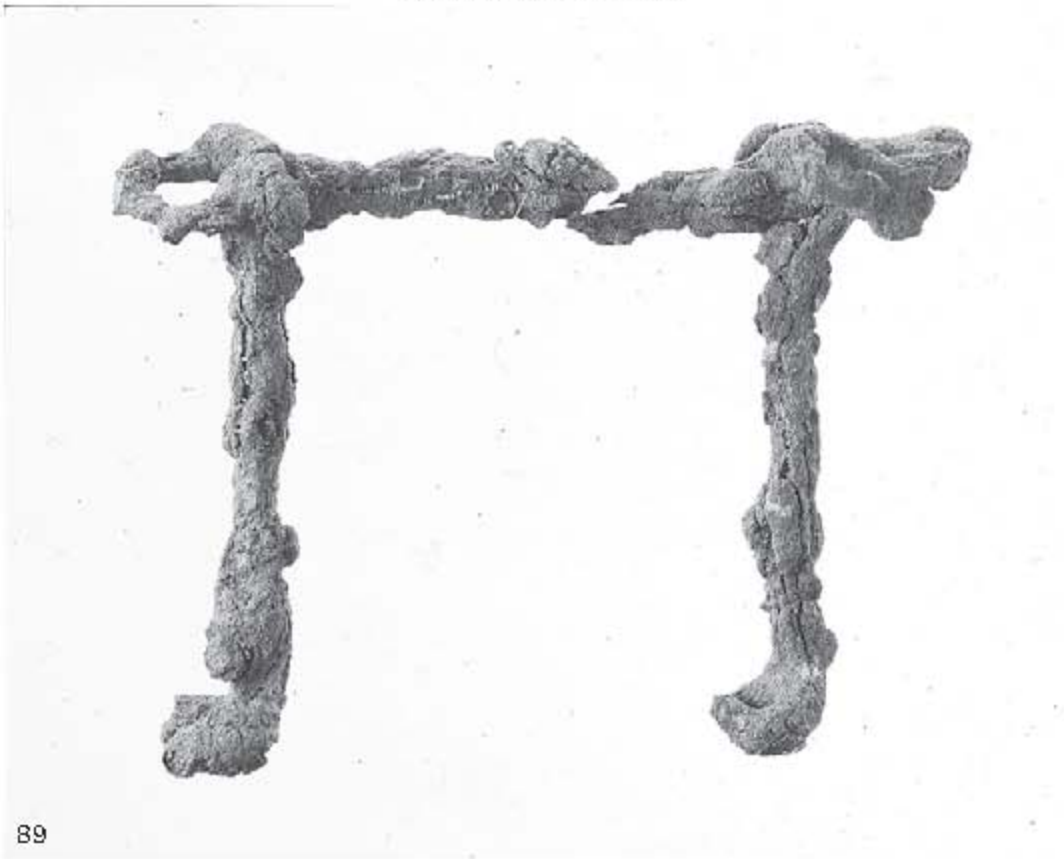
76-1 7

87-2 8

1～4 ST11067出土
5、6 ST11141出土
7 ST11002出土
8 ST11141出土

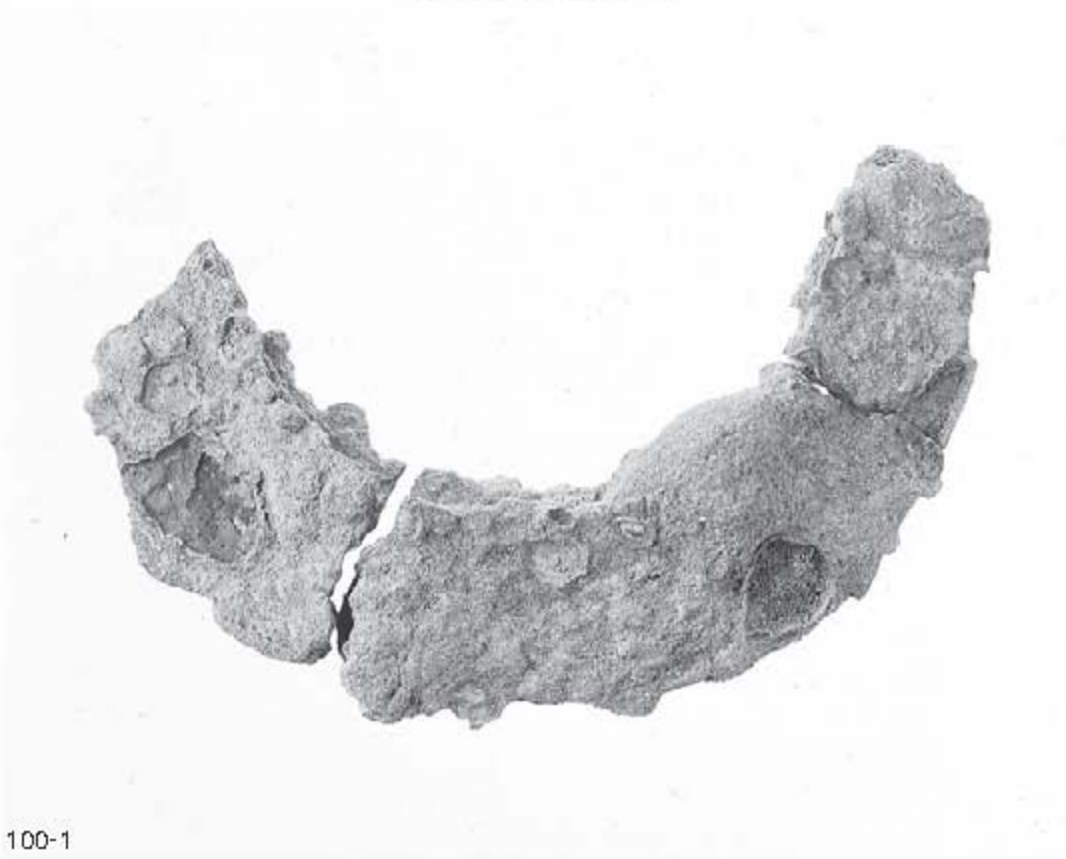
古墳出土水晶原石・埴輪・鉄製品

1ST11141古墳出土轡1



2ST11141古墳出土轡2

1.ST11067古墳出土轡



2.ST12002古墳出土U字形鍬鋤先

1

90-1 ～ 13

90-14

2

76-2

3

100-2

4

1、2 ST11141出土
3 ST11002出土
4 ST11158出土

古墳出土玉類

報告書抄録

ふりがな	なかばる
書　　名	中原遺跡Ⅴ　11区～13区の弥生時代・古墳時代墳墓の調査
副 書 名	西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書
巻　　次	9
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第187集
編著者名	小松譲・市川浩文・吉野進一・伊達惇一朗
編集機関	佐賀県教育委員会
所 在 地	〒840-8570　佐賀市城内1丁目1番59号 TEL(0952)25-7232
発行年月日	西暦2011年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかばる 中原遺跡	からつし 唐津市 はる　ためのうち 原字溜ノ内 にしのはた ・西ノ畑	412023	2146	33°24′57″ 36164	129°59′59″ 3893	平成13年 5月28日～ 平成17年 9月30日	10200㎡ (本書掲載分)	西九州自動車道建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中原遺跡 11区・12区 ・13区	墳墓	弥生 古墳	土壙墓 祭祀土坑 古墳	硬玉製玉類 碧玉製管玉 石剣 石戈 磨製石鏃 土製人形 水晶原石 馬具 U字形鉄鏃先 滑石製勾玉 ガラス製小玉 器材埴輪片 弥生土器 須恵器 土師器	初期馬具（鐙轡、素環轡） 前方後円墳2基(5世紀前半？、6世紀後半) 陶質土器

佐賀県文化財調査報告書第187集

中原遺跡Ⅴ

11区～13区の弥生時代・古墳時代墳墓の調査

―西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(9)―

平成23(2011)年3月25日
発行　佐賀県教育委員会
〒840-0041　佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号
印刷　株式会社 佐賀印刷社
〒849-0921 佐賀県佐賀市高木瀬西6丁目11番7号